

「音韻」に関する語誌的研究

阿久津  
智

的に特徴づけていることを示した。

第三章『音韻』の語誌<sup>1)</sup>では、古代中国から近代日本語までの「音韻」の語誌をたどった。ここでは、「音韻」が、江戸時代になると、広く「言語音」の意味に使われるようになり、これが明治以降の（西洋の言語研究の影響を受けた）言語音研究の用語につながっていったことを示した。

第四章「明治初期・中期の日本文典における『音韻』」では、明治初期・中期の日本文典（日本語文語文法書）に見られる音韻観を探究した。ここでは、この時期の日本文典には、（江戸時代に起こった国学の影響で）五十音図を日本語の基本音韻図と考え、五十音図の行を「音」、列を「韻」とし、「五十音Ⅱ音韻」とする意識が広く見られることを示した。

第五章「明治後期・大正期の口語文典における『音韻』」では、明治後期・大正期の口語文典（口語文法書）に見られる音韻観（音声観）を探究した。ここでは、この時期の口語文典では、西洋由来の音声学（声音学）の影響を受け、音声学的な分析が精密になり、五十音中心の音韻観が薄れたことよって、かえって日本語音（声音）が体系としてとらえにくくなり、それを再構築しようとする試みに音素（phoneme）としての「音韻」の考え方に近いものが生まれたということを示した。

第六章「漢語音韻学における『音韻』」では、漢語音韻学（中国音韻学）における「音韻」、および日本漢字音研究における「音韻」について論じた。ここでは、漢字音韻学や日本漢字音研究がどのように発展してきたか（用語や概念、研究方法がどのように整えられてきたか）を述べるとともに、これらの研究成果が、日本語漢字学習にどのように活かせるかについても考察した。

第七章「音韻関連用語の語誌（一）——『母音』、『子音』、『音節』——」では、言語音研究における用語としての、「母音」、「子音」、「音節」（に当たる概念を表す語）の変遷の過程を追った。

第八章「音韻関連用語の語誌（二）——『音素』、『單音』、『その他』——」では、言語音研究における用語として、「音

## まとめ

本研究は、「音韻とは何か」についての研究である。その主要なアプローチの方法は、『音韻』という語について、その意味や用法の変遷（語誌）を明らかにする」というものである。これは、従来の音韻研究における、「音韻にかかわる現象を、言語学的に分析する」という方法や、「音韻についての研究や学説を、歴史的にたどる」というやり方とは、異なるアプローチである。言い換えれば、本研究における主な研究対象は、語彙論的に見た「音韻」という語であって、音韻論的にとらえた「音韻」という現象や、学史（学説史）の対象としての「音韻」という概念ではない。つまり、本研究は、語彙論的アプローチによる「音韻」の研究ということになる。このアプローチには、日中語彙交流史の観点、意味論的な観点、日本語学習の観点なども取り入れた。また、本研究では、「音韻」のほかに、これと関連する用語（「母音」、「子音」、「音節」など）についても取り上げ、その（用語としての）変遷の過程を追った。

本論は、八つの章と「結論」とからなる。

第一章「日本語研究における『音韻』」では、本研究のアプローチ方法について述べた。ここでは、（言語学や日本語学の）音韻論における音韻のとらえ方を概観し、語彙論における「音韻」の研究法を紹介し、第二章以下への導入とした。

第二章「現代日本語における『音韻』」では、現代日本語における「音韻」の意味・用法について論じた。ここでは、現代語の「音韻」について、規範（辞書、実態（コーパス調査）、意識（アンケート調査）の三方面から調査を行い、その結果、現代語の「音韻」に、言語学的（専門的）な概念を表す用法のほかに、この語本来の「音とひびき」を表す用法が見られることを示した。また、中国語についても同様の調査を行い、その結果と比べることで、とくに日本語において、「音韻」が専門語・翻訳語として使われるようになったことが、この語を語彙論



## 目次

	まえがき	i
	目次	iv
	凡例	xi
第一章	日本語研究における「音韻」	1
一	はじめに	1
二	音韻論における「音韻」	2
二・一	入門書や概説書における「音韻」	2
二・二	音韻の範囲	7
二・三	音韻の基本単位	9
三	語彙論における「音韻」	13
三・一	「音韻」の語誌研究	14
三・二	音韻関連の用語の研究	18
四	音韻と日本語学習とのかわり	21
	第一章のまとめ	24
	第一章の参考文献	25
第二章	現代日本語における「音韻」	28

素」、「単音」、「発音」、「音声」、「声音」が用いられるようになった過程を追った。

「結論」では、「音韻とは何か」について、各章で見てきたことを、時代・分野ごとにまとめ、また、日本語研究における用語として、「音韻」がどのように使われてきたかをまとめた。

第一章・第八章の各章は、それぞれ独立した論文として（発表するために）執筆したものである。そのため、もとの文章には、体裁の不統一や主題のずれ、重複する部分などがある。今回、一つの論文としてまとめるに当たり、できるだけ整理・統一するように努めたが、各章における論旨展開の都合から、こういった部分が一部残っていることをお断りしておく。

なお、各章の最後に、「まとめ」、「参考文献」、「使用データベース類」を載せた。本文中に、注は付していない。

一	はじめに	28
二	調査の方法	28
三	現代日本語における「音韻」の意味・用法の調査	29
三・一	辞書の記述（日本語）	29
三・二	コーパス調査（日本語）	34
三・三	アンケート調査（日本語）	39
三・四	現代日本語における「音韻」の意味のまとめ	41
四	中国語における「音韻」の意味・用法の調査	42
四・一	辞書の記述（中国語）	43
四・二	コーパス調査（中国語）	47
四・三	アンケート調査（中国語）	50
五	「音韻」の意味・用法、および語彙論的特徴	53
五・一	専門語としての特徴	53
五・二	翻訳語としての特徴	56
第二章のまとめ		61
第二章の参考文献		62
第二章の使用データベース類		63
第二章の用例資料		64
第三章 「音韻」の語誌		65

一	はじめに	65
二	辞書における「音韻」の意味	65
三	文献資料に見る「音韻」の意味・用法	70
三・一	「音」と「韻」	71
三・二	日本伝来以前の中国語における「音韻」	72
三・三	平安時代における「音韻」	79
三・四	鎌倉・室町時代における「音韻」	84
三・五	江戸時代における「音韻」	86
三・六	明治・大正期における「音韻」	91
四	「音韻」の意味の変遷	104
第三章のまとめ		107
第三章の参考文献		108
第三章の使用データベース類		108
第三章の用例資料		109
第四章 明治初期・中期の日本文典における「音韻」		110
一	はじめに	110
二	日本文典	111
三	日本文典に見える音韻	117
三・一	日本文典における音韻に関する記述の体裁	118

第六章	漢語音韻学における「音韻」	170
一	はじめに	170
二	漢語音韻学における「音韻」	170
二・一	漢語音韻学	170
二・二	「音韻」	172
二・三	「漢語音韻学」、「中国音韻学」、「声韻学」	175
三	漢語音韻学の発展と日本漢字音研究	177
三・一	漢語音韻学の発展	177
三・二	日本漢字音研究	179
四	漢語音韻学の効用	183
五	漢語音韻学と日本語漢字学習	185
五・一	入声	186
五・二	清濁	190
五・三	「尖音」と「団音」	193
六	おわりに	194
第六章のまとめ		195
第六章の参考文献		197
第七章	音韻関連用語の語誌（一）―「母音」、「子音」、「音節」―	199
一	はじめに	199
三・一・一	西洋文典の影響	118
三・一・二	国学の影響	122
三・二・一	日本文典に見られる日本語音韻観	125
三・二・二	五十音図観	125
三・二・三	日本語音韻観	129
三・二・四	音声学的な説明	142
四	明治期の日本文典における「音韻」	146
第四章のまとめ		147
第四章の参考文献		148
第四章の使用データベース類		149
第五章	明治後期・大正期の口語文典における「音韻」	150
一	はじめに	150
二	口語文典の五十音図観	152
三	口語文典の音声分析	163
四	おわりに	167
第五章のまとめ		167
第五章の参考文献		168
第五章の使用データベース類		169

第六章	漢語音韻学における「音韻」	170
一	はじめに	170
二	漢語音韻学における「音韻」	170
二・一	漢語音韻学	170
二・二	「音韻」	172
二・三	「漢語音韻学」、「中国音韻学」、「声韻学」	175
三	漢語音韻学の発展と日本漢字音研究	177
三・一	漢語音韻学の発展	177
三・二	日本漢字音研究	179
四	漢語音韻学の効用	183
五	漢語音韻学と日本語漢字学習	185
五・一	入声	186
五・二	清濁	190
五・三	「尖音」と「団音」	193
六	おわりに	194
第六章のまとめ		195
第六章の参考文献		197
第七章	音韻関連用語の語誌（一）―「母音」、「子音」、「音節」―	199
一	はじめに	199
三・一・一	西洋文典の影響	118
三・一・二	国学の影響	122
三・二・一	日本文典に見られる日本語音韻観	125
三・二・二	五十音図観	125
三・二・三	日本語音韻観	129
三・二・四	音声学的な説明	142
四	明治期の日本文典における「音韻」	146
第四章のまとめ		147
第四章の参考文献		148
第四章の使用データベース類		149
第五章	明治後期・大正期の口語文典における「音韻」	150
一	はじめに	150
二	口語文典の五十音図観	152
三	口語文典の音声分析	163
四	おわりに	167
第五章のまとめ		167
第五章の参考文献		168
第五章の使用データベース類		169

第八章の使用データベース類	255
結論	256
一 「音韻とは何か」についての、時代・分野ごとの見方	256
二 日本語研究における用語としての「音韻」の使われ方	258
参考文献	260
あとがき	276
謝辞	277
資料	(1)
資料一 「音韻」の用例(中国・古典)	(1)
資料二 「音韻」の用例(日本・古典)	(28)
資料三 「音韻」の用例(朝日新聞)	(58)
資料四 「音韻」の用例(日本・近現代(朝日新聞以外))	(93)
資料五 「音韻」の用例(中国・現代)	(123)
資料六 「音韻」に関するアンケート調査の回答(日本・中国)	(148)

二 「母音」と「子音」	202
二・一 「母音」、「子音」の使用の始まり(明治以降)	202
二・二 「母音」、「子音」の使用以前(江戸時代まで)	209
三 「音節」	217
第七章のまとめ	228
第七章の参考文献	229
第七章の使用データベース類	230
第八章 音韻関連用語の語誌(一) — 「音素」、「単音」、その他 —	231
一 はじめに	231
二 「音素」と「単音」	231
二・一 「音素」	232
二・二 「単音」	237
三 その他の用語	242
三・一 「発音」	242
三・二 「音声」と「声音」	244
三・二・一 「音声」	247
三・二・一 「声音」	251
第八章のまとめ	253
第八章の参考文献	254

【凡例】

- 漢字の字体について、
- 原則として、現代日本語の通用字体を用いる。康熙字典体（旧字体）や現代中国の簡体字で、現代日本語の通用字体と異なるものは、現代日本語の通用字体に改める（ただし、現代日本語の固有名詞に関しては、この限りでない）。「音韻」・「音韵」の表記は、原則として、「音韻」に統一する。
- 用例の引用について
- ・用例には、章ごとに、通し番号を付ける。通し番号の前に、章を表すローマ数字を付ける。
  - ・当該語の部分（「音韻」など）には、網かけを行う。
  - ・算用数字は、必要に応じて、漢数字に改める。年月日、書籍・雑誌の巻号、数量などは、十百千などを用いず、一〇〇のみを用いて記す（例：巻五十八―巻五八、百五件―一〇五件）。
  - ・傍点・傍線（下線）、声点、二字熟合の符号などは、原則として、省略する（必要に応じて付す）。
  - ・日本語の横書きの文献における「レ」と「ル」とは、「リ」と。「ル」に改める。
  - ・日本語の新聞・雑誌・辞書などからの引用においては、原則として、当該語の部分を除き、ルビを省略する（必要に応じて付す）。
- ・中国語の文章からの引用においては、引用符はカギ括弧に改める。「レ」と「ル」については、両者の用法に違いがあるため、改めない。
- ・中国語、および英語の文章には、適宜〔〕内に日本語訳（断りのないかぎり、筆者訳）を付ける。
- かつこ類の順序について
- ・「レ」、「ル」（リ）を入れ子にする場合には、原則として、「レ」「ル」「リ」のようにする。

・「音声」を含む複合語

音声ガイド、音声案内、音声認識、自動音声、音声合成技術、音声入力、副音声、音声解説、音声言語、音声工学、音声自動翻訳、音声操作、音声データ、音声翻訳、音声読み上げソフト、人工音声

ここから、「音韻」は、理論的、あるいは、歴史的、文学的にとらえられた音に使われ、「音声」は、技術的、あるいは、現代的、実用的にとらえられた音に使われることが見てとれる。

学習（小型）国語辞典によると、「音韻」は、「①一つの言語で、個々の言語音を他の言語音と対比して、同類の言語音として一まとめにできるようなもの。例えば、日本語の「デンキ」「デンパ」の「ン」は音声としては異なるが、同じ音韻だと認められる。②漢字の音（＝頭音）と韻（＝尾音）。」であり、「音声」は、「①人が出す声。言語音。②テレビ放送で、（画像に対して）声や音」である（『岩波国語辞典第七版新版』岩波書店、二〇一二）。これらから、一般的にいう「音韻」は抽象的、理論的な音であり、「音声」は、具体的、実的な音だということがいえよう。

以下、音韻について見ていく。まず、第二節で音韻論の観点から音韻がどうとらえられているかについて概観し、次いで、第三節で語彙論の観点から「音韻」について考え、最後に、第四節で音韻研究における成果を日本語学習にどう生かせるかについて触れる（以下、明治期までの文献については、出版元を省略して記す）。

## 二 音韻論における「音韻」

### 二・一 入門書や概説書における「音韻」

日本（語）の音韻論において、音韻とは何か、音韻をどうとらえるかは大きな問題である。しかし、「音韻」と

## 第一章 日本語研究における「音韻」

### 一 はじめに

本章では、日本語の研究において、音韻がどのようにとらえられているかについて概観する。併せて、音韻研究における成果を日本語学習にどう生かせるかについても触れる。本章は、第二章以下の導入でもあり、全体のまとめの章でもある。

一般に、言語教育・言語学習において、言語音に関する教育・学習は、「音声教育」や「音声学習」と呼ばれ、「音韻教育」や「音韻学習」とは呼ばれない。それは、同じ言語音に関する用語であっても、音声と音韻とは、（以下に述べるように）そのとらえ方が異なり、教育や学習に適しているのは「音声」だと考えられているからであろう。両者の違いは、専門的な研究だけでなく、一般的な文章における「音声」と「音韻」の使い方にも現れている。たとえば、「音声」または「音韻」を含む複合語にどんなものがあるか（どんな要素と組み合わせるか）について調べてみると、両者には明らかな違いが見られる。たとえば、現代の新聞記事には、次のようなものが現れている（『朝日新聞データベース』（開蔵Ⅱビジュアル）を用いた。調査対象とした期間は、「音韻」が一九八五年～二〇一六年、「音声」が二〇一六年一月～二月である。期間（の幅）が大きく異なるのは、「音韻」に比べて、「音声」の出現頻度が圧倒的に高いためである。これらの期間の朝日新聞における、「音韻」と「音声」（ともに複合語を含む）の「総件数」は、それぞれ、一七八と一七六とであった。以下に挙げたのは、出現度数二以上のものである）。

・「音韻」を含む複合語

音韻論、音韻学、音韻体系、音韻変化、音韻構造、音韻史、音韻構成、音韻文字、音韻律、音韻説

○…あり、×…なし、\*（↓音素論）、\*（↓音素）。

右のうち、「音韻」という用語が使われているのは、西田龍雄編『言語学を学ぶ人のために』（西田龍雄「言葉と音声（Ⅱ）…音韻論」と、風間喜代三ほか『言語学 第2版』（上野善道「音の構造」）だけである。前者では、「音韻」を「音素（phoneme）」の別名としているが（西田一九八六…四）、後者では、「音韻」には「音素だけに限らず、アクセントや声調なども含まれる」（上野二〇〇四…二二七）としている（「音素」は「音韻的最小機能単位」とされる）。

一方、日本語学・国語学関係の概説書には、「音韻」が使われているものが多い。それには、主に、音韻を、（右と同様に）音韻論における機能的な単位（音素など）と見るものと、母語話者の音の観念（による単位）と見るものがある。前者に関しては、たとえば、次のような記述が見られる。

（I 01）現実のコミュニケーションでは、同じ言語を使用する人同士が意味の違いを意識しない範囲でまとめられる音、という考え方が必要となる。これを音声と区別して「音韻」と呼び、音韻の最小単位を「音素」と呼ぶ。（中略）広い意味では、音韻の中にアクセントやイントネーションまでを含めることがある。

（木村義之「音声・音韻」沖森卓也ほか『図解日本語』三省堂、二〇〇六…一四）

（I 02）音韻とは、ある言語の中で、機能の同じ音声を一とくくりの束にしてまとめ、その代表として抽出した抽象的な概念のことである。（中略）音韻の他に「音素（phoneme）」という用語も広く使われているが、本章では、音韻を音素とアクセント素の総称と見なす。

（土岐哲「現代の音声学・音韻論」工藤浩ほか『日本語要説改訂版』ひつじ書房、二〇〇九…一一九）

いう用語に関しては、言語学・英語学の分野では、単独の（「音韻論」などの複合語ではない）「音韻」という用語は、あまり使われないようである（釘貫二〇一三…二二、高山二〇一六…一五）。現代の言語学・英語学の入門書（概論書）のいくつかについて、「音韻」という用語が取り上げられているかどうかを、「目次」や「索引」で調べてみたところ、表一のようになった。

表一 言語学・英語学の入門書（概論書）における「音韻」

書名	索引	
	目次	音韻論 音韻
田中春美ほか『言語学入門』大修館書店、一九七五	○	×
西田龍雄編『言語学を学ぶ人のために』社会思想社、一九八六	○	○*
佐久間淳一ほか『言語学入門』研究社、二〇〇四	○	×
風間喜代三ほか『言語学 第2版』東京大学出版会、二〇〇四	○	○
斎藤純男『言語学入門』三省堂、二〇一〇	○	×
瀬田幸人ほか『入門ことばの世界』大修館書店、二〇一〇	×	×
西原哲雄編『言語学入門』朝倉書店、二〇一一	○	×
佐久間淳一『本当にわかる言語学』日本実業出版社、二〇一三	×	×
西光義弘編『英語学概論』くろしお出版、一九九七	○	×
安藤貞雄・澤田治美編『英語学入門』開拓社、二〇〇一	○	×
中島平三『ファンダメンタル英語学 改訂版』ひつじ書房、二〇一一	○	×
長谷川瑞穂編『はじめての英語学 改訂版』研究社、二〇一四	×	×

それは、人々の記憶の中に個々の具体的な発声上の差を捨象して共通に理解できる「オ・ハ・ヨ・ウ」という音の概念があるからである。

(和田利政・金田弘『国語要説五訂版』大日本図書、二〇〇三：一七(初版一九八二))  
このような見方は、有坂英世の「音韻観念」に由来する(有坂秀世『音韻論』三省堂、一九四〇：一三)。有坂の音韻論は、時枝誠記や橋本進吉にも影響を与え、現代日本語の「音韻」の概念にも継承されている(釘貫二〇一三：九)。これに近い立場は、欧米にも古くからあり、一九世紀末の、J・B・de クルトネの音楽(phoneme)に関する「心理主義的見方」にさかのぼる(西田一九八六：五七)、二〇世紀後半のN・チョムスキーらの生成文法の音韻論も「心理主義」の立場に立っている(太田二〇〇五：三)。

ここで、日本の言語音研究に大きな影響を与えてきた、西洋の「音韻論」(phonology)の変遷について、大きく三つの時期に分けて、整理しておく。

第Ⅰ期(一九世紀) 伝統的音韻論：音声学(phonetics)が、言語音の物理的・生理的・技術的研究として、音韻論から分化する以前の、言語音全般を研究対象とした phonology。これは、明治期には、「音声学」、「音学」、「人声論」、「人声学」、「声学」、「声音学」などと訳されていた(第三章三・六)。

第Ⅱ期(二〇世紀前半) 構造主義的音韻論：音声学が(伝統的)音韻論から分化して以降の、音楽(phoneme)の設定とその体系化を中心とした phonology。主なものに、F・de ソシユールの影響を受けたヨーロッパのブラーグ(ブラハ)学派の音韻論(独 Phonologie)や、アメリカの音楽論(phonemics)などがある。前者については、昭和初年に「音韻論」と訳され、これが phonology の訳として定着した。phoneme は、「音楽」のほか、「音韻」とも訳された(第二章五・二)。

第Ⅲ期(二〇世紀後半) 現代音韻理論：音声現象を法則としてとらえる、文法的な phonology。N・チョムスキーらの生成音韻論に始まる。当初は、適格な音声形式は、基底にある分節音(音韻素性の束)

(Ⅰ 03) 具体的な音声が、その言語において果たしている機能に着目し、これを抽象化して捉えていく視点も必要である。その抽象化された単位を「音韻」または「音楽」という。

(肥爪周二「現代日本語の音韻」月本雅幸編『日本語概説』放送大学教育振興会、二〇一五：三二)  
以上を大まかにまとめると、「音韻」とは、「機能」的で、「抽象」的な、音の「単位」で、「音楽」とも呼ばれる(広い意味では、アクセントなども含まれる)ということができる。これは、構造主義的な音韻のとらえ方である。なお、Ⅰ 01の「まとめられる音」やⅠ 02の音声の「ひとくぐりの束」のような音韻のとらえ方は、一八八年のD・ジョーンズによる phoneme の定義「a family of sounds」にさかのぼる(Oxford English Dictionary「phoneme」, Jones 一九六〇：四九)。また、Ⅰ 01の「音韻の中にアクセントやイントネーションまで含める」Ⅰ 02の「音韻を音楽とアクセント素の総称と見なす」などのような、音韻にプロソディー(韻律の要素)まで含める見方は、服部四郎が一九三九～一九四〇年に発表した「音韻」の定義(「phonemeの外に、音の長短の段階、強勢、アクセントの型、文強勢の型、音調の型、強調の型などのやうに」, phoneme と同等の資格を有し、いはゆる langue に属するもの)の総称(服部一九四〇：一一)に始まるようである。

一方、音韻を音の観念にとらえる見方は、少し前の(「国語学」)の概説書に多く見られる。

(Ⅰ 04) 音の上では違っても、それらと同じ語として聞き取ることができるのは、同じ言語を話す人々の間では、一語ごとに共通する音の観念があるからと考えることができる。そして、その音の観念を「音韻」と呼ぶのである。即ち、「音声」は「回」ごとの具体的な発音であって、「音韻」は各人の脳中にある音の観念である。

(古田東朔ほか『新国語概説』くろしお出版、一九八〇：二〇)  
(Ⅰ 05) 具体的・物理的な音声に対し、抽象的・心理的な音を音韻という。すなわち、「オハヨウ」という挨拶語は、それを言う人ごとにそれぞれ発音が異なっている、互いに朝の挨拶語として了解される。



(I 06) *hara* が「*h*」の一族であるとする時、このような認識をなす者は観察者以外にはない訳である。これに対して、*hara* を、その理念である「*h*」の具体的実現であると考へる時、このような音理念の所有者は必ず言語主体でなければならない。「中略」音声研究に二の立場の相違があり、観察的立場と主体的立場とであるが、観察的立場は主体的立場を前提とすべきであるから、この方法論に基く時、音声、音韻は対立したものでなく、音韻研究は音声研究の中に包摂されることとなり、音韻と音声とは、言語の音声的表現に於ける段階と考へられるが故に、音声音韻と分つて考察することは、言語音の全面的理解に遠ざかることとなるのである。

(時枝誠記『国語学原論』岩波書店、一九四一・一八二)

また、生成音韻論以降の現代音韻理論では、音声形式の生成までを音韻過程に含める。生成音韻論では(音素という単位は設けないが)、「形態素ごとに抽象的な『基底形』を設定し、それに『音韻規則』を適用して具体的な『音声表示』を派生する」(上野二〇四・二三七)という記述形式をとる。

ほかに、(音声学と音韻論とが未分化であり、かつ、通時的な観点と共時的な観点とが峻別されていなかった時代のものであるが)明治期の日本文典(日本語文法教科書)などにも、音の種類に音の変化を含めるという点において、これにやや近い音韻観が見られる。

(I 07 (Ⅱ IV 21)) 五十音の変化とは言語を組立つる際、其音韻の種々に変化転移するものをいふ。即ち左の五種とす。／濁音 音便 通音 延約 省略音／是なり。／は改行を示す(以下同じ)。句読点は筆者「同書の例を挙げる。「濁音」の「本濁」の例…東ひがし、「濁音」の「連濁」の例…谷川たがわ、「音便」の例…以モチテ―もつて、「通音」の例…驗メプターまぶた、「延約」の「約音」の例…捧サ、ゲ↑さしあげ、「延約」の「延音」の例…曰イフ↓いはく、「省略音」の例…河合カハヒ↑かはあひ」(大川真澄『普通教育日本文典』一八九三・七)

の連鎖に規則を順序立てて適用することによって派生するとする理論(分節音韻論、線形音韻論)であったが、その後、韻律を対象とするもの(総称して、非分節音韻論、分節音と韻律とを別の階層として扱うもの(総称して、非線形音韻論)などが生まれ、さらに、制約によって最適な音声形式が選ばれるとする理論(最適性理論)へと発展してきている。ほかに、規則や制約をスキーマ(多くの使用例から一般化・抽象化された知識構造)としてとらえる、認知文法による音韻論なども出てきている。

## 二・二 音韻の範囲

さて、音韻を音韻論における単位(要素)ととらえる場合、音韻として扱う範囲には、次の三つのレベルが考えられる。

- (ア) 分節音(音素、音節など)のみ
- (イ) 分節音＋非分節音(アクセント、リズムなど)
- (ウ) もとになる音(右の(ア)、または(イ))＋実現音(音声)
- (ア) については、西田(一九八六)の「音韻」、I 03の「音韻」などの「音韻≡音素」とする見方や、I 05の『オ・ハ・ヨ・ウ』という音「に見られるような「音韻≡音節」(詳しくはモーラ)とする見方などがこれに当たる。(イ)については、上野(二〇〇四)の「音韻」、I 01の広義の「音韻」、I 02の「音韻」などがこれに当たる。

(ウ)は、従来の音韻論の範囲を逸脱するものであるが(「実現音」は、音声学的な音声に当たる)、これは、音韻論と音声学とを区別せず、連続的に考えようとする方によるもので、たとえば、時枝誠記の言語過程説など、この考えが見られる。

(I 09 (II IV 20)) 問 音韻は共に幾種に分つ。／答 清音 濁音 半濁音 鼻音〔撥音〕 拗音の五種となし、其清音には母韻〔母音〕 子韻〔母韻〕 以外の音節〕あり。濁音より下四種はみな子韻なり。〔句読点は筆者〕

(春山弟彦『小学科用日本文典卷一』一八七七・二ウ)

(I 10 (II IV 22)) 音韻を大別して、清音、鼻音〔撥音〕、濁音、半濁音、拗音、促音、引音の七種となす。

(杉敏介『中等教科日本文典』一八九八・三)

(I 11) 外国語を借用して日本語に用いる場合、日本語の音韻に同化させた語形が用いられるのが原則であるが、次のように、その外国語の発音に応じて外来語だけに適応される音韻、ならびにそれを書き表す特有の表記もある。〔中略〕(すでに慣用となっている語形は◎に記す)。／〔e〕〔シエ〕シエーカー シェード ◎〔セ〕ミルクセーキ ◎／〔æ〕〔ジエ〕ジエット ダイジエスト ◎〔ゼ〕ゼラチン ◎／〔ɛ〕〔チエ〕チエーン チェス チェック 〔下略〕

(沖森卓也『語の構造と分類』同編『語と語彙』朝倉書店、二〇二二・一二)

(I 12) 日本語(標準語)の音韻は、次の百三種である。／アイウエオ／カキクケコ キャキュキョ／ガギグゲゴ ギャギュギョ／サシスセソ シャシュショ／ザジズゼゾ ジャジュジョ／タチツテト チャチュト ヨ／ダデド／ナニヌネノ ニャニュニョ／ヒフヘホ ヒャヒュヒョ／バビブベボ ビャビュビョ／パピプペポ ビャビュビョ／マミムメモ ミャミュミョ／ヤユヨ／ラリルレロ リャリュリョ／ワ／ン (撥音)／ッ (促音)／ー (長音)

(峰高久明ほか『中学総合的研究 国語三訂版』旺文社、二〇一三・一五二)

言語一般についていえば、音節(またはモーラ)を基本的な単位とすることは難しい。基本単位は、その数が限定されていて、体系を作れなければならないが、一般に、音節は種類が多すぎて、数え上げることが難しいか

(I 08) わが国言語の声音に、直音と拗音の二種あり、其直音の代標字を五十として、之を主音〔ア行音〕客音〔カゝワ行音〕、即ち音と韻との二に大別し、再ヒ三類に別ちて、清音 次清音〔バ行音など〕 濁音となし、更に七分して、入声音〔促音〕 鼻声音〔撥音〕 切約音〔約音〕 省略音〔略音〕 延長音〔延音〕 転通音〔通音〕 帰便音〔音便〕となす、〔一〕内は筆者注(以下同じ)〕

(秦政治郎『皇国文典』一八九三・一一)

これらは、「五十音(清音)」を基本的な音韻(正音)と考え、それ以外の音(濁音、半濁音、撥音、促音、拗音など)を五十音の変化したものと見なし、その他の音韻変化現象も、その延長上に考える」といった音韻観に立つものである(第四章三・一一)。

## 二・三 音韻の基本単位

ここでは、「音韻」を分節音(単位)と見る立場(前項の(ア))について見ていく。この立場には、「音韻≡音素(phoneme)」と見るものと、「音韻≡音節」(日本語においては、詳しくはモーラ)と見るものがある。

前者では、音韻は、母音や子音など(≡音素)となる。この場合、「音韻」は「音素」で言い換えられるため、「音韻」という用語(単位)はとくに必要がなくなる。これは、言語学・英語学の主な立場である。

後者では、音韻は、仮名一字で表される音(ただし、拗音や外来語音などは、主に「大字+小字」)、すなわち、実際の発音における音の一まとまり(≡音節、またはモーラ)となる。これは、古くからの日本語(音韻)研究における「音韻」のとらえ方であるが、現代の国語教育、日本語研究においても、このとらえ方は見られる(左のほかに、現代の新聞等における例は、第二章五・二参照)。

われてきているのであるが、一方で、少数ながら、日本語音韻の基本的単位あるいは最小単位は音節であると見るべきだ、という考えかたも行なわれている。」(岸田一九八四・四九〇)という状況にある(これは今日も変わらないと思われる)。岸田武夫は、後者の立場をとる研究者として、橋本進吉、浜田敦、前田正人、亀井孝らを挙げ、自らも次のように主張する。

(I 13) 日本語音韻における CV [直音] もしくは CCV [拗音] という形をもつ音節は、それだけの形で一個の音韻としての機能を果たしている基本的単位であると見られるものであるし、撥音・促音・母音音節などは、CV・CCV の音節と等長的であるという性質をもっているので、これらの音も、それぞれに一個の音韻としての機能を果たしている基本的単位であると見られるのである。

(岸田一九八四・五〇四)

また、「日本語音韻の最小単位を『音素』と見る学者が、音韻体系について記述するさいに示しているものも、多くは、音節の表であり、拍の表であり、モーラの表である。」(岸田一九八四・四九四)とも述べている。

「音韻」という用語をめぐる問題は、結局のところ、新しい音韻論の概念に、古くからある「音韻」を用いたことに起因するものと思われる。これについて、釘貫(二〇〇七・六、一九)は、「わが学界の『音韻』の語と概念には独自の伝統的蓄積が複雑に絡んでいる」、「『音韻』の語には西洋言語学の音韻論 phonology にわが国独自の伝統的な観念が付着しているのである。」としている。こういったことを考慮すれば、phoneme に「音素」を用いて、「音韻」は伝統的な日本語音の単位であるモーラに使ったほうが、混乱が少なくすむように思われる(実際、そういう使い方が多いように思う)。

もつとも、現代音韻理論においては、初期の生成音韻論で、早くに音素(および音節、強勢)が音韻素性(弁別素性、示差的特徴)に解体され(SPE (≡ The Sound Pattern of English) 理論。Chomsky & Halle 一九六八・一六四)、後の非分節・非線形音韻論(自律分節音韻論や韻律音韻論)で、韻律単位として、音節が復活し、さらにモ

らである。つまり、このとらえ方の場合、「音韻」は日本語独自の音概念に(ほぼ)限られることになる。以上述べてきたことは、結局、次の二つの問題点にまとめられる。

(a) phoneme の訳語は、「音素」か、「音韻」か

(b) 日本語音の基本単位は、音素か、音節(モーラ)か

(a) の phoneme の訳語については、「はじめ『音素』が提出され、ついで小林英夫によってこれが斥けられて『音韻』が流通するに至り、さらにまた最近は服部四郎の影響のもとに『音素』が復活してゐる。」(「最近」とは一九五五年ごろ。亀井一九七一・一六一)という経緯がある。「音素」は、昭和初年ごろ(一九二八年以前)に、日本式ローマ字論者である田中館愛橘や菊沢季生らが、イギリス音声学派の D・ジョーンズや H・E・パーマーの phoneme を訳したものである。ほぼ同時期に、小林英夫が、F・de ソシユールやブラーグ学派の phonème を「音韻」と訳したが(フェルディナン・ド・ソッスユール述、シャルル・バイイ、アルベール・スシュエ編、小林英夫訳『言語学原論』岡書院、一九二八、トルベツコイ、小林英夫訳『形態音韻論』について「方言」二一―一一 春陽堂、一九三二など)、これは、「この語を『音素』と訳するは当らず。かゝる訳語は構成主義に基く」(小林英夫『言語学通論』三省堂、一九三七・二五九)と考えたからである。昭和初期の他の言語学者たちも、「国語などで説かれて来た『音韻』も、筆者の見るところでは、一種のフォネムに外ならない」(佐久間鼎)、「phoneme を研究するのがフォノロジーだと云ふのださうである。〔中略〕音韻を研究する音韻論で、丁度よい」(金田一京助)、「私が音韻と称する所のは〔中略〕根本に於てはフランスの社会派の phonème に最も近い」(有坂秀世)などとして(いずれも、『音声学協会会報』三五(日本語音韻論我観「特輯号」の記事からの引用)、多くが「音韻」を採用した(第二章五・二)。

(b) の日本語音の基本単位については、「日本語における最小の音韻的単位を、英語などのばあいと同じように、音声学における単音に該当するものとし、これを音韻もしくは音素と名づけるという考えかたが多く行な

史) 研究を、(一) 主として一語のみを扱うものと、(二) 主として複数の関連する語を扱うものとの二つに分けて考えていきたい。(一) は、ある語について、その語の形成や、その意味・用法の変遷を追うもので、(二) は、ある(いくつかの) 概念について、その概念の形成や、それを表す(複数の) 語の形成、また、その意味・用法の(整理・統一されていく) 変遷の過程を追うものである。

また、ここでは、語彙的な「意味」と、(専門的な「概念」とを区別しておく。宮島(一九八二:三、二〇) は、意味と概念とについて、「意味は言語のカテゴリーだが、概念は認識・思考のカテゴリーである。」「国語辞典では、ある単語の意味を説明し、専門語辞典ではその単語のあらわす[科学的]概念を説明する。」「意味とは、単語の使用を規定するような日常的な概念である。」などとしているが、ここでは、これに従っておく。

### 三・一 「音韻」の語誌研究

まず、「音韻」の語誌(語史)について見ていく。「近年の語史研究の進展の状況」を見るには、まず『日本国語大辞典 第二版』(小学館、二〇〇〇～二〇〇二)以下、『日本国語大』の記述を見るべきであろう(前田二〇〇二:二四九)。同辞典には、「音韻」について、次のように記載されている。

①音とひびき。また、その調和。音色(ねいろ)。

＊経国集(827) 一三・奉和搗衣引(巨勢識人)「通霄砧杵未<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>足、音韻填<sub>レ</sub>掬不<sub>二</sub>相讓<sub>一</sub>」

＊西国立志編(1876-7) (中村正直訳) 二・八「大風琴(ラルガン)を建る事を、或人より托せられたりければこれより、始めて音韻(注) テウシ」を調和することを学び」

＊宋書・謝靈運伝論「二簡之内、音韻尽殊、両句之中、軽重悉異」

②(漠然と) 言語音をいう。

ーラやフット(音節より大きく語より小さい単位)が導入されており(原口一九九四～一九三、田中二〇〇五～八三)、「最小単位」を設定する意義が薄れている。とはいえ、それでも、音韻論の基本的な単位としてわかりやすいのは、(アルファベットと対応するレベルである) 音素(レベル)であろう。

いずれにしても、そもそも「音韻」とは、どういう意味で、どのような背景をもつ語なのかを見ておく必要があると思われる。そこで、次に、語彙論的なアプローチから、「音韻」について考えてみたい。

### 三 語彙論における「音韻」

ここである語彙論的アプローチとは、語彙研究領域の枠組みに基づいて行う研究方法のことである。語彙研究領域をまとめたものには、たとえば、安部(二〇〇九:二三)の「語彙のカテゴリー」などがある。これは、以下のような、三区分、五領域、一一分野をもつ。

【区分】		【領域】		【分野】	
単語単位		(単語単位)		意味、形態	
類単位		語の内的属性		文字、語構成、語種、文法機能	
		語の外的属性		位相、文体、文化	
語彙単位		総合的総体単位		意味体系による位置付け	
		集合的総体単位		計量的方法による位置付け	

これらには、それぞれ、共時的研究と通時的研究とがある。通時的な研究のうち、「その語の使われ方をその語と関わりのある他の語も合わせて文化的、歴史的背景の中で考える」研究が「語誌」である(単なる一語の通時的研究が「語史」であり、また、語誌の集大成が「語彙史」となる。前田二〇〇九:二〇八)。ここでは、語誌(語

からないという点である。④の用例は一九三一年の『国語音韻論』なので、語釈にある「音韻論」は、ソシユール言語学以降の音韻論だと思われるが、そうすると、それ以前の言語音研究における「音韻」は④には当たらない(②に当たるか)ということになる。これについては、筆者は、それほど厳密には考えず、明治期の日本語研究に現れた「音韻」などもこれに含めていいのではないかと考えている(これらについては、第四章で見る)。

以上のような点を含む「音韻」の語誌については、第二章以下で扱う。現代日本語における「音韻」については第二章で、古代中国語、古代日本語、近代日本語における「音韻」については第三章で、明治初期・中期の日本語研究(具体的には、日本語文語文典)における「音韻」については第四章で、明治後期・大正期の日本語研究(具体的には、日本語口語文典)における「音韻」については第五章で見る。ここで、「音韻」の意味の変遷の図を挙げておく(図一一)。詳しくは、第三章四節を参照。図の『日国』の欄は、『日本国語大』における意味区分である)。

\*小説神髓(1885-86)〈坪内逍遙〉下・文体論「音韻(オンセン)の似ると似ざるとには係(かかは)らず」

\*日本語学「班(1890)〈岡倉由三郎〉三「思想交換の良好方便たる言語は、音韻を以て其原料とす。されど只、音韻を発したるのみにては、意を他人に通じ得べからず」

\*旅日記から(1920-21)〈寺田寅彦〉一〇「其のrの喉音や語尾の自然な音韻が紛れもない独逸の生粋の氣分を旅客の耳に吹込むものであった」

③漢字の表わす一音節の頭初の子音とそれを除いた後の部分。音(声母・頭子音)と韻(韻母)。

\*寛永刊本江湖集鈔(1633)一「音韻は体用也。吹出す処が音也。それより色々に分て出る処が韻ぞ」

④言語学で、具体的な音声から音韻論的な考察を経て抽象された言語音をいう。

\*国語音韻論(1931)〈金田一京助〉二・一「この抽象された音声概念が即ち言語学上音韻と呼ばれて、言語の形式を為す所のものである」

以上の記述には、いくつか気になる点がある。一つは、①が雑多な「音とひびき」を含むことである。用例を見ると、『経国集』と『西国立志編』のものは「楽器の(ような)音」であり、『宋書』のものは「詩のリズムや韻律」である。ここにはないが、このほかに「歌声」や「声(ことば)の響き」なども①に含まれると思われる。

二つ目は、②と③の用例(最も古いもの)の新旧が逆になっている(③が古く、②が新しい)ことである。同辞典の「凡例」には、「語釈の記述」について、「一一般的な国語項目については、原則として、用例の示すところに従って時代を追ってその意味・用法を記述する。」とあり、「採用する出典・用例」について、「(イ)その語、また語釈を分けた場合は、その意味・用法について、もっとも古いと思われるもの。」とある。これに従えば、②と③とは記述の順序が逆だということになる。

三つ目は、④の「音韻」の始まりをいつと考えればいいのか(いつの「音韻」から④と見ていいのか)よくわ

来ているものである。この音韻観は、明治期の日本文典によく見られる（第四章四節）。例を一つ挙げておく。

〔I 14〕 母音〔ア行〕・子音〔カㄱワ行音〕ヲ連タル図ヲ五十連音図ト云フ。此図ハ堅ノ五字ヲ音トシ、横ノ十字ヲ韻トス。〔中略〕此五十ノ音韻ハ縦横ニ通ジ、万変ニ応ズルモ、各其格ニ従テ、混乱錯雜スルコトナシ。〔句読点は筆者〕

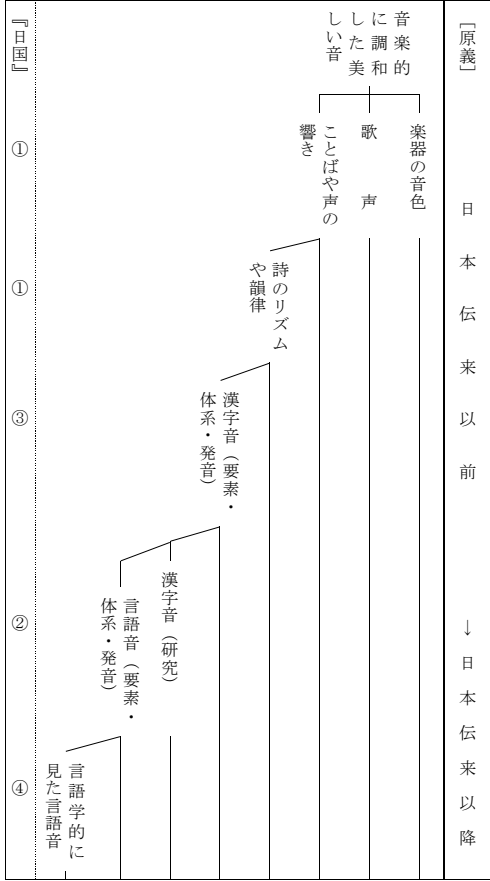
（物集高見『初学日本文典上』一八七八・七ウ）

三・二 音韻関連の用語の研究

次に、（複数の）音韻関連の用語について、語誌と属性（とくに語構成と位相）とを中心に見ていく。音韻関連の用語の語誌については、とくに「概念や用語をめぐる混乱が整理・統一されていく過程」として見ることもできるだろう。中国の伝統的な音韻学（漢語音韻学）においては、一九三〇年代に、羅常培が、概念や用語をめぐる問題を「名実の混淆」（「名実（用語）の混乱」と呼び、「正名」（名を正す（用語・概念を明確にする））を、音韻学における重要な課題としている（羅二〇〇四：四八七）。ここでは、「音韻」については、すでに述べたので「母音」、「子音」、「音節」について触れておく。なお、漢語音韻学、日本漢字音研究における「音韻」については第六章で、その他の用語の語誌については、第七章（「母音」、「子音」、「音節」と、第八章（「音素」、「単音」、「発音」、「音声」、「声音」とで扱う）。

「母音」と「子音」は明治初年ごろから、「音節」は一九〇〇年ごろから使われ始めた用語であるが、明治・大正期には、その概念を表すのに、ほかの語も使われ、また、同じ語（文字列）が異なる概念を表すことなどもあった（第七章二節、三節）。たとえば、明治期の日本文典などでは、子音の概念を表すのに、「父音」が多く使われ（ほかに「発声」なども使われた）、一方で、「子音」は、「子音＋母音」の「音節を表すのに多く使われた（子

図一 「音韻」の意味の変遷



「音韻」の語誌から見ると、「音韻＝音節（モーラ）」というと考え方は、江戸時代の国学に始まる（もと悉曇学や韻鏡学に由来する）、五十音図に基づいて、行を「音」、列（段）を「韻」、五十音を「音韻」とする見方から

続いて、音韻関連の用語の属性、とくに語構成と位相における特徴を取り上げる。語構成については、より上位の（全体的な）概念を表す、「音韻」や「音声」が並列構造（類義関係）をとり、より下位の（部分的な）概念を表す、「母音」、「子音」、「単音」、「音節」、「音素」などが（くの音、「音のく」という）統語構造（連体修飾構造）をとるという特徴が見られる。ただし、「発音」は、本来動詞性の語（音を発する）であり、統語構造（動賓（VO）構造）をとっている。

このうち並列構造のものを見ると、「音韻」における「音＋韻」という順序は、中国語（漢語）の、「並列語」における、構成要素（字）が「声調の順序で並ぶ」（古典語では「平声・上声・去声・入声」の順、現代語では「第一声（陰平声）・第二声（陽平声）・第三声（上声）・第四声（去声）」の順）という規則（中川二〇〇五：一六八）に従ったものと思われる。「音」は平声（第一声）、「韻」は去声（第四声）。また、「音声」については、一方にこれと逆に構成要素が並ぶ（「反転語」の関係にある）「声音」という語もあるが（中国ではこちらが主に使われる）、中川（二〇〇五：一六八）によれば、日本語の「語順」には「母音優先の原理」（「母音で始まるものが前にくる」）があるといい、「音声」（「おん」＋「せい」）がこれに合うため、日本語ではこちらが主に使われるようになったとも考えられる。ところで、「音声」は、今日の一般的な読み方は「おんせい」であるが、古くは「おんじよう（おんじやう）」が一般的であり（ほかに、『日本国語大』の見出し語には、「いんじよう」、「いんせい」、「おんぞう」もある）、「声」の読み方に、呉音から漢音への交替が起こっている（なお、『日本国語大』における「おんせい」の最古の用例は、一七〇三年刊の歌謡集、『松の葉』のものである）。これについては、明治・大正期の漢字の字音には「一字について一つの字音に統一される傾向」があり（飛田一九六八：三八九）、「音」の読みが「おん」（呉音）に、「声」の読みが「せい」（漢音）に統一されていったことが、「音声」が「おんせい」という読みで定着したことの要因かとも思われる。

位相については、音韻関連の用語のほとんどが、翻訳語として、専門的な概念（のみ）を担う専門語であると

音の概念を表す「子音」は、主に英語学などで使われた。「子音」と「音節」とが、子音と音節との概念を表す（それぞれ、ほぼ唯一の）語として定着するのは、昭和初期のことである。

ところで、近年、漢語（とくに翻訳語などの「新漢語」）の研究に、「日中語彙交流史」という新しい研究分野が生まれている（孫二〇一五：七によれば、この分野を開拓したのは、沈国威である）。孫（二〇一五：四）は、西洋文明の概念の翻訳語に関する「日中近代漢語の借用関係」について、一九世紀中頃までは、中国で作られた「転用語」（すでに「存在する類義語に新しい意味を付加して転用」した語）や「新造語」（もともと「その概念がなく、新しく造語」した語）が、中国語から日本語に移入し、一九世紀末からは、逆に、日本で作られた「転用語」や「新造語」が、日本語から中国語に移入したと述べている。この観点から、音韻関連の用語を見ると、次のようなことがいえる（第二章五・二、第四章。㉑は日本語、㉒は中国語を示す）。

phoneme ㉑ 「音素」、「音韻」 ㉒ 「音位」、「音素」

「音素」は、日本と中国とで別々に作られた語のようで、日本語では昭和初年ごろ（一九二八年以前）から、中国語では民国初年ごろ（一九一三年以前）から使われている。ただし、中国語では、「音素」は、ふこう phone や speech sound の意味で使われる（日本語の「単音」に当たる）。中国語における「音素」が phoneme を表す用法は、あるいは、日本語からの借用かもしれない。

vowel ㉑ consonant ㉒ 「母音」と「子音」 ㉑ 「元音」と「輔音」、「母音」と「子音」

「母音」と「子音」とは、日本での造語で、中国語にも借用されたようである。

syllable ㉑ 「音節」 ㉒ 「音節」、「音綴」

「音節」は、本来「リズムや韻律」の意味であったが、日本で syllable に当てて使われるようになり（あるいは、これは、本来の「音節」とは無関係の造語かもしれない）、この用法が、中国語にも借用されたようである。中国語では、「音節」以前に、「切音」、「分音」、「字音」、「綴音」などが使われていた。

スウィートの考えを発展させたのは、D・ジョーンズである。ジョーンズは、これに「音素 (phoneme)」と「異音 (allophone)」という概念を取り入れ、「一音素一記号」の原理による表記を「音素表記」あるいは「簡略表記 (broad transcription)」と呼び、異音による表記を「異音表記」あるいは「精密表記 (narrow transcription)」と呼んだ (Jones 一九六〇: 五一)。

音素の例として、ジョーンズは、日本語のハ行子音を取り上げている。

(15) The initial consonants in the Japanese words *hito* (man), *hata* (flag), *huzi* (fiji) (wisteria) are very different to the ears of a European, the first resembling a German *ich*-sound (ç), the second being an ordinary *h*, and the third being a *bi-labial* *f* (φ); but in the Japanese language the three sounds are merely members of a single phoneme, their use being determined by the vowel following. In the Japanese *‘Kumetaki’ Romaji* spelling introduced in 1937 they are represented by a single letter (h). [日本語の「hito (人)」「hata (旗)」「huzi (fiji) (藤)」の語頭の子音はヨーロッパ人には、まったく別の音に聞こえるが、最初のもはドイツ語の *ich* の音 (ç) に似ており、二つ目はふつうの *h* であり、三つ目は両唇の *f* (φ) である。] この三つの音は、日本語では同一の音素の成員に過ぎず、これらの使い分けは、後続する母音によって決まる。日本語の訓令式ローマ字表記 (一九三七公布) では、これらは一つの字母 (h) で表される。]

(Jones 一九六〇: 五〇)

15では、音素 *h* は ç・h・φの三つの異音をもつと述べている。さらに、次のように述べる。

(16) Different sounds which belong to one phoneme do not distinguish one word of a language from another, failure on the part of the foreigner to distinguish such sounds may cause him to speak with a foreign accent, but it will probably not make his words unintelligible. [同じ音素に属する異なる音は、単語の区別には関係せず、外国人がそれらの音を区別できずに、外国語なまりで話しても、意味が理解しにくくはならない。]

いう特徴をもつ (音韻) の専門語・翻訳語としての特徴については、第二章五・一・五・二参照)。ただし、「音声」については、(冒頭で見たように)「一般語としての用法をもつ語だといえるであろう。「音韻」にも、「音とひびき」『日本国語大』「音韻」①」という、一般語としての意味があり、現代日本語においても、そのような用法が散見されるが(第二章三・二)、学習国語辞典にこの意味が載せられていないことに見られるように、今日ではあまり一般的な用法とはいえないようである(冒頭で見たように、この語自体、使用頻度があまり高くない)。

#### 四 音韻と日本語学習とのかかわり

本章の最後に、音韻と日本語学習とのかかわりについて考えてみたい。

外国語学習に「音韻」という考え方を取り入れることについては、黒田龍之介がその重要性を強調している。黒田(二〇〇四: 一〇八、一二〇)は、『「音韻」とは、『』』が違ったら別の意味になっちゃうよ』という点に注目する、各言語ごとの音の研究分野である。」と定義し、「意味の違いに関わってくる音は、各言語ごとに決まっている。外国語学習だったら、これを押さえることが第一歩である。」と述べて、「わかってもらえる発音」を「音韻レベル」、「うまい発音」を「音声レベル」としている。

音韻と音声とにかかわる、このような実践的な二分法は、H・スウィートの発音表記である(国際音声記号(IPA)の字母の起源とされる)「簡略ローミック表記(broad Romic)」(音素表記に近い)と「精密ローミック表記(narrow Romic)」(音声表記に近い)とにさかのぼる[Romicとは、字母を、英語読みではなく、本来のローマ字読みで読むという意味である(Sweet 一八七七: 一〇二)]。スウィートは、前者を「大雑把にいくつかの音を同一の記号で」表したもので、後者を「はっきりと一つの音を表したものと考え、両者の違いを「量的な違い」と見た(牧野一九七三: 二一九、Sweet 一八七七: 一〇五)。



弁別素性という考えは、プラグ学派のN・S・トウルベツコイや、アメリカ構造言語学のL・ブルームフィールドなどの「音素」についての見方（音韻的に意味ある諸特徴の総体）（トウルベツコイ一九八〇：四二）、「示差的音特徴の最小単位」（ブルームフィールド一九七〇：一〇〇）に起源をもつものであるが、その後の音韻理論にも受け継がれ、（音素レベルを認めない）生成音韻論などでは「音韻素性」（phonological feature）とも呼ばれている。

今日の音韻理論では、各種の音韻現象を法則として表すことが試みられている。たとえば、日本語では、連濁（あるいは、非連濁）、促音化（あるいは、非促音化）、母音の無声化、借用（外国語音の日本語化）、アクセントの付与などについて、法則の記述が行われている（田中二〇〇九など）。これらには、語種による差が見られるものもある。たとえば、連濁は和語に起こりやすく、促音化は漢語に起こりやすい。促音化の例を挙げると、漢語（漢字音）の「一ツ」は、無声子音の前で促音化（逆行同化）するという規則がある（これを、「変換禁止（忠実性の確保）が優先順位の低い（違反可能な）制約となっている」（ので、変換（促音化）が起こる）」とする、最適性理論のとらえ方などもある。田中二〇〇九：一四五）。たとえば、「活（かつ）」＋「気（き）」で「活気（かつき）」になる。これに対して、和語では、「勝つ（かつ）」＋「気（き）」は「勝気（かつき）」で、促音化は起こらない。このような音韻規則を（実用的な形で）示すことは、日本語学習の手助けになるように思う。

#### 【第一章のまとめ】

第一章では、日本語研究において、音韻がどのようにとらえられているかについて概観した。

一 はじめに

一般に、言語音に関する教育について、「音声教育」という言い方はされるが、「音韻教育」という言い方はされない。

(Jones 一九六〇：五一)

これは、たとえば、「人」を〔*ɕio*〕ではなく〔*hio*〕と発音しても、「藤」を〔*ɕuzi*〕ではなく〔*huzi*〕と発音しても、とりあえず通じる（「わかってもらえうる発音」になる）ということである。ジョーンズの音素（表記）は、外国語学習者の発音教育に役立てることを目的とするものであった。なお、この、「簡略表記Ⅱ音素表記」、「精密表記Ⅱ異音表記」とするとなえ方は、今日の音声学・音韻論にも見られる（高橋二〇一三：九など）。

言語音における二つのレベルということでは、音素という概念が成立する（音韻論と音声学とはつきり分化する）以前に、右とは別の観点から、松下大三郎が論じている。松下は、「文法学と一般音声学とは声音の取扱方が違ふ」、「五十音図は音の文法学的行列図であつて声音学的行列図とは違ふ点がある。」として、「声音」（音声）に「声音学的音価」と「文法的音価」という二つのレベルを認め、たとえば、『ち』は声音学的にはチャ行イ列ㄷであるが、文法学的にはタ行イ列ㄸである。行力ないー行キます、立たないー立チます、カ・キタ・チである。羅馬字ではㄷである。ㄷと書いては文法的でない。」としている（松下大三郎『標準日本文法』紀元社、一九二四：五、一一）。なお、タ行音の子音に関しては、その後（一九四九年、服部四郎が、同一の音素で統一のにとらえることを否定し、「タ・「テ」・「ト」のまとは別に、「チ」・「ツ」・「チャ」・「チュ」・「チヨ」の子音音素として、ㄷを導入した（服部一九九〇：一五〇）。今日の日本語学では、この見方が主流となっている（ただし、現代音韻理論における「基底形」では、「チ」や「ツ」を、ㄷやㄸとする）。

さて、黒田（二〇〇四：一〇八）の『ここが違つたら別の意味になっちゃうよ』という点とは、弁別素性（示差的特徴（distinctive feature）のことである。これは、たとえば、（日本語にある）「有聲／無聲」という弁別素性をもたない（有聲音と無聲音との対立のない）言語の話者が、日本語のガ・ザ・ダ・バ行音を、（語頭子音の「有聲性」を「有聲性」（＋無聲性）にして）カ・サ・タ・バ行音（に聞こえる音）で発音した場合、日本語話者に誤解されるおそれがあるということである。

安部清哉（二〇〇九）「語彙史研究と語彙的カテゴリー…その多様性と体系化」安部清哉・斎藤倫明・岡島昭浩・半沢幹一・伊藤雅光・前田富祺『語彙史』（シリーズ日本語史２）岩波書店  
上野善道（二〇〇四）「音の構造」風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健『言語学第2版』東京大学出版会  
太田聡（二〇〇五）「SPE理論とそれ以前の音韻論」西原哲雄・那須川訓也編『音韻理論ハンドブック』英宝社  
亀井孝（一九七二）「音韻」の概念は日本語に有用なりや』『亀井孝論文集Ⅰ日本語学のために』吉川弘文館（一九五六初出）

岸田武夫（一九八四）『国語音韻変化の研究』武蔵野書院  
釘貫亨（二〇〇四）『近世仮名遣い論の研究…五十音図と古代日本語音声の発見』名古屋大学出版会  
釘貫亨（二〇一三）『国語学』の形成と水脈』ひつじ書房  
黒田龍之介（二〇〇四）『はじめての言語学』（講談社現代新書一七〇）講談社  
佐久間鼎（一九三五）『音声学』かといふことの意味』『音声学協会会報』三五 音声学協会  
孫建軍（二〇一五）『近代日本語の起源…幕末明治期につくられた新漢語』早稲田大学出版部  
高橋幸雄（二〇一二）「音の構造について…音声学・音韻論」西原哲雄編『言語学入門』朝倉書店  
高山倫明（二〇一六）「音声学と音韻論」高山倫明・木部暢子・松森晶子・早田輝洋・前田広幸『音韻史』（シリーズ日本語史Ⅰ）岩波書店  
田中伸一（二〇〇五）「韻律音韻論」西原哲雄・那須川訓也編『音韻理論ハンドブック』英宝社  
田中伸一（二〇〇九）『日常言語に潜む音法則の世界』開拓社  
N・S・トゥルベツコイ、長嶋善郎訳（一九八〇）『音韻論の原理』岩波書店（原著一九三九）  
中川正之（二〇〇五）『漢語からみえる世界と世間』（もっと知りたい！日本語）岩波書店  
西田龍雄（一九八六）「言葉と音声（Ⅱ）…音韻論」西田龍雄編『言語学を学ぶ人のために』社会思想社

「音韻」は、抽象的、理論的な音を表すのに使われ、「音声」は、具体的、実際の音を表すのに使われる。

## 二 音韻論における音韻

「音韻」という用語は、言語学・英語学の入門書にはあまり使われておらず、日本語学の概説書で多く使われている。そこには、音韻を、音韻論における機能的な単位（音素など）とする見方と、母語話者の音の観念とする見方とが見られる。音韻として扱う範囲には、分節音（音素や音節など）のみ、分節音＋非分節音（アクセントやリズムなど）、もとなる音＋実現音、という二つのものが考えられる。音韻の基本単位については、音素とすると、音節（モーラ）とするとある。

## 三 語彙論における音韻

語彙論的アプローチとは、語彙研究領域の枠組みに基づいて行う研究方法のことである。これに、通時的な研究として、語史（語誌）研究がある。語史（語誌）を見る基本文献として、『日本国語大辞典第二版』があるが、同辞典における「音韻」の記載には疑問点があり、「音韻」に関して、さらなる語誌研究が必要である。また、「音韻」や、その他の関連用語については、語の属性、とくに語構成や位相に、語彙論的特徴が見られる。

## 四 音韻と日本語学習とのかわり

外国語学習に、音声のほかに、音韻というレベルを取り入れようとする考え方がある。「音韻レベル」とは、D・ジョーンズの「音素」のレベルに当たるもので、「意味が理解されないわけではない」発音のレベルということになる。今日の音韻理論では、さまざまな音韻現象を法則として示すことが試みられており、これらの成果には、日本語学習の手助けになるものもあると思われる。

## 第二章 現代日本語における「音韻」

### 一 はじめに

本章では、「音韻」という語について、主に、現代日本語における意味・用法を見ていく。また、日本語の「音韻」が歴史的に中国語に由来することを踏まえ、現代中国語における「音韻」の意味・用法についても見ていく。その上で、この語のもつ語彙論的特徴（語の成立・発展における特徴）を探っていく。まず、第二節で、「音韻」という語の意味・用法に関する調査方法を述べる。次いで、第三節で、現代日本語における「音韻」の意味・用法の調査の内容とその結果を示し、分析・考察を行う。続いて、第四節で、現代中国語における「音韻」の意味・用法の調査の内容とその結果を示し、分析・考察を行う。最後に、第五節で、日本語の「音韻」のもつ語彙論的特徴について考察する。なお、日本語研究においては、音韻とは何か、音韻をどうとらえるかをめぐって、しばしば議論が行われてきたが、ここでは専門的な議論には触れない。

### 二 調査の方法

ここでは、現代語における「音韻」という語の意味・用法について、主に、次の三つの観点・方法によって調査を行う。

- (一) 規範…「音韻」について、辞書の記述を見る。
- (二) 実態…「音韻」について、コーパス（言語資料）調査を行う。
- (三) 意識…「音韻」について、アンケート調査を行う。

服部四郎（一九四〇）「Phonemeについて」『音声学協会会報』六〇、六一 音声学協会『新版音韻論と正書法…新日本式つづり方の提唱』大修館書店、一九七九に収録

服部四郎（一九九〇）『新版音韻論と正書法…新日本式つづり方の提唱』（再版）大修館書店（一九七九初版）

原口庄輔（一九九四）『音韻論』（現代の英語学シリーズ 3）開拓社

飛田良文（一九六八）『明治大正期における漢音・呉音の交替』近代語研究第2集『近代語学会』（東京語成立史の研究）

東京堂出版、一九九二に収録）

L・ブルームフィールド、三宅鴻・日野資純訳（一九七〇）『言語』（新装版）大修館書店（一九六二初版、原著一九三三）

前田富祺（二〇〇二）『語彙史』北原保雄監修、斎藤倫明編『語彙・意味』（朝倉日本語講座 4）朝倉書店

前田富祺（二〇〇九）『文化からみた語彙史』安部清哉・斎藤倫明・岡島昭浩・半沢幹一・伊藤雅光・前田富祺『語彙史』（シリーズ日本語史 2）岩波書店

牧野勤（一九七三）『イギリスの音声学』小泉保・牧野勤『音韻論 1』（英語学体系 1）（3版）大修館書店（初版一九七一）

宮島達夫（一九八一）『専門語の諸問題』（国立国語研究所報告六八）秀英出版

羅常培（二〇〇四）『音韻学不是絶学』羅常培語言学論文集・商務印書館（一九四四初出）

Chomsky, Noam & Morris Halle (1968) *The sound pattern of English*, New York, Harper & Row.

Jones, Daniel (1960) *An Outline of English Phonetics* (Ninth Edition), Cambridge, W. Heffer & Sons, Manuzen. (初版一九一八)

Sweet, Henry (1877) *A Handbook of phonetics*, Oxford, the University of Oxford. (複製：木原研三編『〈ハントリー・スウィー

ト音声学提要』三省堂、一九九八）

- ①中国語で、漢字の音（語頭の子音）と韻（語尾の母音・韻尾）。
- ②具体的に発音された一つ一つの音声から抽象され、記号として表される最小単位の言語音。音素。「一論」・『岩波国語辞典 第七版新版』（岩波書店、二〇一一）
- ①一つの言語で、個々の言語音を他の言語音と対比して、同類の言語音として一まとめにできるようなもの。例えば、日本語の「デンキ」「デンバ」の「ン」は音声としては異なるが、同じ音韻だと認められる。
- ②漢字の音（＝頭音）と韻（＝尾音）。
- ・『新選国語辞典 第九版』（小学館、二〇一一）
  - ①漢字の音と韻。
- ②『語』実際の発音から抽象された、語の意味の区別に役立つ単位としての音。
- ・『集英社国語辞典 第三版』（集英社、二〇一一）
  - ①言語音の単位。音素。例えば、「でんわ」[denwa]、「でんぱ」[denpa]、「でんき」[denki]の「ん」は実際の発音では[n] [m] [ŋ]と音声が違うが、同じ音と意識される類。v phoneme
  - ②漢字の頭音と韻尾。
- ・『現代国語例解辞典 第五版』（小学館、二〇一六）
  - ①音と韻。漢字のはじめの音と後半の韻。
  - ②音声に対して、ある言語を表す共通の音として抽象された音の体系。
- ・『学研現代新国語辞典 改訂第五版』（三省堂、二〇一四）
  - ①漢字の音（語頭の子音）と韻（語尾の母音）。
  - ②一回一回の具体的な音声に対して、同一言語社会に属する話し手たちが共有していると仮定される抽象的な言語音。

(一) ～ (三) の調査を、現代日本語と現代中国語について、それぞれ行う。その調査結果を分析して、両言語（現代語）における「音韻」の意味・用法を明らかにするとともに、両言語（現代語）における「音韻」の意味・用法を比較対照して、その異同を見る。さらに、そこから、日本語における「音韻」という語のもつ語彙論的特徴を探っていく。

### 三 現代日本語における「音韻」の意味・用法の調査

#### 三・一 辞書の記述（日本語）

まず、辞書における「音韻」の意味記述（語釈）を見る。ここで調査対象としたのは、現代の主な国語辞典である（小型（学習）国語辞典に関しては、二〇一〇年一月改定の「常用漢字表」に対応しているものに限った）。以下に、辞典名と各辞典における「音韻」の意味記述を挙げる（意味区分の番号は、○数字に統一して示す。以下同じ）。

- 〔小型（学習）国語辞典〕
- ・『新明解国語辞典 第七版』（三省堂、二〇一一）  
言語によつて異なる特徴を有する、意味の区別を示す弁別性を持った音声（の種類とその体系）。
- ・『三省堂国語辞典 第七版』（三省堂、二〇一四）  
〔言〕その言語で、同じと意識されている音（オン）（の種類）。例、英語で何種類かに区別されている「ア」は、日本語では一つの音韻。↓音声
- ・『明鏡国語辞典 第二版』（大修館書店、二〇一〇）

ればこれより、始めて音韻（注）テウシ）を調和することを字び」

\* 宋書「謝靈運伝論」一簡之内、音韻尽殊、両句之中、軽重悉異」

②（漠然と）言語音をいう。

\* 小説神髓（1855-86）「坪内逍遙」下・文体論「音韻（オンキン）の似ると似ざるとには係（かは）らず」

\* 日本語学 一班（1890）「岡倉由三郎」三「思想交換の良好方便たる言語は、音韻を以て其原料とす。されど只、音韻を発したるのみにては、意を他人に通じ得べからず」

\* 旅日記から（1920-21）「寺田寅彦」一〇「其のrの喉音や語尾の自然な音韻が紛れもない独逸の生粋の気分を旅客の耳に吹込むものであった」

③ 漢字の表わす一音節の頭初の子音とそれを除いた後の部分。音（声母・頭子音）と韻（韻母）。

\* 寛永刊本江湖集鈔（1633）一「音韻は体用也。吹出す処が音也。それより色々に分て出る処が韻ぞ」

④ 言語学で、具体的な音声から音韻論的な考察を経て抽象された言語音をいう。

\* 国語音韻論（1931）「金田一京助」二・一「この抽象された音声概念が即ち言語学上音韻と呼ばれて、言語の形式を為す所のものである」

以上の各辞典に挙げられている意味を、『日本国語大辞典 第二版』（以下『日本国語大』の意味区分（語義・用法の分類）を基準に、一覧表にして示す（表二一）。表中では、意味記述を簡略化した。以下同じ）。

③ 「音素おんそ」に同じ。

〔中型国語辞典〕

・『広辞苑 第六版』（岩波書店、二〇〇八）

① 中国語で漢字の音を構成する声母や韻母などの総称。↓声（せい）・韻。

② (phoneme) 音素、または音素と韻律（声調・アクセント）とを組み合わせた単位。

・『大辞泉 第二版』（小学館、二〇一一）

① 音と響き。ねいろ。

② 漢字の音と韻。声母（漢字音の子音）と韻母（漢字音の頭子音を除いた後の部分）。

③ 言語学で、音韻論的な考察を経て、具体的な音声から抽象された言語音。

・『大辞林 第三版』（三省堂、二〇〇六）

① 言語の音声。

② 現実の音声に対して、言語学的分析に基づく抽象的な音。

③ 音素。

④ 漢字音の声母（頭子音）と韻母。

⑤ 音色。響き。

〔大型国語辞典〕

・『日本国語大辞典 第二版』（小学館、二〇〇〇～二〇一三）

① 音とひびき。また、その調和。音色（ねいろ）。

\* 経国集（827）一三・奉和搗衣引（巨勢識人）「通霄砧杵未<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>足、音韻<sub>二</sub>填<sub>一</sub>挑<sub>二</sub>不<sub>二</sub>相<sub>一</sub>譲<sub>一</sub>」

\* 西国立志編（1870-71）「中村正直訳」二・八「大風琴（ラルガン）を建る事を、或人より托せられたりけ

表二―からわかるように、すべての国語辞典に記載されているのは、『日本国語大』の④に当たる意味のみである。これに次いで、多くの国語辞典に『日本国語大』の③に当たる意味が載せられている。小型（学習）国語辞典には、この二つの意味しか記載がなく、最も古い（本来の）意味と思われる『日本国語大』の①に当たるものについては、記載がまったく見られなかった『日本国語大』の「凡例」に「一般的な国語項目については、原則として、用例の示すところに従って時代を追ってその意味・用法を記述する」とあり、①が最も古い意味だと思われる。

ここから、日本の国語辞典では、「音韻」を、主に専門的な概念（言語学における「音韻」、漢字音研究における「音韻」）を担う語として扱っていることがわかる。

三・二 コーパス調査（日本語）

次に、コーパス（言語資料）を使った、「音韻」の意味・用法の調査結果を見る。ここでは、コーパスとして、「朝日新聞記事データベース」（開蔵Ⅱビジュアル）の「朝日新聞（一八八五）・週刊朝日・アエラ」、「書き言葉均衡コーパス 少納言」（国立国語研究所、「芸能人・有名人ブログ」（Anaba 検索）を用いた（いずれもウェブ上で、全文検索した）。これらに現れた用例を筆者が分析・分類した結果、「音韻」には、次のような意味・用法が見られた『日本国語大』の四区分のうち、①をさらに三つに分け、合計六つに分類した。

（ア）音楽の音の響き『日本国語大』の①の一部に相当）

（Ⅱ 01）様々な音楽ジャンルが生まれた歴史的背景や楽曲のコード・音韻・音色等を分析し、他曲との類似性を探る「楽曲分析（アナリゼ）」

（YOU-DIEⅢ:オフィシャルブログ「BOBEE」二〇一〇年三月一六日）

表二― 辞書における「音韻」の意味（日本語）

『日本国語大』の意味区分 その他の辞書	『日本国語大』の①			
	①音と響き、調	②言語音	③漢字の音と韻	④言語学的な音
新明解国語辞典 第七版	－	－	－	○
三省堂国語辞典 第七版	－	－	－	○
明鏡国語辞典 第二版	－	－	①	②*
岩波国語辞典 第七版 新版	－	－	②	①
新選国語辞典 第九版	－	－	①	②
集英社国語辞典 第三版	－	－	②	①*
現代国語例解辞典 第五版	－	－	①	②
学研現代新国語辞典 改訂第五版	－	－	①	②・③
広辞苑 第六版	－	－	①	②*
大辞泉 第二版	①	－	②	③
大辞林 第三版	⑤	①	④	②・③

○・…それに当たる意味の記載あり（数字は各辞書における意味区分の番号）。－…それに当たる意味の記載なし。

○\*：「音素」という用語を使っているもの（「phoneme」の訳。「phoneme」は、「音素」とも「音韻」とも訳される。『学研現代新国語辞典 改訂第五版』と『大辞林 第三版』では、「音素」は独立した区分になっている）。

(II 08) 「東北なまりのような音韻で道民が聞くとなつかしく思うかもしれません」と宮下さん。  
『朝日新聞』二〇〇五年八月一九日

(オ) 漢字音の構造 『日本国語大』の③に相当

『朝日新聞』二〇一一年二月八日

(II 09) また漢字を音韻で分類し、行列形式の表に配列した韻図も作られ、宋代には『韻鏡』も編まれた。

『朝日新聞』二〇〇九年八月二三日

(カ) 言語学的に見た言語音（要素・体系） 『日本国語大』の④に相当

(II 10) 東北方言は構文的にも音韻的にも東京方言と異なるだけで、決して東京方言より劣っているわけではない。

『朝日新聞』一九九四年七月二二日

(II 11) 「ことばのしくみ」という点では、日本語の絶対的難易度は、世界の諸言語の中で中位くらいであるとされる。語彙と場面に応じた使い方の面では難しいが、音韻や文法の面では易しい方だからである。

『朝日新聞』二〇〇一年九月一六日

(II 12) たとえば、カリフォルニア大学のM・マーズニックらによる脳の学習機能の研究から、言語訓練プログラムが発案された。音韻を識別する知覚機能を助けるように音声が遅くしたり、その特徴を誇張したりすることによって、学習不能だったこともでも、また外国人でも言語の学習が促進されるという。

『朝日新聞』二〇〇四年二月九日

(II 13) 人の声は母音や子音などの音韻（音素）ごとに音色が大きく違う。

『朝日新聞』二〇〇八年二月二日

(II 14) 言語を分割するのには、いろいろなやり方があるであろう。たとえば、音韻、意味、文法に分ける

(イ) 詩や文章のことばの響き 『日本国語大』の①の一部に相当

(II 02) 五、七、五、七……。重々しく続くリズム。「遠く万葉の時代を思わせる荘重な音韻は、忙しく、乾ききった現代にこそだと思うのですが」と話す。

『朝日新聞』二〇〇〇年一月八日

(II 03) 漢文崩しの文の語感が子どもの頃から大好きで、見知らぬ漢語が不思議な音韻を響かせるグルーヴ感に官能的な愉悅を覚えていた。

『朝日新聞』二〇〇七年七月二九日

(II 04) 歯切れのいいリズムに呼応した歌唱、意味と音韻に工夫を凝らした歌詞などがた森魚ならではの。

『朝日新聞』二〇一一年九月一二日

(II 05) 本書を通読し、あらためて生涯を通じ、その詩論も作品も、音韻やリズムへの傾倒により貫かれた詩人と確信した。

『朝日新聞』二〇一四年一月二六日

(ウ) 詩の韻律（平仄や押韻） 『日本国語大』の①の一部に相当

(II 06) 中国の短歌が、旧来の定型詩がもつ山水詩、田園詩とは異なり、実情実感に近づこうとする。のびやかに人間味を出そうとすることに気づく。音韻などの制約も、いちじるしく緩やかなことが特徴的である。

『朝日新聞』一九九八年五月一八日

(エ) ことばの（具体的な）発音 『日本国語大』の②に相当

(II 07) 「ニホン」と「ニッポン」、どちらが正しいかという問いを時々聞くが、それは「やはり」「やつぱり」などを並べて考えれば簡単に説明がつく。音韻の問題で、どちらがどうということではない。

表二―二 言語資料における「音韻」の意味・用法（日本語）

『日本国語大』の区分		①音と響き、調和			②言語音	③漢字の音と韻	④言語学的な音
資料	主な意味・用法	音楽の音の響き	詩や文章のことばの響き	詩の韻律（平仄や押韻）	ことばの（具体的な）発音	漢字音の構造	言語学的に見た言語音（要素・体系）
	朝日新聞（一九八五～二〇一五）	－	34	4	16	2	52
	アエラ（一九八五～二〇一五）	－	1	－	1	1	2
	書籍（一九七一～二〇〇五）	1	4	1	2	1	19
	ヤフー知恵袋（二〇〇五）	－	－	－	－	－	4
	芸能人・有名人ブログ（二〇〇七～二〇一五）	2	1	－	2	－	2

数字…それに当たる用例の数（同一書籍・記事中の複数例は1とした）。―…それに当たる用例なし。

固有名詞、複合語（「音韻論」、「音韻学」、「音韻体系」、「音韻変化」など）は除いた（最終的な分析対象数は、「資料」右から、それぞれ108、5、28、4、7）。

表二―二から、「音韻」という語は、現代日本語の書き言葉において、「言語学的に見た言語音（要素・体系）」『日本国語大』の④に相当）の意味で使われる場合が最も多く、これに次いで、「詩や文章のことばの響き」『日

とか、語音、単語、文に分けるという考えもあろう。

（杉下守弘『言語と脳』講談社、二〇〇四）

コーパス調査に現れた「音韻」の意味・用法を分析・分類・集計した結果を表二―二に示す。表二―二の「資料」のうち、「朝日新聞」・「アエラ」（週刊誌）は「朝日新聞記事データベース」に、「書籍」・「ヤフー知恵袋」（電子掲示板上のQ & A サイト）は「書き言葉均衡コーパス」による。なお、「朝日新聞記事データベース」では、「週刊朝日」に「音韻」の用例は現れなかった。また、「書き言葉均衡コーパス」では、「書籍」・「ヤフー知恵袋」以外の「メディア／ジャンル」（「雑誌」・「新聞」・「白書」・「教科書」・「広報紙」等）に「音韻」の用例は現れなかった。「書き言葉均衡コーパス」で用例の現れた「書籍」五七種については、NDC分類の「（八）言語」が過半数（三二種）を占めた。



(Ⅱ 16) 末尾の音韻を合わせる。  
調査結果を、まとめて表二―三に示す(右の(ア)と(イ)のいずれにもとれるような記述も見られたが、それについては、ここでは便宜的に分けて、集計した)。

表二―三 アンケートの回答における「音韻」の意味・用法(日本)

『日本国語大』の区分 主な意味・用法 主な記述		調査項目	
①音と響き、調和 (ア) ことばのリズム (二)「リズム」、「ラップ」など (二)「作詩する時、音韻を重視したほうがいい。」		(イ) 詩の韻律(押韻) (二)「漢文漢詩」、「韻を踏む」など (二)「末尾の音韻を合わせる」など	
その他(判断が難しいもの)		「何も思いつかない」	
(二)「音韻」を使った文	1	8	13
(二)「音韻」の意味(イメージ)	2	2	2
(二)「音韻」を使った文	17	2	

数字…それに当たる回答の数(複数回答を含む)。

表二―三に見られるように、この調査の回答には、「音韻」の意味を、国語辞典における主要な意味である、「言語学的な音」(『日本国語大』の④に相当)や「漢字の音と韻」(『日本国語大』の③に相当)ととらえたものはま

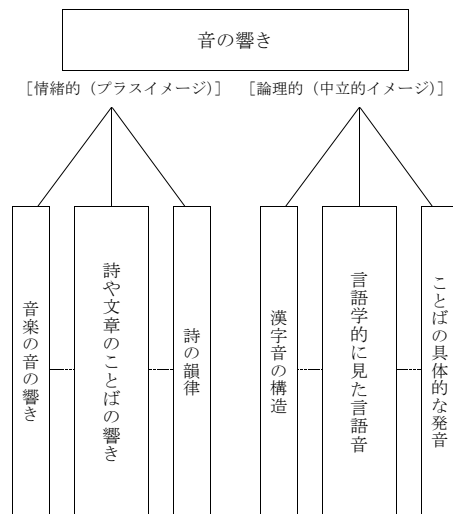
本国語大』の①の一部に相当)の意味で使われる場合が多いことがわかる。後者は、小型(学習)国語辞典には載っていない意味であるが、実際には少なからず使われていることがわかる。

三・三 アンケート調査(日本語)

次に、大学生を対象に行った、「音韻」の意味・用法に関するアンケート調査の結果を挙げる(立教大学文学部の、石川巧先生と日本文学専修の一年生にご協力いただいた。調査時期は二〇一六年五月。回答者数は二二名)。調査項目(原文)は、次の二項目である。

- (二)「音韻」と聞いて、最初にどんな意味(イメージ)を思い浮かべるか書いてください。
- (二)「音韻」という語を使って、文を一つ作ってください。
- アンケートの回答に現れた記述を筆者が分析・分類した結果、主に、次のような意味・用法が見られた。
- (ア) ことばのリズム(『日本国語大』の①の一部に相当)
- (二)「音韻」の意味(イメージ)の例…  
リズム／ラップ／ノリが良いイメージ
- (二)「音韻」を使った文の例…  
(Ⅱ 15) 作詩する時、音韻を重視したほうがいい。
- (イ) 詩の韻律(押韻)(『日本国語大』の①の一部に相当)
- (二)「音韻」の意味(イメージ)の例…  
漢文漢詩／韻を踏んでいる／言葉の最後
- (二)「音韻」を使った文の例…

図二一 現代日本語における「音韻」の意味（多義性）



―は意味の具体化を、…は意味の拡張を示す。左の三つは、『日本国語大』の①に相当、右の三つは、右からそれぞれ、『日本国語大』の②④③に相当。

#### 四 中国語における「音韻」の意味・用法の調査

まったく現れなかった。調査項目（一）の結果からは、「音韻」という語を「ことばのリズム」や「詩の韻律（押韻）」という意味（イメージ）にとらえる者が多いことがうかがえる（あるいは、これは、調査対象が文学部の学生ということと関係があるかもしれない）。調査項目（二）の結果からは、「何も思いつかない。」と答えた者が多いことから、「音韻」という語は多くの者にとって使用語彙ではない（日常的に使う語ではない）ということがわかる。

#### 三・四 現代日本語における「音韻」の意味のまとめ

以上の調査結果をもとに、現代日本語における「音韻」という語について、意味論的に考えると、この語には、使用域の異なる二つの代表的な意味（プロトタイプの意味）があるように思われる。一つは「詩や文章のことばの響き」であり、もう一つは「言語学的に見た言語音」である。前者は、小型（学習）国語辞典には載っていないが、実態調査や意識調査には多く現れた、「音韻」の一般語としての意味である（情緒的で、プラスのイメージをもつ）。後者は、いずれの小型（学習）国語辞典にも載っていない、実態調査には最も多く現れたが、意識調査にはまったく現れなかった、「音韻」の専門語としての意味である（論理的で、中立的なイメージをもつ）。前者は、「音楽の音の響き」と「詩の韻律」という二つの周辺の意味をもち、後者は、「漢字音の構造」と「ことばの具体的な発音」という二つの周辺の意味をもつと考えられる。また、これら全体に共通する意味（スキーマ的意味）として、「音の響き」を考えることができるだろう。

以上を図式化して、図二一に示しておく（吉村二〇〇四・九九などを参考にした）。なお、これは、現代日本語における「音韻」の多義性を模式的に示すものであって、「音韻」の意味の歴史的变化（派生過程）を示すものではない。

②漢語語音中の声、韻、調三要素及其結合与变化的総称。〔中国語語音中の声母・韻母・声調の三要素、およびその結合と変化の総称。〕

・『辞源第三版』(商務印書館、二〇一五)

①指抑揚頓挫和諧的声音。〔めりはりがあり調和した音を指す。〕

晋書 摯虞伝 不用古尺駁：「施之金石，則音韻和諧；措之規矩，則器用合宜。」〔之を金石(楽器)に施せば、則ち「音韻」和諧(調和)す。之を規矩に措いば、則ち器用宜しきに合う。〕

周書 寇儻伝：「容止端詳，音韻清明。」〔容止(身のこなし)端詳(端然)にして、「音韻」清明なり。〕

②詩文的音節韻律。〔詩文のリズムや韻律。〕

宋書 謝靈運伝論：「一簡之内，音韻尽殊；两句之中，輕重悉異。妙達此旨，始可言文。」〔一簡(一節)の内、「音韻」尽く殊に、两句の中、輕重悉く異なり。妙に此の旨に達せば、始めて文と言ふべし。〕

③指漢字字音中の声、韻、調。〔漢字字音中の声母・韻母・声調を指す。〕

・『現代漢語詞典二〇〇二年増補版』(商務印書館、二〇〇二)。最も規範的な辞典

①指和諧的声音；詩文的音節韻律……悠揚〔調和した音を指す。詩文のリズムや韻律。〕「悠揚」

②指漢字字音の声、韻、調。〔漢字字音の声母・韻母・声調を指す。〕

・『漢語大詞典』(上海辞書出版社、一九八六～九四。最大規模の辞典)

①抑揚頓挫的和谐声音。〔めりはりがあり調和した音。〕

『晋書・摯虞伝』：「施之金石，則音韻和諧。」『辞源第三版』の①の例に同じ

唐劉禹錫『百舌吟』：「笙簧百轉音韻多，黃鸝吞声燕無語。」〔笙簧(笙の笛)百たび轉り「音韻」多く、黃鸝

(ウグイス)声を吞み燕語ること無し。〕

続いて、中国語における「音韻」という語の意味・用法について、見ていく。

#### 四・一 辞書の記述(中国語)

まず、辞書における「音韻」の意味記述(語釈)を見る。ここで調査対象としたのは、現代中国における主な中国語辞典(二言語辞典)である(ただし、『教育部重編国語辞典修訂本』は台湾の電子版辞典)。以下に、辞典名と各辞典における「音韻」の意味記述を挙げる。

・『辞海一九八九年版』(上海辞書出版社、一九八九)

也叫「声韻」。漢字字音中声、韻、調三要素的總称。〔「声韻」ともいう。漢字字音中の声母・韻母・声調の總称。〕

・『教育部重編国語辞典修訂版』(中華民国教育部、二〇一五)

由声母、韻母和声調構成的漢字字音。也称為「声韻」。〔声母・韻母・声調により構成される漢字字音。「声韻」ともいう。〕

・『現代漢語大詞典』(漢語大詞典出版社、二〇〇〇)

①抑揚頓挫的和谐声音。如：音韻和諧。〔めりはりがあり調和した音。例：「音韻」が調和する。〕

②漢字字音中声母、韻母、声調三要素的總称。〔漢字字音中の声母・韻母・声調の三要素の總称。〕

・『大辞海語詞卷』(上海辞書出版社、二〇一七)

①音節韻律。〔リズムや韻律。〕

沈約『答陸厥問声韻書』：「若以文章之音韻，同絃管之声曲，則美惡妍蚩，不得頓相乖反。」〔若し文章の「音韻」を以て、絃管の声曲と同じくせば、則ち美惡妍蚩(美醜)、頓に相乖反(離反)することを得ず。〕

表二一四 辞書における「音韻」の意味（中国語）

『漢語大』の意味区分 その他の辞書		① 抑揚頓挫的和諧声 音。	② 文学作品の音節韻 律。	③ 漢字字音中声母、韻 母、声調。
辞海 一九八九年版	—	—	—	○
教育部 重編国語辞典修訂本	—	—	—	○
現代漢語大詞典	①*	—	—	②
大辞海 語詞卷	①*	—	—	②
現代漢語詞典二〇〇二年増補版	①	①	①	②
辞源 第三版	①	②	③	

○…それに当たる意味の記載あり（数字は各辞書における意味区分の番号）。「…それに当たる意味の記載なし。」  
①…ここに『漢語大』の②の意味も含まれると思われる。なお、『漢語大』の①の「亦指女子的風度儀態。」は省略した。

『漢語大』の①・②は、『日本国語大』の①「音とひびき。また、その調和。音色（ねいろ）。」に、『漢語大』の③は、『日本国語大』の③「漢字の表わす一音節の頭初の子音とそれを除いた後の部分。音（声母・頭子音）と韻（韻母）。」に相当する（いずれも中国語における意味・用法が日本語に伝わったものである）。

表二一四からわかるように、上のすべての中国語辞典に記載されているのは、『漢語大』の③に当たる意味のみであるが、本来の意味と思われる『漢語大』の①に当たるものも、多くの辞典に記載されている『漢語大』の「凡

元李好古『張生煮海』第四折…「聽三弄瑤琴，**音韻**非俗。」〔瑤琴を三たび弄するを聴く。「音韻」非俗なり〕亦指女子的風度儀態。〔また、女子の容姿・態度を指す。〕

『太平広記』卷四四引唐李復言『河東記』…「有頃見一女人，年可二八，容華端麗，**音韻**幽閑。」〔頃く有りて一女人を見る。年は二八（十六歳）なるべし。容華（容色）端麗にして、「音韻」幽閑（上品）なり。〕  
②指文学作品の音節韻律。〔文学作品のリズムや韻律を指す。〕

南朝梁沈約『答陸厥問声韻書』…「若以文章之**音韻**，同絃管之声曲，則美惡妍蚩，不得頓相乖反。」『大辞海語詞卷』の①の例に同じ）  
『宋書・謝靈運伝論』…「欲使宮羽相変，低昂互節，若前有浮声，則後須切響。一簡之内，**音韻**尽殊；两句之中，轻重悉異。妙達此旨，始可言文。」〔宮羽（音律）をして相変じ、低昂（高低）互節（交互に節づけ）せんと欲し、若し前に浮声（軽い音）有らば、則ち後に須く切響（切迫した音）をもちいるべし。（以下、『辞源 第三版』の②の例に同じ）

③漢字字音中声母、韻母、声調三要素の総称。〔漢字字音中の声母・韻母・声調の三要素の総称。〕  
各辞典に挙げられている意味を、『漢語大詞典』（以下『漢語大』の意味区分（語義・用法の分類）を基準に、一覧表にして示す（表二一四。表中では、意味記述を簡略化した。以下同じ）。

通して、独学で「流水」まで学び、琴の会で演奏したが、曲調はまだ聞くに値するが、指使いはやや雑で、古琴の「音韻」も比較的弱かった。」

（行者先生的博客、二〇一四年五月七日）

（イ）詩文のリズムや韻律（平仄・押韻）『漢語大』の②に相当）

（II 19）整部詩集的語言朴素，清新，音韻和諧，流暢。〔詩集全体の言語は素朴で、清新であり、「音韻」は調和して、流暢である。〕

《光明日報》二〇一四年八月一日）

（II 20）錢先生說了毛詩英訳後說：「訳者带着音韻和節奏的鏗鏘跳舞，靈活自如，令人驚奇。〔下略〕」（錢先生は、『毛詩』の英訳を読んだ後に言った。「訳者は、「音韻」とリズムの足かせのある踊りを見せているが、動きは思いのままであり、不思議な感じを抱かせる。〔下略〕」

《光明日報》二〇一五年四月二八日）

（II 21）詞有詞牌，詞牌嚴格律定了每首詞的格律和音韻。〔詞には詞のメロディーがあり、詞のメロディーは、詞ごとに格律と「音韻」とを嚴格に定めている。〕

（高考語文衝刺的博客、二〇一四年二月二六日）

（ウ）漢語音韻字（の知識）『漢語大』の③の一部に相当）

（II 22）王懿榮發現甲骨文并非偶然，他廣泛涉獵經史、義理、訓詁、音韻等學問，青年時期就撰寫了金石文字考釈著作三〇多種。〔王懿榮が甲骨文を発見したのは決して偶然ではなく、彼は広く経史・義理・訓詁・音韻等の学問を涉猟し、青年期には金石文字考釈の著作を三〇種以上執筆している。〕

《光明日報》二〇一四年八月一八日）

（II 23）音韻之作，如《玉篇》《廣韻》《集韻》，亦當優先備參。〔音韻の著作、たとえば、『玉篇』『廣韻』

例〕には、意味記述の順序について何も述べられていないが、これと意味記述・意味区分がほぼ同じである『辞源 第三版』の「体例〔凡例〕では、「多義詞的解釈一般以本義、引申、通假為先後」〔多義語の解釈は一般に本義、派生義、仮借（による転義）の順とする〕としていることから、『漢語大』でも同様に、同辞典の①を「本義」と見なしていると思われる。ここから、中国語の「音韻」の（辞書における）規範的な意味は、日本語の国語辞典における主要な意味（「言語学的に見た言語音」とは異なることがわかる。

#### 四・二 コーパス調査（中国語）

次に、コーパス（言語資料）を使った、「音韻」の意味・用法の調査結果を見る。ここでは、コーパスとして、日刊紙の「光明日報」（光明網）二年分、有名人ブログの「新浪博客（名博）」（新浪網）一年分を用いた（いずれもウェブ上で、全文検索した。これらに現れた用例を筆者が分析・分類した結果、「音韻」には、次のような意味・用法が見られた『漢語大』の三区分のうち、③をさらに二つに分け、合計四つに分類した。用例の日本語訳は省略する）。

（ア）音楽的な（美しい）音、楽器の音色『漢語大』の①に相当）

（II 17）這一首甘肅、寧夏少数民族歌曲和陝西府民歌影響的曲種，音韻動聽，方言風趣。（この、甘肅・寧夏の少数民族の歌曲と陝西府の民歌の影響のある曲種は、「音韻」が感動的で、方言が面白い）

《光明日報》二〇一四年八月二四日）

（II 18）我在琴会上有親眼見過雲南來的一位年輕琴人，通過存世的古琴名家錄音，自學到一曲《流水》，在琴会上演奏，曲調尚可一聽，可是指法較為雜亂，這樣提升琴藝的空間就非常小，古琴的音韻也相對弱些〔私は琴の会でじかに雲南から来た一人の若い琴の演奏家を見たが、現存する古琴の名演奏家の録音を

表二―五から、「音韻」という語は、現代中国語の書き言葉において、「詩文のリズムや韻律」「漢語大」の②に相当）の意味で使われる場合が最も多く、これに次いで、「音楽的な（美しい）音、楽器の音色」「漢語大」の①に相当）や「漢語音韻学（の知識）」「漢語大」の③の①の一部に相当）の意味で使われる場合が多いことがわかる。これらは、いずれも日本語の書き言葉にはあまり現れないもので、両言語で「音韻」の意味・用法（の使用実態）に違いがあることがわかる。また、「音韻」の出現（使用）頻度にも、両言語に差がある（中国語のほうが高い）ように思われるが、これについては、また別の調査が必要なので、ここでは確かなことはいえない。

四・三 アンケート調査（中国語）

次に、大学生を対象に行った、「音韻」の意味・用法に関するアンケート調査の結果を挙げる（ハルビン師範大学東語学院の、黄明侠先生と商務日語専攻の三年生に「協力いただいた。調査実施時期は二〇一六年五月。回答者数は二十八名。調査項目（原文）は、次の二項目である（調査はすべて中国語で行った）。

（一）聴到「音韻」的時候、請写下你最初想到的是甚麼意思（形象）？「音韻」と聞いて、最初にどんな意味（イメージ）を思い浮かべるか書いてください。」

（二）請用「音韻」這個詞，造一個句子。「音韻」という語を使って、文を一つ作ってください。」

回答に現れた記述を筆者が分析・分類した結果、主に、次のような意味・用法が見られた。

（ア）音楽的な（美しい）音、楽器の音色『漢語大』の①に相当

（イ）「音韻」の意味（イメージ）の例：

音楽的韻律「音楽の韻律」／音楽的韻味「音楽の情感」

『集韻』などもまた、優先して参考にすべきである。」

『光明日報』二〇一五年四月一〇月一五日（

（エ）（中国語の）言語音（要素・体系）『漢語大』の③の一部に相当

（Ⅱ 24）在古代文献中找出方言的音韻，詞彙，語法的特性。「古代文献の中に、方言の「音韻・語彙・文法」の特性を探り出す。」

『光明日報』二〇一五年四月二〇日（

コーパス調査に現れた「音韻」の意味・用法を分析・分類・集計した結果を表二―五に示す。

表二―五 言語資料における「音韻」の意味・用法（中国語）

資料	『漢語大』の意味区分	
	主な意味・用法	
光明日報（二〇一四～二〇一五）	①抑揚頓挫的和諧聲音。 音楽的な（美しい）音、楽器の音色	②文学作品の音節韻律。 詩文のリズムや韻律（平仄・押韻）
新浪名博（ブログ）（二〇一四）	15	41
	5	19
	6	12
	4	3

数字…それに当たる用例の数（同一記事中の複数例は1とした）。  
固有名詞、複合語（「音韻学」「音韻史」「音韻系統」など）は除いた（最終的な分析対象数は、「資料」右から、それぞれ 39、66）。

の意味区分の①・②・③の順に当たる（つまり、「音韻」の意味の古い順に、回答が多く現れたことになる）。このうち、「音楽的な（美しい）音、楽器の音色」と「中国語の」言語音（要素・体系、漢字音）は、日本語の調査の回答には現れなかったものである。また、日本語の調査で多く見られた「何も思いつかない」という回答はあまり見られなかった。この調査結果と、辞書の記述・コーパス調査の結果とを合わせて考えると、中国語における「音韻」は、日本語と比べて、古い（本来の、一般語としての）意味を多く残しているといえるようである。

表二一六 アンケートの回答における「音韻」の意味・用法（中国）

『漢語大』の区分		①抑揚頓挫的和諧声。	②文学作品の音節韻律。	③漢字字音中声母、韻母、声調。	その他
主な意味・用法		(ア) 音楽的な（美しい）音、楽器の音色	(イ) 詩文のリズムや韻律（平仄・押韻）	(ウ)（中国語の）言語音（要素・体系、漢字音）	
主な記述		(一)「音楽的韻律」など (二)「古琴の音韻令人沈醉」など	(一)「中国の古詩詞」など (二)「作詩非常講究音韻」など	(一)「漢字的読音」など (二)「音韻在語言中是很重要的部分」など	(一)「日語的音調」（日本語の音調） (二)「甚麼都想不到」(「何もしない」)
調査項目					
(一)「音韻」の意味（イメージ）	17		8	4	1
(二)「音韻」を使った文	15		8	3	—
					2

数字…それに当たる回答の数（複数回答を含む）。—…それに当たる回答なし。

- (一)「音韻」を使った文の例：
- (Ⅱ 25) 古琴の音韻令人沈醉。「古琴の「音韻」は人を酔わせる。」
- (Ⅱ 26) 中国古典楽曲具有独特的音韻。「中国の古典楽曲には独特の「音韻」がある。」
- (イ) 詩文のリズムや韻律（平仄・押韻）『漢語大』の②に相当
- (一)「音韻」の意味（イメージ）の例：
- 中国的古詩、詞（中国の古詩・詞）／詩、文章等的節拍、韻律、韻味〔詩や文章等のリズム・韻律・情感〕

- (二)「音韻」を使った文の例：
- (Ⅱ 27) 這是一首音韻和諧的詩歌。「これは「音韻」の調和がとれた詩歌である。」
- (Ⅱ 28) 作詩非常講究音韻。「作詩は非常に「音韻」を重んじる。」
- (ウ)（中国語の）言語音（要素・体系、漢字音）『漢語大』の③に相当
- (一)「音韻」の意味（イメージ）の例：
- 漢字的読音〔漢字の読音〕／漢語中的声調〔中国語の声調〕／漢語的韻母〔中国語の韻母〕
- (二)「音韻」を使った文の例：
- (Ⅱ 29) 音韻在語言中是很重要的部分。「音韻」は言語学で重要な部門である。」
- 調査結果を、まとめて表二一六に示す。

表二一六に見られるように、この調査の回答には、『漢語大』に記載されている意味（に当たる記述／を使った例文）がすべて現れた。最も多かったのは「音楽的な（美しい）音、楽器の音色」『漢語大』の①に相当）で、次いで「詩文のリズムや韻律（平仄・押韻）」『漢語大』の②に相当）が多く現れ、「（中国語の）言語音（要素・体系、漢字音）」『漢語大』の③に相当）も見られた。この順は、コーパス調査の結果とは異なるが、『漢語大』

「音韻」は、日本では日常的な語にはならなかったようで、漢詩文以外の文学作品にはほとんど用例が見られない。筆者の調べた限りでは、「音韻」の用例は、『新編日本古典文学全集』所収の古典文学作品に一つも見られなかったほか（『ジャパンナレッジ』の「全文」検索による）、各種の古典文学索引（書籍版）によっても、見つからなかった。「音韻」の用例の多くは、音韻学関係の文献の中に現れている。とくに江戸時代では、「音韻」は、広く言語音の研究に関して使われている。

以下に、江戸時代の文献に見られる「音韻」の例をいくつか挙げておく（用例の収集には、『ジャパンナレッジ』の「東洋文庫」、「国立国会図書館デジタルコレクション」、「早稲田大学図書館古典籍総合データベース」を用いた。明治以降の翻刻本によるものについては、その書名・出版社・出版年を付した。その他の例は、第三章三・五参照）。

（II 30）東寺の悉曇。中印度を伝へて南天竺を兼たり。山門は南天竺を伝ふ。南天は中天に次で。東天北天よりも音韻詳雅なり。

（契沖『和字正濫抄』巻一 一六九三成立、一六九五刊…一五ウ）

（II 31）（Ⅵ 02の一部）（故ニ字フ音韻ヲ者必不レ可カラ不レ由ヲ華音ニ字フ華音ヲ者必ス不レ可カラ不レ由ヲ韻鏡ニ）

（文雄『磨光韻鏡』下「韻鏡索隠」一七四四刊…六ウ）

（II 32）若シ旧慣ノ如クをヲあ行。おヲわ行トスルトキハ悉ク軽重錯乱シテ一字モ音韻ニカナフ者アルコトナシ

（本居宣長『字音仮字用格』「おを所属弁」一七七六刊…九ウ）

（II 33）因ッテ今和蘭字ニテ和蘭言語ヲ採録シテ本編トシ、国字ニテ彼音韻訳文等ノ解ヲ記シテ末編トス。（前野良沢『和蘭訳室』「序」一七八五成立）

## 五 「音韻」の意味・用法、および語彙論的特徴

これまでの分析から、現代日本語における「音韻」について、以下の点が指摘できるであろう。

- （一）小型（学習）の国語辞典には載っていない意味・用法（「詩や文章のことばの響き」など）で使われることが少なからずある（辞典（規範）と実例（実態）とのずれ）。
- （二）中国語の「音韻」ではあまり使われない意味・用法（言語学的に見た言語音 など）で使われることが多い（日中間でのずれ）。

上の（一）「辞書（規範）と実例（実態）とのずれ」の問題は、「音韻」が専門語であるという点に関係し、（二）「日中間でのずれ」の問題は、「音韻」が翻訳語であるという点に関係すると思われる。以下、この二点から、「音韻」という語のもつ語彙論的特徴について考えたい。

### 五・一 専門語としての特徴

本章三・四でまとめたように、現代日本語の「音韻」には、一般語としての意味（「詩や文章のことばの響き」など）と、専門語としての意味（「言語学的に見た言語音」など）がある。「音韻」という語は、平安時代の初めごろに日本に入ってきたと考えられるが、このときに、一般的な意味だけでなく、当時の「音韻」研究（悉曇学や反切など）の概念を表す用法も伝えられたようである（「音韻」を日本に伝えたのは空海だと見られる。「反切」と悉曇学の両方を、日本人として最初に理解したのが空海で（岸田二〇一五：二二）、「日本人として始めて『音韻』の語を使用したのも空海であった」（釘貫二〇〇七：二二）とこう）。



へんの事情を反映しているといえよう。

## 五・二 翻訳語としての特徴

現代日本語において、「言語学で、具体的な音声から音韻論的な考察を経て抽象された言語音」『日本国語大』の④の意味で使われる「音韻」は翻訳語である。この用法は、一九二〇年代の終わりに、ソシユール言語学の用語である「phonème」(英 phoneme)を小林英夫が「音韻」と訳したことに始まるようであるが(ソッスユール一九二八・八二)、その後一九三〇年代の初めごろに、ソシユールの影響を大きく受けた、ヨーロッパのプラグ学派(N・S・トゥルベツコイ)の音韻論(phonologie (英 phonology))が日本に紹介され、その単位である phonème も、小林英夫によって、「音韻」と訳されたことによって、広まったようである(トルベツコイ、小林英夫訳『形態音韻論』について『方言』二一一 春陽堂、一九三二など)。これは、それまで使われていた、「音韻」の、言語音(主として日本語音)の種類を表す用法を転用したものである。なお、プラグ学派の phonologie は、釘貫(二〇三三・九六)によれば、一九三二年に菊沢季生によって初めて日本に紹介され、菊沢の「附説」においては、phonology に「音韻論・音韻学」という訳語を与えている。なお、ソシユールは、音韻論を phonétique 音声学を phonologie と呼ぶことを提唱していた(ソッスユール一九二八・六七)。

また、phoneme については、ほぼ同時期に、イギリスの音声学派の D・ジョーンズや H・E・パーマーの説も紹介されており、田中館愛橘ら日本式ローマ字論者によって「音素」と訳されて、田中館らの提唱する日本式ローマ字の綴り方(「音素一字」式)の理論的根拠となっていた(Palmer 一九二九・四、菊沢一九三〇・三五)。phoneme は、岡倉由三郎の『新英和大辞典』研究社(一九二七)にも収録されているが、「一国語の中に出て来る

(『前野蘭化三著訳篇』平凡社東洋文庫、一九九七・一一九)  
(II 34) 俗間の謡に、こんなえにしが唐にもあらかと唄ふ。エニシとは、何かに書くや。抑何にことぞと云たれば、流石音韻の学に通ぜし男にて、即云ふ。

(松浦静山『甲子夜話』巻五六(一)一八二一〜一八四一成立)  
(『甲子夜話四』平凡社東洋文庫、一九七八・一二一)

これらの例に見られるように、「音韻」は、西洋から言語学が入ってくる以前においても、漢字音(中国語音)はもとより、広く言語音を表す、学問上の用語(専門語)として、多く使われていたようである(中国語では、中国語音以外の言語音に「音韻」を用いる例は、ほとんど見られないようである(本章四・二と四・三の調査では、まったく例が現れなかった。古く玄奘の『大唐西域記』や智広の『悉曇字記』などに「梵語音」を示す例などはある。詳しくは、第三章三・二参照)。

専門語は一般語から分化したものであるが、専門語(専門的概念)が一般語(もとの語)に及ぼす影響も大きいという(宮島一九八一・一二三)。宮島(一九八一・二〇)は、「ときには、科学的(専門的)な概念の普及が単語の使用法をかえてしまうことがある」として、「くじら」を例に挙げ、現代では「あの船はくじらもさかなもとる。」という文は不自然ではないが、古く「くじら」が「種のさかな」と考えられていた時代には、「この文は不自然だつたにちがいない」と述べている。

「音韻」についても、専門的な新しい概念の普及がこの単語の使用法を変えてしまった面があると思われる。「音韻」を「言語音」とする用法が広まることによって、本来の「音楽や詩歌の(美しい)音の響き」という意味が失われ、たとえば、「楽器の音韻」や「短歌の音韻」などといった言い方がしだいに使われなくなってきた(不自然に感じられるようになりつつある)ように思われる。学習国語辞典の「音韻」における記載は、この

(II 37) 先頃神保格君が紹介された仏蘭西の新しい学説だといふのに、*son* を研究するのがフォネチクで、*phoneme* を研究するのがフォノロジーだと云ふのださうである。音声の研究する音声学に、音韻を研究する音韻論で、丁度よい。

(金田一京助「我観『音韻学』『音声学協会会報』三五、一九三五・八)

(II 38) 私が音韻と称する所のは、言語制度即ち *langue* を組み立ててゐる素材としての音を意味するものでありつまり根本に於てはフランスの社会派の *phoneme* に最も近いといふことを、予め呑み込んでおいていたゞきたい。

(有坂秀世「音韻に関する卑見」『音声学協会会報』三五、一九三五・九)

(II 39) なほ、術語を吟味して用ひられる小林英夫氏が、*Semen* を「意義素」、*Morphem* を「形態素」とせられながら、*Phonem* に限り「音声素」乃至「音素」とせず、「音韻」或は「音相」の語を使用せられるのは、腑に落ちない。恐らく、金田一京助氏の「国語音韻論」あたりの用例に敬意を表せられたのであらう。

(菊沢季生「国語音韻論」賢文館、一九三五・一一)

(II 40) 音韻 *[phoneme]* この語を『音素』と訳するは当らず。かゝる訳語は構成主義に基く

(小林英夫「言語学通論」三省堂、一九三七・二五九)

こゝでは、*phoneme* の定義やその訳語(「音韻」や「音素」など)に関する(当時の)議論には立ち入らないが、いずれにしても、昭和初期に、「音韻」に *phoneme* の翻訳語としての意味が生まれ、それが、その後の「音韻」の主要な意味になっていった(あるいは、「音韻」が *phoneme* の意味を含んで使われるようになっていった)ということがいえよう。

欧米から移入された概念の翻訳に古い漢語を用いるのは、日本における翻訳の一つの方法である(陳二〇〇一・

音の一大団で、意味の違いを来さずに互に転替して使用されるもの。」とだけあつて、訳語は与えられていない(なお、亀井一九七一・一七四は、同辞典について、「この語のみえる最初ではないにしても最も早い辞書であらう」(この語)とは *phoneme*)と述べてゐる)。

昭和初期の文献から、*phoneme* と「音韻」とにかかわるものを、いくつか引用しておく(なお、「フォ」の表記(「大字+小字」の「フォ」か、「大字+大字」の「フォ」か)は、原文のままである)。

(II 35) 聴覚・運動的であり、与へられた一言語において意義を有する、最も単純な概念であると見たときの音韻 (*phoneme*) の体系を研究する所の音韻論 (*phonologie*) と、それからまた形態部 (*morpheme*) の体系を研究する所の形態論 (*morphologie*) とのほかに、文法学はなほ音韻論的差異の形態論的利用を研究する所の一章を包含しなければならない。

(小林英夫訳(トルベツコイ著)『形態音韻論』について「方言」二一一、一九三二・一四)

(この文の「訳者小記」には「例のフォネムの論議がやかましい折から、トルベツコイ侯の名は既にわが国の音学者やなづくローマ字論者には親しくなつてゐる筈」とある)

(II 36) 一体国語などで説かれて来た「音韻」も、筆者の見るところでは、「一種のフォネムに外ならないと思ひます。それを少し拡充すれば、たゞちにフォネムと同義のものとして用ゐられると考へます。「音素・素音」等々をあてる人もあるし、一方それは別だといふ人もあるし、「音族」といふ人もあつて、さうした訳語は、却つてまぎらほしいと思ひます。「音族」はたしかに *phoneme* に対しての D. Jones あたりの定義から出てきた訳語と思ひますが、その定義が元来次に説くやうに不適當なので、この訳語は困ると思ひます。)

(佐久間鼎「音声学」か「音韻学」かといふこと「音声学協会会報」三五、一九三五・二)

(II 43) 奄美語の特徴として、(一) 日本語にはない「テイ」などの音韻がある

『朝日新聞』二〇〇九年九月一六日

(II 44) 四六(昭和二二)年には、現代語の音韻に合わせた「現代かなづかい」が告示され、「ち」と表記されていた発音は原則として「ぢ」と書くこと定められました。

『朝日新聞』二〇一五年二月五日

このように、現代日本語で、「音韻」は、古い意味合いを残しながらも、(音韻論的概念を担うという点において) 翻訳語としての用法が一般的になっている。

一方、中国語では、先に見たように、「音韻」は phoneme の翻訳語としては使われていない。phoneme は、一般に「音位」と訳される。また、日本語で「音韻論」と訳される phonology は、「音系学」(phonemics の訳としては「音位学」と呼ばれる。「音韻学」は、伝統的な手法を継承する漢語音韻研究(漢語音韻学)について使われる(ただし、台湾では、phonology を「も」「音韻学」と呼び、伝統的な音韻学を「声韻学」と呼ぶことが多い。以上、『20世紀中国學術大典 語言学』福建教育出版社、二〇〇二、『語言学辞典』(増訂版)三民書局、二〇〇五などを参照。第六章二・三)。なお、「音素」は、中国語では、phone の意味で使われることが多いようである(研究者によって、使い方に違いが見られる)。「音素」という語の使用は、日本語より中国語のほうが早かったようで、一九一三年に中華民国教育部が召集・開催した「読音統一会」の「議程」(第二項)に「核定音素」[音素を定める]という表現が見られる(この「音素」は、声母や韻母を意味する。これが翻訳語かどうかは、はっきりしない。第八章二・一)。

いずれにしても、日中両言語における「音韻」の意味のずれは、「音韻」を翻訳語として(あるいは、音韻論的な概念を担う語として)使うかどうかによるところが大きいのと思われる。

以上、現代日本語における「音韻」について見てきたが、現代日本語の「音韻」は、専門語・翻訳語としての

二六九)。こうして作られた翻訳語には古いニュアンスがつきまとうこともある(本章五・一では「新しい概念の古い意味への影響」を述べたが、その逆の「古い意味の新しい概念への影響」も起こりうるといえる)。たとえば、柳父(一九八二)は、「伝来の日本語を翻訳語として用いた場合には、異なる意味が混在し、しかも矛盾している」という問題が重要である(二頁)と述べ、「自然」(nature の訳)や「自由」(liberty; freedom の訳)などの例を挙げて論じている。釘貫(二〇〇七:一九)によれば、『音韻』の語には西洋言語学の音韻論 phonology にわが国独自の伝統的な観念が付着している」という。実際、現代日本語における「音韻」の用例を見ると、音韻論の用語としての「音韻」が、子音や母音(こちらが一般的な phoneme、いわゆる「音素」)ではなく、音節(詳しくは、モーラ)を指す(ととれる)ことが多い点などに、伝統的な音韻学における「音韻」の概念の影響がうかがえる(五十音図に基づいて、行を「音」、列(段)を「韻」、五十音を「音韻」とする音韻観があった(第四章四節)。そもそも日本語の音韻の基本単位は、「音素」(子音や母音)ではなく、音節(モーラ)だと考える方もある(岸田一九八四:四九〇~五一三に、諸家の説が検討されている。第一章二・二)、実際、「音韻」の用例には、音節(モーラ)を指す(ととれる)ものも多く見られる。

現代語のコーパスから、いくつか例を挙げてみる(以下は、新聞記事などの例であるが、日本語学の専門書にも(日本語音韻の最小単位を『音素』と見る学者)の記述にも)この傾向は見られるという(岸田一九八四:四九七)。

(II 41) 「し」でも「す」でもない音韻、独特のアクセント表記の研究に、著者は二十五年を費やしたという。

『朝日新聞』二〇〇三年一月二六日

(II 42) 「言」の音韻を正しく表記すれば、「ユ」になります。

(Yahoo!知恵袋、二〇〇五)

味をもつ。全体に共通する意味としては、「音の響き」を考慮することができる。

#### 四 中国語における「音韻」

辞書の記述では、『漢語大詞典』などに、①調和した音、②詩文のリズムや韻律、③漢字音、の三つの意味が挙げられている。コーパス調査では、新聞記事やブログ記事などに、「詩文のリズムや韻律」、「音楽的な音や楽器の音色」、「漢語音韻学」、「中国語音」という意味で使われる用例が見られた。アンケート調査（大学生対象）の回答では、「音韻」のイメージとして、「音楽的な音や楽器の音色」、「詩文のリズムや韻律」、「中国語音」などを挙げているものが多かった。

#### 五 「音韻」の意味・用法、および語彙論的特徴

以上の調査結果によると、現代日本語の「音韻」は、小型（学習）国語辞典に載っていない意味（「詩や文章のことばの響き」）や、中国語では使われない意味（「中国語以外の言語音」）で使われている。現代日本語の「音韻」は、専門語であり、(phoneme や phonology の) 翻訳語である。「音韻」が専門語となったことで、本来の意味（ことばの響き）が規範的な（辞書に載せる）意味ではなくなり、翻訳語となったことで、（中国語にはない）新しい意味・用法が生まれたと考えられる。

#### 【第二章の参考文献】

大西雅雄（一九三四）『音声学史』（国語科学講座Ⅱ 音声学）明治書院  
沖森卓也・木村義之・田中牧郎・陳力衛・前田直子（二〇一一）『図解日本語の語彙』三省堂  
音声学協会（一九三五）『音声学協会会報』三五（日本語音韻論我観）特輯号 音声学協会  
亀井孝（一九七二）『音韻』の概念は日本語に有用なりや『亀井孝論文集Ⅰ 日本語学のために』吉川弘文館（一九五

特徴をもつ語だということがいえるだろう。

#### 【第二章のまとめ】

第二章では、「音韻」という語について、現代日本語と中国語における意味・用法を見るとともに、現代日本語の「音韻」のもつ語彙論的特徴を探った。

#### 一 はじめに（省略）

#### 二 調査の方法

現代語の「音韻」について、規範（辞書の記述）、実態（コーパス調査）、意識（アンケート調査）の三方面から調査を行った。日本語に加えて、中国語についても、調査を行った。

#### 三 現代日本語における「音韻」の意味・用法の調査

辞書の記述では、『日本国語大辞典第二版』には、①音と響き、調和、②言語音、③漢字の音と韻、④言語学的な音、の四つの意味が挙げられている（記述は簡略化した）。小型（学習）国語辞典には、このうちの③と④の意味しか載っていない。コーパス調査では、新聞記事や書籍などに、「言語学的に見た言語音（体系）」、「詩や文章のことばの響き」、「ことばの（具体的な）発音」といった意味で使われる用例が多く見られた。アンケート調査（大学生対象）の回答では、「音韻」のイメージとして、「詩の韻律（押韻）」、「ことばのリズム」などを挙げているものが多かった。

以上から、現代日本語の「音韻」には、「詩や文章のことばの響き」と「言語学的に見た言語音」という、二つの代表的な意味があると考えられる。前者は、「音韻」の一般語としての意味（情緒的で、プラスのイメージをもつ）であり、「音楽の音の響き」と「詩の韻律」という、二つの周辺の意味をもつ。後者は、「音韻」の専門語としての意味（論理的で、中立的なイメージをもつ）であり、「漢字音の構造」と「ことばの具体的な発音」という、二つの周辺の意

「書き言葉均衡コーパス 少納言」国立国語研究所 <http://www.kotonoha.g.jp/shonagon/>  
「教育部 重編国語辞典修訂版」中華民国教育部 <http://dict.revised.moe.edu.tw/cdict/>  
「芸能人・有名人フロム」Ameba <http://official.ameba.jp>  
「光明日報」(光明網) 光明日報社 <http://www.gmw.cn>  
「国立国会図書館デジタルコレクション」国立国会図書館 <http://dl.ndl.go.jp>  
「ジャパンナレッジ」ジャパンナレッジ <http://japanknowledge.com>  
「新浪博客」(新浪網) 新浪公司 <http://blog.sina.com.cn>  
「早稲田大学図書館 古典籍総合データベース」早稲田大学図書館 <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>

## 【第二章の用例資料】

日本語文献(古典)の用例は、巻末の「資料二 『音韻』の用例(日本・古典)」を参照。  
『朝日新聞』『アエラ』の用例は、巻末の「資料三 『音韻』の用例(朝日新聞)」を参照。  
その他の日本語文献の用例は、巻末の「資料四 『音韻』の用例(日本・近現代(朝日新聞以外))」を参照。  
中国語文献(現代)の用例は、巻末の「資料五 『音韻』の用例(中国・現代)」を参照。  
アンケート調査の回答は、巻末の「資料六 『音韻』に関するアンケート調査の回答」を参照。

## 六発表

菊沢季生(一九三〇)「国字問題の研究(第五)：ローマ字の綴り方の変遷(続、終結)」『学士会月報』五二二『国字問題の研究』(一九三二)として合本  
岸田武夫(一九八四)『国語音韻変化の研究』武蔵野書院  
岸田知子(二〇一五)『空海の文字とことば』吉川弘文館  
釘貫亨(二〇〇七)『近世仮名遣い論の研究：五十音図と古代日本語音声の発見』名古屋大学出版会  
釘貫亨(二〇一三)『国語学』の形成と水脈』ひつじ書房  
フェルディナン・ド・ソッスエール述、シャルル・バイイ、アルベール・スシエ編、小林英夫訳(一九二八)『言語学原論』岡書院(原著一九一六)  
高山倫明・木部暢子・松森晶子・早田輝洋・前田広幸(二〇一六)『音韻史』(シリーズ日本語史 1) 岩波書店  
陳力衛(二〇〇一)『和製漢語の形成とその展開』及古書院  
H. E. Palmer 音声学協会会報編輯部訳(一九二九)「Phoneme, Phone, Diaphoneに就て(佐伯三浦二氏の論争を觀て)」『音声学協会会報』一五  
服部四郎(一九九〇)『新版音韻論と正書法：新日本式つづり方の提唱』(再版)大修館書店(一九七九初版)  
宮島達夫(一九八二)『専門語の諸問題』(国立国語研究所報告六八) 秀英出版  
柳父章(一九八二)『翻訳語成立事情』(岩波新書黄版一八九) 岩波書店  
吉村公宏(二〇〇四)『はじめての認知言語学』研究社

【第二章の使用データベース類】(ウェブの閲覧は、二〇一六年四月〜一〇月)  
「朝日新聞記事データベース」(開蔵Ⅱビジュアル) 朝日新聞社 <https://database.asahi.com/index.shtml>

まず、『日本国語大辞典 第二版』（以下『日本国語大』）における「音韻」の意味記述・意味区分を、左に挙げる（用例は省略する。用例は、第一章三・一、第二章三・一参照）。

①音とひびき。また、その調和。音色（ねいろ）。

②（漠然と）言語音をいう。

③漢字の表わす一音節の頭初の子音とそれを除いた後の部分。音（声母・頭子音）と韻（韻母）。

④言語学で、具体的な音声から音韻論的な考察を経て抽象された言語音をいう。

『日本国語大』では、「音韻」の意味を四つに分けている。同辞典は、「語釈」については、「原則として、用例の示すところに従って時代を追ってその意味・用法を記述する」（凡例）という「編集方針」をとっていることから、同辞典では、①（音とひびき。また、その調和。音色。）の意味が最も古く、次いで、②、③、④の順に意味が発生したと認めていることになる。

次に、『大辞林 第三版』（以下『大辞林』）における「音韻」の意味記述・意味区分を挙げる。

①言語の音声。

②現実の音声に対して、言語学的分析に基づく抽象的な音。

③音素。

④漢字音の声母（頭子音）と韻母。

⑤音色。響き。

『大辞林』では、「音韻」の意味を、『日本国語大』より多い五つに分けている（現行の国語辞典では、意味区分が最も多いと思われる。なお、『大辞林』の③の意味の「音素」は、『日本国語大』では、④の意味の「言語学で、具体的な音声から音韻論的な考察を経て抽象された言語音をいう。」に含まれると思われる。『大辞林』は、「意味の記述順序」に関して、「最初に現代語としての一般的な意味・用法を記し、そのあとに順次特殊な意味・

### 第三章 「音韻」の語誌

#### 一 はじめに

本章では、「音韻」という語の意味・用法の変遷について見ていく。主として、平安時代から明治・大正期までの日本語文献資料における「音韻」を扱うが、中国語における「音韻」や、現代日本語における「音韻」も取り上げる。まず、第二節で、「音韻」という語の、現代の辞書における意味記述・意味区分について概観する。続いて、第三節で、文献資料に現れた「音韻」の用例を時代順に見ながら、「音韻」の意味・用法について分析する。最後に、第四節で、「音韻」の意味・用法の時代的な変遷についてまとめる。なお、ここでは、伝統的な音韻学や現代の音韻論における専門的な議論には立ち入らない。

#### 二 辞書における「音韻」の意味

本節では、現代の辞書における「音韻」の意味記述（語義説明、語釈）・意味区分（語義区分）を見ていく。ここでは、日本語の辞書に加えて、日本語の「音韻」が歴史的に中国語に由来することを踏まえ、中国語の辞書における「音韻」についても見ていく。日本語の辞書としては、大型国語辞典の『日本国語大辞典 第二版』（小学館、二〇〇〇・二〇〇二）、中型国語辞典の『大辞林 第三版』（三省堂、二〇〇六）、日本語学の専門辞典の『日本語大事典』（朝倉書店、二〇一五）を取り上げる。中国語の辞書としては、大型中国語辞典（『言語辞典』の『漢語大詞典』（上海辞書出版社、一九八六～一九九四）と、中国語学の専門辞典の『中国語言文字学大辞典』（中国大百科全书出版社、二〇〇七））を取り上げる。

『日本語大』では、番号を付けて（明確に）意味区分を行うことはしていないが、ここでは、同事典の記述に基づいて、右の八つに区分しておく。

つづいて、中国語の『漢語大詞典』（以下『漢語大』）における「音韻」の意味記述・意味区分を挙げる（用例は省略する。用例は、第二章四・一参照）。

①抑揚頓挫の和諧声音。「めりはりがあって調和した音。」

亦指女子的風度儀態。「また、女子の容姿・態度を指す。」

②指文学作品の音節韻律。「文学作品のリズムや韻律を指す。」

③漢字字音中声母、韻母、声調三要素の総称。「漢字字音中の声母・韻母・声調の三要素の総称。」

『漢語大』の「凡例」には、意味記述の順序について何も述べられていないが、これと意味記述・意味区分がほぼ同じである『辞源 第三版』（商務印書館、二〇一五）の「体例」「凡例」では、「多義詞的解釈一般以本義引申、通假為先後」（多義語の解釈は一般に本義、派生義、仮借（による転義）の順とする）としている（第二章四・一）ことから、『漢語大』でも同様に、同辞典の①を「本義」と見なしていると思われる。

最後に、『中国語言文字学大辞典』（以下『中国語文大』）における「音韻」の意味記述・意味区分を挙げる。

①又名声韻。漢語語音声母韻母声調三要素の総称。「また声韻という。中国語音の声母・韻母・声調の三要素の総称。」

②音韻学的簡稱。又叫声韻。「音韻学の略称。また声韻という。」

③音韻学的著作。李思敬著。一九八五年作為『漢語知識叢書』分冊之一由商務印書館出版。「音韻学の著作。李思敬著。一九八五年に『漢語知識叢書』の一冊として商務印書館より出版された。」（以下省略）

『中国語文大』は、専門辞典であり、専門的な意味しか掲載していない（同辞典の「凡例」には、「本辞典は語言文字学的専科性工具書。内容包括語言理論和定理、語言研究的歷史和現狀、文獻資料、人物、著作、刊物、社

用法、古語の意味・用法を記」（凡例）すという『日本国語大』とは異なる。「編集方針」をとっている。同辞典では、①の意味（言語の音声。）を、現代語として最も「一般的な意味・用法」と認めていることになる（なお、筆者の調査では、現代日本語の書き言葉に最も多く現れたのは、同辞典の②に当たるものであった（第二章三・一一））。

次いで、『日本語大事典』（以下『日本語大』）を取り上げる。同事典上巻の「音韻」（高山倫明執筆）では、『音韻』という用語は、伝統的な意味用法に加え、欧米における言語音（人間が言語活動を行う際に用いる音声）にかかわる研究の潮流とその訳語の問題が複雑に絡んで、多様な意味合いを含んでいる。」として、以下のような意味を挙げている（以下は、筆者がまとめたものである。なお、原文の表現を一部変えている。①～⑧の数字は原文にはない。〈〉はその意味の使われる分野・時代を示す）。

〔中国における「音韻」〕

①〈伝統的な漢語〉聴覚に訴えるもの全般

②〈伝統的な漢語〉詩文の韻律

③〈漢字を軸とする中国の伝統的な言語研究（小学）〉漢字を構成する形・音・義のうちの音、すなわち字音

④〈字音研究（音韻之学）・六朝時代〉字音を構成する要素の総称

〔日本における「音韻」〕

①〈伝統的な漢語・平安初期〉詩文の韻律

②〈悉曇学や韻学・平安初期〉言語音（字音を含む。鎌倉時代からは日本語音にも適用される）

③〈今日の日本語学〉文法・語彙などと並ぶ言語を構成する要素として、聴覚に訴える部分全般

④〈音韻論〉phoneme の訳語

⑤〈音韻論〉（音声に対して）理念化したレベルの言語音全般（これには諸学説がある（二）では省略）

図三一一 「音韻」の意味の変遷（一）

時代 地域		日本 伝来 以前	日本 伝来 以降	現 代
中国	①音の響きや音色			音楽的な響き、楽器の音色
	②詩のリズムや韻律			詩のリズムや韻律
	③漢字音			漢語音韻学、中国語音
	(中国語から)	①音の響きや音色		音楽の響き、ことばの響き
	(中国語から)	②詩のリズムや韻律		詩の韻律
日本	(中国語から)	③漢字音		漢字音の構造
	④言語音	⑤言語学的に見た言語音		ことばの発音
				言語学的に見た言語音（体系）

以下、これを基に（たたき台として）「音韻」という語の意味・用法の変遷について見ていく（図三一一の各意味を、それぞれ図三一一①～図三一一⑤と呼ぶことにする）。

三 文献資料に見る「音韻」の意味・用法

団機構等方面的名詞術語。」〔本辞典は、言語文字学の専門的な参考書である。内容には、言語理論と原理、言語研究の歴史と現状、文献資料、人物、著作、刊行物、学術団体・機関などの方面の術語を含む。〕とある）。以上の五つの辞書における「音韻」の意味記述・意味区分をまとめると、おおむね表三一一のようなになる（『漢語大』①の「亦指女子的風度儀態。」と、『中国語文大』③は含めていない）。

表三一一 「音韻」の辞書における意味区分

意味		辞書	
響き・音色	音全般	中国語文大	—
	詩のリズムや韻律	漢語大	①
言語音	漢字音	大辞林	⑤
	漢字音の要素	日本国語大	①
言語学的に見た言語音	漢字音の研究	日本国語大	②
	言語音体系	大辞林	①
抽象化した音	漢字音の研究	漢語大	③
	漢字音の研究	大辞林	⑥
音素	漢字音の研究	日本国語大	④
	漢字音の研究	大辞林	②
音素	漢字音の研究	漢語大	⑦
	漢字音の研究	大辞林	③

以上の辞書の記載（説明・用例）をもとに、「音韻」の主な意味を、時代順・地域別に分け、また、筆者の調査による現代語における「音韻」の意味（第二章三・二、四・二）を加えて示すと、次のようになる（図三一一）。



「韻」については、『説文解字』にこの字は見えない（徐鉉が校訂した「大徐本」（九八六成立）の「新附」には、「韻和也（韻は和なり）」とある。「韻」には、古くは「均」が使われていた。李（一九九八・四六）によれば、「韻」が使われた最も古い例は、陸機（二六一〜三〇三）の『文賦』であり、「韻」は、音楽で使われる「均」と区別して、文学の分野で使われはじめたという。『漢字語源語義辞典』では、「韻（イン）」の語源について、「コアイメージ」丸く行き渡る。「実現される意味」調和した音楽の調べ（音楽や言葉の心地よい響き）」としている。『広漢和辞典』は、「韻」の「解字」で「まろやかな音、ひびきの意を表す。」と述べている。

以上から、「音」と「韻」には、ともに古くから音楽的な音の意味があったことがわかる。ここから推して、「音韻」という語は、類似した意味の語（字）を並べた、並立構造によって成立した語で、原義は「音楽的に調和した美しい音」であると考えられる。

### 三・二 日本伝来以前の中国語における「音韻」

「音韻」という語が現れる最も古い文献は、（その成立年代からいえば）沈約撰『宋書』（四八八成立）のようである（以下、中国語文献の用例は、「中国哲学書電子化計画」、「漢籍電子文献資料庫」を検索して求めた。くぎり符号（句読点など）も、断りがない限り、これらによる。ただし、Ⅲ14は、「国立国会図書館デジタルコレクション」による）。

Ⅲ01「…旧京荒廢，今既散亡，音韻曲折，又無識者，則於今難以意言。」于時以無雅樂器及伶人，省太樂并鼓吹令。〔…旧京（洛陽）荒廢し、今既に散亡す、『音韻』曲折し、又識る者無ければ、則ち今において意を以て言うこと難し。〕時に雅樂器及び伶人（樂師）無きを以て、太樂（樂官）並びに鼓吹令（軍樂官）を省く。〕

### 三・一 「音」と「韻」

まず「音韻」の構成要素である「音」と「韻」の語源について見ていく。

「音」については、中国最古の字書である、許慎の『説文解字』（一〇〇成立）に、「声也。生於心，有節於外，謂之音。宮商角徵羽，声也；糸竹金石匏土革木，音也。」（くぎり符号（句読点など）は「中国哲学書電子化計画」による）（声なり。心に生じ、節外に有り、之を音と謂う。宮・商・角・徵・羽（音階）は声なり。糸・竹・金・石・匏・土・革・木（樂器）は音なり。）とある。これによれば、「音」は、単なる音ではなく、音楽的な（調和した）音を表すことになる。また、『詩経』（毛詩）「周南」や、『礼記』『楽記』には、「声成文謂之音」（声文を成す、之を音と謂う）『群書治要』によったとあるが、これについて、李（一九九八・四五）は、『声成文，謂之音』加以芸術化（文飾而有節）借以抒發内心之感情的『声』才称之为『音』因此、『音』指歌詠之音，又引伸為器樂之『八音』。「声文を成す、之を音と謂う」とは、芸術化を行う（文飾して、節をつける）ことによって、心の中の感情を述べる「声」を、はじめて「音」と呼ぶことができるということである。それゆえ、「音」は、歌の音を指し、また、派生義として、器樂の「八音」（糸竹金石匏土革木）をいう。」と述べている。一方、加納喜光『漢字語源語義辞典』は、「音（オン・イン）」の語源について、藤堂明保『漢字語源辞典』の説を踏襲し、「コアイメージ」中に入れてふさぐ。「実現される意味」物の発する響き（おと）」としている。また、『広漢和辞典』は、「音」の「解字」で「弦・管樂器や金石草木などから発するおとの意を表す。」、「語家族」で「ことばにならないおと・樂器などのおとの意を表す。」と述べている（なお、『広漢和辞典』は、「諸橋轍次著『大漢和辞典』を基本とし」（同辞典上巻「凡例」）ているが、「近時の研究による甲骨金石学や音韻学の成果をふまえ」（序）ており、白川静の甲骨金文研究の成果などを取り込んでいとされる（小山二〇一六・一三四））。

（令狐德棻等撰『周書』卷三七「寇儻傳」六三六成立）

（Ⅲ 06）施之金石，則音韻和諧；措之規矩，則器用合宜。「之を金石（楽器）に施せば、則ち「音韻」和諧（調和）す。之を規矩（規準）に措ければ、則ち器用（器具）は宜しきに合う。」

（房玄齡等撰『晉書』（六四六成立）卷五一「摯虞伝」

（Ⅲ 07）魏武帝時，河南杜夔精識音韻，為雅樂郎中，（魏の武帝（曹操）の時、河南の杜夔「音韻」を精しく識り、雅樂郎中（官）と為る。）

（房玄齡等撰『晉書』卷一六「律曆上」六四六成立）

詳しくいえば、Ⅲ 04の「音韻」は「歌声」を、Ⅲ 05の「音韻」は「ことばや声の響き」を、Ⅲ 06とⅢ 07の「音韻」は「楽器の音色」を表している。

つづいて、「詩のリズムや韻律」（図三一②に相当）と、「漢字音」を表す「音韻」（図三一③に相当）の例を挙げる。

（Ⅲ 08）若以文章之音韻，同絃管之声曲，則美惡妍蚩，不得頓相乖反。「若し文章の「音韻」を以て、絃管の声曲と同じくせば、則ち美惡妍蚩（美醜、頓に相乖反（離反）することを得ず。）」

（蕭子顯撰『南齊書』卷五十二「陸厥伝」六世紀成立）

（Ⅲ 09）玉府標孤映，霜蹄去不疑。激揚音韻徹，籍甚衆多推。（玉府（宝物藏）標くして孤り映き、霜蹄（馬蹄）去りて疑わず／激揚（激励宣揚）して「音韻」徹し、籍甚（盛大）にして衆多推す）（杜甫「暮春江陵送馬大卿公，恩命追赴闕下」（七八八作）。訓読は、下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注四』講談社（二〇一六・六四七）による）

（沈約撰『宋書』卷一九「樂一」四八八成立）

（Ⅲ 02）暢隨宜応答，吐属如流，音韻詳雅，風儀華潤，孝伯及左右人並相視歎息。「（張）暢、随いて宜しく応答し、吐属（話しぶり）流るる如く、「音韻」詳雅（優雅）、風儀華潤（華麗）にして、（李）孝伯及び左右の人並びに相視て歎息す。」

（沈約撰『宋書』卷五九「張暢伝」四八八成立）

（Ⅲ 03）一簡之内，音韻尽殊；兩句之中，輕重悉異。妙達此旨，始可言文。「（中略）至於高言妙句，音韻天成，皆闇与理合，匪由思至。「一簡（一節）の内、「音韻」尽く殊に、兩句の中、輕重悉く異なり。妙に此の旨に達せば、始めて文と言ふべし。（中略）高言・妙句に至り、「音韻」天成にして、皆闇に理と合うも、思いの至るに由るにあらず。」

（沈約撰『宋書』卷六七「謝靈運伝」四八八成立）

Ⅲ 01の「音韻」は「楽器の音色」（図三一①に相当）、Ⅲ 02の「音韻」は「ことばや声（話しぶり）の響き」（図三一①に相当）、Ⅲ 03の「音韻」は「詩のリズムや韻律」（図三一②に相当）を表している。

先に見たように、「音韻」の本義は「音楽的に調和した美しい音」であると考えられるが、この意味（図三一①に相当）の例をさらに挙げておく。

（Ⅲ 04）為《上堵吟》，音韻哀切，有惻人心，今水次尚歌之。「堵（堵水）に上る吟」を為る、「音韻」哀切にして、人心を惻むもの有り、今水次（水路の宿駅）尚之を歌う。」

（酈道元注『水経注』卷二八「沔水」五一五頃成立）

（Ⅲ 05）儻身長八尺，鬚鬢皓然，容止端詳，音韻清明。「儻（俊）は身長八尺，鬚鬢皓然（白く）、容止（華動）端詳（端正）にして、「音韻」清明なり。」

び、それをまとめた「韻書」の成立とされる（張一九三二・六七など）。この音韻学的な「音韻」の現れる古い文献として、決まって挙げられるのは、Ⅲ11の『顔氏家訓』である。Ⅲ10は、それより古い例と思われ、このころ（六世紀初め）に（後に散佚した）韻書があったことをうかがわせるが、『水経注』は明清代に復元されたものであるため、確かなところはわからない（ちなみに、ここで「音韻聯」とされている「城」と「亭」は、『広韻』では、それぞれ、「下平」十四の「清」韻と、「下平」十五の「青」韻とに属する）。

以上のほかに、唐代の文献には、「音韻」が漢字音（中国語音）以外の言語音を表す例も見られる。

（Ⅲ13）文辞婉密音韻循環。或一言貫多義。或一義綜多言。声有抑揚。調裁清濁。（文辞婉密（緻密）にして、「音韻」循環（連続）す。或いは一言（語）多義を貫く。或いは一義多言を綜む。声に抑揚有り。調は清濁を裁つ。）

（玄奘『大唐西域記』卷二一 六四六成立）

（Ⅲ14）与唐書旧翻。兼詳中天音韻。不無差反。考覈源濫。所帰悉曇。（句読点はⅢ27による）（唐書の旧翻と、中天（中天竺）の「音韻」とを兼ねて詳かにするに、差反無きにあらず、源濫（起源）を考覈（考察）するに、帰する所悉曇なり。）

（智広『悉曇字記』七九四頃成立）

Ⅲ13とⅢ14の「音韻」は、いずれもインドの言語（サンスクリット語、梵語）の「言語音の要素・体系」を表している。

Ⅲ14の『悉曇字記』は、中国における悉曇学（インド音韻学）の初期の教科書であり、日本における悉曇学の創始にも大きな影響を与えた書物である。悉曇学は、日本には、平安時代の初めに密教とともに伝えられ、その興隆とともに盛んになったが、中国では早くに廃れてしまった（悉曇学の資料は、中国では散佚したが、日本に

（張玉書等撰『全唐詩』一七〇五成立）

（Ⅲ10）消水又東南逕辰亭東。俗謂之田城。非也。蓋田、辰声相近。城、亭音韻聯故也。（消水は又東南のかた辰亭の東を逕く、俗に之を田城と謂うは、非なり。蓋し田・辰、声相近く、城・亭「音韻」聯なるが故ならん。）

（酈道元注『水経注』卷二二「消水」五一五頃成立）

（Ⅲ11）自茲厥後、音韻鋒出、各有土風、遽相非笑、（中略）李季節著音韻決疑、時有錯失、陽休之造切韻、殊為疎野。（茲（三国の魏の時代）より厥の後、「音韻」鋒に出で、各々土風（土地の風）有り、遽に相非笑（非難嘲笑）す、（中略）李季節『音韻決疑』を著すも、時に錯失（誤り）あり。陽休之、切韻（反切）を造るも、殊に疎野（粗野）為り）

（顔之推『顔氏家訓』卷下「音辞篇」六〇〇頃成立）

（Ⅲ12）昔開皇初、有儀同劉臻等八人、同詣法言門宿。夜永酒闌、論及音韻。（句読点は、汪寿明選注『中国歴代音韻学文選』による）（昔、開皇（隋代）の初め、儀同（官）の劉臻等八人有りて、共に（陸法言の門宿に詣る。夜永く酒闌にして、「音韻」に論及す。）

（陸法言等撰『切韻』「序」六〇一成立。陳彭年等撰『大宋重修広韻』（一〇〇八成立）による）

Ⅲ8とⅢ9の「音韻」は「詩のリズムや韻律」を、Ⅲ10とⅢ12の「音韻」は「漢字音」、詳しくいえば、Ⅲ10は「漢字音の要素・体系」、Ⅲ11とⅢ12は「漢字音の研究」（音韻学）を表している。

中国における言語音（漢字音）研究である「音韻学」の始まりは、「反切」（ある漢字の音を、他の漢字二字で表す方法。一字目が声母（頭子音）を表し、二字目が韻母（頭子音以外の部分）を表す）の発見（漢代末、およ

以上の「音韻」の意味は、その後も、中国語において、用いられたようである（ただし、「④言語音」の用例は限られる）。いくつか例を挙げておく。

（Ⅲ 15）妙女謳歌，神色自若，音韻奇妙清暢不可言。（妙女謳歌し、神色自若たり。「音韻」は奇妙・清暢にして、言うべからず。）

（Ⅲ 16）大都自沈約為四声，音韻愈密。（大都自沈約四声を為りてより、「音韻」愈々密（精密）なり。）

（Ⅲ 17）陳問：「古詩有平仄否？」李云：「無平仄，只是有音韻。」（陳（宜中）問う、「古詩に平仄有りや否や」李（漢老）云う、「平仄無し、只是有音韻」のみ有り。）

（Ⅲ 18）每只以簫、笙、箏、篳篥、方響，其音韻清且美也。（毎に只、簫、笙、箏、篳篥、方響のみを以てす。其の「音韻」清く且つ美し。）

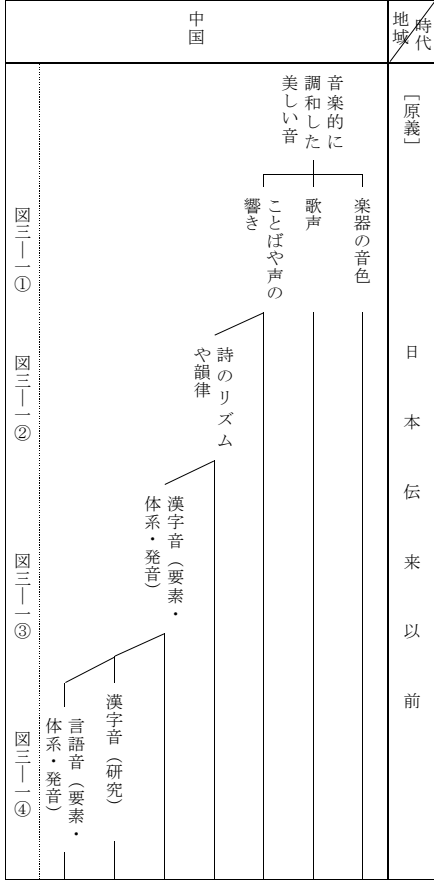
（Ⅲ 19）於西域其書左行，皆以音韻相生而成字，諸蕃之書悉其變也。（句読点は筆者）「西域に於いて其の書左行し、皆「音韻」を以て相生じ、字を成す。諸蕃の書、悉く其の變なり。」

（Ⅲ 20）音均明而六書明。六書明而古経伝無不可通。（音均明らかにして、六書明らかなり。六書明らかにして、古経伝、通ずべからざる無し。）（均」を「韻」の古字として用いている）

残されている（馬淵一九八四・一九）。「音韻」を漢字音（中国語音）以外の言語音に使う用法も、中国語では、一般的にはならなかったようである（『漢語大』『中国語文大』をはじめ、中国の辞典には、この意味は載せられていない）。

ここまで見てきたことを基に、推定される、中国語（日本伝来以前）における「音韻」の意味の変遷（派生）を示しておく（図三一一）。

図三一一 「音韻」の意味（中国語（日本伝来以前））



データベース」、「駒澤大学電子貴重書庫」、「グーグルブックス」を用いた。明治以降の翻刻本によるものについては、『群書類従』（正・続・続々）を除いて、その書名・出版者・出版年を付す。

(Ⅲ 22) 若シ前ニ有レハニ浮声ニ則チ後ニ切響ナル。一簡之内音韻尽殊。両句之内輕重悉ク異ナリ。妙ニ達シメレニ此ノ旨ニ始テ可シ言ツレ文ヲ。

(空海『文鏡秘府論』天卷)

(『弘法大師全集 卷第八』吉川弘文館・六六新報社、一九一〇・九)

(Ⅲ 23) 故ノ從五位上勲十一等晋卿ノ之第九ノ男也。父晋卿ハ遙カニ慕テ聖風ヲ遠ク辞ヌニ本族ヲ。誦シテ兩京之音韻ヲ。改ムニ吳之訛響ヲ。ロニハ吐イテ唐言ヲ一発ニ揮ス嬰字之耳目ヲ。

(空海『性靈集』卷四「為三藤ノ真川カ拳スルカニ浄豊ヲ」啓)

(Ⅲ 24) 叔虞封枝月影抱。判是歌舞無ニ勞曲。通霄砧杵未レ為レ足。音韻墳廐不ニ相讓。響添レ佩暗連統。

(良岑安世ほか編『経国集』卷十三「奉レ和ニ搗衣引」一首。巨識人)

(『群書類従』第八輯・卷第一二五・五二四)

以上は、いずれも平安時代初めの用例であるが、Ⅲ 22の「音韻」は「詩のリズムや韻律」(図三一②に相当)を、Ⅲ 23の「音韻」は「漢字音」(図三一③に相当)、詳しくは、中国語方言音を、Ⅲ 24の「音韻」は「楽器の(ような)音色」(図三一①に相当)を表しており、「音韻」の伝来当初に、複数の意味が伝えられていたことがわかる。

さて、日本における「音声研究の源流」は、「弘法大師空海が唐土から将来した悉曇の学問とそれに結んだ漢

(段玉裁『六書音均表』「寄戴東原先生書」一七七五成立)

(Ⅲ 21) 担負者往同売、秋声入耳、音韻淒涼、抑鬱多愁者不禁有歲時之感矣。「句読点は筆者」(担負の者(振り売り)、往同に売る。秋声耳に入り、「音韻」淒涼にして、抑鬱多愁なる者、歳時の感有るを禁ぜず。)

(敦宗『燕京歲時記』「棗兒葡萄」一九〇六刊)

(『筆記続編 燕京歲時記』広文書局、一九六九・八八)

Ⅲ 15の「音韻」は「歌声」、Ⅲ 16の「音韻」は「漢字音の研究」、Ⅲ 17の「音韻」は「詩のリズムや韻律」、Ⅲ 18の「音韻」は「楽器の音色」、Ⅲ 19の「音韻」は「言語音の要素・体系・発音」、Ⅲ 20の「音韻」は「漢字音の要素・体系」、Ⅲ 21の「音韻」は「ことばや声の響き」を表している。図三一①の意味では、楽器の音色の形に、「音韻曲折」、「音韻清越」、「音韻窈窕」などの表現が、ことばや声の響きの形に、「音韻高亮」、「音韻適雅」、「音韻詳雅」、「音韻清雅」、「音韻清弁」、「音韻清朗」などの表現が多く見られる。

### 三・三 平安時代における「音韻」

日本の文献に見られる最古の「音韻」の用例は、空海の著作中に現れたものであるらしい(釘貫二〇〇七・二一)。(『文鏡秘府論』(八二〇頃成立「天巻」に『宋書』「謝靈運伝」からの引用(Ⅲ 22ⅡⅢ 03の前半部分)が見られるほか、『性靈集』(八三五頃成立)にも例(Ⅲ 23)が見られる。また、『日本国語大』では、良岑安世ほか編『経国集』(八二七頃成立)巻一三に見られる「音韻」を初出例(Ⅲ 24)としている。(以下、用例の収集には、「ジャパンナレッジ」の『群書類従』(正・続・続々)、および「東洋文庫」(以上、「全文」検索を利用)のほか、「国立国会図書館デジタルコレクション」、国文学研究資料館電子資料館、「早稲田大学図書館古典籍総合デー

が、両者の「音韻」は、いずれも「言語音の要素・体系」を表していると思われる（なお、Ⅲ 27の「与唐書旧翻」以下は、『悉曇字記』からの引用である（Ⅲ 14 参照）。いずれにしても、以上の三例は、インド（梵語）の「言語音」（図三―④に相当）について述べている。

これ以外の意味で使われている、平安時代の文献における「音韻」の用例を、『群書類従』（正・続・続々）から挙げておく。

（Ⅲ 28）何<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>此<sub>一</sub>ノ<sub>レ</sub>終ノ<sub>レ</sub>究竟<sub>ニ</sub>到<sub>シ</sub>ニ<sub>一</sub>彼岸<sub>ニ</sub>、願<sub>ハク</sub>ハ<sub>二</sub>仏開<sub>イ</sub>テ<sub>一</sub>微密<sub>ヲ</sub>、広<sub>ク</sub>為<sub>ニ</sub>衆生ノ<sub>一</sub>説<sub>カ</sub>レン<sub>コト</sub>ヲ、**音韻絶妙**ナリ、作梵ノ之間<sub>ニ</sub>、有<sub>レ</sub>テ<sub>レ</sub>人分<sub>レ</sub>経<sub>ヲ</sub>、〔送り仮名は筆者〕

（Ⅲ 29）即令<sub>三</sub>学生四百人<sub>ヲ</sub>シ<sub>テ</sub>習<sub>ハ</sub>ニ<sub>一</sub>五經三史。明法算術、**音韻**、**禮篆等ノ六道**ヲ。  
〔円仁『入唐求法巡礼行記』巻第一 九世紀成立〕  
『続々群書類従』第一二：一七四

（Ⅲ 30）巡<sub>ニ</sub>礼<sub>シ</sub>処々ノ<sub>レ</sub>靈驗ノ<sub>レ</sub>勝地<sub>ヲ</sub>。薰修スルコト年尚<sub>シ</sub>矣。就<sub>レ</sub>中其ノ<sub>レ</sub>音微妙幽美<sub>ニ</sub>シテ。雖<sub>モ</sub>不<sub>レ</sub>加<sub>ハ</sub>レ<sub>二</sub>曲<sub>ヲ</sub>不<sub>レ</sub>致<sub>サ</sub>ニ<sub>一</sub>**音韻**ヲ。任<sub>セ</sub>レ<sub>二</sub>運<sub>ニ</sub>出<sub>スト</sub>上<sub>レ</sub>声<sub>ヲ</sub>。聞ク人傾<sub>ク</sub>レ<sub>二</sub>耳<sub>ヲ</sub>。〔訓点は筆者〕

（鎮源『本朝法華驗記』巻之下「第八十六天王寺别当道命阿闍梨」一〇四一頃成立）

（Ⅲ 31）玄奘所<sub>レ</sub>訳スル十一面經疏<sub>ニ</sub>云。○此ノ菩提樹ハ用<sub>ホ</sub>テ<sub>二</sub>都魯色迦香<sub>ヲ</sub>油<sub>ニ</sub>漬<sub>スル</sub>ナリ之<sub>ヲ</sub>也。法花經<sub>ニ</sub>曰ク。兜盧皮香此ハ云フ<sub>二</sub>草香<sub>ヲ</sub>。与<sub>ニ</sub>此<sub>一</sub>ノ中<sub>ニ</sub>都魯色香ト**音韻**少<sub>シク</sub>異ナリ。大意相似タルナリ也。〔訓点は筆者〕

『香字抄』「安息香」一一世紀後半成立か  
『続群書類従』第三〇輯下・巻第八九四・五一九

語学音学に求めることが通例」とされる（釘貫二〇七・一）。悉曇学と漢字音研究とはしだいに統合され、日本化した（日本語音・五十音図に基づく）研究となり、中世には独特の音韻研究が起ったという（馬淵・出雲一九九九・二六）。馬淵和夫は、悉曇学について、「空海は真言宗の悉曇、円仁は天台宗の悉曇の祖となった。これらの時代の悉曇を集成したのが安然の『悉曇藏』である。その後、真言・天台の各宗各派においてその学は継承され、院政時代の天台の学僧明覚によつてさらに音声学的に研究され、しだいに中国語学と一体となつて韻学といふべきものが形成されるようになった。ここから国語研究の機運がおきたのである。」『日本大百科全書』悉曇」と述べている。ここで、平安時代の悉曇学書における「音韻」の用例をいくつか挙げておく。

（Ⅲ 25）此ノ<sub>二</sub>八声<sub>ニ</sub>各々有<sub>ニ</sub>三種<sub>一</sub>一ニハ<sub>二</sub>喉内ノ声<sub>ニ</sub>一ニハ<sub>二</sub>舌内ノ声<sub>ニ</sub>一ニハ<sub>二</sub>唇内ノ声<sub>ニ</sub>並<sub>ニ</sub>与<sub>ニ</sub>梵文<sub>一</sub>対檢<sub>シテ</sub>摠<sub>トル</sub>実<sub>ヲ</sub>。亦述ス本韻ノ大空涅槃ノ音ノ中ニ並<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>此<sub>レ</sub>等ノ三種ノ**音韻**一

（安然『悉曇藏』「序」八八〇成立）

（Ⅲ 26）五天ノ之中ニハ<sub>二</sub>中天<sub>ヲ</sub>為<sub>ス</sub>最<sub>ニ</sub>、中天ノ之外<sub>ニ</sub>、無<sub>レ</sub>有<sub>ル</sub>コト<sub>一</sub>勝<sub>ル</sub>処<sub>ニ</sub>、若<sub>シ</sub>以<sub>テ</sub>此<sub>ノ</sub>理<sub>ヲ</sub>準<sub>シテ</sub>判<sub>ケ</sub>ハ<sub>二</sub>優劣<sub>ヲ</sub>、可<sub>シ</sub>レ<sub>二</sub>道<sub>ヲ</sub>中天ノ**音韻**ヲ以<sub>テ</sub>為<sub>ス</sub>ト<sub>一</sub>美<sub>正</sub>ト、余国清濁而モ多<sub>シ</sub>ニ訛謬<sub>一</sub>、

（宗叡『悉曇私記』八八四成立）

（Ⅲ 27）故<sub>ニ</sub>欲<sub>セ</sub>ヘ<sub>レ</sub>取<sub>ント</sub>ニ梵文ノ正旨<sub>ヲ</sub>。不<sub>レ</sub>専<sub>セ</sub>ニ<sub>一</sub>文<sub>ヲ</sub>也。又判<sub>シテ</sub>般若菩薩所<sub>レ</sub>伝<sub>ヲ</sub>云。与<sub>ニ</sub>唐書ノ旧翻<sub>一</sub>兼<sub>ニ</sub>詳<sub>ル</sub>ニ<sub>一</sub>中天ノ**音韻**一。不<sub>レ</sub>無<sub>ニ</sub>差<sub>反</sub>一。考<sub>ニ</sub>覈<sub>ニ</sub>源<sub>濫</sub>ヲ。攸<sub>ニ</sub>帰<sub>ニ</sub>悉曇<sub>ヲ</sub>ナリ。

（明覚『悉曇要訣』巻第一 一一〇一成立）

Ⅲ 25は、中国伝来の悉曇学を集成した（智広の『悉曇字記』の系統を引く）『悉曇藏』に見られる例であるが、この「音韻」は「言語音の要素」を表している。Ⅲ 26の『悉曇私記』は『悉曇字記』の注釈書であり、Ⅲ 27の『悉曇要訣』は（前二者に比べ、少し時代が下るが）日本化した独自の悉曇学（音韻学）を説いた書物である

表三一一 『群書類従』（正・続・続々）収録文献における「音韻」の意味・用法

図三一一の意味区分 主な意味・用法 時代（文献数）	①音の響きや音色		②詩のリ ズムや韻律		③漢字音		④言語音
	楽器の音色	ことばや 声の響き	詩の韻律	漢字音の要 素・体系・発 音	漢字の研 究	言語音（発音）	
平安時代（9）	2(2)	3(3)	—	—	1(1)	4(4)	
鎌倉時代（3）	5(3)	—	—	—	—	1(1)	
室町時代（4）	1(1)	1(1)	1(1)	2(1)	—	—	
江戸時代（6）	2(2)	1(1)	—	6(1)	5(3)	—	

数字…それに当たる用例の数（○内は、文献の数（重複あり））。…それに当たる用例なし。  
室町時代は、南北朝時代・戦国時代を含む。  
固有名詞は除いた（最終的な分析対象数は、「時代」右から、それぞれ10、6、5、14）。

三・四 鎌倉・室町時代における「音韻」

鎌倉・室町時代の文献に現れる「音韻」は、平安時代における「音韻」の複数の意味を踏襲している。以下に、

（Ⅲ 32）大恵大法師<sup>ハ</sup>者。安然和尚<sup>ノ</sup>之入室也。大法師依<sup>テ</sup>知<sup>ル</sup>ニ糸竹<sup>ノ</sup>之曲調<sup>ヲ</sup>。明<sup>ニ</sup>通<sup>ス</sup>悉曇<sup>ノ</sup>之音韻<sup>ニ</sup>。凡<sup>ソ</sup>内外兼<sup>テ</sup>学<sup>ビ</sup>。管絃俱<sup>ニ</sup>習<sup>フト</sup>云々。（訓点は筆者）  
（三善為康『拾遺往生伝』卷中「大法師浄蔵」一一二三成立）  
『続群書類従』第八輯上・卷第一九六…二四四）  
Ⅲ 28とⅢ 30の「音韻」は「ことばや声の響き」（図三一一、①に相当）を、Ⅲ 29の「音韻」は「漢字音の研究」（図三一一、③に相当）を、Ⅲ 31とⅢ 32の「音韻」は「言語音」（図三一一④に相当）、詳しくいえば、梵語（漢字音訳語）の「発音」を表している。

ところで、筆者の調べた限りでは、（平安時代に限らず）一般の古典文学作品には、「音韻」の用例は見当たらなかった。『新編日本古典文学全集』収録の作品に用例が見られなかった（ジャパンナレッジ）の「全文」検索による）ほか、各種の古典文学索引（書籍版）によっても、用例は見つからなかった。一方、『群書類従』（正・続・続々）に収録された文献では、二二文献に「音韻」の用例が見られた。ここから、「音韻」は、日常的な語ではなく、限られた分野（漢詩文や音韻学）で使われる語であることがうかがえる。

参考までに、『群書類従』（正・続・続々）に収録された文献に現れた「音韻」の用例数を、意味別・時代別に、表にして挙げておく（表三一一）。用例数は、「ジャパンナレッジ」の「全文」検索によって得られた用例を、筆者が分析・分類・集計して求めた（図三一一）の、①く④のうち、①と、③とを、それぞれさらに二つに分け、合計六つに分類した。⑤の用例は、見られなかった。

〔訓点は筆者〕

(春沢永恩『枯木稿』「器用凍琴」一五七四頃成立か)  
『統群書類従』第一三輯下・卷第三五一・七八四)  
Ⅲ33とⅢ38の「音韻」は「楽器の(ような)音色」(図三一①に相当)を、Ⅲ34の「音韻」は「言語音」(図三一④に相当)、詳しくいえば、梵字の「発音」を、Ⅲ35の「音韻」は「声の(音楽的な)響き」(図三一①に相当)を、Ⅲ36の「音韻」は「詩のリズムや韻律」(図三一②に相当)を、Ⅲ37の「音韻」は「漢字音の要素・体系」(図三一③に相当)を表している(なお、例二四は、『晋書』「荀勖伝」、および『蒙求』「荀勖音律」からの引用である)。

### 三・五 江戸時代における「音韻」

江戸時代になると、「音韻」は、(漢字音や梵語音に限らず)広く「言語音」(図三一④に相当)を表すのに使われるようになる。この意味の「音韻」の用例は、漢学や国学、さらには蘭学の研究書などに多く見られる。以下、まず特定の言語(方言を含む)の「言語音」を表す用例を、文献の成立年(または刊行年)順に挙げる(内は、筆者による)。

(Ⅲ39) 証拠を挙ていはば京都中国板東北国等の人に逢て其音韻を聞に総て四音の分弁なきがごとし唯筑紫方の辞を聞に大形明に言分る也一文不通の兒女子なりといへ共強に教る事もなければども自然に聞習ひて常々の物語にも其音韻を混乱する事なし

(鴨東軟父『仮名文字使蜆縮涼鼓集』上「凡例」一六九五刊・六才)

『群書類従』(正・続・続々)収録文献に見られる「音韻」の用例をいくつか挙げておく。

(Ⅲ33) 楽官ニナサレニケリ。昔遇フニ趙ノ商人ニ於路ニ。懸クニ鐸ヲ於牛角ニ。識ニ其声ヲ。後ニ音韻イマタトノホラサルニ。荀勖力云ク。〔訓点は筆者〕

(源光行『蒙求和歌』第一二「管弦部十首荀勖音律」一二〇四成立)

(Ⅲ34) 習学悉曇ヲ、法師元依テ知ルニ糸竹ノ之曲調ヲ、殊ニ朗スルナリ悉曇ノ之音韻也、十九歳ニシテ誓ヒテ期シニ箇年ヲ、蟄居ス横川ノ苔洞ニ、〔送り仮名は筆者〕

(宗蓮『大法師淨藏伝』一二三・一成立)

『統々群書類従』第三・四六五)

(Ⅲ35) 或時法花経ヲ読誦スルニ年十五六歳ノ兒童数多左右ニ来テ同経ヲ誦。其容貌奇麗而音韻又清雅也。

〔神皇正統録』上「六十二代村上天皇」南北朝時代頃成立)

『統群書類従』第二九輯上・卷第八五一・三(四)

(Ⅲ36) 無ク願トシテ不ト云コト往。無シトハ善トシテ不ト云コト廻セ。言ハ三心既具無行不成。願行既成若不生者無有是処。今往ト廻ト不ナルコト次ニ為ニス音韻ノ。

(聖因『鹿島問答』「上衍極致鶏距蹈開」一三七七成立)

『統群書類従』第三三輯上・卷第九六二・一五三)

(Ⅲ37) 反音大意事。右反切ノ大道者。声明ノ根本也。音韻ノ学業之述作ノ軌範也。

(志玉照珍『反音抄』「開口合口事」一四〇八成立)

『統群書類従』第三〇輯下・卷第八八八・二五七)

(Ⅲ38) 曇下ノ梧桐誰カ所レ伝フ。暁来凍合シ落ツ階泉ニ。夜寒ク古曲無シニ音韻。只有リ松風ニ続ク断絃。



(寺門静軒『江戸繁昌記』(一八三二)一八三六刊)三篇「書舖」

『江戸繁昌記二』平凡社東洋文庫、一九七五・二二三

以上のうち、Ⅲ39とⅢ45の「音韻」は日本語方言の「言語音の発音」を、Ⅲ40とⅢ42の「音韻」は日本語の「言語音の要素・体系」を、Ⅲ41とⅢ43の「音韻」はオランダ語の「言語音の要素」、具体的には「音節」を、Ⅲ44の「音韻」は中国語方言の「言語音」を表している。

つづいて、特定の一言語の音というより、諸言語、あるいは言語一般の「言語音」を表していると思われる「音韻」の用例を挙げる。

(Ⅲ46) 西方諸国の如きは。方俗音韻の学を尚びて。其文字の如きは尚ぶ所にはあらず。僅に三十余字を結びて。天下の音を尽しぬれば。其声音もまた猶多からざる事を得べからず。中土の如きは。其尚ぶところ文字にありて。音韻の学の如きは。西方の長じぬるに及ばず。我東方の如きは。其尚ぶ所言詞の間にありて。文字音韻等の学は。相尚べる所にもあらず。〔中略〕然るに今朝鮮音韻の学を問ふに。此国にはなき所の音でもあるなり。

(新井白石『東雅』一「総論」一七二七成立)

『東雅』吉川半七、一九〇三・五

(Ⅲ47) 夫レ人ノ言ニ有リ自然ノ音韻焉。古人任セ其ノ自然ニ罕ニ有リ訛舛、蓋シ夷蛮戎狄ノ言語各々殊ナリ、待チテ訳ヲ而通セバ中国ニ、則チ受クテ先王ノ同律同文之治ヲ、而其ノ言自然ニ正シ、所以ナリ古人ノ未レ有ラ下精覈スル音韻ヲ者也〔訓点は筆者〕

(文雄『磨光韻鏡』上「太宰純序」一七四四刊…一才)

(Ⅲ48) 凡ソ音韻ヲ学バム者。必悉曇ヲ知ラズバアルベカラズ。世ノ韻学者タ、漢字ノ韻書ニノミ執滞セル

(Ⅲ40) 美昔遇フニ和蘭人ニ、獲テ觀テ其ノ国字ヲ、因テ以テ其字ヲ写スニ東方ノ音韻ノ図ヲ、第一行ノ喉音ノ五字ノ止は一音一字ニシテ、其ノ他ノ字ハ並ビ皆ニ合ニ合シ、必ズ取リテ喉音ノ之字ヲ以テ合ニ其体ヲ、〔訓点は筆者。〕「美」は白石の自称

(新井白石『東音譜』「凡例」一七一九序)

『新井白石全集第四卷』吉川半七、一九〇四・三九七

(Ⅲ41) (ⅡⅦ17の一部) 愚按ルニ、此十九字「ホカーレン」ニ從ハザレバ、音韻ヲ如何トモ発スルコト能ハズ。〔「ホカーレン」(vocalen)は「母音」〕

(前野良沢『和蘭訳文略』一七七二頃成立)

『洋学上』(日本思想大系六五)岩波書店、一九七六・八六

(Ⅲ42) 又御国ノ音韻ハ甚悉曇ニ似タルコト多シ

(本居宣長『字音仮字用格』「喉音三行弁」一七七六刊…四ウ)

(Ⅲ43) 文ヲ為シ辞ヲ成スニハ上ノ二十六ノ文字ヲ二字或三四字以上ヲ連合シテ音韻ヲ諧ヘ諸々ノ文辞・言語ヲナスナリ其連合シテ音韻ヲナスヲ「シルラーベン」ト云フ「シルラーベン」(syllaben)は「音節」

(大槻玄沢『蘭学階梯』下卷「配韻」一七八三成立、一七八八刊…四ウ)

(Ⅲ44) 先生ハ浙江杭州西湖ノ人。明亡テ航シ海ニ。寓ルコト長崎ニ二十有余年。僕之親炙也久。而其語言音韻。則不レ期而頗ル解ス焉。至レ今ニ皓首猶操ス南音ヲ。

(原念齋『先哲叢談』卷之五「高玄岱」一八一六刊…一ウ)

(Ⅲ45) 「語学語書、聞く、其の先生去年上方より来ると、未だ其の人の何如を詳にせず」と。客曰はく、「宜なるかな、其の音韻に審かなること。上方役者は率是れなり」と。

以下、その他の意味で使われている、江戸時代の文献における「音韻」の用例を、いくつか挙げておく。

(Ⅲ 53) 大成シ顯密ヲ、帝深ク有リ優幸ニ、入レ宮ニ而進メ席ヲ、令ム誦セ三十七尊ノ之真言ヲ、音韻ヲ麗隠々如ク鈴ノ、聞ク者不レ覺エ悦予ス、〔送り仮名は筆者〕

(智灯『弘法大師弟子伝』巻上「城南深艸貞觀寺開山真雅僧正伝」一六八四成立)

〔続々群書類従』第三・四五〇〕

(Ⅲ 54) 算術モ亦四道ノ其一ツニシテ算道ヲ掌レリ、音韻ハ吾書ノ類四声開合等ヲ弁知スル事也、籀篆ハ古文也、

(松下見林『本朝学原浪華鈔』六一六九八序、一七一六刊)

〔続々群書類従』第一〇・五三七〕

(Ⅲ 55) 学者欲セハ必ス通セント「音韻」妙ニ応ニ須クレ以テス「於此ノ書」

(盛典『新增韻鏡易解大全』第一「韻鏡易解ノ起」一七一八刊・五才)

(Ⅲ 56) 羽衣霓裳。霧鬢風鬟。灼嬋聯娟。冠珮交珊。法曲未闕。僊樂又起。音韻ヲ劉亮。若速若遲。歌詠讚嘆。并奏送吟。

(万瑛『万瑛和尚文集』「極樂賦并序」江戸中期成立)

〔続群書類従』第一三輯下・卷第三五五・九七〇〕

(Ⅲ 57) 韻鏡ハ者音韻ノ之譜ナリ也夫音韻ノ之有ルヤ譜也猶シ三方円ノ之有ルカ二規矩ノ有テ二規矩ニ而シテ后ニ方円正シ有テレ譜而シテ后ニ音韻調フ

(文雄『磨光韻鏡』上「韻鏡索隱」一七四四刊・一才)

Ⅲ 53の「音韻」は「ことばや声の響き」(図三一一、①に相当)を、Ⅲ 54の「音韻」は「漢字音の研究」(図三

故ニ天下ノ音韻ノ大体ヲ知ラズ。

(本居宣長『漢字三音考』「天竺国ノ韻」一七八四序、一七八五刊)

〔漢字三音考』前川善兵衛、一九〇〇・六ウ〕

(Ⅲ 49) 朝鮮・蒙古・韃靼・梵文・マレイス・ギリイキス・ヘブレウス・和蘭、共ニ八種ノ文字ヲ采録シ得タリ。〔中略〕「ヘブレウス」ハ和蘭ノ書ニ出タルヲ略抄シ得タルノミナリ。余ノ六種モ只文字音韻ヲ考察シタルマデニテ、其書ヲ読ム事難シ。

(前野良沢『東察加志』「請問」一七八九成立)

〔前野蘭化三著訳篇』平凡社東洋文庫、一九九七・二一九〕

(Ⅲ 50) 天明八年秋のころ。肥前ノ国の長崎に物して。於蘭陀人オランダ人のまうで来てあるに逢て。音韻ノ事どもを論じ。皇国の五十音の事をかたりて。そを其人にとなへさせて聞しに。

(本居宣長『玉勝間』二「五十連音をおらんだびとに唱へさせたる事」一七九九刊・四二才)

(Ⅲ 51 (Ⅵ 25)) 殊に音韻言語ハ。太古より毎国カキコトにとなへ来たりし者なるを。我国にハ。西土の字を仮て。音を習ふにハ。一旦彼土の音声に転ウツるが如くすれど。はた年を歴ヘてハ。我音声に移るべき事。自然の理也。

(上田秋成『霊語通』第五「仮字篇」一七九五序・六才)

(Ⅲ 52 (Ⅵ 26)) 音韻ノコト、古来云フ者多シト雖モ、皆一方ノ私言ニシテ、世界同一ノ公論ニ非ズ、夫活物ニ、音声アルコト、何レノ国ニテモ、同一ノコトニシテ、此ノ国ニ限り、此ノ地ニ限りテ、無シト云フコト、有ルベカラズ、

(島海松亭『音韻啓蒙』「総論」一八一六刊・一才)

このように、明治・大正期における「音韻」の辞書的・規範的な意味は、主に「漢字音の要素・体系」(図三一①、③に相当)であったようだ(ただし、『大日本国語辞典第一巻』の用例における「音韻」は、「詩のリズムや韻律」(図三一②に相当)、および「楽器の音色」(図三一①に相当)を意味するものである)。

では、実際に、明治・大正期において「音韻」がどのような意味で使われていたか、書き言葉資料から見ておきたい。各種の日本語書き言葉コーパス(言語資料)を用いて調査を行った結果を、表に挙げる。使用したコーパスは、「読売新聞記事データベース」(読売新聞「ヨミダス歴史館」)の「明治・大正・昭和(一八七四～一九八九)」「キーワード検索」を利用、「朝日新聞記事データベース」(朝日新聞「開蔵Ⅱビジュアル」)の「朝日新聞縮刷版(一八七九～一九九九)」「見出しとキーワード」検索を利用、「太陽コーパス」(国立国語研究所「近代語のコーパス」)から五年分(一八九五・一九〇一・一九〇九・一九一七・一九二五)を抽出した全文コーパスであるが、一九一七年と一九二五年のものには、「音韻」の用例は見られなかった。また、「太陽コーパス」と同じ国立国語研究所の「近代語のコーパス」である「近代女性雑誌コーパス」、「明六雑誌コーパス」、「国民之友コーパス」には、「音韻」の用例は見られなかった。これらを検索して得られた「音韻」の用例を、筆者が分析・分類・集計したものを挙げる(表三一二)。

――③に相当)を、Ⅲ55とⅢ57の「音韻」は「漢字音の要素・体系」(図三一①、③に相当)を、Ⅲ56の「音韻」は「楽器の音色」(図三一②に相当)を表している。なお、日本の漢字音研究(韻鏡学)では、漢字音の声母を「音」、韻母を「韻」と呼んでおり(この用語は、鎌倉時代の悉曇研究に始まる。釘貫二〇七・三五)、「音韻」に「音+韻」という分析的な意味合いがあったようである。これは、五十音図に基づく日本語の音韻観にも影響を与えている(第五章四節)。

### 三・六 明治・大正期における「音韻」

明治以降、「音韻」という語には、伝統的な意味・用法のほかに、西洋の言語研究の影響を受けた意味・用法が見られるようになる。ここでは、まず明治・大正期の代表的な国語辞典における「音韻」の意味を見ておく(国立国会図書館デジタルコレクション)によった。

・『日本辞書 言海』(大槻文彦(著作兼発行者)、一八八九)  
漢字ノ音、又ハ、韻。

・『日本大辞書』(山田美妙、明法堂、一八九二)  
漢語。おん(音) トおん(韻) ト。―「おんおん相叶ハズ」。  
・『大辞典上巻』(山田美妙、嵩山堂、一九二二)  
音ト韻ト。〃こゑトひびきト。

・『大日本国語辞典第一巻』(上田万年・松井簡治、金港堂書籍、一九一五)  
「おん(音) は字の読み声。おん(韻) は音のひびき」こゑとひびきと。漢字の音又は韻。  
宋書謝靈運「一簡之内音韻尽殊、両句之中轻重悉異」 白居易詩「蜀琴本性寒、楚糸音韻清」

(Ⅲ 59) 而して音韻を講究するは韻鏡に如くもの無し之に依らば三万の漢字廿万の音韻立どころに弁知し得べき良書にして実に我国学に於ける音韻の羅針盤なり、  
 (「学士会院講演要旨」(木村正辞「音韻学の要領」)『読売新聞』一八九六年四月一四日)

(Ⅲ 60) 音韻は硬音、軟音、強音、弱音、高音、低音、母音、子音、半母音、半子音、清音、濁音、半濁音の如何を問はず

(前田林外「五十音改正新論(下)」『読売新聞』一九〇八年二月二〇日)

(Ⅲ 61) そのrの喉音や語尾の自然な音韻が紛れもないドイツの生粋の氣分を旅客の耳に吹き込むものであった。

(寺田寅彦「旅日記から(明治四十二年)」(一九二二)  
 (『寺田寅彦隨筆集』岩波書店、一九四七)

(Ⅲ 62) それから、Rain, rain go to Spain というような音韻上の引っかけことばのものは訳しようとするのがそもそもの無理であるから訳しなかった。

(北原白秋訳『まざあ・ぐうす』一九二一刊)  
 (『まざあ・ぐうす』角川書店、一九七六)

(Ⅲ 63) 蝶の原音は「て・ふ」である。蝶の翼の空氣をうつ感覺を音韻に写したものである。

(萩原朔太郎『青猫』一九二三刊)  
 (『萩原朔太郎全集第一卷』筑摩書房、一九七五)

(Ⅲ 64) 「ひ」と「ゐ」とは、音韻に相違はあつても、此時代はまだ此二音の音価が定まらないで、転化の自由であつた時なのだから、仮字の違いは、物の相違を意味せないのである。

表三―三 明治・大正期の文献における「音韻」の意味・用法

図三―一の意味区分 資料(コーパス)	主な意味・用法				
	①音の響きや音色 ことばや声の響き	②詩のリズムや韻律 詩の韻律	③漢字音 漢字音(要素・体系)	④言語音 言語音(発音)	⑤言語学的に見た言語音 言語学的な言語音(要素・体系)
読売新聞 (一八七四―一九二六)	—	—	2	4	7
朝日新聞 (一八七九―一九二六)	—	—	3	—	1
雑誌太陽(一八九五・一九〇一・一九〇九)	1	1	5	1	—
文芸作品(青空文庫) (一九〇八―一九二六)	2	1	—	1	3

数字…それに当たる用例の数(同一記事・作品中の複数例は1とした)。…それに当たる用例なし。  
 固有名詞、複合語(「音韻学」、「音韻論」、「音韻組織」など)は除いた(最終的な分析対象数は、「資料」右から、それぞれ13、4、8、7)。

ここに現れた用例を、いくつか挙げておく。

(Ⅲ 58) 音韻の編制、人に依り、世に依り、互に異同なくばあらず、或は二百六韻となせるあり、或は一百七韻となせるあり、

(三宅雪嶺「字音の標準」『雑誌太陽』第一卷三号、一八九五年三月五日)

(Ⅲ 67) われ／＼はまづ、明治今日の日本の言語上にはそれだけの音韻がある、そして又在来の文字で示して居る音韻よりは、どれだけの新しい音韻が殖えて来て居る、猶又た進んでは、今後とも、ある種類の音韻の殖えて来た暁には、どういふ様にそれを取扱ふかなどいふ上に、充分の考慮を煩はしまして、そして後御互に文字の組織法に論究すべきが至当であらうと存じます。

(上田万年「新国字論」「国語のため」富山房、一八九五・二一九)

この時期、日本における言語音に関する研究は、伝統的な「音韻」研究の成果を引き継ぐとともに、西洋における言語音研究の影響を受けて発展していくが、そのなかで、「音韻」という語は、伝統的な用法のほか、西洋の言語研究(言語学)における言語音(および、その研究)を表す専門語(翻訳語)にも使われるようになっていった。たとえば、西洋の歴史的な音韻研究である「phonology」は、明治初期に、西周によって「音声学」と訳されたほか『百学連環』(一八七〇頃筆)第一編「文章学」『西周全集第四卷』宗高書房、一九八二)。なお、同「覚書」には、「音韻字」の「韻」を消して「声」と直してある。『音学』、「人声論」、「人声学」、「声学」、「声音学」などと訳されたが、昭和になって、F・de・ソシュールの言語学や、その影響を受けたブラーグ学派の言語音研究である新しい phonology (仏 phonologie) が日本に伝来すると、phonology が菊沢季生や神保格らにより「音韻学」、「音韻論」と訳され、やがて「音韻論」という訳語が定着した(なお、『日本国語大』では、「音韻論(英 phonology ドイツ Phonologie の訳語)」の初出例として、上田万年「今後の国語学」『国語のため』(一八九五)の例を挙げているが、同文献には、これが phonology の訳語であるとは書かれていない)。また、phonology における単位である phoneme (仏 phonème) にも、小林英夫によって「音韻」という訳が当てられた(フェルディナン・ド・ソッスール述、シャルル・バイイ、アルベール・スシュエ編、小林英夫訳『言語学原論』岡書院、一九二八)。ただし、ソシュールは、「音韻論」に当たるものを「phonétique (英 phonetics) と呼ぶべきだ」としているため、ソシュール言語学においては、phonème は phonétique の単位ということになる(昭和初期における phonème

(折口信夫「国文学の発生」(第二稿、一九二四)『折口信夫全集第一巻』中央公論社、一九九五)

Ⅲ 58 とⅢ 59 の「音韻」は「漢字音の要素・体系」(図三一一、③に相当)を、Ⅲ 60 とⅢ 64 の「音韻」は「言語学的な言語音」(図三一一⑤に相当)を、Ⅲ 61 の「音韻」は「言語音」(図三一一④に相当)、詳しくいえばドイツ語の「発音」を、Ⅲ 62 の「音韻」は「詩の韻律」(図三一一、②に相当)を、Ⅲ 63 の「音韻」は「ことばや声の響き」(図三一一、①に相当)を表している。

このように、明治・大正期の「音韻」には、「漢字音」の意味で使われる用例が比較的多く見られるが、「言語学的な言語音」を表す用例も現れてきている。明治期の文献から、「言語学的な言語音」を表す「音韻」の用例を補っておく。

(Ⅲ 65) 仮名は元来音韻を顕はすの記号なりしもその之を顕はすの仕方は一の組み立たる成音に一つ一つの微を付けたるものにして其まゝにては顕され悪き音多し、強て之を顕さんとせは彼の反切を遣はさるべからず。

(田中館愛橘「理学協会雑誌を羅馬字にて発兌するの發議及び羅馬字用法意見」『理学協会雑誌』一六、一八八五)

(Ⅲ 66) 兼テ御話シタル通り、言葉ト云フモノハ、人間ノ音声ヨリ成立ツモノデ、其音声ガ、即言葉デアル。シテ見レバ音韻ノコトヲ研究スルニハ、如何ニシテ宜イカトイヘバ、其音ヲ出ス機械、即発声機カラ研究シナケレバナラス。

(伊沢修二「本邦語学ニ就テノ意見」『大日本教育会雑誌』八一・八二・八四、一八八八)  
(信濃教育会編『伊沢修二選集』信濃教育会、一九五八・六八四)

- ・『学生英和辞典』（一九一〇）上野陽一・長崎英造・太田英次郎編 博報堂
- ・『哲学字彙英独仏和三版』（一九二二）井上哲次郎・元良勇次郎・中島力造 丸善
- ・『井上英和大辞典』（一九二五）井上十吉 至誠堂書店

の訳語としての「音韻」については、第二章五・二参照。

一方で、明治初期には、西洋で一九世紀から盛んになった、言語音の自然科学的研究である「phonetics」も、日本にもたらされた。こちらは、明治期に、「音学」、「声音学」、「人声学」、「音律学」、「音声学」、「発音学」などと訳されたほか、「音韻学」とも訳された。（このうち、「音学」と「声音学」とは、『English and Chinese Dictionary, with Pinyin and Mandarin Pronunciation』（W. Lobscheid 羅存德、一八六六―一八六九）の「声音之学、音学」、『Vocabulary and Handbook of the Chinese Language』（J. Doolittle 盧公明、一八七二）の「声音之学」などに基つくと思われる。なお、これらの英華字典の見出し語には、「phonology」は見られない（「グーグルブックス」を利用）。Phoneticsの訳語としては、明治末・大正期には、さまざまな訳が見られたが、昭和になってから、「音声学」という訳語が定着した（釘貫二〇一三）。八によれば、「phonetics は、これの紹介者である神保格や佐久間鼎が伝統音韻学と区別して『音声学』と訳した」とのことである。先に述べたように、『日本国語大』では、「音声学」を「英 phonology の訳語」として、西周の『百学連環』の例を挙げている。

ここで、明治・大正期の主な英和辞典における「phonology」および「phonetics」の訳語を、表にして挙げておく（表三―二二）。取り上げる辞典は、次のとおりである（『国立国会図書館デジタルコレクション』によった）。

- ・『附音挿図英和字彙』（一八七三）柴田昌吉・子安峻 日就社
- ・『附音挿図英和字彙』（一八八八）島田豊・辰巳小次郎増訂 大倉書店
- ・『ウェブスター氏新刊大辞書と訳字彙』（一八八八）イーストレイキ、棚橋一郎訳 三省堂
- ・『双解英和大辞典 再版』（一八九二）島田豊纂訳 共益商社書店
- ・『英和新字彙』（一九〇二）イーストレイキ 鍾美堂
- ・『新英和辞典』（一九〇二）和田垣謙 三倉書店
- ・『新訳英和辞典』（一九〇二）神田乃武・横井時敬・高橋順次郎・藤岡市助・有賀長雄・平山信編 三省堂

これを見ると、**phonology**と**phonetics**とは、同じ訳語が多く見られる。これは、この時期（一九二〇年代）  
ろまでは、原語においても、この両者の区別が必ずしも明確ではなかったことによると思われる。昭和初期でも、  
たとえば、『新英和大辞典』（研究社、一九二七）には、「**phonology**」に「声学（**phonetics**）」（特に発音の歴史  
的研究を云ふ、尚現代の発音を研究対象とする学は**phonetics**と云ふ、但し此区別は必ずしも厳密でない）」とあ  
る。また、大西（一九三四・四）も、「両者の間には何等確然たる本質上の相違がない」と述べ、「註」として英  
語辞典（**NED**）の意味記述を挙げているが、これによれば、「声学」(**phonetics**と思われる)に「**phonology**;  
…」とあり、「音韻学」(**phonology**と思われる)に「**Phonetics**」とある。  
ここで、英和辞典以外の文献に見られる、**phonetics**の訳語としての、「声学」、「音声学」、「発音学」（表三―  
三にはない）、「音韻学」（表三―三にはない）の用例を挙げておく（書籍のほか、「国立国会図書館デジタルコレ  
クション」、「読売新聞記事データベース」（ヨミダス歴史館）の「明治・大正・昭和（一八七四～一九八九）」、「漢  
珍知識網 報紙篇」を用いた）。

〔声学〕

（Ⅲ 68（ⅡⅢ 41））コノ書ノハジメニハ、問答体ニテ、**声学**ノ基礎トナルベキ生理オヨビ解剖上ノ概説ヲ  
カガゲ、ソレヨリ母韻・父音・子音・拗音等ニワタツテ、

（伊沢修二『視話応用 国語発音指南』金港堂、一九〇二：緒言一）

〔音声学〕

（Ⅲ 69）母音は勿論のこと、子音のある数種にも長短の差を示すこと頗る大きなものがあるが、実際の取  
扱において、**音声学**上三級の程度を立てゝ論じるのが常である。

（佐久間鼎『リズムと人生』心理学研究会、一九二〇：一九三）

表三―三 明治・大正期の英和辞典における「**phonology**」と「**phonetics**」の訳

原語	辞書	訳語							
		音学	人声論	人声学	声学	声音学	音声学	音律学	諸音術
phonetics									
	附音挿図英和字彙 1873	○	—	—	—	—	—	—	—
	附音挿図和訳英字彙 1888	—	○	○	○	—	—	—	—
	ウェブスター氏和訳字彙 1888	—	—	○	—	○	—	—	—
	双解英和大辞典再版 1892	—	—	○	—	○	○	○	○
	英和新字彙 1901	—	—	—	—	—	—	○	—
	新英和辞典 1901	—	—	○	—	—	—	—	—
	新訳英和辞典 1902	—	—	—	—	○	—	—	—
	学生英和辞典 1910	—	—	—	—	○	—	—	—
	哲学字彙英独仏和三版 1912	—	—	—	—	—	○	—	—
	井上英和大辞典 1915	—	—	—	—	○	—	—	—
phonology									
	新訳英和辞典 1902	—	—	—	—	○	—	—	—
	井上英和大辞典 1915	—	—	—	—	○	—	—	—
	附音挿図英和字彙 1873	○	—	—	—	—	—	—	—
	附音挿図和訳英字彙 1888	—	—	○	—	○	—	—	—
	ウェブスター氏和訳字彙 1888	—	—	○	—	○	—	—	—
	双解英和大辞典再版 1892	—	—	○	—	○	○	○	○
	英和新字彙 1901	—	—	○	—	—	○	—	—
	新英和辞典 1902	—	—	○	—	—	—	—	—
	新訳英和辞典 1902	—	—	—	—	○	—	—	—
	井上英和大辞典 1915	—	—	—	—	○	—	—	—
	附音挿図英和字彙 1873	○	—	—	—	—	—	—	—
	附音挿図和訳英字彙 1888	—	—	○	—	○	—	—	—
	ウェブスター氏和訳字彙 1888	—	—	○	—	○	—	—	—
	双解英和大辞典再版 1892	—	—	○	—	○	○	○	○
	英和新字彙 1901	—	—	—	—	—	—	○	—
	新英和辞典 1901	—	—	○	—	—	—	—	—
	新訳英和辞典 1902	—	—	—	—	○	—	—	—
	学生英和辞典 1910	—	—	—	—	○	—	—	—
	哲学字彙英独仏和三版 1912	—	—	—	—	—	○	—	—
	井上英和大辞典 1915	—	—	—	—	○	—	—	—

○：その訳語あり。―：その訳語なし。

(上田万年「新国字論」「国語のため」富山房、一八九五…二一八)  
(Ⅲ 75 (Ⅷ 33) 音韻学とは人の発する音声の元になるもの、即ち発音の元素となる所のものを探求して、それを言出すこと、又それを結び付けること、従つて之に附随して来る調子の如きものまでも含んで、それを研究するのが音韻学の本領である。)

(伊沢修二『視話法について』一九〇四講演)  
(信濃教育会編『伊沢修二選集』信濃教育会、一九五八…七六七)  
(Ⅲ 76) 兄の大著『正音発美』と云ふのは音韻学オナリツクシの上から支那語を研究し、米国斯界の碩学ベル氏の所謂ヴキジブル・スピーチ即ちシムボルでアルファベットの発音を示す方法に依て支那の標準国語を統一しやうとして出来たものである

(「台湾統治の上に尊き犠牲となつた六氏の三十年祭に当り当時の芝山巖を偲びつゝ故令兄の事共を語る」  
Ⅱ 伊沢総督『台湾日日新聞』一九二五年一月三一日)  
「兄の大著『正音発美』は、伊沢修二『支那語正音発微』(楽石社、一九一五)のこと  
本節の最後に、参考までに、昭和前期(一九二七…一九六〇)の文献における「音韻」の意味・用法を挙げておく。書き言葉コーパス(表三―三と同じ。ただし、「太陽コーパス」を除く)から採集した用例を分析・分類・集計したものを、表三―四に挙げる(図三―一の五区分のうち、①をさらに二つに分け、合計六つに分類した)。

(Ⅲ 70) 有りたけの言語の音声を集めたとしたら随分沢山の音声があるであらう。斯様に世界中の人類の使ふ言語の音声を集めその理論を研究する学問を「音声学」(Phonetics)といふ。

(神保格『言語学概論』岩波書店、一九二二…二六)

#### 〔発音学〕

(Ⅲ 71) 発音学の研究は如何、

(上田万年「国語と国家と」『国語のため』富山房、一八九五…二六)

(なお、安田敏朗校注『国語のため』(平凡社 東洋文庫、二〇一一…三八六)では、「発音学」に「音声学のこと。」と注を付けている)

(Ⅲ 72) どうか政府に於ては純粹に発音による国語の書き方と云ふことを、一層深く研究せられて、丁度西洋で発音学者、Phoneticの学者がいろ／＼研究して居るやうに国語を成るだけ完全に発音的に書くと云ふ方法を研究せられたいと斯う思ふのであります。

(森嶋外「仮名遣意見」(臨時仮名遣調査委員会第四回委員会演説、一九〇八)  
『国語国字教育資料総覧』国語教育研究会、一九六九…一六〇)

(Ⅲ 73) 発音学の題目として居る事柄は音である。其音は意味のない只の声で、而も何国人の声といふことなく、世界全体の人の声である

(田丸卓郎「向軍治氏の文に就て」(五)△附、ローマ字ひろめ会と僕との事実上の関係  
『読売新聞』一九一四年一月二四日)

#### 〔音韻学〕

(Ⅲ 74) 第二に私が申したいと存じますのは、フォネティックス即ち音韻学オナリツクシの事で、この学問は今日我国では学者がまことにをろそかにして居ります



に方言に着眼したことを特色とする。

(松岡静雄)『読書ページ 国語音韻論 金田一氏の快著くだけた態度に先づ喜ぶ』

『朝日新聞』一九三二年五月一三日)

(Ⅲ 78) 言語遊戯的には先ず音韻使用効果の実験が準備さるべきである。例えば明治大正の日本文壇の音韻使用のパーセンテージの概略的統計を試みて見るに A、O、I、N、T、K、……Z、F、P などの順序に並ぶ様である。

(中井正一)『「壇」の解体』一九三二)

(増補 美学的空間) 新泉社、一九七七)

(Ⅲ 79) そういう中でも文章はその特技をもつ人々の手に委託せられ、公私の記録は漢文をもつて訳出するを本意とし、たまたま現実の国語を写し伝えようとした場合にも、その表記は主として漢字に拠より、その音韻の判別は驚くべく精確であったとさえ言われている。

(柳田国男「根の国の話」一九五五初出)

『海上の道』岩波書店、一九七八)

四 「音韻」の意味の変遷

以上見てきた、「音韻」の意味の変遷(推定)を図にして示す(図三一二)。

表三―四 昭和前期の文献における「音韻」の意味・用法

資料(コーパス)	図三―一の意味区分 主な意味・用法					
	音色	楽器の響き	詩の韻律	漢字音(要素・体系)	言語音(発音)	⑤言語学的に見た言語音(要素・体系)
読売新聞 (一九二七〜一九六〇)	—	—	—	—	—	2
朝日新聞 (一九二七〜一九六〇)	—	—	—	—	—	3
文芸作品(青空文庫) (一九二七〜一九六〇)	1	4	—	—	4	8

数字…それに当たる用例の数(同一記事・作品中の複数例は1とした)。…それに当たる用例なし。

固有名詞、複合語(「音韻学」、「音韻論」、「音韻変化」、「音韻法則」など)は除いた(最終的な分析対象数は、「資料」右から、それぞれ2、3、17)。

ここからは、「言語学的な言語音(要素・体系)」の用例が増えてきたことがうかがえる。この意味で使われる「音韻」の用例を、いくつか挙げておく。

(Ⅲ 77) 本書は国語の音韻を組織、変化、法則の三方面から論じたものであるが、著者がもととも力を注いだと思はれるのは第三章の「音韻変化」で、従来音便といふばかりたる概念語を以て表示せられたものを、脱落、同化、異化(不同化)相通等に分類し、声音学上から科学的に詳説し、広く例証を求め、特

データベース」(朝日新聞「聞蔵Ⅱビジュアル」)の「朝日新聞(一八八五)・週刊朝日・アエラ」による。また、第二章三・二参照)。

(Ⅲ 80) 近代以降、外来語はもとからあった日本語の音韻に沿って書かれてきたが、外国語へのなじみが増すにつれ、より原音に近い表記が広まった。

(Ⅲ 81) 中高年層以上を中心に、県内の広い範囲で、「赤い」が「アカエー」、「財布」が「サエーフ」、「お前」が「オマエー」、「帰る」が「カエル」というふうに、連母音アイ/aɪ/とアエ/ae/がアエー[æ:]と発音される。伝統的な山口弁の音韻の特徴のひとつである。

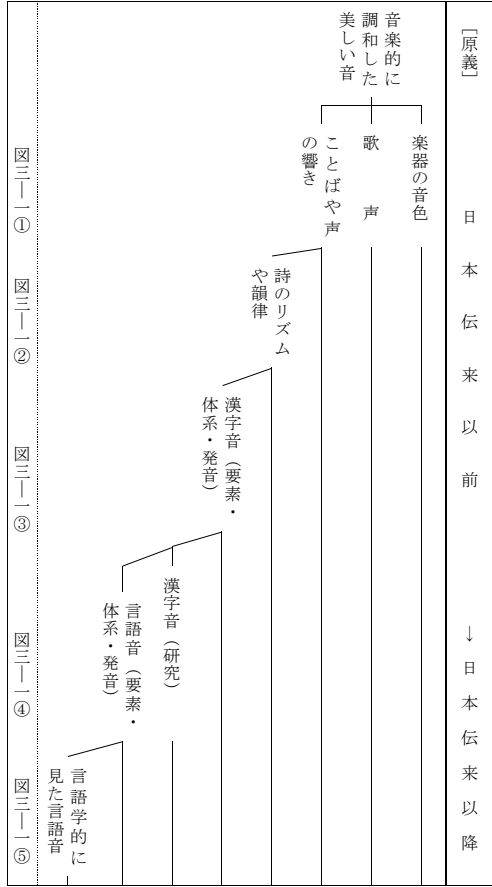
『朝日新聞』二〇一二年一〇月二七日(現行の小型の学習国語辞典でも、「言語学的に見た言語音」が「音韻」の主たる意味となっている(第二章三・一)。これは、「音韻」に古い意味合いを残す用法が多く見られる(逆に、比較的新しい「言語音」、「言語学的に見た言語音」という用法が見られない)現代中国語と対照的である(第二章四・一二)。

(Ⅲ 82) ゆらゆらと連続的に揺れ続ける声。太古から連綿と続く音韻が、大地をはって迫ってくる錯覚に陥る。

(Ⅲ 83) 言葉の意味よりも音韻やリズムなどの音楽性を追究し、日本語表現の可能性を探った。

『朝日新聞』二〇一四年一〇月一日(こういった例から見ると、現代日本語の「音韻」にも、この語本来の「音楽的に調和した美しい音」という意味合いが残っているようである。

図三—三 「音韻」の意味の変遷(一)



「音韻」の新旧の意味は、現代日本語で同じような頻度で使われているわけではない。現代日本語では、たとえば、次の例に見られるような、専門的な「言語学的に見た言語音」が主たる用法となっている(朝日新聞記事

### 【第三章の参考文献】

- 大西雅雄（一九三四）『音声学史』（国語科学講座Ⅱ 九 音声学） 明治書院  
 釘貫亨（二〇〇七）『近世仮名遣い論の研究…五十音図と古代日本語音声の発見』名古屋大学出版会  
 釘貫亨（二〇一三）『国語学』の形成と水脈』ひつじ書房  
 小山鉄郎（二〇一六）『白川静入門…真・狂・遊』平凡社  
 張世祿（一九三二）『中国音韻学史之鳥瞰』『東方雜誌』二八一一 商務印書館  
 馬淵和夫（一九八四）『日本韻学史の研究 増訂版Ⅰ』臨川書店（一九六二初版）  
 馬淵和夫・出雲朝子（一九九九）『国語学史…日本人の言語研究の歴史』笠間書院  
 李葆嘉（一九九八）『当代中国音韻学』広東教育出版社

### 【第三章の使用データベース類】（ウェブの閲覧は、二〇一六年四月～二〇一七年三月）

- 「青空文庫」青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp>  
 「朝日新聞記事データベース」（開蔵Ⅱ ビジュアル）朝日新聞社 <https://database.asahi.com/index.shtml>  
 「漢籍電子文献資料庫」中央研究院 歴史語言研究所 <http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw>  
 「漢珍知識網 報紙篇」漢珍數位圖書 <http://oldnews.lib.nmu.edu.tw>  
 「グーグルブックス」グーグル <https://books.google.co.jp>  
 「国文学研究資料館」電子資料館「国文学研究資料館」 <https://www.nijl.ac.jp/pages/database/>  
 「国立国会図書館」デジタルコレクション「国立国会図書館」 <http://dl.ndl.go.jp>

### 【第三章のまとめ】

第三章では、「音韻」という語の意味・用法の変遷をたどった。

#### 一 はじめに（省略）

#### 二 辞書における「音韻」の意味

『日本国語大辞典 第二版』、『漢語大詞典』をはじめとする、日中の主な辞書によると、「音韻」には、中国語に、①音の響きや音色、②詩のリズムや韻律、③漢字音、という意味があり、日本語には、これらに加えて、④言語音、⑤言語学的に見た言語音、という意味がある。

#### 三 文献資料に見る「音韻」の意味・用法

各種文献資料から、「音韻」の意味・用法の変遷（拡大・派生）のようすを探った。「音韻」の（中国における）本来の意味は「音楽的に調和した美しい音」であった。そこから、「楽器の音色」や「歌声」、「ことばの音楽的な響き」といった意味が生まれた。さらに、「詩のリズムや韻律」という意味や、「漢字音」（中国語音）、詳しくいえば、その要素・体系・発音・研究などの意味が生まれた。この用法は、「梵語音」などにも応用された。「音韻」のこれらの意味・用法は、平安時代初期に、中国から日本へ伝わった。日本では、「音韻」に、漢字音以外の「言語音」を表す用法が発達し、明治以降、「音韻」は、西洋言語学の影響を受け、言語研究における「言語音」を表す専門語（翻訳語）としても使われるようになった。

#### 四 「音韻」の意味の変遷

現代日本語における「音韻」の主たる意味・用法は、「言語学的に見た言語音」であるが、この語本来の「音楽的に調和した美しい音」という意味合いを残す用法も見られる。

## 第四章 明治初期・中期の日本文典における「音韻」

### 一 はじめに

本章では、明治期の日本文典（日本語文法書）における音韻について見ていく。

「音韻」という語は、今日では、「言語学的に見た言語音」といった意味で使われることが多いようである（第二章三・二）。辞書では、これを、「言語学で、具体的な音声から音韻論的な考察を経て抽象された言語音をいう。」『日本文学大辞典 第二版』（小学館、二〇〇〇）（二〇二二）「音韻」④、「具体的に発音された一つ一つの音声から抽象され、記号として表される最小単位の言語音。音素。」『明鏡国語辞典 第二版』（大修館書店、二〇一〇）「音韻」②などと説明している。これらの辞典でいう「音韻論」や「音素」は、主に、二〇世紀の初めに確立し、日本には、ほぼ昭和になったころにもたらされた、現代的な（構造主義的な）音韻論の概念（phonologyやphonemeに当たるもの）を指すと思われるが、言語音に関する研究はそれ以前からあり、その研究対象も「音韻」と呼ばれていた（これが訳語に使われた）。明治期の新聞などにも、「言語学的に見た言語音」という意味での「音韻」は現れている（第三章三・六）。

そこで、本章では、明治期の日本語研究において音韻がどのようにとらえられていたかを知るために、明治期に刊行された各種の日本文典（日本語文法書）を資料に、そこに現れた日本語の音韻（あるいは、音）に関する記述を見ていきたい。資料として日本文典を選んだのは、日本文典は、その種類が非常に多く、かつ、多くの場合、音韻についてまとめた記述があり、この時代の日本語音韻観を見るのに適していると考えたからである。なお、資料によっては、音韻に関する記述があっても、「音韻」という用語が使われていないものもあるが（「音」、「音声」、「声音」などが使われている）、これも併せて見ていく（以下、（日本語の）音の概念を表すのに、「

「駒澤大学 電子貴重書庫」駒澤大学図書館 <http://repo.komazawa-u.ac.jp/retrieve/kiyou/>  
「ジャパンナレッジ」ジャパンナレッジ <http://japanknowledge.com>  
「太陽コーパス」国立国語研究所 [http://pj.nijia.ac.jp/corpus\\_center/cnjl/aiyou/](http://pj.nijia.ac.jp/corpus_center/cnjl/aiyou/)  
「中国哲学書電子化計画」中国哲学書電子化計画 <http://cext.org/zh>  
「読売新聞記事データベース」（ヨミダス歴史館）読売新聞 <http://www.yomiuri.co.jp/database/tekishikan/>  
「早稲田大学図書館 古典籍総合データベース」早稲田大学図書館 <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>

#### 【第三章の用例資料】

中国語文献（古典）の用例は、巻末の「資料一 『音韻』の用例（中国・古典）」を参照。  
日本語文献（古典）の用例は、巻末の「資料二 『音韻』の用例（日本・古典）」を参照。  
『朝日新聞』の用例は、巻末の「資料三 『音韻』の用例（朝日新聞）」を参照。  
その他の日本語文献の用例は、巻末の「資料四 『音韻』の用例（日本・近現代（朝日新聞以外）」を参照。

(前半) : 西周による研究 (ことばのいしずゑ)、洋式文典の刊行 (田中義廉・中根淑など)。  
 (後半) : 国学の流れを汲む伝統文典の刊行 (堀秀成・佐藤誠実など)。  
 第二期 一八八四〜一八八九 (明治一七〜二二) 年 : 大槻文彦『言海』の刊行。「語法指南」が折衷文典の一つの形として出現。  
 第三期 一八九〇〜一八九四 (明治二三〜二七) 年 : 初期の統語論研究が現れるが (手島春治・高津鋳三郎)、文典編纂は低調。  
 第四期 一八九五〜一八九九 (明治二八〜三二) 年 : 大槻文彦『広日本文典』の刊行。教科書文典のスタイルが定着 (三土忠造『中等国文典』など)。  
 第五期 一九〇〇〜一九〇九 (明治三三〜四二) 年  
 (前半) : 俗語文典編纂の開始 (松下大三郎・金井保三など)。統語論研究の隆盛 (岡田正美・岡倉由三郎・草野清民など)。  
 (後半) : 山田孝雄『日本文法論』・三矢重松『高等日本文法』などの刊行。  
 後述するように、本章では、このうちの、ほぼ第一期〜第四期の日本文典を見ていく。  
 次に、日本の言語音研究に大きな影響を与えてきた、西洋の「音韻論」(phonology) の変遷について、大きく三つの時期に分けて、整理しておく (第一章二・一の一部再掲)。  
 第一期 (一九世紀) 伝統的音韻論 : 音声学 (phonetics) が、言語音の物理的・生理的・技術的研究として、音韻論から分化する以前の、言語音全般を研究対象とした phonology。  
 第二期 (二〇世紀前半) 構造主義的音韻論・音声学が (伝統的) 音韻論から分化して以降の、音素 (phoneme) の設定とその体系化を中心とした phonology。主なものに、F・de ソニールの影響を受けたヨーロッパのブラーグ学派の音韻論 (Phonologie) やアメリカの音素論 (phonemics) などがある。

なしの音韻を用いる)。

## 二 日本文典

ここで、日本文典の特徴と、音韻論の歴史的変遷について、簡単に触れておく。  
 「日本文典」(国文典)とは、日本語文法書の呼称である。「文典」という語は、江戸時代にオランダ語や英語の文法書名に現れ、明治以降に文法書 (文法教科書) の意味で定着した『日本語大事典』『文典』。明治初期の文典は、独立国家としての体面上、また、文語の実用的規範を示すために必要とされたもので、「文法組織の根本原理」について深く考えるというものではなかった (時枝一九四〇 : 二〇四)。  
 明治初期の日本文典は、大きく、「洋式文典系」(洋学系統) と「和式文典系」(国学系統) とに分かれていた。洋式文典は、西洋文典の体系に基づき、語を「品詞」に分け、文の基本を「主語」と「述語」におく点の特徴とし、一方、和式文典は、江戸時代の国学者の文法研究の流れをくみ、ことばを「詞」と「てにをは」に分け、文の中核を「係り結び」におく点の特徴としていた (永野一九九一 : 六八)。また、洋式文典は、西洋文典の体裁を模倣して、「音声」(文字) 論を文法の一部門としていた (古田二〇一〇 : 四六、一八三)。この両系は、一八八九 (明治二二) 年に公開された大槻文彦の「語法指南 (日本文典摘録)」「言海」第一冊巻頭) において折衷・統一され、その後の日本文典は「本書の影響を受けざるもの稀なり」(山田一九七一 : 七七〇) という状況になった。

この間 (および、その後) の日本文典の変遷を概観するために、服部 (二〇一七 : 二八) における「日本語文典の編纂」の時代区分を挙げておく (西暦を加えて示す)。

第一期 一八六六〜一八八三 (慶応二〜明治一六) 年

典や、三土忠造『中等国文典』などは取り上げていない。なお、同じ著者が複数の文典を著している場合は、そのうちのひとつを取り上げた。ただし、服部（二〇一七・二八）の第二期・第四期を代表する大槻文彦の著作は二つとも取り上げた。調査には、「国立国会図書館デジタルコレクション」を用いた。

古川正雄『絵入智慧の環』初編上く四編下、古川正雄、明治三く五（一八七〇く一八七二）年（一部一八七三年再版を使用）

中金正衡『大倭語学手引草』前篇、自笑軒、明治四（一八七二）年秋

高田義甫・西野古海『皇国文法階梯』一、千鍾房、明治六（一八七三）年八月

黒川真頼『皇国文典初学』一、文淵書堂、明治六（一八七三）年一〇月

藤沢親之『日本消息文典』上・下、不由書院、明治七（一八七四）年五月

渡部栄八『啓蒙詞のたつき』一、小林新兵衛、明治八（一八七五）年四月

田中義廉『小学日本文典』一、田中義廉、明治八（一八七五）年一月

中根淑『日本文典』上・下、大角豊治郎、明治九（一八七六）年三月

小笠原長道『日本小文典』川勝徳次郎、明治九（一八七六）年一〇月

藤田維正・高橋富兄『日本文法問答』藤田維正・高橋富兄、明治一〇（一八七七）年一月

安田敬斎『日本小学文典』上、安田敬斎、明治一〇（一八七七）年一月

春山弟彦『小学科用日本文典』一、浅井吉兵衛、明治一〇（一八七七）年二月

藤井惟勉『日本文法書』上・下、正栄堂、明治一〇（一八七七）年八・一〇月

旗野十一郎『日本詞学入門』上、事貴明堂、明治一〇（一八七七）年十二月

物集高見『初学日本文典』上、出雲寺万次郎、明治一一（一八七八）年七月

第三期（二〇世紀後半） 現代音韻理論・音声現象を法則としてとらえる、文法的な phonology。N・チヨムスキーらの生成音韻論に始まる。

本章では、右の第一期に当たる時期の日本文典について見ていく。便宜的に、一九〇〇（明治三十三年）までに刊行されたものを取り上げる。このころまでの国語教育・言語研究の流れを概観しておく、一八八六（明治一九）年の「学校令」の公布による教科書検定制度の発足や、一八八九（明治二二）年の大槻文彦の「語法指南」の公刊によって、文法教科書の体裁がほぼ統一されるようになり（山東二〇〇二：一〇二）、一九〇〇（明治三十三年）年には「小学校令」が改正され、「国語科」が成立するとともに、仮名字体などが規定された。また、一八八六（明治一九）年に帝国大学に博言学科が新設され、一八九四（明治二七）年に欧州留学から帰国した上田万年がその教授に就任してから、「音韻」の調査・研究の必要性が唱えられるようになり、一九〇〇（明治三十三年）年には「国語調査会」（翌々年、「国語調査委員会」として発足）の設置が議会で決まり、上田・大槻らが委員に選ばれた（なお、「音韻」に関して、『日本国語大辞典 第二版』では、「音韻論」(phonology の訳語)の初出例を、上田の『国語のため』（一八九五刊）からとっている。ただし、同書には「フォネティクス即ち音韻学の事」（一一八ページ）とあり、学問領域や名称がまだ揺れていたことがうかがえる。本稿では、ようやく「国語」が形づくられはじめたころまでの日本文典を見ていくことになるが、この時期は、口語文典（俗語文典）の刊行が始まる前であり、もっぱら文語文典を扱う（口語文典の刊行は、一九〇一年ごろから活発になっていった（仁田二〇〇五：〇一））。

さて、本章では、以下の七三種類の日本文典（文語文典）を調査対象とする（編著者名、書名、出版元名、初版発行年を挙げる。次節以降では、編著者（筆頭者）の姓と発行年（西暦）の下二桁で略称する。例・大槻文彦『広日本文典』一八九七年刊→大槻97。これは、この時期に公刊された日本文典類から、音韻についてまとめた記述のあるものを選んだものである。そのため、音韻について記述のない、堀秀成、佐藤誠実などの和式文

村山自彊『普通教育国語学文典』前編、大倉書店、明治二四（一八九一）年二月  
 大久保初雄『中等教育国語文典』図書出版、明治二五（一八九二）年二月  
 木村春太郎『日本文典』育英堂、明治二五（一八九二）年一月（一八九三訂正再版を使用）  
 小田清雄『応用日本文典』文栄堂、明治二六（一八九三）年三月  
 大川真澄『普通教育日本文典』吉川半七、明治二六（一八九三）年四月  
 村田鈔三郎『国語文典』神原文盛堂、明治二六（一八九三）年五月  
 秦政治郎『皇国文典』目黒書房、明治二六（一八九三）年八月  
 大宮宗司『初等教育日本文典』博文館、明治二七（一八九四）年二月  
 井田秀生『皇国小文典』明法堂、明治二七（一八九四）年三月  
 遠藤国次郎・鈴木重尚『日本文典教科書』桜井書店、明治二七（一八九四）年十一月  
 岡崎遠光『日本小文典』松栄堂、明治二八（一八九五）年二月  
 富山房編輯所『国語問答』富山房、明治二八（一八九五）年七月  
 峰原平一郎『普通文典』敬業社、明治二八（一八九五）年八月（一八九七の三版を使用）  
 豊田伴『新撰日本文典』上、衆生堂、明治二八（一八九五）年一〇月  
 大宮兵馬『日本語法』吉川半七、明治二九（一八九六）年三月  
 新保磐次『中学国文典』金港堂、明治二九（一八九六）年三月（一八九七訂正再版を使用）  
 柏木重総『東文典』磯部太郎兵衛、明治二九（一八九六）年六月  
 西山実和『日本文典』上、西山実和、明治三〇（一八九七）年一月  
 大槻文彦『広日本文典』大槻文彦、明治三〇（一八九七）年一月  
 中島幹事『中学日本文典』春陽堂、明治三〇（一八九七）年二月

関治彦『語学階梯日本文法』一・二、中川藤四郎、明治二二（一八七九）年一月  
 中島操『小学文法書』上、万象堂、明治二二（一八七九）年一月  
 加部厳夫『語学訓蒙』上、探古堂、明治二二（一八七九）年二月  
 拝郷蓮茵『ちまたの石ふみ』上、福井源次郎、明治二二（一八七九）年三月  
 林甕臣『小学日本文典入門』一、林甕臣、明治一四（一八八一）年三月  
 大槻修二『小学日本文典』上、柳原喜兵衛ほか、明治一四（一八八一）五月  
 稲垣千顕『小学用語格』文会舎、明治一四（一八八一）七月  
 弘鴻『詞乃橋立』一、弘鴻、明治一七（一八八四）年二月  
 近藤真琴『ことばのその』はじめのまき、瑞徳屋卯三郎ほか、明治一八（一八八五）年九月  
 ビー・エッチ・チャンブレン『日本小文典』文部省編輯局、明治二〇（一八八七）年四月  
 大槻文彦『語法指南』(日本辞書言海)附録)大槻文彦、明治二二（一八八九）年五月  
 岡直盧『国語指掌』細謹舎、明治二三（一八九〇）年五月  
 佐藤雲韶『普通文典』丸善商社書店、明治二三（一八九〇）年五月  
 落合直文・小中村義象『日本文典』日本堂、明治二三（一八九〇）年二月  
 手島春治『日本文法教科書』金港堂本店、明治二三（一八九〇）年二月  
 大和田建樹『和文典』上、中央堂、明治二四（一八九一）年四月  
 高津敏三郎『日本文典』金港堂、明治二四（一八九一）年六月  
 関根正直『国語学』弦巻書店、明治二四（一八九一）年六月  
 岡倉由三郎『日本新文典』富山房、明治二四（一八九一）年六月  
 井口隆太郎『普通文典』皇典講究所、明治二四（一八九一）年八月

さて、以下、七三種類の日本文典における音韻に関する記述について、次の二点を中心に見ていく。

- (一) 日本文典における音韻に関する記述の体裁
- (二) 日本文典に見られる日本語音韻観

### 三・一 日本文典における音韻に関する記述の体裁

まず、日本文典における音韻に関する記述の体裁について、調査した結果を見ていく(以下、便宜上、音韻に關してまとめた記述のある箇所を〈音韻部〉と呼んでおく)。調査した日本文典には、次のような特徴が見られた。

- (ア) 〈音韻部〉は、文典の最初のほうに置かれている。
- (イ) 〈音韻部〉の中では、文字(仮名)と音韻とが一緒に扱われている。
- (ウ) (右に關して) 〈音韻部〉では、まず仮名(種類・名称)を挙げ、次いで「五十音図」によって音韻を示すものが多い。
- (エ) 〈音韻部〉で、仮名遣いを扱っているものもある。

### 三・一・一 西洋文典の影響

「日本文典における音韻に関する記述の体裁」の特徴の(ア)「〈音韻部〉は、文典の最初のほうに置かれている」と、(イ)「〈音韻部〉の中では、文字(仮名)と音韻とが一緒に扱われている」に關しては、〈音韻部〉を文法の一部門として扱う、西洋文典の体裁の模倣によるものである(調査した文典のうち、〈音韻部〉を後ろに置いているのは、チャンブレン 87 のみであった)。

ここで、参考までに、西洋文典の例を見ておく。以下に挙げるのは、初期の日本文典に大きな影響を与えた

中等学科教授法研究会『中学教程 日本文典』中等学科教授法研究会、明治三〇(一八九七)年三月

渡辺弘人『新撰国文典』浪華書院、明治三〇(一八九七)年三月

鳥山讓『国文の栞』集英堂、明治三〇(一八九七)年七月

塩井正男『中学日本文典』六盟館、明治三〇(一八九七)年一月

和田万吉『新撰国文典』富山房、明治三〇(一八九七)年一月

杉敏介『中等教科 日本文典』文学社、明治三一(一八九八)年二月

中邨秋香『皇国文法』大日本図書、明治三一(一八九八)年七月

上谷宏『中等教科 新体日本文典』八尾書店、明治三一(一八九八)年八月

大林徳太郎・山崎庚午太郎『中学 日本文典』上、明治書院、明治三一(一八九八)年十二月

高田宇太郎『中等国文典』吉川半七、明治三二(一八九九)年三月

佐方鎮子・後閑菊野『女子教科 普通文典』目黒書房ほか、明治三二(一八九九)年四月

瓜生篤忠・瓜生喬『国文法詳解』吉川半七、明治三二(一八九九)年六月

大平信直『中等教育 国文典』金港堂、明治三二(一八九九)年七月

下田歌子『女子普通文典』博文館、明治三二(一八九九)年一月

鈴木忠孝『新撰日本文典』興文社、明治三二(一八九九)年二月

永井一孝、岡田正美補『国語法階梯』大日本図書、明治三三(一九〇〇)年六月

普通教育研究会『中学教程 新撰日本文典』水野書店、明治三三(一九〇〇)年六月

岡沢鉦次郎『初等日本文典』前編上、吉川半七、明治三三(一九〇〇)年十一月

## 三 日本文典に見える音韻



CONSONANTS WITH VARIED SOUNDS.  
REDUNDANT AND DEFICIENT LETTERS.  
ON SPELLING.

右に見るように、両文典ともに、文字（綴り）と音とを一緒に扱っている。また、これらは、いずれも、「緒言」(INLEIDING/INTRODUCTION)のすぐあとに置かれている。

文字や音韻を文法の一部門として扱うことについては、初期の日本文典に、たとえば、次のような記述が見られる。

(IV 03) 大凡書を読み、或は正く文章を綴り、事を記すことを知らんと欲せば、能く文法を学ぶ可し。夫れ文法は、語音を正し、文章を綴る法を、教ふる学なり。今茲に、文法を分ちて三編とす。○第一字学○第二詞学○第三文章学なり〔「字学」が〈音韻部〉に当たる〕

(田中 75…一―一オ)

(IV 04) 文法ヲ大別シテ四種トナス。一ヲ文字解ト云ヒ、一ヲ言語解ト云ヒ、一ヲ文章解ト云ヒ、一ヲ音韻義ト云フ、是ナリ。文字解ハ事ヲ記スル根源ヲ論シ、言語解ハ言葉ノ本体ト変化トヲ論シ、文章解ハ文章ノ起結ヲ論シ、音韻義ハ音声ノ節度ヲ論ス。〔「文字解」が〈音韻部〉に当たる。句読点は筆者〕

(藤井 77…上―一ウ)

(IV 05) 文典ハ活語作文ノ格法ヲ論ズルノ学ナリ。蓋シ読書、作文、家ノ日用ニ関クベカラザルノ一科トス。故エニ幼童必ズ百科入学ノ指針トスベキモノゾ。此書分チテ四篇トナス。則チ「音韻并仮字論」「言語論」「文章論」「歌謡論」是レナリ。〔「音韻并仮字論」が〈音韻部〉に当たる。句読点は筆者〕

(林 81…一―一オ)

「文法」という語は、江戸時代には、主として「表現法・文書作法」の意味で用いられていたが、幕末ごろか

される、『和蘭文典』(纂作阮甫翻刻、天保二三(一八四二)年刊。)と『英吉利文典』(開成所翻刻、一八六六(慶応二)年刊)における〈音韻部〉の見出しである(「早稲田大学図書館 古典籍総合データベース」(以下、早大DB)を用いた)。前者は、中金71、田中75、物集高見『日本文語』などの範とされ、後者は、中根76などの範とされる(古田二〇一〇:一七九、二四八、二五三、二五七)。

『和蘭文典 前篇』[( ) 内の日本語訳は、同文典の訳書である『訳和蘭文語 前篇』(大庭雪斎訳、安政二(一八五五)年刊) s. 6。〔〕内は筆者(以下同。)]

(A 10) Over de letters en derzelver zamenvoeging tot lettergrepen en woorden. (字并ニ字ヲ言辞ニ連綴スル集合ヲ論ス)

A. Getal der letters. (字数レッテル)

B. Soorten der letters. (字類 ソールテン、ハン、レッテル)

C. Over de klinkers. (韻字 キリンケル [母音])

D. Over de medeklinkers. (配韻字 メーデキリンケル [子音])

E. Zamenvoeging van klinkers, en bȳzonder over de twee - en drieklanken. (韻字連合并ニ音ニ音連合 [長母音、二重母音])

F. Zamenvoeging van medeklinkers. (配韻字連合 [子音群])

G. Zamenvoeging van klinkers, en medeklinkers tot lettergrepen en woorden. (韻字ト配韻字トヲ連合シテ言辞ヲ綴ル)

『英吉利文典』

(A 26) ORTHOGRAPHY.

SOUND OF LETTERS—VOWELS.

中島97、渡辺97、中邨98、高田99、佐方99、瓜生99）などと呼ばれている。これに対して、漢字は「象形文字」などと呼ばれる。明治後期の口語文典では、表音文字は「音字」、表意文字は「意字」と呼ばれるようになる。

ここで、日本文典で〈音韻部〉を何と呼んでいるか挙げておく。文典全体をいくつかの「篇」（編・論）に分けているものについて、〈音韻部〉の名称を見てみると、明治初期は、もっぱら「字」を称するものばかりであるが、中期以降は、「音」を称するものが多数を占めるようになる（両者の併称も見られる。「字」を称するものには、「文字論」（藤沢74、中根76、物集78）、「字学」（田中75、中島79）、「文字学」（小笠原76）、「字法」（春山77）、「文字解」（藤井77）、「文字篇」（大槻81、大槻97）、「文字の事」（佐藤90）、「字格」（大和田91）があり、「音」を称するものには、「音韻」（岡90、大宮94、中等学科教授法研究会97、渡辺97、高田99）、「音格」（関根91、岡崎95）、「単語を組織する音韻」（岡倉91）、「声音編」（村山91）、「声音篇」（大久保92）、「音韻編」（小田93）、「音韻論」（大川93、和田97、鈴木99、普通教育研究会00）、「音声」（峰原97、島山97）、「音論」（新保97）、「音韻篇」（杉98）、「音韻門」（瓜生99）、「音格篇」（大平99）があり、両者を併称するものには、「音韻并仮字論」（林81）、「声音及文字」（落合90）、「声音論附文字」（村田93）、「音字」（秦93）、「音字論」（上谷98）、「字及ひ音」（佐方99）、「音韻附文字」（下田99）がある（秦93・上谷98の「音字」は、表音文字の意味ではない）。

### 三・一・二 国学の影響

「日本文典における音韻に関する記述の体裁」の特徴の（ウ）「音韻部」では、まず仮名（種類・名称）を挙げ、次いで「五十音図」によって音韻を示すものが多い」と、（エ）「音韻部」で、仮名遣いを扱っているものもある」に関しては、「五十音図」を日本語研究の基礎に置く、国学の考え方の影響が見られる。江戸中期に、契沖、榊取魚彦らによって、仮名遣い研究の枠組みが、「いろは歌」から「五十音図」に変えられてから、国学では、五十音図を重視するようになった（釘貫二〇七・六六）が、五十音図は、音韻現象や用言の活用などを説明する

ら grammar の意味が定着しはじめた（佐藤一九七六・四一九）。右の「文法」には、古い意味合いが残っているように、その点で、「字学」や「音韻并仮字論」が文法の一部門であることにそれほど違和感はなかったのではないかとと思われる（なお、右の「詞学」・「言語解」・「言語論」は品詞論や形態論、「文章学」・「文章解」・「文章論」は統語論、「音調義」・「歌謡論」は韻律論のことである）。

これに対して、文法で文字や音韻を扱うことに疑問を呈する記述も見られる（のちに松下大三郎や山田孝雄も論じている（服部二〇一七・二三、一五））。

（IV 06）本邦従来の学者達が、作られたる文典には、大抵、音韻のこと文字のことなどを、委しく論せられ  
たれど、著者思ふに、すべて、これらのことは、小学生徒が読書を始むべき前に教ふべきことにして、  
言語の性質用方の説明などとは、相並ぶべきものに非るべし。さては、本書には、たゞ言のはたらきを  
説明するに必要なりと考ふる、概略のみを、総論の部に収めて、委しくは之を説かず。音韻、文字等の  
ことは、語学には、極めて、必要なれども、文法上には、さほど必要ならずと思へばなり。

（高津91・七）

ところで、文字（仮名）と音韻とを一緒に扱うことに関連して、日本文典には、総じて、「仮名〓音韻」ととらえる意識が見られる。文字に関する見出しを掲げて、ほぼ音韻についてだけ説明している場合などもある（中金71の「字学」、小笠原76の「文字学」、物集78の「文字論」など）。これは、一面では、文字と音との混同ともいえるが、以下に述べるように、日本文典には、文字と音とを順序立てて扱っているものが多く、〈音韻部〉では、仮名を音韻を表す記号として用いているという見方でもできる。これには、「同一音（素）であるか否かの議論が同一字（綴り）で書くべきか否かの議論と密接に結びついている」（『言語学大辞典 第六卷 術語編』（三省堂、一九九六）「音素」という現実的な面もあるように思う。なお、日本文典では、仮名（のような表音文字）は、「音標字」（物集78、村田93、豊田95、大槻97）や「音標文字」（チャンブレン87、落合90、高津91、遠藤94、西山97、

れている(「字」を使っているのは、近藤85のみである)。

ところで、日本文典における日本語音韻の説明の順序は、ほぼ、まず五十音を示し、次いで、その他の音を挙げ、さらに音が変化する現象を取り上げるといふものである。文典によって、取り上げる範囲や取り上げ方に違いはあるが、五十音図を基に、諸音について説明し、「音便」や「延約」によって音変化(語形の変化)を解釈するという方法がとられている(その根底には、五十音を「正音」とする音韻観が見られる)。ここには、本居宣長『漢字三音考』(天明五(一七八五)年刊)や、賀茂真淵『語意考』(明和六(一七六九)年自序)などで確立された用語や概念が用いられている。

『漢字三音考』には、「正音」について、次のような記述がある。

(IV 09) 古言ノ正音ハタゞ四十七ニシテ。ヤノ行ノイ<sup>イ</sup>エト。ワノ行ノウ<sup>ウ</sup>トヲ加フレバ。都テ五十ナリ。「割注略」是ニカ<sup>カ</sup>ノ行サ<sup>サ</sup>ノ行タ<sup>タ</sup>ノ行ハ<sup>ハ</sup>ノ行ノ濁音。合セテ二十ヲ加フレバ。都テ七十ナレドモ。濁音ハタゞ清音ノ変ニシテ。モトヨリ別ナル者ニ非ル故ニ。皇国ノ正音ニハ。是ヲ別ニハ立ズ。清音ニ撰スルモノナリ。

(本居宣長『漢字三音考』二才、早大DBによる)

「音便」については、同書では、「音便。イトウト<sup>イ</sup>ント急促ル声ト<sup>セ</sup>ハ行ノ半濁音ト凡テ五ツ」(五五ウ)を挙げている。この五つは、それぞれ、イ音便、ウ音便、撥音便、促音便、(促音・撥音の後の)半濁音化(例…「南風、雪片」)に当たる。

「延約」については、『語意考』に、「約言」(例…「阿波宇美(淡海)↓阿布美」)、「延言」(例…「見る↓見良久」)、「略言」(例…「高脚」多可し)、「回転通」(例…「見万(志)↓見武」)の四つが挙げられている『賀茂真淵全集 第二』吉川弘文館一九〇三・二二〇六、古田・築島一九七二・二三四)。これらは、日本文典には、それぞれ、「約音(約言)」「または、反切」、「延音(延言)」、「略音(略言)」「または、省略音」、「通音・通韻(通言)」

のに適していることから、洋学者にも受け入れられ、明治期の日本文典にも採用された(古田二〇一〇・二二三)。日本文典は、いずれも、日本語音韻の説明に五十音図(の原理)を用いているが、「いろは」については、載せていないものが多い(調査した七三文典中、「いろは」掲載は一七文典のみ)。日本文典では、多くの場合、まず仮名(種類・名称)を挙げ、次いで五十音図に基づいて音韻の説明を行っている。「いろは」を載せている文典でも、「いろは」によって仮名(種類・名称)を挙げてから、五十音図によって音韻を説明するというものが多数を占める(「いろは」を載せる一七文典中、一一文典がこの順序)。ここからは、「いろは」は文字の列、五十音図は音の図であり、『五十音図』は音を教えるもの(馬淵一九九三・二六)という意識がうかがえる。

五十音図の意義については、日本文典に、たとえば、次のような記述が見られる。

(IV 07) 此の十行五列の音は、努<sup>ゆ</sup>この位置を濫<sup>あ</sup>る可らず。国語の動詞は、皆此の次第に従ひて、其の語尾を変化し、又通音略音等の諸格も、皆この行列に準則するものなれば、能く縦横の音位を心得置くべし。

(関根91・三)

(IV 08) 右の五十音図によりて、動詞の活用及音韻の相通・延約法・省略・反切・仮字用格等に至るまで、総てこの五十音図に則らざるはなし。是を以て、我国の語法・文格を学ばんと欲せば、第一に五十音図の経緯を自在に諳記し、何経の音は何、何緯の韻は何と悉く記憶して、其根拠基礎を確め置かずあるべからず。(句読点は筆者)

(大川93・六)

五十音図には、「五十音図」以外にもさまざまな呼称があった(馬淵一九九三・二二四)。日本文典には、「五十音図」、「五十音の図」、「五十音」以外に、「五十韻」(中金71)、「五十連音図」(物集78、落合90、手島91、村山91、村田93、豊田95、西山97、中邨98、岡沢00)、「五十系位図式」(林81)、「五十連声の図」(弘84)、「五十じのづ」(近藤85)、「五十音表」(チャンブレン87)、「五十連音之図」(渡辺97)、「正音五十連音図」(鈴木99)などが現

(IV 10) スベテコトバノ種類ハ。世ト共ニフエクモノナリ。サレドモ。基本ハ母音ノ外ナラズ。母音ヨリ子音〔カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ラ行音〕ヲウミ。子音ヨリ重濁弾余ノ音〔ワ・ヤ行音、濁音、半濁音、撥音〕ヲワカツ。外国ノ声音ニオイテハ。コトナルコトアルガゴトクナレドモ。殊ニコトナルニアラズ。マナベバイヅル音ナリ。其イダスモノハ。即チ五十音ナリ。

(加部 79…上―六オ)

(IV 11) されは言語は異なれとも、おの／＼五音を出されは、いつれの国にも五十韻あるへし。いはゞ日本の五十韻、支那の五十韻、天竺の五十韻あり。猶、いはゞ英吉利、仏蘭西、亜墨利加及びその外の国々にもすへて五十韻あるへき理なり。〔句読点は筆者〕

(拝郷 79…上―三オ)

(IV 12) 我国の純粹清雅なる音は前章に記したる十行五列五十個にして是を正音といふ

(木村 92二…七)

(IV 13) さて、その声音は、如何なるものかといふに、我が国人の、古来、保有せる自然の音にして、甚純清のもの五十あり、名づけて五十音といふ。

(高田 99…三)

IV 10とIV 11とは、五十音を(あらゆる言語に共通する)普遍的な基本音と見るもので、IV 12とIV 13とは、五十音を日本古来の固有の音と見るものである。これらは、いずれも国学における五十音図観を踏襲している(前者は契沖に、後者は本居宣長に顕著に見られる言語観である(馬淵一九九三…四九、七六))。

また、次のような、五十音(清音)を基本としながらも、それ以外の音も(五十音から派生したものと)して日本語の音韻として認める記述なども見られる。

(IV 14) 我が国の人の音、五十あり、これを五十音といふ、この五十音のうちに、濁る音二十あり、半濁

(または、相通)などといった名称で現れている。

一方、仮名遣いについては、調査した七三文中中、二八文典において、(音韻部)で取り上げられていた。この中には、字音仮名遣いを和語の仮名遣いとは別に扱っているものも多くあった(弘 84、落合 90、大和田 91、関根 91、大久保 92、井田 94、遠藤 94、峰原 95、豊田 95、大林 98、佐方 99、鈴木 99、永井 00)。これ以外に、仮名遣いを、(音韻部)ではなく、文典の後ろに(「附録」などとして)載せているものも九文典あった(字音仮名遣いのみのもの(高田 73)を含む)。日本文典(明治期の教科書)では、当初より歴史的仮名遣いが採用されている(古田二〇一〇:三〇、築島二〇一四:一四〇)が、ここでは、その内容については触れない。

### 三・二 日本文典に見られる日本語音韻観

次に、日本文典に見られる日本語音韻観について、調査した結果を見ていく。

調査した日本文典には、主な傾向として、次のような音韻観が見られた。

(ア) 五十音図を絶対視し、五十音(ア、イ、ウ、エ、オ、:ワ、ヰ、ウ、エ、ヲ)の、文字どおり「五十音」を日本語の基本的な音韻(正音)と考える。

(イ) 五十音(清音)以外の音(濁音、半濁音、撥音、促音、拗音など)を、五十音の変化したものとしなし、その他の音韻変化現象も、その延長上に考える。

### 三・二・一 五十音図観

「日本文典に見られる日本語音韻観」の(ア)「五十音図を絶対視し、五十音を日本語の基本的な音韻(正音)と考える」に関しては、日本文典には、たとえば、次のような記述が見られる。

の発音は本来異なる」とする記述が多く見られる（ただし、この区別を仮名遣い（「仮字格」）として示しているのは、泰 93 のみである）。

（IV 16）後世五十音ヲ説ク者、也縦行ノイハイノ縮音、エハイエノ縮音、和縦行ノウハウウの縮音ニシテ、阿縦行ノ・イ・ウ・エ・トハ自異ルコトヲ論ジ、且之ガ文字サヘモ、作り出デタル者アリ、是ハ甚道理アルコトナレ共、中古伊呂波歌ヲ製リタル時ヨリ、既此ノ音ノ文字ナキヲ以考フレバ、其以前モ何ガアリシヤ、得テ知ル可カラザルナリ、故ニ余ハ故旧ニ依リ、敢之ヲ分タザルナリ

（中根 76…上—二〇オ）

（IV 17）以上、七十六字の内にて、ヤ行のイ、エ、及び、ワ行のウは、音も、字も、已に消滅して、母音のイ、エ、ウ之に代り、ワ行のウ、エ、ヲは、音のみ消滅して、母音のイ、エ、オ之に代れり。〔原文では、ヤ行の「イ、エ」とワ行の「ウ」に特殊な仮名を用いている〕

（上谷 98…七）

（IV 18）又古ハ詞ノ音モ正シクシテ、イイ（ヤ行）エエ（ヤ行）ウウ（ワ行）ノ用方ノ如キモ各差異アリト雖トモ、現今ニ至リテ、イ（ヤ行）エ（ヤ行）ウ（ワ行）ヲ省キ、只イエウノミヲ用ウルコトナレリ。〔原文では、ヤ行の「イ、エ」とワ行の「ウ」に特殊な仮名を用いている。句読点は筆者〕

（中島 79…上—四オ）

（IV 19）此中イエウの三字古来別字を用ひずといへども、その音の重複軽重に因りて発音の別あり。故に仮字使ひに於て之を別つこと、下にいへるが如し。〔句読点は筆者〕

（渡辺 97…三）

IV 16 は、「イ、エ、ウ」には、古くから音の区別も文字の区別もなかった（特殊な文字は最近作られた）とする説、IV 17 は、古くは音の区別も文字の区別もあったが、今はないとする説、IV 18 は、古くは音の区別があったが、

るゝ多五つあり、また、んといふこゑあり、むの転じたるなり、つといふこゑあり、つの促れるなり、この七十七のこゑを、さまざまにいひつらぬれば、数多の詞となる、

（黒川 73…一—ウ）

（IV 15）以上母音五、子音〔カゝワ行音〕四十二、変音〔撥音、促音〕二、濁音二十、半濁音五、合ハセテ七十四音トス、天下ノ広キ、言語ノ多キ、此ヲ以其ノ音ヲ写スニ、記スベカラザル者アルコトナシ、其ノ二ノ変音ハ、古昔無キ所ノ音ニシテ、後世ニ至リ、用ヒ出シタル者ナリ、其ノ・ヤ・ユ・ヨ・ワ・ヲ母音ニ用フルコト〔拗音〕ト、半濁音トハ、前ニモ説ケル如ク、純然タル日本語ニハ、之ナキコト知ルベシ、

（中根 76…上—一九ウ）

ところで、日本文典には、とくに五十音図において、ア行の「イ」とヤ行の「イ」、ア行の「エ」とヤ行の「エ」、ア行の「ウ」とワ行の「ウ」とを、それぞれ異なる仮名で書き表しているものが多く見られる。たとえば、片仮名では、ヤ行の「イ」が「イ」を逆さにした形（以）の「二画」で、ヤ行の「エ」が「エ」の初画を「ノ」にした形（延）の「二・五画」あるいは、「衣」の「三・四画」で、ワ行の「ウ」が「于」で示されているものが多い（藤沢 74、小笠原 76、旗野 77、関 79、岡崎 95、西山 97、中島 97、中等学科教授法研究会 97、上谷 98、鈴木 99、永井 00）。調査した七三文典では、五十音図を挙げる七〇文典中、三六文典で異なる仮名（一部のみのもの、圏点（ ）で書き分けているものを含む）が使われていた。

このような特殊な仮名は、白井寛蔭『音韻仮字用例』（万延元（一八六〇）年）に始まるようであるが（古田二〇一〇…八、馬淵一九九三…九三）、これは、本居宣長が「喉音三行弁」『漢字三音考』で明らかにした、ア・ヤ・ワ行音の発音の違い（ア行音 aiueo、ヤ行音 ya iyu ye yo、ワ行音 wa wi wu we wo）（釘貫二〇〇七：一二）を書き分けるために使われている。日本文典には（イ、エ、ウ）を書き分けていないものにおいても、「これら

「日本文典に見られる日本語音韻観」の(イ)「五十音(清音)以外の音(濁音、半濁音、撥音、促音、拗音など)を、五十音の変化したものと見なし、その他の音韻変化現象も、その延長上に考える」について、日本文典には、たとえば、次のような記述が見られる。

(IV 20 (Ⅱ I 09)) 問 音韻は共に幾種に分つ。／答 清音 濁音 半濁音 鼻音 撥音 拗音の五種となし、其清音には母韻 母音 子韻 子音 十母音の音節など)あり。濁音より下四種はみな子韻なり。〔は改行を示す。句読点は筆者〕

(春山 77・一一二ウ)

(IV 21 (Ⅱ I 07)) 五十音の変化とは言語を組立つる際、其音韻の種々に変化転移するものをいふ。即ち左の五種とす。／濁音 音便 通音 延約 省略音／是なり。〔は改行を示す。句読点は筆者〕

(大川 93・七七)

(IV 22 (Ⅱ I 10)) 音韻を大別して、清音、鼻音(撥音)、濁音、半濁音、拗音、促音、引音の七種となす。

(杉 98・三三)

(IV 23) 而、所謂音韻トハ、肺臓中ノ空氣、氣道ノ声帯(弾力性ノ膜)ニ触レテ、発スル一種ノ響音ニシテ、更ニ、口内ノ諸機關ニヨリテ、種々ノ音韻ヲ組成セラル、モノトス。即、性ニ求メ形ニ尋ネ、約シテ、父音〔子音、母音、及、子音〕子音十母音の音節ノ三類彙ト為シ、而、更ニ、母音ヲ別テ、母音及半母音ノ二種トシ、子音ヲ別テ、清音、濁音、拗音、ノ三種トナス。

(瓜生 99・七七)

(IV 24) 音韻を区別して、左の三種とす／正音〔清音〕 変音〔濁音、半濁音、撥音〕 拗音／これなり〔は改行を示す〕

(鈴木 99・三三)

今はないとする説、IV 19は、古くから文字の区別はなかったが、音の区別はあり、それは今もあるとする説である。調査した日本文典には、IV 16のような記述は初期にしか見られず(ほかに古川 73)、IV 18やIV 19のような記述が多く見られた(大槻 97などにもIV 19に近いことが述べられている)。なお、ア行の「エ」とヤ行の「エ」とが古くは別音(別表記)であったことについては、この時期よりあとに、大矢透らの研究により広く知られるようになった(馬淵・出雲一九九九・四六、五二)。

各文典の五十音図における、ア行の「イ」とヤ行の「イ」、ア行の「エ」とヤ行の「エ」、ア行の「ウ」とワ行の「ウ」の仮名の表記(書き分けがあるかどうか)については、表四一の(a)「イ・エ・ウの仮名」の欄にまとめて示しておく。

その他、日本文典には、五十音図に音義説『鈴木重胤』詞のちかみち(弘化二(一八四五)年刊)の一行一義説(八ウ)に基づくと思われるものを載せているものがある(高田 73、旗野 77、拝郷 79、岡 90)。また、悉曇に基づいて、「ア」を本源として諸音が生成されると説くもの(拝郷 79、弘 84)や、「ウ」を本源として諸音が生成されると説くもの(中島 97)などもある。前者は浄嚴『悉曇三密鈔』(天和二(一六八二)年刊、および、契沖『和字正濫鈔』(元禄八(一六九五)年刊)の説、後者は平田篤胤『神字日文伝』(文政七(一八二七)年刊)の説である(馬淵一九九三・三九、釘貫二〇〇七・五一、一二三)。『和字正濫鈔』には、「あは口を開く最初の声〔中略〕韻に有ながら亦声にて。堅にはい、えを、ゝ生し横にはか、さ、た、な、は、ま、や、ら、わを生ず」(傍点は筆者)(一一八ウ、早大DBによる)とあり、『神字日文伝』には、「五十ノ音の本は。宇なること疑ヒなしといへり」。(上一二五才、早大DBによる)とある。このように、日本文典には、国学における五十音観の影響が広く見られる。

### 三・二・二 日本語音韻観

表四― 日本文典に取り上げられている音

文典	イ・エ・ウ の仮名	濁音 (b)	半濁音 (c)	撥音 (d)	促音 (e)	長音 (f)	拗音 (g)	ハ行音の 音声 (h)
古川 70・ 72	異	「 <small>（有無を きかざる ）</small> じり・濁 音」	「半濁音」 「マ・サ・ シ・カの半濁音」	「字」 「ン・テ」	―	―	―	―
中金 71	同	―	「(5)」	―	―	―	―	唇音 「唇に力を入 出す音」
高田 73	異 「発音の差別 あり」	「(20)」 「濁音」	「(5)」 「半濁音」	「音」 「音便の」	「音」 「音便の」	「音」 「ウと引く音」	△ 「拗音」	唇音 「唇」 「唇外」
黒川 73	異 「イ・エ・ウ 同」	「(20)」 「濁音」	「(5)」 「半濁音」	「字」 「 <small>（ ハネテ 音</small> ） 「 <small>（ ハネテ 音</small> 」	「音」 「音便の」	―	―	唇音 「唇に力を入 れぬ音」
藤沢 74	異 「 <small>（ 内に特殊な 仮名を示す ）</small> 」	「(20)」 「濁音」	「(10)」 「半濁音」 「カ行音・鼻 音をさす 音は合称呼音」	「字」 「ン」	「音」 「 <small>（ ツ・ 断す</small> ） 「 <small>（ 断す</small> 」	「音」 「オの響を為 す」	―	唇音 「唇に触れて 出る音」
渡部 75	同	「(20)」 「濁音」	「(5)」 「半濁音」	―	―	―	△ 「拗音」 「拗音・延音」	唇音 「唇に力を入 れぬ音」
田中 75	異	「(20)」 「濁音」	「(6)」 「半濁音」 「ツ・ 音は合称呼音」	「音」 「 <small>（ ハネテ 音</small> ） 「 <small>（ ハネテ 音</small> 」	「音」 「 <small>（ ハネテ 音</small> 」	「符」 「長呼の音」	△ 「拗音」	唇音 「唇に力を入 れぬ音」
中根 76	同	「(20)」 「濁音」	「(5)」 「半濁音」	「音」 「 <small>（ ハネテ 音</small> ） 「 <small>（ ハネテ 音</small> 」	「音」 「 <small>（ ハネテ 音</small> 」	―	△ 「拗音」	唇音 「唇に力を入 れぬ音」
小笠原 76	異	「(20)」 「濁音」	「(5)」 「半濁音」	「音」 「 <small>（ ハネテ 音</small> ） 「 <small>（ ハネテ 音</small> 」	「音」 「 <small>（ ハネテ 音</small> 」	―	△ 「拗音」	唇音 「唇に力を入 れぬ音」
藤田 77	―	「(20)」 「濁音」	「(5)」 「半濁音」	「音」 「 <small>（ ハネテ 音</small> ） 「 <small>（ ハネテ 音</small> 」	「音」 「 <small>（ ハネテ 音</small> 」	―	△ 「拗音」	唇音 「唇に力を入 れぬ音」

これらの例では、「音韻」という語を「日本語の音（の種類）」として認められるものといった意味で使っている（現代でも、この使い方はよく見られる）。何を（どこまでを）日本語の音韻とするかについては、さまざまな見方があるが、日本文典では、全体的に、清音を基本的な音とし、その他の音をその変化したもの（清音から派生したもの）として扱う傾向がうかがえる。ここでは、濁音、半濁音、撥音、促音、長音、拗音について、日本文典でどう扱っているか、表四―（b）～（g）の欄にまとめて示しておく。

大槻 81	林 81	坪郷 79	加部 79	中島 79	関 79	物集 78	旗野 77	藤井 77	春山 77	安田 77	文 典
同	異	異	同 「其美同ジ カニス」	異 「イ土 ウ同」	異	異	異	同	同 「母頭のイウ に近」	異 「イウ エ同」	イ・エ・ウ の仮名
○ 20 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ 20 「濁音」	濁音
○ 5 「半濁音」	○ 5 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ 5 「弾音・半濁 音」	○ (5) 「次清音」	○ (5) 「次清音」	○ (5) 「半濁音」	○ (5) 「弾音」・「半濁 音」	○ 5 「次清音・半濁 音」	○ 10 「半濁音」	○ 5 「半濁音」	半濁音
○ 「鼻音」	○ 「撥音」	—	○ 「余音」	○ 「半舌・半鼻の 音」	○ 「鼻音」	○ 「半舌半鼻の 音」	○ 「字」 「ン」字	○ 「鼻音」	—	—	撥音
○ (音) 「詰音の」	○ 「急促音」	—	—	○ 「ツト呼フツト」 「音」	○ 「入鼻半舌の 音」	○ 「急促音」	—	○ 「促音」	—	—	促音
○ (音) 「長音」	○ 「長呼音」	—	—	○ 「長ク引キテ呼 ブ」	○ 「引音」	○ 「音便の」	—	○ 「符」 「長呼」	○ 「符」 「長呼」	○ 「符」 「長呼」	長音
○ 35 「拗音」	—	—	—	○ 「拗音」	△ 「拗音」	○ (90) 「拗音」	○ 「拗音」	—	○ 「拗音」	△ 「拗音」	拗音
唇音 「唇音」	—	—	唇音 「唇」	唇音 「外唇音」	—	唇音 「唇音」	唇音 「唇外」	—	唇音 「唇音」	—	ハ行音の 音声

高津 91	大和田 91	手島 90	落合 90	佐藤 90	岡 90	大槻 89	ン 87	チャン ブレ	近藤 85	弘 84	稲垣 81	文 典
同	同 「輕重の別 あり」	同 「輕重稍異 なり」	異	同	異	同 「相異ナルベ キ理アリ」	—	異 「イウ エ同」	異 「この有無書 き分ける」	同 「其音モト 異なり」	同 「其音モト 異なり」	イ・エ・ウ の仮名
○ 20 「濁音」	○ 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ (20) 「濁音」	—	—	濁音
○ 5 「反濁音」	○ 「重濁音」	○ (5) 「清音の」	○ (15) 「半濁音」 「ガ」 「ヤ行音を 含む」	○ (5) 「半濁音」	—	○ 5 「半濁音」	○ 「半濁 音」	○ 5 「わもきん り」	○ (5) 「半濁音」	○ 「次清音」・「半 濁音はガ行音 を含む」	○ 「次清音」・「半 濁音はガ行音 を含む」	半濁音
○ 「撥音」	○ 「人音」	○ 「音」 「撥呼」	○ 「鼻音」	○ 「撥る音」	—	○ 「鼻音」	○ 「音便の」	○ 「はゆるゑ」	○ 「音」 「撥る音」	○ 「音」 「撥る音」	○ 「音」 「入音」	撥音
—	○ 「詰音」	○ 「促呼」	○ 「急促音」	—	—	○ 「促音」	○ 「音便の」	○ 「まるゑ」	○ 「音」 「ツの入音・入 る音」	○ 「音」 「入音」	○ 「音」 「入音」	促音
○ (音) 「長音の音便」	—	○ 「長呼」	—	—	—	○ 「転呼音の」	○ 「音」 「長き母音」	—	—	—	—	長音
—	○ 「複子音・拗 音」	○ 「拗音」	○ (80) 「拗音」	—	—	○ (38) 「濁音・ 半濁音を含む」 「拗音」	—	○ 24 「ようおん」 「拗音」	△ 「拗音」	—	—	拗音
—	—	ハF 唇音	喉音 「ハH 喉音」	唇音 「唇音」	喉・唇音 「半喉半唇」	—	喉音 「ハ h」	—	唇音 「唇音」	—	—	ハ行音の 音声



大宮 94	泰 93	村田 93	大川 93	小田 93	木村 92	大久保 92	村山 91	井口 91	岡倉 91	関根 91	文典
「同 別あり」	異	異	異 イ ウ 同	異 い え 同	同	異	異 い え 同	異	異	同	イ・エ・ウ の仮名
○ (20) 「濁音」	○ 25 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ 20 「濁音」	—	○ 20 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ 「濁音」	○ (20) 「全濁音」	濁音 (b)
○ 5 「半濁音」	○ 15 「清音・半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ (15) 「半濁音」 「半濁音の音便」	○ (音) 「半濁音」	○ 5 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ 5 「半濁音・次清音」	○ (5) 「半濁音」	○ 「清音の」	○ (5) 「半濁音」	半濁音 (c)
○ 「撥音」	○ 「鼻音・撥音」	○ 「鼻音・撥音」	—	○ (音) 「ンと撥ぬる音便」	○ 「鼻音」	○ 「鼻音」	○ 「鼻音・鼻音」	○ 「撥音」	○ (音) 「ン音」	○ (音) 「撥呼音便」	撥音 (d)
○ 「詰音」	○ 「入声音」	—	○ (音) 「急促音便」	○ (音) 「急促音便」	○ 「急促音」	○ 「促音」	○ 「急促・呼ぶ音便」	○ 「詰音」	○ (音) 「子音の上に促れる音便」	○ (音) 「促呼音便」	促音 (e)
—	—	—	—	—	—	—	—	○ 「引音」	—	—	長音 (f)
—	○ (100) 「拗音」	○ (100) 「拗音」	○ (76) 「拗音」	—	○ 「拗音」	○ (100) 「拗音」	○ (100) 「拗音」	—	○ 「拗音」	○ (40) 「濁音・半濁音を含む」	拗音 (g)
—	唇音 「唇音」	—	—	—	唇音 「唇音」	唇音 「唇音」	唇音 「唇音」	唇音 「唇音」	喉音 「h」	—	ハ行音の 音声 (h)

大槻 97	西山 97	柏木 96	新保 96	大宮 96	豊田 95	峰原 95	所 95	富山房 編輯	岡崎 95	遠藤 94	井田 94	文典
「同 ナリ」	異	同	同	異 い う え 同	異	同	—	異	同	同	同	イ・エ・ウ の仮名
○ 20 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ 20 「濁音・全濁音」	○ 20 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ (20) 「濁音」	濁音 (b)
○ 5 「半濁音」	○ 5 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ 5 「半濁音」	○ 5 「半濁音・次清音」	○ (5) 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ 5 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	半濁音 (c)
○ 「鼻音」	○ 「撥音・鼻音」	○ (音) 「余音」	○ 「撥音」	○ 「撥音」	○ 「鼻音」	○ (音) 「ンに転呼」	○ 「鼻音」	○ 「鼻音」	○ 「撥音便」	○ (音) 「ンに転呼」	○ (音) 「通声の音便」	撥音 (d)
○ 「促音」	○ 「急促音」	—	○ 「促音」	○ 「詰音」	○ 「促音」	○ (音) 「ンに転呼」	○ 「促音」	○ 「急促音」	○ 「促音便」	○ (音) 「急促音」	○ (音) 「通声の音便」	促音 (e)
○ 「符・音」	—	—	—	—	○ (音) 「長音の音便」	—	—	—	—	—	○ (音) 「伸声の音便」	長音 (f)
○ (3) 「濁音・半濁音を含む」	○ (80) 「拗音」	—	○ 「拗音」	○ 「拗音」	○ (100) 「拗音」	○ (72) 「拗音」	○ 「拗音」	○ (72) 「拗音」	○ (40) 「濁音・半濁音を含む」	△ 「漢字音約」	△ 「漢字音約」	拗音 (g)
唇音 「ハ行音」	唇音 「唇音」	—	喉音 「喉に由りて起る音」	—	唇音 「唇音」	—	—	唇音 「唇音」	—	—	唇音 「唇音」	ハ行音の 音声 (h)

高田 99	大林 98	上谷 98	中邨 98	杉 98	和田 97	塩井 97	鳥山 97	渡辺 97	中等学科 教授研 97	中島 97	文 典
同	同	異	異	同 「正しくは… 区別する」	同 「固有より別 の音なり」	異 「エウ イ同異」	同	同 「鼻音の別あ り」	異	異	イ・エ・ウ の仮名
○ 20 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ 20 「濁音・全濁 音」	○ (20) 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ (20) 「濁音」	濁音
○ 5 「半濁音」	○ 5 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ 5 「半濁音」	○ 5 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ 5 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	半濁音
○ 「鼻音」	○ 「鼻音」	○ 「鼻音」	○ 「鼻音」	○ 「鼻音」	○ 「鼻音」	○ 「鼻音」	—	○ 「鼻音」	○ 「鼻音」	○ 「鼻音・鼻音」	撥音
(音) 「促音」	○ 「促音」	(音) 「促音」	○ 「促音」	○ 「促音」	○ 「促音」	○ 「促音」	—	—	○ 「促音」	—	促音
—	(符) 「音ヲ長ク引ク 二用アル符号」	(音) 「長音」	—	○ 「引音」	○ 「長音」	—	—	(音) 「長呼」	—	(音) 「前付の音便」	長音
○ 「拗音」	○ 「拗音」	○ 「拗音」	○ 「拗音」	○ 「拗音」	○ 「拗音」	○ 「拗音」	○ (47) 「濁音・ 半濁音・シツ行音 を含む」	○ (90) 「拗音」	○ 「拗音」	○ 「拗音」	拗音
唇音 「唇」	—	ラ行 「唇音」	喉音 「唇音」	唇音 「唇音」	—	—	—	唇音 「唇」	—	—	ハ行音の 音声

四―一の(a)ゝ(h)欄における略号は、以下のとおりである。

(a)「イ・エ・ウの仮名」ア行の「イ」とヤ行の「エ」とヤ行の「エ」とヤ行の「ウ」とワ行の「ウ」の、五十音図における書き分け…異」は「特殊な仮名を用いて書き分けているもの」、「同」は「書き分けていないもの」。

(b)濁音…「○」は「音韻として」取り上げているもの、数字は「音韻として」挙げている数、( ) 付きの数字は「音韻

岡沢 00	普通教育 研究会 00	永井 00	鈴木 99	下田 99	大平 99	瓜生 99	佐方 99	文 典
同	同	異	異	同	同 「もより 異なり」	異 「イ土異 ウ同」	同	イ・エ・ウ の仮名
○ (20) 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ (20) 「濁音」	○ 20 「濁音」	○ (20) 「濁音」	濁音
○ 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ (5) 「半濁音・次清 音」	○ (5) 「半濁音」	○ (5) 「半濁音」	○ 清音の「 行」	○ (5) 「半濁音」	半濁音
○ 「撥音」	○ 「撥音」	○ 「撥音」	○ 「鼻音」	○ 「撥音」	○ 「鼻音」	○ 「鼻音」	○ 「鼻音」	撥音
○ 「促音」	○ 「促音」	○ 「促音」	(音) 「促音」	○ 「促音」	(音) 「促音」	○ 「促音」	(音) 「促音」	促音
○ 「引音」	—	(符) 「長音」	—	(符) 「音の仮名」	—	—	—	長音
○ 「拗音」	○ (28) 「拗音」	○ (42) 「濁音・ 半濁音を含む」	○ (27) 「拗音」	○ (36) 「濁音・ 半濁音を含む」	○ (40) 「濁音・ 半濁音を含む」	○ (52) 「濁音・ 半濁音を含む」	○ (25) 「拗音」	拗音
—	—	—	喉・唇音 「唇」	唇(喉)音 「唇」	—	喉音 「喉」	唇音 「唇音」	ハ行音の 音声

表

四期」に一九〇〇年を加えたものに相当)の三つの時期に分けて、数字を挙げて示しておく(表四―二)。

表四―二 時期別に見た日本文典における各音の扱い

(Ⅲ) 1895～1900 (28 文典)	(Ⅱ) 1884～1894 (23 文典)	(Ⅰ) 1870～1883 (22 文典)	時期 (対象文典数)		音
			異	同	
12 (44.4%)	12 (54.5%)	13 (61.9%)	○	○	イ・エ・ウ (a)
15 (55.6%)	10 (45.5%)	8 (38.1%)	○	○	濁音 (b)
28 (100%)	22 (95.7%)	20 (90.9%)	○	○	半濁音 (c)
0 (0%)	1 (4.3%)	2 (9.1%)	○	○	撥音 (d)
28 (100%)	21 (91.3%)	22 (100%)	○	○	促音 (e)
0 (0%)	1 (4.3%)	0 (0%)	○	○	長音 (f)
0 (0%)	1 (4.3%)	0 (0%)	○	○	拗音 (g)
25 (89.3%)	12 (52.2%)	11 (50.0%)	○	○	ハ行音 (h)
2 (7.1%)	9 (39.1%)	7 (31.8%)	○	○	唇 (フのみ唇音 のものを含む)
1 (3.6%)	2 (8.7%)	4 (18.2%)	○	○	
15 (53.6%)	7 (30.4%)	6 (27.3%)	○	○	
9 (32.1%)	12 (52.2%)	8 (36.4%)	○	○	
4 (14.3%)	4 (17.4%)	8 (36.4%)	○	○	
3 (10.7%)	1 (4.3%)	1 (4.5%)	○	○	
8 (28.6%)	6 (26.1%)	9 (40.9%)	○	○	
17 (60.7%)	16 (69.6%)	12 (54.5%)	○	○	
27 (96.4%)	14 (60.9%)	8 (36.4%)	○	○	
0 (0%)	2 (8.7%)	4 (18.2%)	○	○	
1 (3.6%)	7 (30.4%)	10 (45.5%)	○	○	
8 (61.5%)	8 (66.7%)	10 (100%)	○	○	
5 (38.5%)	4 (33.3%)	0 (0%)	○	○	

数字は、表四―一に挙げた略号の数を数えたものである。「一」となっているものについては、ここでは、「取り上げていない」とした。(Ⅰ)内は、それぞれの音ごとに、その扱い方の割合を示したものである。(a)と(h)については、表四―一の「一」を

として(表に)挙がっているものの数(筆者が数えたもの)。

(c) 半濁音:「○」は「音韻として」取り上げているもの、数字は「音韻として」挙げている数、( ) 付きの数字は「音韻として」(表に)挙がっているものの数(筆者が数えたもの)。「音」は「音便としてのみの扱いのもの」。

(d) 撥音:「○」は「音韻として」取り上げているもの、「字」「は」文字としてのみの扱いのもの、「音」は「音便、または、発音としてのみの扱いのもの」。

(e) 促音:「○」は「音韻として」取り上げているもの、「音」は「音便、または、発音としてのみの扱いのもの」。

(f) 長音:「○」は「音韻として」取り上げているもの、「符」「は」表記(符号)としてのみの扱いのもの、「音」は「音便の「長呼」、または、発音としてのみの扱いのもの」。

(g) 拗音:「○」は「音韻として」取り上げているもの、数字は「音韻として」挙げている数、( ) 付きの数字は「音韻として」(表に)挙がっているものの数(重複を除く。筆者が数えたもの)。「」は「字音としてのみの扱いのもの、または、説明のみで名称を挙げていないもの、または、名称のみでほとんど説明のないもの」。

(h) ハ行音の音声:「唇音」は「唇音としているもの」(または、「f」としているもの)、「喉音」は「喉音としているもの」(または、「h」としているもの)。「」のみ「唇音」「f」としているものを含む、「喉・唇音」「喉(唇音)」「唇(喉音)」は、「喉音とも、唇音ともしているもの」。

なお、「一」は、(a)については、「五十音図を載せていないもの」、他については、「取り上げていないもの」である。

表四―一だけでは、それぞれの音の扱い方が時期的にどう変わってきたかがわかりにくいので、服部(二〇一七:二八)における「日本文典の編纂」の時代区分に基づき、(Ⅰ)一八七〇～一八八三(明治三～明治一六)年(服部二〇一七の「第一期」に相当)、(Ⅱ)一八八四～一八九四(明治一七～明治二七)年(服部二〇一七の「第二期」と「第三期」に相当)、(Ⅲ)一八九五～一九〇〇(明治二八年～明治三三)年(服部二〇一七の「第

字で表記される「直音」に対して、各直音に対応する形で、仮名二字で反切式に表記されるもの（「ア」に対する「イヤ」「ウワ」、「カ」に対する「キヤ」「クワ」など）を「拗音」とするとらえ方に基づいて、この形式に合うものを（それが具体的にどんな音声かや、実際に使われるかは別にして）「拗音」として挙げたものである。

### 三・二・三 音声学的な説明

この項の最後に、日本文典に見られる日本語音韻に関する音声学的な説明について、簡単に触れておく。日本文典には、日本語音韻の構造について、たとえば、次のような記述が見られる。

（IV 24）父音〔子音〕は、母音に配合して、子音〔子音＋母音〕の音節を生ずる音声なり、其の音、隠微にして、明にいひあらし難きも、子音は、もと、父、母、両音の配合より成れるものなれば、子音より、母音を取り去りたるもの、即、父音なり。〔中略〕之れを書きあらはす、文字あらざれども、今、仮に、ク、ス、ツ、ヌ、フ、ム、ユ、ル、于（ワ行の「ウ」）の九字を以て、之れにあつべし。

（岡崎 95…四）

（IV 25）此の外に音声を拗曲して出だす一種の音あり。之を拗音と云ふ。拗音とは也行又は和行の諸音の更に他の父音〔子音〕と結合したるものをいふ、例へば、キヤ、キヨ、ヒヨ、クワ、シヤ、シヨ、チャ、チヨ等の如し。抑此の二行に限り更に父音と結合して拗音を生じ得る所以の理を考ふるに、元来此の二行の父音は母音のイ、ウに外ならず、〔中略〕而して其の半ば父音となりたるもの猶其の半ば母音たるの性質あるを以て更に他の父音と結合す、これ拗音の生ずる所以なり。

（手島 90…二四）

日本文典では、右に見るように、「ア、イ、ウ、エ、オ」以外の音節（子音）は「父音＋母音」という基本構

除いて計算し、（b）ゝ（g）については、表四―Ⅰの「二」を含めて計算した。ただし、（h）の、「喉・唇音」と「喉（唇）音」とは「喉音」に、「唇（喉）音」は「唇音」に含めた。

表四―Ⅱからは、日本文典では、時代が下るにしたがつて、次のような傾向が現れることが見て取れる。

- （Ⅰ）ア行の「イ」とヤ行の「イ」、ア行の「エ」とヤ行の「エ」、ア行の「ウ」とワ行の「ウ」について（a）欄）、五十音図において、書き分けているもの（異）の割合が減り、書き分けていないもの（同）の割合が増えてきている。
- （Ⅱ）濁音・半濁音・撥音・促音・長音・拗音について（b）ゝ（g）欄）、（音韻として）取り上げているもの（○）の割合が増え、「取り上げていない」ものの割合が減ってきている（ただし、濁音と半濁音とは、（Ⅰ）の時期から「○」の割合が高く、長音は、（Ⅲ）の時期でも「取り上げていない」の割合が高い）。
- （Ⅲ）ハ行音について（h）欄）、「唇音」とするもの（唇）の割合が減り、「喉音」とするもの（喉）の割合が増えてきている（ハ行音の音声については後述）。

このうちの、とくに（Ⅱ）からは、五十音（清音）以外の音も、次第に、日本語の音韻として認められるようになってきたようすが見える（ただし、現代の日本語音韻論の立場からは、これらの音（音素・音素配列）は、明治より前の時代に、音韻として確立していたといえる）。

なお、拗音について付言しておく、日本文典では、たとえば、「イヤ、イイ、イユ、イエ、イヨ、ウワ、ウヰ、ウウ、ウエ、ウワ、キヤ、キイ、キユ、キエ、キヨ、クワ、クヰ、クウ、クエ、クワ、…」というように、今日では「拗音」とされないもの（「あいうえお表」にないもの）まで含めて、「拗音」として挙げているものが多い。これは、江戸時代の五十音図（五位五音の図）によく見られるもので（馬淵一九九三・五四、一三四）、仮名一

ではなく、「唇音」としているものが多い。これは、「ハ」がまだ唇音(ㄆ)を保持していた(その点で、悉曇や『韻鏡』の研究において、齟齬を生じなかった)江戸時代の記述をそのまま踏襲したものであろうが、このほうが連濁(例…ハ→「…バ」)などの音韻現象を説明するのに都合がいいという面もあったのではないかと思われる(なお、ハ行子音の歴史的変遷については、大槻97、上谷98、瓜生99が触れている)。日本文典におけるハ行音の扱いについては、表四一の(h)「ハ行音の音声」の欄にまとめて示した。

日本文典には、現実の音声の観察に基づく(理念的なものではない)記述も見られる。それらには、ローマ字を利用して、音声の説明を行っているものが多い(日本文典で、日本語音声の説明にローマ字を使用しているのは、チャンブレン87、手島90、岡倉91、大槻97、上谷98、瓜生99、下田99、鈴木99である)。以下、いくつか例を挙げておく。

仮名遣いに関連するものとしては、ア行とワ行とで、「イ」と「エ」と「オ」と「ウ」とに、音声上の区別がないことについて触れているもの(チャンブレン87、大槻97、下田99)や、「ジ」と「ヂ」と「ズ」とに、音声上の区別がないことについて触れているもの(大槻89、大槻97七、上谷98、下田99)などがある。また、ガ行鼻音に触れているもの(旗野77、稲垣81、秦93、大槻97、下田99)や、「ツア、ツイ、ツエ、ツオ」の音(表記は「ザ、ジ、ゼ、ゾ」)に触れているもの(古川71)などもある。

なお、アクセントについては、日本文典では、ほとんど触れられていない。アクセントによって区別される語の例を挙げているものが見られる程度である(中根76、藤井77の「曲直音」、春山77、弘84の「三声」(平声・上声・去声))。

その他、日本文典には、頭音法則や、いわゆる「ライマンの法則」への言及なども見られる。

(IV 26)二三箇重リタル熟語ハ、大抵下ノ語ヲ濁リテ読ムナリ、即・公連・良刀・鬼瓦・耳鬚・日本橋・宇治川・ノ類是ナリ、然レ共下ノ語ノ末ニ、濁音ヲ含ミタル者ハ、其ノ上ノ音ヲ濁ルコトナシ、即・画

造をもち、ヤ行音とワ行音は「母音(ㄇ) + 母音」、拗音は「父音 + ヤ行音(または、ワ行音)」つまり「父音 + 母音(ㄇ) + 母音」という構造をもつと説明されることが多い。

日本文典では、今日の子音 (consonant) に対して、主に「父音」という用語が使われ(これは、反切上字を意味する「父字」から来していると思われる)、今日の(子音 + 母音)の音節 (syllable) に対して、主に「父音」と「母音」から生まれるという意味で「子音」という用語が使われる。ところが、日本語の仮名には「父音」だけを表す文字がないため、個々の「父音」を表すのに「子音」の文字を借りて使う場合が多い(たとえば、kを表すのに「ク」を使う)。このためか、「子音」の用法にしばしば混乱が見られる(「父音」をウ段音(ㄱ)を含む音節)とするものもある(井田94、遠藤94、中邨98、大林98)。あるいは、このあたりから、(本来 syllable を表す)「子音」が(それまで consonant を表していた)「父音」に取って代わっていったのではないかとも思われる。ただし、consonant の意味での「子音」は、早くから英語学関係の文献に使われている。なお、内田(二〇〇八:一五)は、洋学者が「現代の子音の概念」を理解し、「子音」を造語したとしている (consonant の意味での「子音」は、日本文典では、チャンブレン87、大久保92、和田97、岡沢00に見える)。

ところで、日本文典に見られる日本語音声の説明は、必ずしも実際の音声の説明したものではない。この時期、日本語の標準語(音)が未確立だったということもあってか、日本文典における日本語音声の説明は、五十音図の枠組みに沿った理念的なものになっている。五十音図の原理からいえば、五十音は(濁音、半濁音を含めて)、すべて別の音となるため、日本文典では、実際の発音では区別のない、「イ」と「エ」と「オ」と「ウ」、「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」なども、それぞれ別の音として扱っている(ここに仮名遣いの根拠がある。また、先に触れた、「イ、エ、ウ」を書き分ける根拠もここにある)。ほかに、日本文典で、実際とは異なる発音を挙げているものにハ行音がある。

「ハ」の子音は、明治期には、ほとんどの地域において[h]であったが、日本文典では、これを「喉音」[h̥]

弘 84、上谷 98、瓜生 99、鈴木 99で、言及されている。なお、これらの「法則」は、賀茂真淵らによって発見されたものである。真淵の『語意考』には、「阿と於是言の下にいふ事なし」、「良利留礼呂は言の上にいふ事なし」、「言の始めを濁る事なし」、「山之風をも山風といへど、こは下に『ぜ』の濁りあれば、ゆづりて『か』を濁らず」、「句読点、カギ括弧は筆者」、『賀茂真淵全集 第二』吉川弘文館、一九〇三・二二・〇二、二二・一一 などとある。

#### 四 明治期の日本文典における「音韻」

本章の最後に、日本文典に見られる「音韻」という語の用法について触れておく。

「音韻」という語は、今回調査した七三文典では、三四文典に現れた。「音韻」という語の使用は、明治初期には少なく、明治中期以降に増える(明治初期には、主に「音」が使われていた。表四―二の時期でいえば、(Ⅰ)で六文典、(Ⅱ)で一五文典、(Ⅲ)で一四文典に、「音韻」が使われている(ただし、(Ⅰ)のうち、二文典の「音韻」は漢字の音韻)。ほかに、「音韻」とほぼ同じ意味で、「声音」や「音声」も用いられている(第八章三・一二)。日本文典では、「音韻」は、狭義には、「五十音(正音)」の意味で、広義には、それ以外の音を含めた(文典によって、その範囲は異なる)、日本語の基本的な音の意味で、使われている。狭義の「音韻」の例を一つ挙げる。

(Ⅳ 30) さて、我國の言語を言ひあらはす音韻はその数五十にして、これを文字に書きあらはし、経緯を乱さず連ねたるを五十音図といふ。(中略) 右の五十音を、あいうえお、かきくけこ、とやうに、經に読み下すを音といひ、あかさたなはまやらわ、いきじちにひみりゐ、とやうに、緯に読み互すを韻といふ。さて、この五十の音韻は、我國言語の淵源となり、千變万化に感ずるも、おの／＼、その格に随いて、規律の乱ることなきは、実に我國音韻の靈妙なる所以なり。

(大宮 94 …二)

筆・朱磬・犬獬・鳥蛇・ノ類是ナリ、

(中根 76 …下―六四ウ)

(Ⅳ 27) この音〔濁音〕は我國上古に於て音につきたる詞なし。音便によりて濁るなり。古事記伊弉那岐神日本紀 吾田君小綱等之 等のごとし。中古以来漢梵語のいりてより音につきたる詞の生ずるなり。古今集 鸛蕉類 糾 物語文 御者 源氏 近世は多く洋語より生ず。瓦斯灯 股引 のごとし。(句点は筆者)

(旗野 77 …上―五ウ)

(Ⅳ 28) 阿行ノ五音ハ詞ノ下ニ付クコトナリ〔ナク〕の誤植か、良行の五音ハ詞ノ上ニ付クコトナキハ奇ト云フヘシ

(村田 93 …六)

(Ⅳ 29) ○良行ノ五音ハ、国語ニアリテハ、一語ノ首ニ発スルコトナシ(之ニ反シテ、動詞、助動詞、ノ語尾ニハ、甚ダ多シ。)一語ノ首ニナルハ、皆、外国ヨリ入レル語ナリ、〔中略〕○国語ニ於テ、濁音、半濁音ノ、一語ノ首ニ発スルモノ、古書ニ見エズ、「べに」、「紅」ぐみ、「茱萸」どろ、「泥」がへんず、「肯」げに、「夷」ぎやまん、「硝子」ばん、「麵麴」或ハ、形状、音響ニ、「ざはぎは」、「ばらばら」ナドイフ語ハ、後世ノ書ニノミ見エ、外国ヨリ入レル語ニハ、殊ニ多シ。(一部表記を訂正した)

(大槻 97 …一六、二二)

(Ⅳ 26) は、「複合語の形成において、後部要素に濁音が含まれる場合は、連濁は起こらない」という非連濁規則(いわゆる「ライマンの法則」)について述べたもので、Ⅳ 27、Ⅳ 29 は、和語(とくに上代語)における、「母音だけの音節は語頭に立たない」、「濁音(および半濁音)は語頭に立たない」、「ラ行音は語頭に立たない」という頭音法則について述べたものである(ほかに、「ライマンの法則」については、渡辺 97で、濁音の頭音法則については、旗野 77、弘 84、上谷 98、佐方 99、瓜生 99、鈴木 99で、ラ行音の頭音法則については、中根 76、稲垣 81、

その他の音韻変化現象も、その延長上に考える、というようなものである。この音韻観は、とくに、五十音図の枠組みに沿った理念的な音声（ア行音とワ行音との区別、ア行の「イ・エ」とヤ行「イ・エ」との区別、唇音としてのハ行音など）の認め方や、五十音以外の音の扱いなどに現れている。実際の音声に関する（音声学的な）説明のあるものも見られる。

#### 四 明治期の日本文典における「音韻」

この時期の日本文典には、国学由来の、五十音図を基本とする音韻観が見られる。五十音図では、縦行が「音」、横列が「韻」とされ、「五十音」音韻」となる。日本文典における「音韻」は、五十音図に基づく概念を担うものといえる。

#### 【第四章の参考文献】

- 上田万年（一八九五）『国語のため』富山房  
内田智子（二〇〇八）「母音・子音の概念と五十音図」『名古屋言語研究』二名古屋言語研究会  
大西雅雄（一九三四）『音声学史』（国語科学講座Ⅱ 九 音声学）明治書院  
釘貫亨（二〇〇七）『近世仮名遣い論の研究…五十音図と古代日本語の発見』名古屋大学出版会  
佐藤亨（一九七六）『文法』の語誌『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』桜楓社  
山東功（二〇〇二）『明治前期日本文典の研究』和泉書院  
築島裕（二〇一四）『歴史的仮名遣い…その成立と特徴』吉川弘文館（一九八六初刊）  
時枝誠記（一九四〇）『国語学史』岩波書店  
永野賢（一九九一）『文法研究史と文法教育』明治書院

ここには、五十音図を基本とする、国学由来の音韻観が反映されている。五十音図では、縦行（経）が「音」、横列（緯）が「韻」とされるため、五十音が「音韻」となる。これは、漢字音研究（音韻学）の用語（第六章二節）を借りたものであるが、結局、日本文典における「音韻」は、五十音図に基づく概念を担うものといえるようである。

#### 【第四章のまとめ】

第四章では、明治初期・中期の日本文典（日本語文語文法書）に見られる音韻観を探った。

##### 一 はじめに（省略）

##### 二 日本文典

ここでは、明治初年（明治三三（一九〇〇）年に刊行された、七三種の日本文典を対象とし、それらにおける、音韻に関する記述について調べた。

##### 三 日本文典に見える音韻

日本文典における音韻に関する記述の体裁には、西洋文典の影響と国学の影響とが見られた。西洋文典の影響としては、文典に音韻に関するまとまった記述部分（編・論など）があり、それが文典の最初のほうに置かれ、ここでは、音韻と文字とが一緒に扱われているということが挙げられる。国学の影響としては、仮名（種類・名称）を挙げたあとで、五十音図によって音韻を説明するものが多いということが挙げられる。日本文典には、歴史的仮名遣いが採用されているが、音韻とともに仮名遣いを説くものも見られる。

日本文典には、五十音図中心の音韻観が広く見られる。それは、五十音図を絶対視し、五十音（直音の清音）を基本的な音韻（正音）と考え、それ以外の音（濁音、半濁音、拗音、撥音、促音など）を五十音の変化したものと見なし、

## 第五章 明治後期・大正期の口語文典における音韻

### 一 はじめに

本章では、主に、明治後期（明治三四（一九〇一）年以降・大正期の日本語口語文典（日本語口語文法書）における音韻について見ていく。

第四章では、明治初期・中期（明治初年～明治三三（一九〇〇）年）の文語文典（日本語文語文法書）七三種（第四章二節参照）における音韻のとりえ方について見たが、そこには、五十音図を基本とする、国学由来の音韻観が広く見られた（第四章三・二）。それは、「五十音（直音の清音）を基本的な音韻（正音）」と考え、それ以外の音（濁音、半濁音、拗音、撥音、促音など）を五十音の変化したものとし、その他の音韻変化現象も、その延長上に考える」というようなものである。この音韻観は、とくに、五十音における理念的な音声（ア行音とワ行音との区別、ア行の「イ・エ」とヤ行「イ・エ」との区別、唇音としてのハ行音など）の認め方や、五十音以外の音（濁音・半濁音・拗音・撥音・促音・長音など）の扱いなどに現れていた（ただし、実際の音声に関する（音声学的な）説明のあるものも見られた）。

本章では、これに続く、明治後期・大正期（明治三四（一九〇一）年～大正一四（一九二五）年）の口語文典を資料に、それまでの音韻観がどう変化したか、現代音韻論につながる考えが見られるかなどについて、見ていく。なお、資料によっては、「音韻」ではなく、「声音」や「音声」などの用語が使われているものもあるが、この時期は、音声学と音韻論とがまだ分かれていなかった時期であり、それらも含めて見ていく。

本章で調査対象とした口語文典は、次の二二種である（編著者名、書名、発行元、初版発行年月を挙げる。以下、編著者（筆頭者）の姓と発行年（西暦）の下二桁で略称する（例：金井保三『日本俗語文典』一九〇一年刊↓

- 仁田義雄（二〇〇五）『ある近代日本文法研究史』和泉書院  
服部隆（二〇一七）『明治期における日本語文法研究史』ひつじ書房  
福井久蔵（一九五三）『増訂版 日本文法史』風間書房（一九〇七初刊）  
古田東朔・山東功解説（二〇一〇）『日本語近代への歩み：国語学史2』くろしお出版  
古田東朔・築島裕（一九七二）『国語学史』東京大学出版会  
馬淵和夫（一九九三）『五十音図の話』大修館書店  
馬淵和夫・出雲朝子（一九九九）『国語学史：日本人の言語研究の歴史』笠間書院  
山田孝雄（一九七二）『国語学史』宝文館出版（一九四三初刊）

【第四章の使用データベース類】（ウェブの閲覧は、二〇一七年六月～二〇一七年八月）

「国立国会図書館デジタルコレクション」国立国会図書館 <http://dl.ndl.go.jp>

「早稲田大学図書館 古典籍総合データベース」早稲田大学図書館 <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>



三矢重松『高等日本文法』明治書院、明治四一（一九〇八）年十一月  
 臼田寿恵吉『日本口語法精義』松村三松堂、明治四二（一九〇九）年七月  
 本多龜三『普通文口語文漢文、文法集成』吉川弘文館、明治四三（一九一〇）年二月  
 兵庫県姫路師範学校『普通教育国語綱要』松村三松堂、明治四三（一九一〇）年七月  
 教育研究会『小学教員検定受験用国文法講義』六盟館、明治四四（一九一一）年九月  
 鴻巣盛広『新撰国語法』裳華房、大正九（一九二〇）年八月  
 小林好日『標準語法精説』育英書院、大正一一（一九二二）年一〇月  
 松下大三郎『標準日本文法』紀元社、大正一三（一九二四）年一二月  
 荒瀬邦介『問答式学生の国文法』英文堂、大正一四（一九二五）年八月

## 二 口語文典の五十音図観

明治後期の口語文典と、明治初期・中期の文語文典との大きな違いの一つは、五十音図に対する見方であると思われる。文語文典には、国字に由来する、五十音（ア、イ、ウ、エ、オ、ヰ、ヱ、ヲ、ヰ、ヱ、ヲ）の、文字どおり「五十音」を基本音とする音韻観が強く見られ（第三章三・二・一）、たとえば、「其原ヲ考フルトキハ五十音ノ外ニ出ツルモノナシ」（中島操『小学文法書 上』一八七九・四才）、「我國の純粹清雅なる音は〔中略〕十行五列五十個にして是を正音といふ」（木村春太郎『日本文典』一八九二・七）、「我國の言語を言ひあらはす音韻はその数五十」（大宮宗司『初等教育日本文典』一八九四・二）、「其の言語をなす音声は、些々五十種に過ぎず」（峰原平一郎『普通文典』一八九五・一）などといった記述が見られる（文語文典については、出版元を省略して記す。以下同じ）。一方、口語文典には、五十音図を掲載しているものは少なくないものの（二・文典中、一五文典。なお、文語文典では、七三文典中、七〇文典）、「音韻ニ五十音」とするものは、次のものぐらいであった。

金井保三『日本文典』宝永館、明治三四（一九〇二）年七月  
 石川倉次『はなしことばのきそく』金港堂、明治三四（一九〇二）年八月  
 新築金橋『中等教育実用日本文典』上巻、敬業社、明治三五（一九〇二）年二月  
 小林稲葉『新編日本文典』田中宋栄堂、明治三五（一九〇二）年五月  
 糸左近『雅俗対照和漢之文典』金刺芳流堂、明治三五（一九〇二）年十一月  
 鈴木暢幸『日本口語典』大日本普通学講習会出版部、明治三七（一九〇四）年一月  
 教育学会研究会『師範教科国語典』上巻、同文館、明治三七（一九〇四）年三月  
 小山左文二『日本文法の解説及練習』井瀬堂、明治三八（一九〇五）年一月  
 高橋竜雄『漢訳日語文法精義』東亜公司、明治三九（一九〇六）年七月  
 岸田蒔夫『日清対訳実用日本語法』明文堂、明治三九（一九〇六）年八月  
 林治一『日本文法講義』修学堂、明治四〇（一九〇七）年一月  
 阪本芳太郎『女子日本文典参考書』田中宋栄堂、明治四〇（一九〇七）年九月

いて、書き分けがあるか。

(b) ハ行音を、唇音としているか、喉音(ただし、「フ」を除く)としているか。

(a) については、文語文典では、とくに五十音図において、異なる仮名で書き分けているものが多く見られる。これは、「五十音図は、経緯(行・列)」によって、整然とした音体系を示すもので、五十音はすべて発音が異なる」という理念に基づく。たとえば、片仮名では、ヤ行の「イ」が「イ」を逆さにした形(「以」の一・二画)で、ワ行の「ウ」が「于」で示されているものが多い。筆者が調査した七三種の文語文典では、五十音図を挙げる七〇文典中、三六文典で異なる仮名(一部のみのもの、圈点(・)で書き分けているものを含む)が使われていた(第四章三・二・一)。

(b) のハ行音については、明治期には、(ほとんどの地域において)「ハ」の子音は「ㄱ」になっていたが、文語文典には、これを「喉音」(ㄱ)ではなく、「悉曇章や『韻鏡』に合わせる形で)「唇音」としているものが多く見られた(第四章三・二・二)。

また、「五十音以外の音」に関しては、次の六点を見る(ただし、名称や分類の問題には、ここでは触れない)。

- (c) 濁音を(音韻として)取り上げているか。
- (d) 半濁音を(音韻として)取り上げているか。
- (e) 拗音を(音韻として)取り上げているか。
- (f) 撥音を(音韻として)取り上げているか。
- (g) 促音を(音韻として)取り上げているか。
- (h) 長音を(音韻として)取り上げているか。

これらについては、文語文典では、大体において、時代が下るに従って、音韻として取り上げるものが増えて

(V 01) 音韻は言語の基礎なり。我が国の音韻は其数五十あり。故に之を五十音と曰ふ。

(新樂 02…上—一ウ)

口語文典には、むしろ、「五十音(図)」は文字の一覧であり、音韻(音声、声音)は、これとは別だ」とするような見方が多く見られる。

(V 02) 日本人のくちにする音声は、すべて百あまりですが、文字の数は五十あまりしかありません。

(金井 01…一六)

(V 03) 国語の音を表を以て記する場合には多く五十音図を用ゐる。しかもこの音図は音の総てを含めるに非ずして、清音と称するもののみを掲げたり。

(鴻巣 20…二三)

(V 04) 兎に角五十音図が印度式のものであることは既に先覚者の定論となつてゐるところで、徳川時代の本居宣長翁初め国学者の説くやうな神秘的のものでもなければ、これだけが正しい音で、この以外の音は禽獣の音であると説くのも誤つて居る。／＼この音図は頗る学術的のもので国語研究上、非常に便利なるものであるから、語法の研究は従来この上に行はれ、随て活用などを説く場合、全然これから離れるわけに行かない。又音の発達の結果、五十音図との間に不調を来してゐるが、これを整理することも中々容易ではない。／＼は改行を示す。以下同じ

(小林 22…八四)

具体的に、文語文典と口語文典とで、五十音における理念的な音声の認め方や、五十音以外の音の扱いなどに、どのような違いがあるか(あるいは、違いがないか)について、見ていこう。「五十音における理念的な音声」に関しては、次の二点を見る。

(a) ア行の「イ」とヤ行の「イ」と、ア行の「エ」とヤ行の「エ」と、ア行の「ウ」とワ行の「ウ」とにつ

表五―Ⅰ 口語文典に取り上げられている音

文典	(a) イ・エ・ウ の仮名	(b) ハ行音の 音声	(c) 濁音	(d) 半濁音	(e) 拗音	(f) 撥音	(g) 促音	(h) 長音
金井 01	同 「区別が出来 なくなり」	喉音 「喉音」	○ 「濁音」	○ 「重唇音」	○ 「拗音」	○ 「撥ねる音」	○ 「促る音促 音」	(音) 「長音便・長 音・ひく音」
石川 01	同 「をなへてう たにきた」	―	○(20) 「たぐへん」	○ 「はんだへを た」	○ 「トーをた」	○ 「はねをた」	○ 「まりをた」	○ 「のはしをた」
新築 02	同	唇音 「唇音」	○20 「濁音」	○5 「半濁音」	○ 「拗音」	○ 「撥音」	○ 「促音」	―
小林 02	同	―	○(20) 「濁音」	○5 「半濁音」	○(80) 「拗音」	○ 「鼻音」	○ 「促音」	―
糸 02	同	―	○(20) 「濁音」	○(10) 「半濁音」	○(72) 「拗音」	○ 「鼻音」	(音) 「促音便」	(符) 「長韻音」
鈴木 04	同	喉音 「ふ」「h」	○ 「濁音」	○ 「清音の」	○(28) 「拗音」	○ 「撥音」	○ 「促音」	○ 「長母韻延 音」
教育學術研 究会 04	同 「今、亡びて用 ゐられず」	―	○20 「二点を加た る仮名」	○5 「二点を加た る仮名」	○(42) 「拗音」	○ 「撥音」	○ 「促音」	―
小山 05	同 「ちんは、書 き分けが」	―	○20 「濁音」	○5 「次清音」	○(38) 「拗音」	○ 「撥音」	○ 「促音」	○ 「長呼音」
高橋 06	同	喉音 「ふ」「h」	○(20) 「濁音」	○(5) 「唇音」	○(36) 「拗音」	○ 「鼻音」	○ 「促音」	○ 「長音」
岸田 06	同 「古ハ音毛典 ゾチ給タ」	喉音 「ふ」「h」	○(20) 「濁音」	○(5) 「次清音」	○(38) 「拗音」	○ 「鼻音」	○ 「促音」	(符) 「長音符」

いる。明治初期には、これらを取り上げていないか、取り上げていても、文字としてのみ（撥音）、表記（符号）としてのみ（長音）、音便としてのみ（撥音、促音、長音）という扱いが多かったが、このような扱いは、明治中期には、減ってきている。

以上について、各口語文典において、どのように扱っているかを、一覧にして示す。表五―Ⅰは、表四―Ⅰにならぬ、(a)～(h)の扱いを挙げたものである（表四―Ⅰとは、記号の付け方が異なる）。

また、表五―Ⅱには、文語文典と口語文典との違いや、時期による変遷を見るために、服部（二〇一七・二八）の「日本語文典の編纂」の時代区分を参考に（詳しくは、第四章三・二・二参照）、四つの時期に分けて、各音について、数字を挙げる（(c) 濁音と (d) 半濁音については、載せない。表四―Ⅱと重なる部分がある）。

- (Ⅰ) 一八七〇～一八八三（明治三～明治一六）年
- (Ⅱ) 一八八四～一八九四（明治一七～明治二七）年
- (Ⅲ) 一八九五～一九〇〇（明治二八年～明治三三）年
- (Ⅳ) 一九〇一～一九二五（明治三四年～大正一四）年
- (Ⅰ)～(Ⅲ) が文語文典に、(Ⅳ) が口語文典に当たる。

表五―の (a) ー (h) 欄における略号は、以下のとおりである。

(a) 「イ・エ・ウの仮名」(ア行の「イ」とヤ行の「エ」、ア行の「エ」とヤ行の「ウ」とワ行の「ウ」の、五十音図における書き分け) : 「異」は「特殊な仮名を用いて書き分けているもの」、「同」は「書き分けていないもの」。

(b) ハ行音の音声 : 「唇音」は「唇音としているもの」(または「イ」としていているもの)、「喉音」は「喉音としているもの」(または「h」としていているもの)。または「舌根音」としていているもの。「イ」のみ「唇音」(f) としているものを含む、「唇(喉)音」は、「唇音」とも、喉音ともしていているもの。

(c) 濁音 : 「○」は「音韻として」取り上げているもの、「数字」は「音韻として」(挙げている数)、「( )」付きの数字は「音韻として」(表に) 挙がっているものの数(筆者が数えたもの)。

(d) 半濁音 : 「○」は「音韻として」取り上げているもの、「数字」は「音韻として」(挙げている数)、「( )」付きの数字は「音韻として」(表に) 挙がっているものの数(筆者が数えたもの)。

(e) 拗音 : 「○」は「音韻として」取り上げているもの、「数字」は「音韻として」(挙げている数)、「( )」付きの数字は「音韻として」(表に) 挙がっているものの数(重複を除く。筆者が数えたもの)。

(f) 撥音 : 「○」は「音韻として」取り上げているもの、「字」は「文字としてのみの扱いのもの」、「音」は「音便、または、発音としてのみの扱いのもの」。

(g) 促音 : 「○」は「音韻として」取り上げているもの、「音」は「音便、または、発音としてのみの扱いのもの」。

(h) 長音 : 「○」は「音韻として」取り上げているもの、「(符)」は「表記(符号)としてのみの扱いのもの」、「音」は「音便の「長呼」、または、発音としてのみの扱いのもの」。

なお、「イ」は、(a) については、「五十音図を載せていないもの」、他については、「取り上げているもの」である。

文典	イ・エ・ウの仮名	ハ行音の音声	濁音	半濁音	拗音	撥音	促音	長音
林 07	同	唇(喉)音	○ 20	○ 5	○ (42)	○ (音)	○	(符) 長音
阪本 07	同	喉音	○ (20)	○ (5)	○ (35)	○	○	(音符) 長音
三矢 08	異	喉音	○ 20	○ 5	○ 38	○	○	○
臼田 09	同	喉音	○ 9	○	○ 42	○	○	(音符) 長音
本多 10	同	喉音	○	○	○	○	○	○
兵庫県姫路師範 10	同	喉音	○ 20	○ 5	○	○	○	(符) 長音
11 教育研究会	同	喉音	○ (20)	○ (5)	○ (38)	○	○	○
鴻巣 20	同	喉音	○	○	○ (38)	○	○	(符) 長音
小林 22	同	喉音	○	○	○	○	○	○
松下 24	同	喉音	○	○	○	○	○	○
荒瀬 25	同	喉音	○	○	○	○	○	(符) 長音

たものである(「」となっていないものについては、「」では、「なし」とした。()内は、それぞれの音ごとに、その扱い方の割合を示したものである。(a)と(b)については、表五―一の「」を除いて計算し、(c)と(h)については、表五―一の「」を含めて計算した。ただし、(h)の、「唇(喉)音」は、「唇音」に含めた。

表五―一、表五―二からは、次第に、五十音(図)にとらわれなくなってきたようすがうかがえる。(a)と(b)については、「五十音における理念的な音声」は認めない(実際の音声に従う)ようになってきており、(c)と(h)については、「五十音以外の音」も音韻として認めるようになってきているといえよう。

(a)の「イ・エ・ウ」の特殊な仮名は、口語文典の五十音図には、ほとんど載せられていないが、本文中で、これらの違い(がないこと)に触れているものは多い(金井 01、石川 01、糸 02、教育学術研究会 04、小山 05、三矢 08、白田 09、教育研究会 11、松下 24)。

(V 05)ヤ行の「**イヱ**」とワ行の「**ウ**」とは、その原音「**イヱ**」「**ウ**」(原文では、特殊な仮名)は、今、亡びて用ゐられず、ア行の「**イヱ**」「**ウ**」と全く同形同音なり。「」内は筆者。以下同じ」

(教育学術研究会 04…七)

(V 06)五十音図中、ア行の「イエ」、ア行の「ウ」は、今日にては、発音も文字も異ならず。

(教育研究会 11…五)

(b)のハ行音は、(その音声に言及しているものでは)多くが喉音(h)としているが、このことよって、唇音である「フ」を、(他の)ハ行音とは別扱いにしているものも見られる。これは、五十音図や、後に生まれる「音素」の考え方とは異なる扱い方である(このような扱い方は、サ行やタ行にも見られる)。

(V 07)フの子音はハヒヘホと異に、唇を合する所、同行ながら別種の音なり。

表五―二 時期別に見た日本文典における各音の扱い

口語文典	文語文典				時期 (対象文典数) 音の扱い	
	(IV) 1901～1925 (21 文典)	(III) 1895～1900 (28 文典)	(II) 1884～1894 (23 文典)	(I) 1870～1883 (22 文典)		
1 (5.9%)	12 (44.4%)	12 (54.5%)	13 (61.9%)	異	(a) イ・エ・ウ の仮名	
16 (94.1%)	15 (55.6%)	10 (45.5%)	8 (38.1%)	同		
4 —	1 —	1 —	1 —	なし		
2 (15.4%)	8 (61.5%)	8 (66.7%)	10 (100%)	唇音	(b) ハ行音の 音声	
11 (84.6%)	5 (38.5%)	4 (33.3%)	0 (0%)	喉音		
8 —	15 —	11 —	12 —	なし		
20 (95.2%)	27 (96.4%)	14 (60.9%)	8 (36.4%)	○	(c) 拗音	
0 (0%)	0 (0%)	2 (8.7%)	4 (18.2%)	(なし)		
1 (4.8%)	1 (3.6%)	7 (30.4%)	10 (45.5%)	なし		
19 (90.5%)	25 (89.3%)	12 (52.2%)	11 (50.0%)	○	(f) 撥音	
2 (9.5%)	2 (7.1%)	9 (39.1%)	7 (31.8%)	(字)、(音)		
0 (0%)	1 (3.6%)	2 (8.7%)	4 (18.2%)	なし		
20 (95.2%)	15 (53.6%)	7 (30.4%)	6 (27.3%)	○	(g) 促音	
1 (4.8%)	9 (32.1%)	12 (52.2%)	8 (36.4%)	(音)		
0 (0%)	4 (14.3%)	4 (17.4%)	8 (36.4%)	なし		
8 (38.1%)	3 (10.7%)	1 (4.3%)	1 (4.5%)	○	(h) 長音	
9 (42.9%)	8 (28.6%)	6 (26.1%)	9 (40.9%)	(符)、(音)		
4 (19.0%)	17 (60.7%)	16 (69.6%)	12 (54.5%)	なし		

数字は、(I)と(III)については、表四―二により(第四章三・二・二)、(IV)については、表五―一に挙げた略号の数を教

らはすには、ことさらに、こゝにかいたやうに、しるしを右傍につけ加へるのです。

(金井 01…八)

(V 11) またバ・ピ・ブ・ペ・ポの五音を半濁音と称し来たり。蓋しハ行とバ行との中間に位する音の意なるべし。然れどもこれはマ行音ワ行音等と同性質なる唇を用いて発する清音にして、ハ行音とは毫も似ざるものなり。却てバ行音を濁る時はバ行音となり、その間に清濁の關係あり。

(鴻巣 20…二四)

(c) の拗音は、ほとんどの口語文典で取り上げられている。文語文典では、拗音の数が非常に多いもの(一〇〇種、八〇種など)が多く見られたが、口語文典では、数が(三六種か、三八種か、四二種か)にほぼ固定してきている(ただし、小林 02 には八〇種、糸 02 には七二種挙げられている)。

(V 12) 拗音はカサタナハマラ七行アウオ三列及クワの二十二／濁拗音はガザダバ四行三列及グワの十三／半濁拗音はバ行三列の三／計三十八

(三矢 08…一〇)

(f) の撥音も、ほとんどの口語文典で取り上げられている。撥音を取り上げていない二つの文典(林 07、小林 22)では、これを、子音分類の「鼻音」として、m(マ行子音)・n(ナ行子音)・ng(ガ行鼻音の子音)に分析・解消している。

(g) の促音も、ほとんどの口語文典で取り上げられている。これにも、調音による分類が見られるが(鈴木 04、臼田 09、本多 10、小林 22、松下 24、それによって、サ行子音の前の「ッ」(s)を促音と認めないものや、逆に、サ行子音の前の「ッ」のみを促音と認めようとするものなどが見られる。

(V 13) いっせん(一銭) はっ艘／などわ、ちヨツとすると、促音と間違えられそであるけれども、決して混同してわならない。「中略」こゝの「ッ」わ、摩擦音であって決して中止の音でわない。

(V 08) (舌根) (舌尖) (唇) (三矢 08…一一)

口音 無聲音 開通音・摩擦音…ハ行(H) ……サ行(S) ……フア行(PH)

(本多 10…六一)

(V 09) 現今に於いては、「しゃ」「しゅ」「しょ」は「Sha」「Shu」「Sho」の如く、「ちゃ」「ちゅ」「ちょ」は「Cha」「Chu」「Cho」の如く、「じゃ」「じゅ」「じょ」と「ぢゃ」「ぢゅ」「ぢょ」は何れも「Ja」「Ju」「Jo」の如く発音される。かやうの発音に成れば、最早拗音ではなく、直音である。

(臼田 09…二五)

V 09 は、サ行、タ行、ザ行に関するものであるが、ここで述べられている考えを敷衍すれば、サ行、タ行、ザ行とは別に、「Sh」を頭音とする行(シャ行)、「Ch」を頭音とする行(チャ行)、「J」を頭音とする行(ジャ行)が設けられうる。

(c) の濁音と(d) の半濁音とは、すべての口語文典で取り上げられている。ただし、とくに半濁音(バ行音)については、その名称や分類にさまざまなものが見られる。音声学の知識や音韻変化の知識の広まりにより、文語文典で主流であった、「半濁音」とは、清濁二者の間のこゑなり。こは、吾が邦、固有の音にあらず。漢音・梵語の渡来後出で来たものなり。」(下田歌子『女子普通文典』一八九九・九)というような見方は減り、次のようなとらえ方が増えている(このような見方は、一部の文語文典にも見られる(第四章三・二・三))。

(V 10) 又、バピブペポをむかしから半濁音などゝ唱へて居りますが、これは、くづれた音でも、又くづれかかった音でもなく、本来の音であります。今のハヒフヘホがもとはバピブペポに発音したのです。それを、時代のうつるとともに、いつしか喉音に転じてしまつたものですから、本来の唇音をあ

うな記述が見られる。

(V 15) 子音が、時として、母韻と結合しないで、単独に用いられることがある。即ち／n, f, b (hの誤りか)・k, s, sh, ch, ts, r, /などで、これわ、もと、母韻「i」或わ「u」と結合して、一つの綴音お成したものであったのが、今わ、その母韻のひゞきが、聞えなくなったものである。

(鈴木 04…二二)

(V 16) 標準的の五つの母音のほか以上の数種を初め各地方に行はれる種々の母音を数えると、十種以上あるひは十三種に上るかも知れない。

(小林 22…七一)

V 15 は、「母韻のひゞきが、聞えなくなつたもの」(母音の無声化)を、「子音が、時として、母韻と結合しないで、単独に用いられる」ととらえている(母音の無声化については、ほかに、小林 22、松下 24で触れられている。V 16 は、「各地方に行はれる種々の母音」(異なる言語体系の母音)を合わせて、母音の種類として数えている。これらを見ると、音声学的に精密になったために、かえつて、(五十音図に基づいて、音韻としてまとめる場合に比べて)体系的な整理がしにくくなっているようにも見える。

口語文典には、音をとらえるレベルを分けることによって、日本語音を体系的に整理しようというものも見られる。松下大三郎は、「文法学と一般声音学とは声音の取扱方が違ふ。」として、「五十音図は音の文法学的行列図であつて声音学的行列図とは違ふ点がある。」「五十音図は声音学的に云へば行列が整はないが文法学的に云へば井然たるものである。」と述べ(松下 24…五、一一、一三)「声音」に「声音学的音価」と「文法学的音価」という二つのレベルを認める。

(V 17) 「つ」は声音学的にはツア行であるが、文法学的にはタ行ウ列である。行力——行ク、立タ——立ツ、カ・ク・タ・ツである。羅馬字では E である。

(V 14) ケツサン(決算) イツシン(一新) イツスン(一寸) / などといふ場合は、決して発音機関を密閉することなく、唯、其の発声の通路を狭くするのみなり。されば、これ等をこそ真の促音と称すべけれ。

(鈴木 04…二六)

(本多 10…六三)

(h) の長音は、口語文典においても、音韻として認めるものは、それほど多くはない。しかし、今日の音韻論でも、長音(あるいは、引き音)を音素として認めない(連母音などとして解釈する)説も有力であり、このゆれは当然だといえるかもしれない。

### 三 口語文典の音声分析

口語文典では、文語文典(のみの時代)に比べて、言語音について、音声学(「声音学」)的な分析が詳しくなり、また、通時的な変化についても知識が深まっている(とくに小林 22や松下 24には、精密な音声観察が見られる)。それによつて、前節で見たように、五十音図で同行音とされていたものが別に扱われたり(ハ行音など)、一つの音とされていたものが、いくつかの音に分けて扱われたりすること(撥音や促音)なども起こっている。とくに子音(「父音」、「発声」、「子音」)については、ローマ字を用いて説明を行っている文典で、その種類にばらつきが見られる。たとえば、鈴木 04の「子音」は二〇種類(k・g・ng・s・z・sh・zh・t・d・ch・ts・n・h・f・p・b・m・y・r・w)、林 07の「発声」は一九種類(k・s・sh・t・ts・ch・n・f・h・m・y・r・w・p・g・z・d・b・ng)、白田 09の「父音」は二二種類(K・S・Sh・T・Ch・Ts・H・F・P・G・Z・Zh・D・Dj・Dz・B・Y・R・W・N・Ng・M)である。また、母音に関しては、次のよ

い)。いずれにしても、この時期に、音楽につながる考えが生まれていたということはいえるであろう。

松下は、ほかに、音のまとまり、音の長さに関して、「音節」と「音長」という二つのレベルを設けている。「音長」は、モーラ（拍）に当たる概念を表すもので、音のまとまりを示す単位（音節）と、音の長さを表す単位（音長）＝モーラ」とを分ける考えがここに見られる。

（V 19）氣息の「努力に由つて発せられる声音の一煽りを一音節と云ふ。「あーも」「あー」「あつ」「あん」「あーん」「あーつ」「あーん」「あい」「あお」「あう」なども皆一音節である。／音長は音の長さの単位であつて、一音として耳に感じ得べき最短の長さである。例えば、「あ」は一音長である。「あー」「あつ」「あん」「あい」などは一音節でも二音長である。「あーん」「あーつ」などは三音長である。

（松下 24…五）

また、阪本芳太郎は、日本文典に多く見られる、『母音』（ア行音）と『父音』（子音）とで『子音』（カ行以下の音節）ができる」という見方を改め、「声音」を「原素」と「成熟音」という二つのレベルに分け、「原素」に「母韻」と「父韻」とがあり、「成熟音」に、「母韻」のみからなる「母音」と、「父韻＋母韻」からなる「子音」とがあるというとなえ方を示した。

（V 20）音即成熟音      母音      単に母韻の成熟したもの、      例      アイウエオ  
子音      父音、母韻の合してなれるもの、      例      カサチシヒムル  
成熟音の原素      母韻      例      A i u e  
父韻      例      r r m m

【註】母音と母韻との区別は、／母音は母韻の成熟したもの、即一の独立した声音である。／母韻は父音の片相手となつて成熟音をくつる一原素である。

（阪本 07…一七）

「声音的音価」は（音声学的な）音声、「文法学的音価」は（音韻論的な）音韻（音楽）に近いものである。さらに、松下は、「声音学的音価＝文法学的音価」のものを「実音」、「声音学的音価＝文法学的音価」のものを「仮音」と呼んでいる。これらは、（後の）音韻論の異音に当たるものと思われる。（「仮音」は、さらに、「一般性仮音」と「特殊性仮音」という、後の「条件異音」と「自由異音」にやや近いものに二分されている）。

（松下 24…一二）

（V 18）サ行のイ列はㄱをㄴとして用ゐるので之をㄴの仮音といふ。声音学的にもㄴであるならば其れは実音である。又「シ」はサ行イ列の音としては仮音であるがシア行のイ列としては実音である。仮音とは声音学的に然らざるものを文法学的に然りとする音を云ふので、喩へば養子の子孫なものである。血統の上からは子ではないが人倫並に法律の上からは子として取扱はれる。

これらの仮音は、言語は之を実音と同様に取扱つて居るので説話者は実音の積りで用ゐて居るのである。其れが実音と異なるものであることは声音学者だけが知つて居るのであるから、羅馬字で日本語を記載するに当つて一々声音学的に発音のまゝを書くといふことは一般人には到底出来ないことであるし、且つ却つて言語の組織を破壊することになるから、仮音文字は実音の文字と同じ文字を用ゐるべきである。多数の仮音の中自分が偶知つて居るものだけを声音通りにして「し」をㄴと書いたりするのは愚かなことである。

（松下 24…二一、一六）

なお、この時期、すでに神保格が『音楽』に類似の概念に到達している（服部一九六五…一〇）が、神保のものは、「具体的単音」に対する「抽象的単音」（多くの人が多くの場合に発する音声に共通な固有的性質のみを取り出して考へたもの）（神保一九二二・四八）であり、松下の、「声音学的音価」に対する「文法学的音価」とは、とらえ方が異なる（「文法学的音価」は、「実音」として実現することがありうる点で、「抽象的」とはいえな



第五章では、明治後期・大正期の口語文典（日本語口語文法書）に見られる音韻観を探った。

一 はじめに

ここでは、明治三四（一九〇一）年～大正一四（一九二五）年に刊行された、二種類の口語文典を対象とし、それらにおける、音韻（「声音」）に関する記述について調べた。

二 口語文典の五十音図観

口語文典では、五十音における理念的な音声（ア行音とワ行音との区別、ア行の「イ・エ」とヤ行「イ・エ」との区別、唇音としてのハ行音など）は認めない（実際の音声に従う）ようになった。また、五十音以外の音（濁音、半濁音、拗音、撥音、促音、長音など）を、はっきりと日本語音として認めるようになった。

三 口語文典の音声分析

口語文典では、西洋由来の音声学の影響により、音声学的な分析が精密になった。このことによって、かえって日本語音の体系的な整理がしにくくなったが、これを、音をとらえるレベルを分けることによって、整理しようという試みも現れた。たとえば、松下大三郎は、「声音」（音声）に「声音学的音価」と「文法的音価」という二つのレベルを認めている。このうちの「文法的音価」は、現代音韻論の音韻（音素）に近い概念のものである。

四 おわりに

大正期には、「音韻」に代わり、「声音」が主に使われるようになった。「音韻」は、昭和になって、「音韻論」の用語として使われるようになる。

#### 【第五章の参考文献】

神保格（一九二二）『言語学概論』岩波書店

「原素」は、音素に当たる概念であり、「成熟音」は、音節に当たる概念である。母音（母韻）に二つのレベルを認めたことで、それまでの「母音＋父音＝子音」という見方ではあいまいになっていた、音節（成熟音）の概念が明確になっている（それまでは、「母音」のみの音節というとなえ方があまり見られなかった）。

#### 四 おわりに

「音韻」という語は、大正期の口語文典には、あまり現れず、代わりに、「声音」が使われるようになっていく。「音韻」が現れるのは、大正期の四文典中、一文典（荒瀬25）のみであるが、「声音」は、四文典すべてに見える（「音声」は、現れない）。明治後期の口語文典では、「音韻」が、「声音」や「音声」とともに使われている（明治後期の二七文典中、「音韻」は一〇文典に、「声音」は八文典に、「音声」は三文典に見られる）。

『日本国語大辞典 第二版』によれば、今日の言語学的な意味での「音韻」（④言語学で、具体的な音声から音韻論的な考察を経て抽象された言語音をいう。）の、初出例は、金田一京助『国語音韻論』（一九三二）の「この抽象された音声観念が即ち言語学上音韻と呼ばれて、言語の形式を為す所のものである」である（同書は、大西雅雄『音声学史』（一九三四）の年表における、「音韻論」という名称をもつ唯一の著作であり、また、国立国会図書館の蔵書検索の結果でも、「音韻論」という名称をもつ最も古い書籍である）。先に見たように、大正期の口語文典には、これに近い考え方が見られるが、（現代）音韻論や、その単位である「音韻」（音素）の考え方が（日本に）本格的に導入されるのは、これより少し後の時期である（第二章五・二参照）。

#### 【第五章のまとめ】

## 第六章 漢語音韻学における「音韻」

### 一 はじめに

本章では、日本語の音韻研究に大きな影響を与えてきた、中国語における歴史的・伝統的な音韻研究（漢語音韻学）における「音韻」と、その研究について見ていく。併せて、漢語音韻学と、日本漢字音研究や漢字学習とのかかわりについても考える。まず、第二節で、漢語音韻学における「音韻」について概観し、第三節で、漢語音韻学と日本漢字音研究の歴史的発展について概観する。次いで、第四節で、漢語音韻学を学ぶ目的や効用について述べ、第五節で、漢語音韻学の知識が（とくに中国語を母語とする日本語学習者における）現代日本語の漢字学習にどのように応用できるかについて考える。

### 二 漢語音韻学における「音韻」

#### 二・一 漢語音韻学

現代日本語において、「音韻」は、規範（辞書）的には、①「中国語で、漢字の音（語頭の子音）と韻（語尾の母音・韻尾）」、②「具体的に発音された一つ一つの音声から抽象され、記号として表される最小単位の言語音」を意味する『明鏡国語辞典 第二版』（大修館書店、二〇一〇）「音韻」。小型の学習国語辞典には、「音韻」に、この二つ（相当）の意味が挙げられていることが多い。しかし、実際に現代日本語の書き言葉について調べてみると、②の意味の用例は多く見られるが、①の意味の用例はごく少数しか見られない（これ以外に、「詩や文章に

服部四郎（一九六五）「日本の記述言語学（一）」『国語学』六二 国語学会  
服部隆（二〇一七）『明治期における日本語文法研究史』ひつじ書房

【第五章の使用データベース類】（ウェブの閲覧は、二〇一七年八月〜二〇一七年一〇月）  
「国立国会図書館デジタルコレクション」国立国会図書館 <http://dl.ndl.go.jp>

する以前に、すでに非常に高いレベルに達していたが、具体的な「音値」の研究は二〇世紀初めにヨーロッパから言語学の方法がもたらされて以降、進展したという（施二〇〇八：二九二）。王（二〇〇七：七三）は、「声韻学」（漢語音韻学）を、カールグレン（Bernhard Karlgren、中国名は「高本漢」）の『中国音韻学研究』（一九一五）と一九二六原著（フランス語）、一九四〇中国語訳、商務印書館。ヨーロッパの比較言語学的手法を用いて、中国語の中古音（隋代長安音を想定している）を再構した歴史的大著。この中国語訳では、*valeur* が「音値」、*phonème* が「音、音類」と訳されている）以前のもの（旧典範）と、それ以降のもの（新典範）とに分け、前者の「方法」を「求音類」（音類を求める）、後者の「方法」を「求音値」（音値を求める）としている（前者は「伝統音韻学」、後者は「現代音韻学」と呼ばれることが多い）。

## 二・二 「音韻」

さて、漢語音韻学における「音韻」は、「又名声韻。漢語語音声母、韻母、声調三要素の総称。」（別名「声韻」。中国語音の声母・韻母・声調の三要素の総称。）『中国語言文字学大辞典』（音韻）である。現代の漢語音韻学において、「音」と「韻」とは、それぞれ、「字音」（音節）と「韻母」を指すとされることが多い。「声・韻・音」などの用語は、古くは、人によって使い方がまちまちで、その表す概念もあいまいだったが、林尹『中国声韻学通論』（一九三七初版。漢語音韻学の初期の教科書の一つ。一九八二修訂増註版、黎明文化事業）が、その師である黄侃（清代末く民国初めの音韻学者）の「声韻通例」（一九二〇）にある「凡声与韻相合為音。凡音歸本於喉謂之韻。凡音所從發謂之聲；有声無韻、不能成音。」（凡そ声と韻と相合して音を為す。凡そ音の本に喉に於いて帰する、之を「韻」と謂う。凡そ音の從りて発する所、之を「声」と謂う。声有りて韻無くんば、音を成すこと能わず。）（陳新雄『重校増訂 音略証補』文史哲出版社、一九七八：一）を踏襲して、「音」、「韻」、「声」を定義し

おけることばのひびき」などを表す用例も見られる。第二章三・二。語誌的には、①の意味が②の意味に先行するようであるが、今日では、専門の著作を除いて、「音韻」が①の意味で使われることは少ないようである。たとえば、『朝日新聞記事データベース』（聞蔵Ⅱビジュアル）を用いた調査では、一九八五～二〇一五年の『朝日新聞』に現れた「音韻」の用例（固有名詞・複合名詞を除く）一〇八例のうち、①の意味に当たるものは二例のみであった（第二章三・二）。漢語音韻学における「音韻」は、この①の意味での「音韻」である。

漢語音韻学とは、「中国伝統語言学的一个分支。它是分析研究各個歷史時期漢字字音的声、韻、調系統及其歷史變化的一門科学。」（中国伝統語言学の一分野。これは、各歴史時期における漢字字音の声母・韻母・声調の系統、およびその歴史的变化を分析・研究する科学である。）『中国語言文字学大辞典』（中国大百科全書出版社、二〇〇七）『漢語音韻学』である。なお、中国語は、基本的に、「一形態素＝一音節＝一漢字」であり、一漢字の字音（一音節）は、「声母」（頭子音、「声」）・「韻母」（頭子音以外の部分、「韻」）・「声調」（音の高低昇降、「調」）に分析される。二〇世紀前半における中国を代表する言語学者の一人である羅常培は、一九三五年に、これを「漢語音韻学就是分析漢字或漢語裏所含『声』『韻』『調』三種元素，而講明他們的發音和類別，並推究他們的相互關係和古今流變的。」（漢語音韻学は、漢字あるいは漢語に含まれる『声』・『韻』・『調』を分析して、それらの発音と類別とを明らかにし、また、それらの相互関係と歴史の変遷とを追究するものである。）（羅一九七八：一五七）としている。この説明の中の「発音」と「類別」とは、今日では、それぞれ、「音値」と「音類」と呼ばれることが多い。「音値」は音声学の音価（*value*）に当たり、「音類」は音韻論の音素（*phoneme*、中国語では「音位」）に近い概念である。ただし、「音類」は、時代や地域を越えた、「漢字」の共通性に基づく類別であり、ここに漢語音韻学の「特色」がある（藩二〇〇四：一八）。藩（二〇〇四：一五）は、「音類」を漢語音韻学における「基本単位」であるとし、「音類」と「音値」との関係を「漢語音韻学研究的一个永恒的主题」（漢語音韻学研究の永遠のテーマ）としている。中国の音韻研究の歴史において、「音類」の分析は、ヨーロッパの近代的な言語学が伝来

刊本江湖集鈔』一（一六三）の「音韻は体用也。吹出す処が音也。それより色々に分て出る処が韻ぞ」を挙げている。同辞典は、「採用する出典・用例」について、「その意味・用法について、もつとも古いと思われるもの」（凡例）を採用する方針をとっており、同辞典では、この例を、「音韻」が「音と韻」（すなわち、声母と韻母）を意味する「もつとも古いと思われるもの」としているようである。しかし、釘貫（二〇七・三五）によれば、これより早く鎌倉時代に、天台学僧（悉曇学者）である承澄や信範らが、「音」と「韻」とを「具体的かつ規定的に」分析しており、「音（声母）＋韻（韻母）」を表す「音韻」は、鎌倉時代にはすでに使われていたようである（釘貫二〇七・三五には、信範の『反音抄聞書』に見える「音韻」の例が挙げられている）。

ここまで見てきたように、現代中国語と日本語とは、「音韻」の「音」が何を指すか（「字音」（音節）か、「声母」か）が異なっている。しかし、日本語に見られる「音」が「声母」を指す用法は、もともと中国から伝わったもので、中国の専門語辞典などにも記述が見られる。たとえば、『中国語言文字学大辞典』の「音」（語義①）には、「指声母或声類。如宋邵雍《皇極經世・声音唱和図》将声母（声類）分為12大類152音。」「（声母）あるいは「声類」を指す。たとえば、宋の邵雍『皇極經世・声音唱和図』は、声母（声類）を12大類152音に分けている。」とあり、『伝統語言学辞典第2版』（河北教育出版社、二〇一〇）の「音韻」（語義①）には、「旧以為『音』指『声成文』、『韻』指『声音相和』、今人亦多以『音』指声母、以『韻』指韻母。」「（古くは、「音」は「声文を成す」ものを指し、「韻」は「声音相和す」ものを指すとされた。今の人は、また多く「音」で声母を指し、「韻」で韻母を指す。）とある。また、漢語音韻学の概論書では、林燾・耿振生『声韻学』（三民書局、一九九七。台湾で出版された、中国の音声学者による教科書。二〇〇二修訂簡体字版『音韻学概要』商務印書館）に、「音、有時指声母、如『五音』。」「（音）は、ときに声母を指す。たとえば、「五音」（調音部位の違いによる五種類の声母）のように。」（三民書局版六二ページ）とあり、劉綸鑫『音韻学基礎教程』（中国社会科学出版社、二〇〇二）に、「音韻学又叫声韻学。其中的『音』、『声』都指声母；『韻』对『音』、『声』而言，指漢語單字音節中除了声母之外的部分。」

た（九ページ）。今日では、これに従った使い方が一般的になっている。たとえば（少し古いが）、王文瀾『実用声韻学』（台湾商務印書館、一九七二）には、「一個字的總音，叫做『音』。構成『音』的元素，叫做『声』和『韻』。」「（一つの字の字音全体は、「音」という。「音」を構成する要素は、「声」と「韻」という。）」（九ページ）とある。なお、今日一般的に使われる「声母」、「韻母」という語は、一九一八年に中華民国教育部が公布した「注音字母表」で用いられてから、音韻学の用語として使われるようになったようである（ただし、同表では、「介音」の、*i*、*u*、*ü*は別扱いになっている）。この両語（に相当する概念）については、一九一三年に教育部の読音統一会が「国音字母」を定めたときには、それぞれ、「母」と「韻」とが使われていたが、その後、「声母」と「韻母」とに改められた（『東方雜誌』一九一四年三月号の邢島「読音統一会公定国音字母之概説」では、「韻」と「母」とが使われ、同誌一九一六年二月号の詹父「論国音字母」では、「韻母」と「声母」とが使われている）。一方、日本では、「音韻」における「音」と「韻」とは、それぞれ、「声母」と「韻母」を指すとされることが多い。先に学習国語辞典（『明鏡国語辞典第二版』）の意味記述を挙げたが、ほかに、たとえば、『言語学大辞典第六卷 術語篇』（三省堂、一九九六）では、「音韻」について、次のように述べている。

「音韻」は元来、古典的な中国語の語である。古い中国では、1音節の音形の分析で、その音節の頭子音（ゼロの場合も含めて）とそれ以降の音（介母音・中心母音・末音／声調）に二分する方法がとられた。そして頭子音を「音」といい、それ以降の音を「韻」とよんだ。韻は語の脚韻になりうるものであった。さらに、古典中国語では「大小」とか「天地」とかのように相対立する概念を表わす語を連ねて、その対立を超えた総称的な概念を表わした。たとえば、「大小」は、大きさ、を示す。「音韻」も同様で、個別的には対立する概念、頭子音と然らざるものを表わすが、「音韻」と連ねて言うとき、言語音全体を示した。（同辞典「音韻論」この意味の「音韻」の例として、『日本国語大辞典 第二版』（小学館、二〇〇〇～二〇〇二）「音韻」の語義③「漢字の表わす一音節の頭初の子音とそれを除いた後の部分。音（声母・頭子音）と韻（韻母）。」では、『寛永

たが、最近の数十年は、この学問分野を「音韻学」と呼び習わしている。」と述べ、また、「中国音韻学」という名称は、中国が「多民族国家」であり、「漢語」以外にも多くの言語があるという点から不適当であり、「漢語音韻学」と呼ぶべきだとしている（一ページ）。なお、王力『中国音韻学』（一九三五初版、カールグレンの学説をほぼ全面的に取り入れ、漢語音韻学の学問体系化をめざした古典的著作）は、同様の理由から、後に『漢語音韻学』中華書局、一九五五と改題されている（新版自序「一ページ」）。このように、今日の中国では「漢語音韻学」という名称が一般的になっているが、台湾では「声韻学」の名称がよく使われている。これについて、竺家寧『声韻学』（一九九一初版、台湾における代表的な教科書の一つ。一九九二第二版、五南圖書出版）は、「漢語」は「国内」向けには省略可能で（教育部のカリキュラムの「標準名称」も「声韻学」であり、「漢語」は付いていない）、「声韻」の「韻」（韻母）には「声調的区別」が含まれるとして、この学問分野を「声韻学」と呼ぶとしている（三ページ）。台湾では、日本でいう「音韻論」(phonology) 中国では「音系学」(phonemics) の訳としては「音位学」を「音韻学」と呼ぶことが多く、これとの区別のために「声韻学」が使われるということもあるようである。声韻学と音韻学との関係について、何大安『声韻学中的觀念和方法』（一九八七初版、台湾で出版された、「言語研究の入門書」ともいふべき教科書。一九九三第二版、大安出版社）は、「声韻学」を中国語の「音韻学」(phonology) であるとし、「音韻学」就是对語音訊号運用規則的説明和研究。声韻学既然是漢語音韻学，它的任務就是要説明漢語语音運用的規則，以及這些規則的來竜去脈。」（音韻学とは、言語音記号が規則を適用することについての説明と研究である。声韻学は漢語音韻学（中国語音韻学）であり、その役割は中国語音が適用する規則、およびその規則の由来・変遷を説明することとなる。）（九ページ）と述べている。

以上見てきたことを、図五——にまとめておく。

「音韻学」は、また「声韻学」という。この中の「音」と「声」は、いずれも声母を指す。「韻」は、「音」「声」に対していい、中国語の単漢字の音節のうち、声母を除いた部分を指す。」（前言「一ページ」という記述が見られる。

### 二・三 「漢語音韻学」、「中国音韻学」、「声韻学」

ところで、漢語音韻学は、日本では「中国音韻学」と呼ばれることが多い。たとえば、辞典では、『言語学大辞典第六卷 術語篇』に「中国音韻学」が立項されており、書籍では、河野六郎『中国音韻学論文集』（平凡社、一九七九）、李思敬（慶谷寿信・佐藤進編訳）『音韻のはなし…中国音韻学の基本知識』（光生館、一九七八）、遠藤光暁『中国音韻学論集』（白帝社、二〇〇二）、大島正二『唐代の人は漢詩をどう詠んだか…中国音韻学への誘い』（岩波書店、二〇〇九）などで、書名（表題・副題）に「中国語音韻学」が使われている。これは、インド由来の梵語（サンスクリット語）の音韻研究である「インド音韻学」（悉曇学）や、日本語の音韻研究である「日本音韻学」（日本韻学）に対応した名称となっている。

中国では、漢語音韻学は、「中国音韻学」のほか、「声韻学」とも呼ばれる（古くは「韻学」、「音学」などとも呼ばれた）。これらの名称について、董同龢『漢語音韻学』（一九五四初版『中国語音史』カールグレン以降の研究成果を総括した漢語音韻史の「入門」書。一九六八増補改題版、文史哲出版社）は、名称としては「漢語音韻学」が最もよく、「中国音韻学」を用いてもよいが、「声韻学」については、「漢語」という限定がない点と、「声韻」（＝声母＋韻母）に「声調」の概念が含まれない点で、最も不適当だとする（二ページ）。また、龍吳騰『基礎音韻学』（巴蜀書社、二〇〇三）は、「過去曾有過『音韻学』与『声韻学』哪個名称更確切的爭論，但最近幾十年人們都習慣把這個科稱為音韻学。」（かつて「音韻学」と「声韻学」のどちらの名称がより適切かの論争があつ

おける音韻研究は、漢字の表す音節を声母と韻母とに分析することから始まったが、これは、具体的には、一つの漢字の音を二つの漢字で表す「反切」として起こった（たとえば、「東」の音は「徳紅」で表される。「徳」の声母と、「紅」の韻母 *u* を合わせると、「東 *tu*」の音になる（*u*）は「*u*」の後ろの寄りの音）。反切の起源には諸説あるが、古くからの説として、インド（サンスクリット語（梵語）の影響を認めるものがある。現代の学説としては、仏典の翻訳を通じて、梵字のつづりの原理から啓発を受けたとする説と、中国語における音変化による語形成が内的要因となり、梵字や西域文字のつづりの原理の影響が外的要因となったとする説が有力なようである（傳二〇三・五）。

なお、音韻学的な意味を表す「音韻」の現れる最も古い文献は、顔之推『顔氏家訓』（六〇〇頃成立）だと思われる（汪寿明選注『中国歴代音韻学文選』（華東師範大学出版社、二〇〇三）は、その最初に『顔氏家訓』を挙げている）。同書の巻下「音辞篇」には、「自茲厥後、音韻録出、各有土風、遽相非笑、」（茲（三国の魏の時代）より厥の後、音韻録に出で、各々土風（土地の風）有り、遽に相非笑（非難嘲笑）す。）、「李季節著音韻決疑、時冇錯失：陽休之造切韻、殊為疎野。」（李季節、『音韻決疑』を著すも、時に錯失（誤り）あり。陽休之、切韻（反切）を造るも、殊に疎野（粗野）為り）などの用例が見える。これらの「音韻」は、具体的には「反切」を指すとされる（李一九八・四七）。

さて、中国の音韻学は、漢字音（中国語音節）の分析を精密化させる方向で進展してきた。施（二〇〇八・二八八）に従えば、中国語音節の「最小構成要素」「最小構成要素」を求める研究は、漢字の発音を反切によって示すようになった「反切時期」（音節は「声母・韻母」に二分される）から、「四声」（声調）が発見されて、四声に応じて分巻した「韻書」（一種の発音辞典）が作られるようになった「韻書時期」（音節は「声調・声母・韻母」に三分される）、「字母等呼」（字母）は声母、「等呼」は韻母の口の開き方などによる分類 による「等韻図」（音韻を体系的に示した図表）が作られるようになった「等韻時期」（音節は「声調・声母・介音（半母音）・韻」に

図五― 漢字音（中国語音）の構成要素の略称と研究分野名

日本語で	声母	字音（音節）		研究分野
		韻母	声調	
中国語で	音	韻		音韻学
主に台湾で	声	韻	調	音韻学
主に台湾で	声	韻		声韻学

三 漢語音韻学の発展と日本漢字音研究

三・一 漢語音韻学の発展

日本における音韻研究は、中国における音韻研究の影響を強く受けて発展してきたが、実は、中国の音韻学も、外来文化（外国語の文字）の影響を受けて発展してきたとされる。「音韻の概念は、表記（特に音素文字）に影響を強く受けることがある」（『言語学大辞典第六巻 術語篇』『音韻』）とされるが、中国語の文字である漢字は「表語文字」（形態素＝音節文字）であり、言語音の分析・記述には適さず、「中土の如きは。其尚ぶところ文字にありて。音韻の学の如きは。西方の長じめるに及ばず。」（新井白石『東雅』一・総論（Ⅲ 46））であった。中国に

は忘れられて漢字音を手掛かりにして研究するようになり、漢字音韻学もまた和化した漢字音について研究することになって、これら二つの音韻学の混交が始まり、「一種独特な学問」である「日本韻学」が起ったという。

日本における音韻研究は、五十音図を基礎に行われていった。五十音図の起源および目的については、悉曇を起源とする説、反切のためのものとする説、日本語の音韻組織表であるとする説など、諸説あるが（森岡一九九〇：二三、二七）、今日では、「悉曇学と漢字音韻学の二方面から発生し、両方の機能が平安時代末に一緒になって定着した」（馬淵一九九三：一七七）といった見方が有力なようである。五十音図は、早くから日本語に見られる諸現象を説明するのに使われたようであるが（五十音図の「発明者」にも擬される明覚（平安時代後期の悉曇学者）が「日本語の説明原理として音図を定着させた」（森岡一九九〇：二八）とされる）、江戸時代になって、日本語研究がさかんになると、「国語の音韻組織図」（馬淵一九九三：六二）として、ますます活用されるようになっていった（この傾向は明治以降も続く。第四章三・一・二）。

また、等韻学については、最初期の代表的な等韻図（韻図）である『韻鏡』（唐代末く五代ごろに成立した、切韻系韻書を反映する韻図。南宋の張麟之により一一五一初刊）が鎌倉時代に日本にもたらされ、悉曇学者の信範によって読解・研究されたことで、日本では、『韻鏡』に基づく漢字音研究（韻鏡学）として結実していった（なお、『韻鏡』は、中国では、早くに佚書となっていたが、清代末（明治中期）に日本から逆輸入され、その後、等韻学における最重要資料の一つとなっている）。韻鏡学は、とくに江戸時代に発展し、漢字音組織の探求から字音仮名遣い（漢字音に関する歴史的仮名遣い）の認定へと研究が進んでいった。

ここで、江戸時代の代表的な音韻研究の著作から、『韻鏡』や悉曇学の価値に言及している箇所を、いくつかを挙げておく。

（VI 01）仮名の様を知らむと思はゞ。先声の出る初の様を知へし。もろこしの韻字はすべて知侍らず。天竺の悉曇も。わづかに梵字をかくやうを習ひたるばかりにて。はか／＼しき事は知侍らねど。此国は天竺

四分される、さらに、「等韻学」（等韻図を用いた音韻学）の探求が深まり、音節分析の精緻化・明晰化が進んだ「明清時代」（音節は「声調・声母・介音・韻腹（主母音）・韻尾（音節末音）」に五分される）へと、発展を続けてきた。音韻学の発展には、外来文化の影響が少なからず認められるようであるが（音韻学史上の画期をなす出来事（反切の出現、四声の発見など）に、それぞれ外来文化の影響を認める説（李一九九八）もある）、とくに、「等韻学」については、古くからインド音韻学（声明、悉曇学）の影響が指摘されている。羅常培（一九三五：三五）は、「印度梵語」の「最大の貢獻」として、「字母」と「等韻」の創造を挙げている。「字母」は、声母（子音）の音声学的観察に基づく分類・命名であり（清代の音韻学者には、これを認めず、梵語の影響を排除しようとする者もいた）、「等韻」は、「模仿梵文悉曇章的体制、以声為経、以韻為緯、把切韻的音系総撰為若干転図」（梵語の『悉曇章』（字母表）の体裁を模倣して、声母を縦列に、韻母を横列にとり、『切韻』（六〇一成立の韻書）の音系をまとめて、いくつかの「転図」（図表）にする）ものであり、「換言之、就是悉曇化的切韻音綴表（Syllabary）。它的作用和現代国音字母的拼音表跟日本語的『五十音図』是完全一樣的。」（言い換えれば、悉曇（梵語字母）にならった『切韻』の音節表（syllabary）である。その役割と現代の「国音」（中国語標準音）字母の綴り字表と日本語の「五十音図」とは、まったく同じものである。）（羅一九三五：三六）とする。

### 三・二 日本漢字音研究

さて、反切（漢語音韻学）と悉曇学（インド音韻学）とは、ともに平安時代の初めごろ、空海によって唐から日本に伝わり、ここから、日本における音韻研究が始まったとされる（馬淵一九八四：一五四、一七九、釘貫二〇〇七：二三）。これは、本来、中国語音および梵語音の研究であったが、やがて日本語に基づいた（五十音図を用いた）音韻研究となった。馬淵・出雲（一九九三：二六）によれば、中世以降、「悉曇学はもとのインドの発音

(VI 05) 音韻の書は数部ありといへども、簡便にして可解易きは、韻鏡にまさるものなし。其韻鏡は数版ある中にも、漢吳音図を最上と云べし。

(黒川春村『音韻考証』「皇国釈音 音韻考証凡例」一八六二成立)

字音仮名遣いの研究は、本居宣長『字音仮名用格』(一七七六刊)に始まるが、その方法は、「古書の用例に基づく帰納法を優先したという点からは、和訓の歴史的仮名遣いと同じ方向を目指したものと評価できるのであるが、全ての字の用例発見が不可能であるために『韻鏡』『広韻』等に基づく演繹論法によって補わざるを得なかった」(沼本二〇一四・五)というものであった。日本漢字音(各漢字の呉音や漢音)の認定は、長く、中国中古音の体系を伝える『広韻』(切韻系韻書)や『韻鏡』に基づく演繹的な方法によって行われるのが主流であった。それは、「主として、韻図を規範として、その縦横欄の枠内においては、斉一的な音形を採らしめようとするもの」で、「韻鏡を絶対視するもの」(高松一九八二・四)であった。今日では、利用できる古い文献資料が格段に増え、字音の認定は、用例中心に行われるようになってきているが、それでも、すべての漢字の音が実証的に確かめられるわけではなく、韻書や韻図による演繹的な方法の使用は欠かせない。日本漢字音の研究には、一切韻系韻書の反切によって推定される中国中古音(Ancient Chinese)の体系を基準として、掲出字と音注字との関係について整理・検討するという方法が一般的にとられている。(小倉一九九五・一六)のである。その際、中国中古音の音価としては、カールグレンによる推定(再構)音を一部修正したものが使われる。実際には、中国中古音(切韻系韻書)の音韻体系と、(用例から帰納される)日本漢字音(呉音・漢音)の母体となった音韻体系とは、ずれが見られるが(呉音には「方言的」なずれが、漢音には「音韻変化」によるずれが見られるという。沼本二〇一四・二九一)、「その整理の拠り所は、飽くまでも、韻書ではある。それは、彼我共に、その字音研究の出発点は、切韻音―広韻音であるからに外ならない。」(高松一九八二・五)とされる。

には遠ながら。声はかへりて能通じ。もうこしには。見花見月など。先用をいひて後に体をいふを。こゝには花を見る月を見るとやうに先体よりいひしかくさまも。天然に似たれば。是によりてだに。おろ／＼心得侍るやうを申べし。

(契沖『和字正濫鈔』巻一 一六九三成立、一六九五刊・三ウ)

(馬淵一九九三・五五によれば、この最初の部分は「実は謙辞」であるという)

(VI 02) (一部Ⅱ 31) 近世伝習ス中華ノ正音ヲ、当ニ称ス「華音」。俗称ニ謂ス唐音ト、其音也。呼法嚴如トシテ七音・四声・輕重・清濁・開口・合口・齊齒・撮口等ノ之条理分明ナリ也。正スニ「之」ヲ「韻鏡」ニ(二)、則如シレ合スルガ「符節」ヲ。故ニ字フ「音韻」者、必不レ可カラレ不レ由ラ「華音」ニ。字フ「華音」者、必ス不レ可カラレ不レ由ラ「韻鏡」ニ。「句読点は筆者」

(文雄『磨光韻鏡』下「韻鏡素隠」一七四四刊・六ウ)

(VI 03) 凡ソ音韻ヲ学バム者。必悉藝ヲ知ラズバアルベカラズ。世ノ韻学者タダ漢字ノ韻書ニノミ執滞セル故ニ天下ノ音韻ノ大体ヲ知ラズ。

(本居宣長『漢字三音考』「天然国ノ韻」一七八四序、一七八五刊)

(『漢字三音考』前川善兵衛、一九〇〇・六ウ)

(VI 04) 字音ヲ善知ントスルハ工ノ必先ソノ器ヲ利スルガ如シ。故ニ字音ヲ善知ンコトヲ思ハ、先音韻ノ原アルヲ知ルベシ。音韻ノ原ヲ知ルハ韻鏡ニ如クモノナシ。サレトモ音韻ノ学ハ蒙士曉リ難キヲ苦ミテ困ミ学フモノ鮮シ。

(太田全斎『漢吳音図』下「漢吳音図説」一八一五刊・一オ)



（講義の席）を忝うし、首す玄虚の談（わけのわからない話）を以て戒めと為す。」（王力『漢語音韻学』「自序」八ページ）、「声韻之学，「中略」不得其途徑，則旁皇岐路，莫知所歸，窮日累年，以思無益，難至皓首，終不能明。故以為神秘不可思議者有之，而穿鑿附會者亦有之。於是妄立名目，侈言是非，遂使後之學者，益迷惑而無所適從。」（「声韻の学，「中略」其の途徑（道）を得ずんば、則ち岐路に旁皇し（さまよい）、歸る所知ること莫く、日を窮め年を累ね、以て思うに益無く、難は皓首（老年）に至り、終に明らかにすること能わず。故に神秘不可思議と以為る者之れ有り、而して穿鑿附會（こじつけ）する者亦之れ有り。是に於いて妄りに名目を立て、侈増注版（三ページ）などある。この時期、羅常培は、その難解さの原因を、「（一）国字不適於表音」「漢字が表音に適していない」、「（二）名実の混淆（名実（用語）の混乱）」、「（三）古今音異」「古今の音の違い」、「（四）方言分歧」「方言の分歧」の四種に分類し、このそれぞれに応じて、「（一）審音」「音を審らかにする（音声を分析する）」、「（二）正名」「名を正す（用語・概念を明確にする）」、「（三）明変」「変を明らかにする（音韻の変遷を探究する）」、「（四）旁徵」「傍証する（現代方言や外国史料を参照する）」の四つを、問題を解決する方法として挙げている（羅二〇〇四：四八七）。

その後、上の（一）～（四）の研究は大きく進展したが、漢語音韻学は、今日でも、難解で何の役に立つのかよくわからない学問と思われているようである。これに関して、たとえば、台湾の学会誌では、「声韻学」（漢語音韻学）をどう教えたらいいかについての特集が組まれている（『声韻論叢』一五「專欄 声韻学教師教学工作坊」〔特集 声韻学教師の教育現場〕。そこには、「曾經聽一些學生說：『声韻学那麼難学，学過了一下子就還給老師啦！有甚麼用！』」（かつて何人かの学生が言うのを聞いた。「声韻学はなんて難しいんだ、勉強してもすぐに先生に返して（忘れて）しまふ。何の役に立つんだ。」（蔡二〇〇七：五五）や、「声韻学向有『絶学』之称，在中文系所設的課程中，声韻学通常是最讓學生頭疼的科目之一。」（「声韻学はかつて『絶学』の称があり、中国文学系が設け

このように、漢語音韻学の研究成果は（ほとんど中国中古音という共時的な体系に限られるが）、日本漢字音の研究の基礎となつて（ほかに、漢語音韻学の研究成果は、万葉仮名文献に現れた上代日本語の音価の推定などにも使われる。最近では、森博達『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館書店、一九九一など）。逆に、日本漢字音の資料や研究成果が、漢語音韻学の研究に利用されることもある。右に挙げたカールグレンによる中国中古音の再構には、中国各地の方言音（方音）のほかに、「域外方音（借音）」として、朝鮮漢字音・ベトナム漢字音とともに、日本漢音・日本呉音が利用されている（高本漢『中国音韻学研究』五四二ページ、耿二〇〇四：一八九）。また、近年の漢語音韻学の論考には、通時的（かつ地域縦断的）な研究に、日本漢字音資料を利用するものも見られる。たとえば、羅（二〇〇五）は、客家語（客家方言）の音層の分析（客家語の歴史の実態の解明）に、中国語方言音（福建省の閩南語文語音・浙江省の呉語音）などとともに、訓点資料に見られる日本漢字音（漢音・宋音）を利用している。なお、中国の『音韻学論著指要与総目』（作家出版社、二〇〇七）「下巻・音韻学論著総目・中古音研究」の「对音訳音研究」、同「近代音研究」の「对音訳音研究」には、（題名から判断して）日本語関係の著作（多くは日本人・日本語によるもの）が、一九八〇～二〇〇六年に限っても、それぞれ約四〇編、約八〇編挙げられている。

#### 四 漢語音韻学の効用

漢語音韻学は、古くから「絶学」（隔絶した学問、孤高の学問）や「読天書（天書を読む）」などと言われ、難解な学問とされてきた。漢語音韻学の初期（一九三〇年代）の教科書には、「自古治斯学者，輒故神其說，以自矜異，窃嘗病之。邇年忝在清華大学音韻講席，首以玄虚之談為戒。」（「古より斯の学（音韻の学）を治むる者、輒ち故に其の説を神とし、以て自ら異を矜る、窃かに嘗て之れを病む。邇年（近年）清華大学に在って音韻の講席

## 五 漢語音韻学と日本語漢字学習

さて、筆者は、漢語音韻学の知識は（必ずしも専門的に学ばなくても、中国語漢字音に関する知識があれば、日本語学習者（とくに中国語を母語とする者）が日本語の漢字音を学ぶのに役立つ場合もあるのではないかと考えている。それは、日本語と中国語（諸方言を含む）の漢字音とは歴史的関係があるため、その間に一定の規則的対応が見られるからである（これは、日本語以外の「域外方言」についても同様である）。少し専門的には、日本語の漢字音の音形には、漢語音韻学で重要視される、古い漢字音（中国語音）の特徴（とくに現代中国語（北方方言。以下、断りが無い限り、同じ）で、すでに失われてしまっているもの）を伝えるものが多く見られるということもある。これに関連して、王（二〇一五）は、台湾語（閩南語）と日本語との漢字音の対応を利用して日本語を学ぶ方法を紹介するなかで、「台語漢字亦相对保存各期中古漢音，此種相同或近似部分成為台員（台湾）河洛人和日本人所共同擁有之最珍貴文化遺產」〔台湾語の漢字も各時期の中国中古音を比較的よく保存しており、この種の（日本語と台湾語とで）同じ、あるいは似ている部分は、台湾の閩南人と日本人とが共通に持っている貴重な文化遺産となっている。〕（王二〇一五：一七一）と述べている。

さて、本節では、日本語に残る中古音の特徴（現代中国語で失われたもの）のうち、陳（二〇〇七：九）が取り上げている「平仄声調」「平仄」は、古い中国の声調（四声）における、「平声」と「仄声」（上声・去声・入声）との区分」と「尖团音」「尖音」と「团音」との弁別」を中心にみていく。

## 四・一 入声

ているカリキュラムの中で、声韻学がふつう最も学生を悩ませる科目の一つである。〕（王二〇〇七：七一）といった現場の声が載っている。

音韻学は、もともと「小学」と呼ばれる、中国の言語・文字を研究する学問（「文字、音韻、訓詁之学」）の一部門であった。「小学」は、本来「大学」に対する「貴族の子弟のための「初級学校」の意味であったが、前漢の劉向・劉歆（古文経学）の創始者）によって「文字学」の意味で使われるようになり、経書を中心に古籍の解釈を行うための学問として発展し、後に「音韻之学」もその中に含まれるようになった（胡二〇〇五：一）。

音韻学は、もともと古籍を読むための基礎学問であったが、現在でも、中国語圏の大学の中国文学系では、漢語音韻学（声韻学）は、古書の読解や古典文学の鑑賞のための基礎科目とされている。漢語音韻学（声韻学）の概論書（教科書）には、たいてい、この学問を学ぶ目的や用途（効用）について書かれている。たとえば、沈祥源ほか『實用漢語音韻学』（山西教育出版社、一九九二）は、「實用漢語音韻学的内容和功用」「實用漢語音韻学の内容と効用」として、「一、有利於學習和研究古代詩文」「二、古代の詩文を學習・研究するのに有利である」、「二、有助於文藝形式的發展」「三、文藝形式的發展に役立つ」、「三、有助於整理古籍」「三、古籍を整理するのに役立つ」、「四、有利於普通話的推廣」「四、普通話（標準語）の普及に有利である」、「五、有助於語言學的全面進展」「五、言語学の全面的な進展に役立つ」の五つを挙げている（八ページ）。また、陳（二〇〇七：四）は、先に挙げた学会誌の特集で、「効用」として（対象は、主に中国文学系の学生だと思われる）、（一）「声韻学有助於瞭解典籍」（二）「声韻学は典籍を理解するのに役立つ」、「（二）「声韻学可助弁識平仄声調有利於詩文創作」（三）「声韻学は平仄・声調を識別することの助け、詩文の創作に有利である」、「（三）「声韻学可幫助弁識京劇中的尖团音」（四）「声韻学は京劇中の尖音と团音とを識別するのを助ける」、「（四）「声韻学有助於詩文吟誦与賞析」（五）「声韻学は詩文の吟誦と鑑賞に役立つ」、「（五）「声韻学有助於瞭解声情的配合關係」（五）「声韻学は声と感情の配合關係を理解するのに役立つ」の五つを挙げている（このうち（二）と（三）については、次節でふれる）。

有利になると思われる（なお、大島二〇〇九・二九は、漢詩の平仄を見分けるのに、現代中国語音と日本漢字音を知っていれば、「鬼に金棒です。平仄を言いあてることができます。」と述べている）。

入声字は、日本漢字音では、（上に引用した『広辞苑 第六版』の説明にあるように）「ㄆ」（ㄆに由来。現代語では、長音が「ㄷ」になっている。「合」（ゴウ、ガツ）、「維」（ザツ、ゾウ）など）、「ㄷ」（ㄷに由来。「鉄」（テツ）、「発」（ハツ）など）、「ㄷ」（ㄷに由来。「吉」（キチ）、「八」（ハチ）など）、「ㄷ」（ㄷに由来。「各」（カク）、「服」（フク）など）、「ㄷ」（ㄷに由来。「駅」（エキ）、「式」（シキ）など）になっているため、その音形から入声字であることがわかる。表六―一に、入声字の見分け方のいくつかを、等韻学という「撰」（韻母のグループ）ごとにまとめておく。表に挙げたものは、日本漢字音の音形、広東語（粵語、入声を保存している中国語方言の一つ）の韻母、陳（二〇〇七・一〇）の「弁識的規則」、入声字に特徴的な主な形声音符（阿久津一九九八による）である（以下、中国中古音の推定音は、主に『広漢和辞典』大修館書店、一九八二によるが、一部表記を変えている）。

はじめに、「平仄声調」の「入声」を取り上げる。入声とは、『広辞苑 第六版』（岩波書店、二〇〇八）によれば、「漢字の四声の一つ。仄声に属する。p・t・kに終わる音節に特有の短促な音調。入声の字は日本の漢字音（旧仮名づかい）ではフ・チ・ツ・ク・キのいずれかに終わる。」「（イチ）・「十」（ジフ）などの類。入声は現代中国の北方方言では多く失われて平声・上声・去声と合わさり、南方方言では保存されている。」（同辞典「入声」）である。入声字を見分けることは、中国古典文学の学習・研究においては、漢詩の平仄・押韻に関係する重要な知識となる。陳（二〇〇七・九）は、「研読古典詩詞最煩人者、莫過於古代平上去入四声、与今陰陽上去之四声、不能完全密合。其中的緣故，就是因為國語（普通話）中入声消失了，分別變入陰陽上去各調中去了。而我們作詩填詞，所用的四声，是古代平、上、去、入四個声調，作詩填詞首宜合於平仄格律，若格律不合，則所作的詩，所填的詞，是今日的詩詞，絕非古典詩詞。」（古典の詩・詞を精読するのに最も悩まされるのは、古代の平声・上声・去声・入声の四声と、今の陰平声（第一声）・陽平声（第二声）・上声（第三声）・去声（第四声）の四声とが完全には合わないことである。そのわけは、国語（普通話）では入声が失われ、陰平声・陽平声・上声・去声のいずれかに分かれて入ってしまったからだ。我々が作詩・填詞するのに用いる四声は、古代の平声・上声・去声・入声の四つの声調で、作詩・填詞は、まず平仄のきまりに合わせなければならないが、もしきまりに合わなければ、その作詩した詩や、填詞した詞は、今日の詩・詞であって、絶対に古典の詩・詞ではない。」と述べている。また、王（二〇一五・一〇六）は、女子高生たちが、入声字について、「只好背起来！」（ただ暗記するしかない。）（国語の教師にそう言われた）と話していたというエピソードを紹介している。つまり、今日の中国語では、入声字の発音上の特徴が失われているため、漢詩の平仄・押韻がよくわからなくなってしまっているわけである。陳（二〇〇七・一〇）は、現代中国語音から見た入声字の見分け方（「弁識的規則」）を八つ挙げているが（表六―一の左に挙げる。この「規則」にいちいち照らし合わせて入声字を見分けるのもなかなか大変であろう）、たとえば、方言音や形声音符などの知識により入声字が識別できれば、漢詩を作るにも、日本語の漢字音を学ぶにも

陳（二〇〇七）の「弁識的規則」（入声字を示す特徴）は、次のとおりである（以下のローマ字は「漢語拼音方案」による）。

① 声母が b、d、g、j、zh、z で、陽平声（第二声）。

② 声母が d、t、l、z、c、s で、韻母が e。

③ 声母が k、zh、ch、sh、r で、韻母が uo。

④ 声母が b、p、m、d、t、n、l で、韻母が ie。

⑤ 声母が d、g、h、z、s で、韻母が ei。

⑥ 声母が f で、韻母が a、o。

⑦ 韻母が ie。

⑧ 両読字で、文語音が主母音で終わり、口語音が -i、-u（-o）の韻尾で終わるもの。

#### 四・二 清濁

「平仄声調」に関連して、漢字音の清濁についてもふれておく。中国中古音の声母には、清音（無声音）と濁音（有声音）との対立が存在した。今日では、吳語などを除き、中国語の多くの方言において、中古音の濁音は無声音化し、声母の「無声音／有声音」という対立は失われているが、声調の違い（調類）にその区別が残っている場合がある。たとえば、北方方言では、中古音の平声が、清音に由来する「陰平声」（第一声、「斤」、「終」など）と、濁音に由来する「陽平声」（第二声、「勤」、「從」など）とに分かれており、かつての清濁の区別を伝えている（中古音の平声の濁音は、「無氣／有氣」の対立があるものにおいては、有氣無聲音になっている。また、中古音の上声・去声の濁音は、去声（第四声）の無氣無聲音に、入声の濁音は、主に陽平声（第二声）の無氣無聲音になっている）。このため、かつては陰平声を「清」、陽平声を「濁」と呼ぶことも行われていた（明代末に

表六― 一 入声字の見分け方欽

中国中古音	日本漢字音	広東語（広州音）	陳（2007）の規則の適用	主な形声音符（例字）
咸 攝（ <i>ǣ</i> 系）	㉞ フ↓㉞ ウ／㉞ ツ、 ㉞ フ↓㉞ ウ	-p、 -p	①④⑥	合（答） 荅（搭） 甲（押） 夾（峽） 荔（協）
山 攝（ <i>a</i> 系）	㉞ ツ（國㉞ チ、 ㉞ ツ	-at、 -t、-ui、-it	①④⑥⑦	察（擦） 友（髮） 伐（闕） 末（抹） 害（割） 曷（退） 舌（活） 兌（悅） 折（哲） 吉（結） 失（迭） 列（烈） 切（窃） 夬（決） 出（拙） 歃（徹）
深 攝（ <i>ǣ</i> 系）	㉞ フ↓㉞ ウ／㉞ ツ	-ap、-ap	①	及（吸） 立（粒） 十（汁） 合（拾）
臻 攝（ <i>ǣ</i> 系）	㉞ ツ↓㉞ ツ（國㉞ チ、 ㉞ ツ、㉞ ツ	-at、 -t、-ei	①	屈（掘） 弗（沸） 失（秩） 室（窒） 朮（述） 必（泌） 吉（詰）
梗 攝（ <i>ǣ</i> 系）	㉞ ツ（國㉞ キ）	-ak、 -k	①②③⑧	麻（歴） 宅（拍） 各（格） 叔（寂） 辟（壁） 毛（毫） 商（敵） 昔（惜） 責（積） 舉（馭） 黑（墨） 則（側） 意（億） 食（飾） 直（植） 或（域） 散（職）
曾 攝（ <i>ǣ</i> 系）	㉞ キ（國㉞ キ）	-ik、 -k	①②③⑤⑧	專（博） 莫（漠） 乍（作） 樂（藥） 夔（獲） 蜀（濁） 夙（學） 却（脚） 勺（酌）
宕（・江） 攝（ <i>ak</i> 系）	㉞ ク、㉞ ク	-ok、-k、-ck	①③⑦⑧	東（速） 足（促） 業（僕） 賣（謁） 告（酷） 叔（督） 蜀（獨） 谷（俗） 泉（錄） 屬（囑） 畜（蓄） 畱（副） 復（復） 孰（熟） 宿（縮）
通 攝（ <i>ǣ</i> 系）	㉞ ク、㉞ ク、 ㉞ ク、㉞ ク	-ik	①⑧	

㉞・㉞は各段の音を、㉞・㉞はヤ行音・拗音を表す。國は吳音に独特の音形。

表六―二 濁音字・清濁音字と現代中国語・日本漢字音との対応

清濁音				濁音				中古音	中国
入声	去声	上声	平声	入声	去声	上声	平声		
など	去声 (第四声)	去声 (第三声)	上声 (第二声)	陽平声 (第二声)	陽平声 (第二声)	陽平声 (第二声)	陽平声 (第二声)	陽平声 (第二声)	現代中国語 (北方方言)
m・n・l・r・ゼロ声母									
日物	業若	二万	外内	軟母	眼女	男文	言人		例字

清濁音 (鼻音)						中国中古音
疑母 [ㄣ]	日母 [ㄣ]	泥母 [ㄣ]	明母 [ㄣ]	濁音		
ガ行音	ナ行音	ダ行音	マ行音	濁音		日本漢字音
ガ行音	ザ行音	ダ行音	バ行音	清音		漢音
	その他	濁音形 (漢音) 57字 (34%)	鼻音形 (呉音) 68字 (41%)	両音形 (呉音・漢音) 28字 (17%)	濁音形 (呉音) 60字 (11%)	常用漢字(音) における 音形の割合
		のみ	のみ	のみ	のみ	

「常用漢字(音)における音形の割合」は、筆者の調査による。調査対象は、「常用漢字表」に音読みがある漢字(音)で、中国中古音(『広韻』による)の濁音字(五十三字)、および、清濁音字のうち、明母・泥母(・娘母)・日母の字(一六七字)である。漢字音の認定は、主に『三省堂五十音引き漢和辞典第三版』(三省堂、二〇一四)によったが、中国中古音の濁音字であって、同辞典で呉音・漢音同形(清音形)とされているものについては、漢音として数えた。漢字音の認定は、漢和辞典によって異

ニコラ・トリゴー(Nicolas Trigault、中国名は「金尼閣」)が著した中国語の音韻書『西儒耳目資』(一六二六刊)の中で使われている。近代では、銭一九一八「一〇などにこの使い方が見られる」。

日本漢字音では、中国中古音の濁音字は、基本的に、呉音で濁音、漢音で清音になっている(漢音の清音形は、その母体となった中国語原音における濁音の無聲音化を反映している)。ただし、呉音・漢音の両音形がともに使われるものはそれほど多くなく、どちらか一方しか使われないものが多数を占める。筆者の調査では、中国中古音の濁音字のうち、今日の日本漢字音(「常用漢字表」にあるもの)で濁音形が使われているものは、およそ四割である(表六―二参照)。それでも、日本漢字音で濁音形をもつものは、現代中国語で陽平声(第二声)か去声(第四声)に発音されるものが大多数を占め、両者の間には、一定の対応が認められる(これは、日本漢字音学習に役立つ知識となるかもしれない)。このほかに、日本漢字音で濁音形になるものには、中国中古音の鼻音声母(明母 [m]・泥母(・娘母) [n]・日母 [ɲ]・疑母 [ŋ])の「母」は「声母」のこと。「泥母」と「娘母」とは、同声母と解釈する説と、別声母と解釈する説とがあるが、ここでは同声母としておく)に由来するものがある。これらは、呉音でマ・ナ・ガ行音、漢音でバ・ダ・ザ・ガ行音になる(漢音形は、中国語原音における脱鼻音化現象を反映している)。現代中国語音では、m [m]・n [n]・r [ɹ]・ゼロ声母になっている)。表六―二に、中国中古音の「濁音」(全濁音)・「清濁音」(鼻音声母をもつ音など)に対応する、現代中国語音と日本漢字音(呉音・漢音)の音形とを挙げておく。

（中国中古音の「ㄷ」など（牙音・喉音）に由来する）ものとは、呉音・漢音を問わず、サ・ザ行音と、カ・ガ行音という音形の違いで現れる。このため、両者の識別は容易である。これは、逆にいえば、両者の区別が失われている中国語母語話者が日本語の漢字を学習する際には、両者の識別が重要になるということである。なお、中国語方言音では、閩語（廈門）・客家語（梅州）・粵語（広州）・平話（南寧）などで、牙音・喉音に硬口蓋化が起らず、この両者の区別が保たれている（李二〇〇一・九〇）。このため、これらの方言音の知識があれば、それを尖音と団音（それぞれに相当する日本漢字音）の識別に応用することは可能であろう。以上を表六―三にまとめておく（濁音字については省略した）。

表六―三 尖音・団音に対応する諸音

中国中古音	日本漢字音	広東語 （広州音）	京劇の発音		現代中国語 （北方方言）	例字
精母「 $\text{ㄐ}$ 」	サ行音	「 $\text{ʃ}$ 」	尖音	「 $\text{ʃ}$ 」	「 $\text{j}$ 」	跡進俊
清母「 $\text{ㄑ}$ 」	サ行音	「 $\text{ʃʰ}$ 」		「 $\text{ʃʰ}$ 」	「 $\text{q}$ 」	七青浅
心母「 $\text{ㄒ}$ 」	サ行音	「 $\text{ɬ}$ 」	団音		「 $\text{x}$ 」	昔須先
見母「 $\text{ㄐ}$ 」	カ行音	「 $\text{k}$ 」			「 $\text{j}$ 」	季緊均
溪母「 $\text{ㄑ}$ 」	カ行音	「 $\text{kʰ}$ 」			「 $\text{q}$ 」	起輕遣
曉母「 $\text{ㄒ}$ 」	カ行音	「 $\text{ɬ}$ 」			「 $\text{x}$ 」	希許險

六 おわりに

本章では、漢語音韻学における「音韻」について概観し、漢語音韻学と、日本語の漢字音研究や漢字音学習と

同が見られるので、数字はあくまでも概数である。

四・三 「尖音」と「団音」

つづいて、「尖音」と「団音」を取り上げる。「尖音」と「団音」とは、現代中国語で「 $\text{j}$ 」「 $\text{e}$ 」・「 $\text{q}$ 」「 $\text{e}$ 」・「 $\text{x}$ 」「 $\text{ɬ}$ 」に発音される声母のうち、「屬於古精清從心邪五母齊齒撮口兩呼的字」(昔の「精母」「 $\text{ʃ}$ 」・「清母」「 $\text{ʃʰ}$ 」・「從母」「 $\text{ɬ}$ 」・「心母」「 $\text{ʃ}$ 」・「邪母」「 $\text{ɬ}$ 」の五つの声母の齊齒呼(介音「 $\text{i}$ 」をもつ音)・撮口呼(介音「 $\text{u}$ 」をもつ音)に属する字) (尖音)と、「屬於古見溪群曉匣五母齊齒撮口兩呼的字」(昔の「見母」「 $\text{k}$ 」・「溪母」「 $\text{kʰ}$ 」・「群母」「 $\text{g}$ 」・「曉母」「 $\text{x}$ 」・「匣母」「 $\text{ɬ}$ 」の五つの声母の齊齒呼・撮口呼に属する字) (団音)とを区別している名称である(羅一九七八：一七〇)。つまり、たとえば「 $\text{ʃ}$ 」が「 $\text{e}$ 」になったもの(「跡・進・俊」など)が「尖音」で、「 $\text{k}$ 」が「 $\text{e}$ 」になったもの(「季・緊・均」など)が「団音」ということになる(この両者の音変化は、いずれも、介音「 $\text{i}$ 」または「 $\text{u}$ 」による硬口蓋化(「顎化」)による)。現代中国語では、この両者は同じ音になってしまっているが、京劇では、今でもこの両者を区別して発音するという(李一九八七：六九によれば、「精・清・星」などの「尖字」の声母の発音は「 $\text{ʃ}$ 」・「 $\text{ʃʰ}$ 」・「 $\text{ɬ}$ 」であり、「京・輕・興」などの「団字」の声母の発音は「 $\text{e}$ 」・「 $\text{e}$ 」・「 $\text{ɬ}$ 」である)。尖音と団音については、古くは用語の解釈が揺れていたようであるが、羅常培によって、一九三五年に、右に挙げたように定義された。尖音と団音との識別について、陳(二〇〇七：一三)は、「這種區別，如果沒有受過聲韻學的訓練，那就只有死背，別無他途。受過聲韻學訓練的人，就很容易辨識。」(この区別は、声韻学の訓練を受けなければ、ただ丸暗記するしかない。声韻学の訓練を受けた人は、容易に識別できる。)と述べているが、具体的なことは述べていない。

日本漢字音では、尖音に相当する(中国中古音の「 $\text{ʃ}$ 」など(歯頭音)に由来する)ものと、団音に相当する

と「韻」とは、それぞれ、漢字音の「声母」と「韻母」とされる。

### 三 漢語音韻学の発展と日本漢字音研究

漢語音韻学は、外来文化（悉曇学など）の影響を受けて、発展してきたとされる。この研究は、「反切」から始まり、その後、漢字音の分析を精密化させる方向に発展してきた。反切と悉曇学とは、平安時代に日本にもたらされた。この影響で、五十音図が作られ、日本語の諸現象を説明するのに使われてきた。また、鎌倉時代に中国からもたらされた『韻鏡』は、日本の音韻研究に大きな影響を与えた。江戸時代には、『韻鏡』に基づく研究（韻鏡学）が盛んになり、それは、漢字音組織の探求から、字音仮名遣いの認定へと進んでいった。漢語音韻学の成果は、日本漢字音研究の基礎となっているが、逆に、日本漢字音研究の成果が、漢語音韻学に利用されることもある。

### 四 漢語音韻学の効用

漢語音韻学は、本来、中国古典籍の読解のための基礎学問であるが、中国文学を学ぶ（中国語圏の）学生たちからは、大変難解で何の役に立つのかよくわからないと思われている。これを学ぶ効用には、漢詩の平仄や、京劇における「尖音」と「团音」などを識別するのに役立つということなどがある。

### 五 漢語音韻学と日本語漢字学習

漢語音韻学の知識には、主に漢字圏出身の日本語学習者にとって、日本語の漢字学習に活かせると思われるものがある。日本漢字音には、漢語音韻学で重要視される、古代中国語音（漢字音）の特徴、とくに現代中国語（北方方言）ですでに失われてしまったものが多く残っている。たとえば、漢詩の平仄や押韻で重要となる入声字に由来する音形や、京劇における「尖音」（進・青・須）などの語頭音と「团音」（緊・輕・許）などの語頭音）との区別に相当する音形などが見られる。これらについて、他の漢字音体系との間に対応関係も見られる。

### 六 おわりに（省略）

のかかわりについて見てきた。とくに第五節では、漢語音韻学の知識を（とくに中国語を母語とする）日本語学習者の漢字学習に応用できないかという観点から、入声字や「尖团音」を取り上げてみた。筆者は、このような知識は、日本語の学習がある程度進み、それまで学んできた日本漢字に関する知識を整理するというような段階になってから、役立たせることが可能になるのではないかと思っている。つまり、日本漢字音と中国語漢字音（あるいは、韓国語漢字音）との対応を日本語漢字学習へ応用することについて、阿久津（一九九一・一三五、一三八）で述べたように、「たとえ音の対応法則を学んだとしても、それがどの程度有効であるか疑問である。」「その語が、漢音で読まれるのか、呉音で読まれるのか、それとも訓で読まれるのか知らなければ、結局は読めない。」「音の対応は語彙力がつけばある程度勘でわかるようになるものであるから、やはりまず語彙力をつけることが大切であろう。」と考えている。ここで取り上げたような知識は、語彙力が備わってこそ役に立つのではないかと思っている。

### 【第六章のまとめ】

第六章では、中国語における歴史的・伝統的な音韻研究（漢語音韻学）における「音韻」と、その研究について概観し、併せて、漢語音韻学と、日本漢字音研究や漢字学習とのかかわりについて考えた。

### 一 はじめに（省略）

### 二 漢語音韻学における「音韻」

漢語音韻学（中国音韻学、声韻学）とは、漢字音に関して、その体系と歴史の変遷とを追究する学問である。漢語音韻学における「音韻」は、「中国語音（漢字音）の、声母（頭子音）・韻母（残りの部分）・声調の総称」であり、この「音」と「韻」とは、それぞれ、「字音」と「韻母」を指すとされることが多い。日本の漢字音研究では、「音韻」の「音」

- 高松政雄（一九八二）『日本漢字音の研究』風間書房
- 陳新雄（二〇〇七）「声韻学的功効」中華民国声韻学学会『声韻論叢』一五 台湾学生書局
- 沼本克明（二〇一四）『帰納と演繹とのほさまに揺れ動く字音仮名遣いを論ず・字音仮名遣い入門』汲古書院
- 藩文国（二〇〇四）『漢語特色的音韻学研究』中国音韻研究会・石家莊師範專科学校編『音韻論叢』二二―一八 齊魯書社
- 傅定森（二〇〇三）『反切起源考』上海古籍出版社
- 馬淵和夫（一九八四）『日本韻学史の研究 増訂版Ⅰ』臨川書店（一九六五初版）
- 馬淵和夫（一九九三）『五十音図の話』大修館書店
- 馬淵和夫・出雲朝子（一九九九）『国語学史・日本人の言語研究の歴史』笠間書院
- 森岡健二（一九九〇）「私の五十音図観」『日本語学』九―一二（一九九〇年二月号）明治書院
- 羅濟立（二〇〇五）『客家語と日本漢音、鎌倉宋音の比較対照研究』閩南語文語音、浙江吳語との関わりをめぐって』致良出版社
- 羅幸田（羅常培）（一九三五）「中国音韻学的外来影響」『東方雜誌』三二―四（一九三五年六月号）商務印書館
- 羅常培（一九七八）『京劇中的幾個音韻問題』『羅常培語言学論文選集』九思出版社（一九三五初出「旧劇中的幾個音韻問題」を改題）
- 羅常培（二〇〇四）「音韻学不是絶学」『羅常培語言学論文集』商務印書館（一九四四初出）
- 李思敬、慶谷寿信・佐藤進編訳（一九八七）『音韻のはなし』中国音韻学の基本知識』光生館（原著『音韻』一九八五）
- 李存智（二〇〇一）「介音対漢語声母系統的影響」中華民国声韻学学会・国立中正大学中国文学系所主編『声韻論叢』一一 台湾学生書局
- 李葆嘉（一九九八）『当代中国音韻学』広東教育出版社

- 【第六章の参考文献】
- 阿久津智（一九九一）『漢字圏の学生に対する漢字教育について』『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』六 筑波大学留学生教育センター
- 阿久津智（一九九八）「入声と形声音符」『立教大学日本語研究』五 立教大学日本語研究会
- 阿久津智（二〇一五）「現代日本語における漢音と呉音の対応について」『拓殖大学日本語紀要』二五 拓殖大学留学生別科・日本語教育研究所
- 王華南編著（二〇一五）『淵遠流長話台語』秀威資訊科技
- 王松木（二〇〇七）「金針如何度与人？…論声韻学之課程設計与教材教法」中華民国声韻学学会『声韻論叢』一五 台湾学生書局
- 大島正二（二〇〇九）『唐代の人は漢詩をどう詠んだか…中国音韻学への誘い』岩波書店
- 小倉肇（一九九五）『日本吳音の研究 第一部研究篇』新典社
- 釘貫亨（二〇〇七）『近世仮名遣い論の研究』五十音図と古代日本語音声の発見』名古屋大学出版会
- 邢島（一九一四）『読音統一会公定国音字母之概説』『東方雜誌』一〇―一八（一九一四年三月号）
- 耿振生（二〇〇四）『20世紀漢語音韻学方法論』北京大学出版社
- 胡奇光（二〇〇五）『中国小学史』上海人民出版社（一九八七初刊）
- 蔡根祥（二〇〇七）「声韻学在国文教学之応用」中華民国声韻学学会『声韻論叢』一五 台湾学生書局
- 施向東（二〇〇八）「等韻学与音位学」中国音韻学研究会編『中国音韻学』南京大学出版社
- 銭玄同（一九一八）「論注音字母」『新青年』四―一（一九一八年一月号）群益書社
- 詹父（一九一六）「論国音字母」『東方雜誌』二一―五（一九一六年二月号）



の日本文典（日本語文法書）類では、『母音』に「母音」（母韻）も見られる、『子音』、『音節』に「子音」が多く使われている（落合直文・小中村義象『日本文典』一八九〇、高津敏三郎『日本中文典』一八九一、関根正直『国語学』一八九一など（明治期までの文献については、出版元を省略して記す。以下同じ））。

これらの用語をめぐるのは、明治後期の新聞記事に、岩野泡鳴と前田林外（ともに詩人）との、次のような論争が見られる（『読売新聞記事データベース』（読売新聞「ヨミダス歴史館」）による。〔内は筆者〕）。

（VII 01）氏（前田林外）が氏の所謂独立音として数へるうちのンでさへ、現代の発音法に拠れば、何か一つの母音を待たなければ独立が出来にくいのだが、短歌または新体詩に於ては、普通に独立音と見為されてゐるのは、恰もシエキスピア時代に不品といふ語がまだ一音節でなく、二音節に別れて、不品と発音されることであつた、その第二音節と同じ価値であるのだ。況んや純粹の父音、乃ち頭音に於てをやだ。たとへばカ行の頭音（k）またはタ行の頭音（t）が、たゞそれだけでは、ひゞき（サウンド）はあるが、音（サイズ）には、ならない。ひゞきだけでは音にはならないが、音を有する母音と一緒に綴られて、初めてその綴音の独立した発音が出来るとののだ。

（岩野泡鳴「前田林外氏に答ふ」『読売新聞』一九〇九年一月三日）

（VII 02）氏（岩野泡鳴）は熟音といふ立派な用語があるのに「一音節」といふコデツケの語を使つてゐるのは悪いことだ。又字母の研究をするに子音といふべき所を「頭音」といふ語を使つてゐる。共に滑稽式だ。頭音といふ語は頭韻であつてアルテレーション杯を論ずる場合に使ふべき語だ。

（前田林外「音韻問題（附岩野泡鳴氏を追撃す）」『読売新聞』一九〇九年一月一〇日）

（VII 03）氏（前田林外）はまた「音節」といふ用語をこちうつけたと云つたが、これは英語のシラブル（Syllable）に当る語で、語学者は普通にこれまで使用して来たのだ。「中略」また、氏は頭音と頭韻とを混同してゐるが、僕が頭音といふのは、五十音中、ア行を除いたすべての行のコンソナントであつて、之を父音

## 第七章 音韻関連用語の語誌（一）——「母音」、「子音」、「音節」——

### 一 はじめに

本章では、音韻論・音声学分野の基本的な用語である、「母音」、「子音」、「音節」について、これらの用語が、いつごろから使われるようになったのか、同様の概念を表す別の言い方にはどのようなものがあつたのか、などについて見ていく。また、それらの語がどこから来たのかについても、考えてみたい。以下、専門的な概念としての、母音、子音、音節（vowel, consonant, syllable）などと、（使用例における）文字列としての、「母音」、「子音」、「音節」などを区別するため、とくに「概念」を表すために使用するときには、『でくくって示す。ただし、ここでは、それぞれについて、細かい定義は行わず、今日、一般に、母音、子音、音節などとされるものと、ある程度重なるものを、すべて『母音』『子音』『音節』などを表すものとしておく。

「母音」、「子音」、「音節」については、今日では、それぞれ、英語の vowel, consonant, syllable の概念を表す語（翻訳語）として定着しているが、昭和の初めごろまでは、必ずしもそうではなかったようである。昭和の初めの主な日本語音韻論・音声学の概論書を見ると、今日と同様に、「母音」、「子音」、「音節」が使われているものが多く（佐久間鼎『日本語声学』京文社・柳原書店、一九二九、神保格『国語音声学』明治書院、一九三三、金田一京助『国語音韻論』刀江書院、初版一九三一、増補版一九三五など）、これらの用語がほとんど定着していたようすがうかがえるが、一方で、菊沢季生『国語音韻論』（賢文館、一九三五）のように、一部に別の用語が使われているものなどもある（母音に「母韻」が、音節に「成音」が使われている。これについては、「三矢重松博士の『文法論と国語学』に従つた」（菊沢一九三五・一二）とあるが、三矢の書では、「母音」や「音節」の語も用いられている（三矢重松『文法論と国語学』中文館書店一九三二・六九））。さらに時代をさかのぼると、明治中期

い、「熟音」と曰う。韻母（ここでは母音のこと）は、西文に依りて当てて「元音」と曰い、日文に依りて当てて「母音」と曰う。（中略）日文に声母を謂いて子音、熟音と為すと云う者は、其の、多く首行の「ア、イ、ウ、エ、オ」五母音を用いて、収声（音節末の音）と為すの故を以てなり。韻母を謂いて母音と為すと云う者は、其の子音の由りて成す所と為るを以てなり。」

（張世祿『中国声韻学概要』（台四版）台湾商務印書館一九七九・四九（一九二九初刊）

ここでは、「声母」に当たる語には、ヨーロッパ語からの翻訳語の「輔音」と「僕音」と、日本語からの「子音」と「熟音」とがあり、「韻母」に当たる語には、ヨーロッパ語からの翻訳語の「元音」と、日本語からの「母音」とがあることが述べられている（後半は、日本語の音節は「子音+母音」という構成をとる（それがこれらの名称と関係している）ということが述べられている）。

以上の VII 01～VII 05 からは、日本語において、（一）《子音》や《音節》を表すのに複数の語が使われていたこと、（二）《子音》を表す語と《音節》を表す語とに混用（混同）があったこと、（三）「母音」と「子音」とは日本で作られた語であるらしいこと、などがうかがえる。そこで、以下、「母音」、「子音」、「音節」（の概念を表す語）を中心に、これらの用語が、いつごろから使われるようになったのか、同様の概念を表す言い方にはどのようなものがあつたのか、などについて見ていく。また、それらの語がどこから来たのかについても考えてみたい。なお、ここでは、音声学・音韻論における専門的な内容（議論）には立ち入らない。

## 二 「母音」と「子音」

### 二・一 「母音」、「子音」の使用の始まり（明治以降）

または子音と云はないのは、わが国語学者の慣例中に、それと母音との熟合した音、乃ち、カ、サ、タ、等をも父音または子音と呼ぶこともあるからである。

（岩野泡鳴『三度、林外氏を駁す』『読売新聞』一九〇九年一月一七日）

(VII 04) 「音節」といふ語は Ton 又は Tonalle それから Comme ensemble に当るのだ。日本語でいへば、音調の曲折変化する調子だ。短くいへば音律だ、音階だ、音度だ。だから「音節」杯とはいはずに何ぞ綴音又は熟音とはいはないのだと尤めたのだ。（中略）又頭音とは滑稽だ。母音を頭にして綴音する場合は僕等には沢山ある、そんな場合には氏の力行以下の頭音説は直ちに究するのだ。だから、今時小学校の小孩でも字母の綴音を頭音だの後尾音だのいふ鈍物はないのだ。子音母音で結構だ。適切だ。

（前田林外「小説材料問題（つゞき）」『読売新聞』一九〇九年一月三一日）

ここに現れた用語を整理すると、《子音》を表す用語には、「父音」、「子音」、「頭音」、「コンソナント」があり、《音節》を表す用語には、「父音」、「子音」、「音節」、「綴音」、「熟音」、「シラブル」があつて、岩野泡鳴は（五十音における）《子音》に「頭音」、《音節》に「音節」を用い、前田林外は、《子音》に「子音」、《音節》に「熟音」または「綴音」を用いているということになる（なお、これらの記事の中では、「子音」には「しいん」と「しおん」と、「母音」には「ぼいん」と「ぼおん」と、「綴音」には「せつおん」と「てつおん」と、いずれも二通りのルビが振られている）。

ところで、一九二九年に中国で出た「声韻学」（漢語音韻学）の概論書には、次のようにある。

(VII 05) 声母、依西文当訳曰輔音、曰僕音；依日文当曰子音、曰熟音。韻母、依西文当曰元音、依日文当曰

母音。（中略）日文謂声母為子音、熟音云者、以其多用首行ア、イ、ウ、エ、オ、五母音、為収声之故；

謂韻母為母音云者、以其為子音所由成也。（声母（ここでは子音のこと）は、西文（ヨーロッパの言語）

に依りて当てて訳して「輔音」と曰い、「僕音」と曰い、日文（日本語）に依りて当てて「子音」と曰



学部二編』(一八七二)、山田正精訳『英学必携上』(一八七二)などがある。

一方、日本語関係では、明治初期の文典(文法書)には、母音には、「母韻」(古川正雄『絵入智慧の環二編下』一八七一、藤沢親之『日本消息文典上ノ巻』一八七四、田中義廉『小学日本文典一』一八七五)や、「母音」(中金正衡『大倭語学手引草前篇』一八七二、渡部栄八『啓蒙詞のたつき一』一八七五、中根淑『日本文典上巻』一八七六など)が多く使われているが、『子音』を表す語はあまり使われていない。「父音」(小笠原長道『日本小文典』一八七六、吉川楽平『国語教授式』一八七七、関治彦『語格楷梯日本文法卷壹』一八七九など)や、「子韻」(藤沢親之『日本消息文典下ノ巻』一八七四、春山弟彦『小学科用日本文典卷一』一八七七)が見られるものの、「もとこゑ」(古川正雄『絵入智慧の環三編下』一八七二)、「本音」(天野春翁『言葉の踏分』一八七七)、「原音」(物集高見『初学日本文典上』一八七八)などという言い方も使われており、明治初期には、この概念を表す語が未定着だったことをうかがわせる。

(VII 10) 父音ト云フ字ハ別ニアラザレドモ、母韻ノミニテ子韻(《音節》)ノ生ス可キハレナシ。故ニウク  
スツヌフムユルノ九字ヲ以テ仮ニ父音トナシ、母韻ト相合ノテ子音(《音節》)ヲ生ゼシム。(句読点は筆者)

(VII 11) 本邦単に子韻の字を製らず。其母韻に配合して全き声をなす者(《音節》)に就きて字を製る。故に  
今かりに其配合の音の者を以て子韻と名づけて母韻とわかつてり。(句読点は筆者)

(春山弟彦『小学科用日本文典卷一』一八七七・五才)

(VII 12) 母音ト相重ナル所ノ子音(《音節》)ニ七個ノ原音アリ。ク<sup>ク</sup>ス<sup>ス</sup>ツ<sup>ツ</sup>ヌ<sup>ヌ</sup>フ<sup>フ</sup>ム<sup>ム</sup>ル<sup>ル</sup>ト云フ其声隠微ニシテ  
未ダ全ク明ナラザル者トス。今仮ニ此隠微ナル声音ノ記標ニ扁傍仮字ノク<sup>ク</sup>ス<sup>ス</sup>ツ<sup>ツ</sup>ヌ<sup>ヌ</sup>フ<sup>フ</sup>ム<sup>ム</sup>ル<sup>ル</sup>ヲ用ヒテ母

同辞典は、「例言八則」に、「是編采用諸書。暨所参考。不下数十百種。(中略)有為英和字典本者。」(是の編は諸書を採用(採用)し、参考する所に暨りては、数十百種を下らず。(中略)英和字典を本と為す者有り。)とあるように、英和辞典から多くの「日本製の訳語」(新語)を取り入れている(沈二〇〇八:二二一)。一方で、「ヨーロッパ言語から直接に訳語を考える西洋系の学者たち」は、「日本の訳語に強い反発を示し、独自の訳語を主張し続け」(沈二〇〇八:二二〇)、その代表である嚴復は、一九〇四年刊の英文法書『英文漢詁』で、「Vowels 元音」、「Consonants 僕音」と訳している。

以上から、「母音」と「子音」とは、日本で作られた語である可能性が高いように思われる(高野二〇〇四:一二三三)。「母韻」(母音) Vowel-sound」と「子音」(子韻) Consonant-sound」とを「和製漢語」として扱っている。なお、中国語では、二〇世紀の初めには、vowel と consonant に対して、さまざまな訳語があったが(VII 05・VII 09にあるもの以外に、たとえば、吳敬恒が一九一七年に発表した「謠音統一会進行程序」には、『子音』に「無音」、「啞音」などが、『母音』に「有音」、「響音」などが挙げられている(吳敬恒、劉紹唐主編『国音国語国字第一集』伝記文学出版社一九六〇:一三七)バ、一九四〇年<sup>三</sup>には、中国を代表する言語学者たちが「元音」と「輔音」とを使うようになり(代表的な著作は、高本漢 B. Karlgren、趙元任・羅常培・李方桂訳『中国音韻学研究』一九四〇)、それを引き継いで、今日では、「元音」と「輔音」とが最も一般的になっている。なお、台湾では、「母音」と「子音」もよく使われる。

さて、明治期の語学書には、『母音』と『子音』とを表すのに、「母音」と「子音」以外の語も使われている。英語関係(英文典など)では、明治初年に、「母韻」と「子韻」(大学南校助教訳『格賢勃斯英文典直訳卷之上』一八七〇、亜遊居人『英学教授』一八七一など)や、「母字」と「子字」(青木輔清『英学之部初編横文字独学』一八七一、浦谷義春『英学辞訓一名・スペリング独学』一八七一など)などが見られるが、明治中期には、「母音」と「子音」とが一般的になっている。「母音」と「子音」の早い時期の使用例には、柴田清熙『洋学指針英

(VII 14) 考人類的發音機關 (Organs of Speech) 總是一樣，就其發聲部位而言謂之『聲』；就其收音於喉而言謂之『韻』。所以最單純之『聲韻』，各國大略相同。記諸紙，表聲者謂之『聲母』(Consonants)；表韻者謂之『韻母』(Vowels)。各民族所用表音之符号有不同，而所表之音則一。由單音結合而成語言，因結合之法不同，而語言遂不能一致。然就「音素」而言(音素是聲母和韻母所表的音)，初非有所歧異；不過各民族各有特別發達之音，不能一律耳。「人類的發音機關 (Organs of Speech) を考えれば、總て同じである。其の「發聲」部位に就いて言えば、之を「声」と謂い、其の喉に「收音」するに就いて言えば、之を「韻」と謂う。所以に最も單純の「声韻」は、各國大略相同なり。諸を紙に記せば、「声」を表す者は、之を「声母」(Consonants) と謂い、「韻」を表す者は、之を「韻母」(Vowels) と謂う。各民族の音を表すに用いる所の符号に同じからざるものあり、しかも、表す所の音は即ち一なり。「單音」の結合に由りて語言を成す、結合の法同じからざるに因りて語言遂に一致すること能わず。而して「音素」に就きて言えば(音素)は、声母と韻母とが表す音である、初めより岐異する所有るに非ず。各民族に各々特別に發達する音有るに過ぎずして、一律たること能わざるのみ。」

(国人「注音字母与万国音標」『東方雜誌』一七一〇、一九二〇：五六)  
(VII 15) 用現代語言學上的名詞說來，**声母**就是一個字的發聲，等於英文的 initial；**韻母**就是一個字的收音，等於英文的 final。(現代語言學の用語を用いていえば、声母は一つの漢字(音節)の「發聲」であり、英語の initial に等しく、韻母は一つの漢字の「收音」であり、英語の final に等しく。)

(王力『漢語音韻學』(重版)中華書局一九八〇：四〇(一九三五初刊))  
日本語学の分野において、『子音』に「子音」が一般的になるのは、大正期以降のことのようであるが、明治期の日本文典にも、『子音』に「子音」を用いた例は見られる(ビー・エッチ・チャンブレン『日本小文典』一八八七、和田万吉『新撰国文典』一八九七、岡沢鉦次郎『初等日本文典前編上』一九〇〇など)。

音トノ結合ヲ説カバ、先ツクト母音ト重リテ「かきくけこ」ノ五音成リ、スト母音ト重リテ「さしすせそ」ノ五音成リ、(句読点は筆者)

(物集高見『初学日本文典上』一八七八：二才)  
その後、明治中期～後期には、『母音』に「母音」、『子音』に「父音」が多く使われるようになった。「子音」は、「父音+母音」の『音節』の意味で多く使われている(本章末に、明治期の日本文典に見られる『母音』、『子音』、『音節』の名称の一覧を挙げる)。そのほかに、『子音』には、大槻文彦が『日本辞書言海』(一八八九)で用いた「發声」も用いられた(大平信直『中等教育国文典』一八九九、教育學術研究会『師範教科国語典上巻』一九〇四、林治一『日本文法講義』一九〇七など)。

(VII 13) 阿行ノ五音ハ、喉ヨリ單一ニ出ツ、コレヲ單音ト名ヅク。加行以下、九行ノ諸音ハ、其行毎ニ、各、其音ヲ呼ビ發ス一種ノ声アリテ、コレヲ發声(Consonant)ト名ヅケ、單音、ソノ韻トナリ、發声ト、單音ト、相熟シテ、始メテ音ト成ル、此ノ故ニ、加行以下ノ九行四十五音ヲ、熟音(Syllable)ト名ク、單音ハ、斯ク發声ノ韻トモナルガ故ニ、亦、母韻(Vowel)ノ称アリ。

(大槻文彦『日本辞書言海』『語法指南(日本文典摘録)』一八八九：二)  
「發声」には、「音を出し始める」という意味があり(この「發」は「起こす、始める」)、そこから「音節の始めの音」という意味に使われたようである(「發音」にも同様の用法があった。詳しくは、第八章三・一参照)。たとえば、新井白石の『東音譜』(一七一九序)「凡例」に、「以「發声」為「頭」など」と見える(訓点は筆者)。なお、近現代の中国の文献にも(一般語としての「發声」はよく見られる(清代には、江永、江有誥、陳澧、洪榜などの音韻学者が、『子音』の分類「無氣閉鎖音など」に「發声」という用語を使っているが、この用語の使い方には、学者によって異同があった『伝統語言學辭典第2版』河北教育出版社、二〇一〇「發声」)。近現代の中国語の例を挙げておく。

ヲ「メデキリンケルス」[medekinkers]ト号ス。「メデ」[mede]ハ相合せ連ルヲ云。韻字ニ連合シテソノ音ヲ成ス義也。〔句読点は筆者〕

（大槻玄沢『蘭字階梯下巻』一七八三成立、一七八八刊・九才）

(VII 19) kliner 韻字／medeklinker. 六韻字ノ外ノ文字／vocal 韻字

(Halma, François 稲村三伯『Nederduits woordenboek』(江戸ハルマ、ハルマ和解 一七九六刊)

(VII 20) kinker 音母／medeklinker 音母／vokaal 韻字

(道氏 Doeff, Hendrik 訳、桂川甫周他校訂『和蘭字彙』一八五八刊)

(VII 21) consome 合音／voyelle 韻字

（村上英俊『仏語明要』一八六四刊）

「韻字」は、古くから、「漢詩文で、韻をふむために句の末に置く字。脚韻に用いる字。」や、「漢詩の脚韻を和歌にあてはめて、一首の末に置かれる語とされたことば。」「『日本国語大』「韻字」として使われてきたが、右の例では、「母音字」という意味で使われている。「韻」には、脚韻に用いる音（音節の後ろの部分）として、古くから、『母音』を表す用法があった。中国唐代の例を挙げると、日本における悉曇学（インドの音韻字の創始に大きな影響を与えた『悉曇字記』に、『母音』（字）に、「韻」、「摩多」（梵語 māra の音訳）が、『子音』（字）（母音 a を潜在させる）に、「声」、「体文」（梵語 vatjana の意訳、「文」（同上）が使われている。

(VII 22) 其ノ始メニ曰フニ悉曇ト。而セ韻ニ有リレ六ツ。長短両分字十有ニナリ。将冠シメテニ下シノ章ノ之首ニ一対シレ声ニ呼テ而モ発ス韻。声合ワレ韻ニ而字生ス焉。〔中略〕其次ニ体文三十有五ナリ。通シテニ前ノ悉曇ニ四十七言明シ矣。声之所ロハ発スルニ則テ牙齒舌喉唇等ナリ。ノ初章ハ将ニ前ノ三十四ノ文ヲ一、対シテニ阿阿等ノ十二韻ニ、呼シテレ之ヲ増スニ以テスニ摩多ヲ一。生字四百有八ナリ。

（智広『悉曇字記』七九四頃成立、根来寺往生院一四四七刊・三ウ、五才）

(VII 16) ア行の五音を母韻と名づく。カ行以下諸行の音を熟音と名づく。熟音は母韻と他の一種の音と熟合したる声音なり。こゝに他の一種の音といへるものを子音と名づく。子音は仮名にて書きあらはす便宜なきが故に、こゝに示すこと能はざるなり。カ行以下毎行の五熟音に通有にして、且つ各音の頭を成す一種の声あるを、よび試みて知るべし。これ即ち子音なり。

（和田万吉『新撰国文典』一八九七・七）

## 二・二 「母音」、「子音」の使用以前（江戸時代まで）

次に、「母音」、「子音」という語が使われる以前に、『母音』や『子音』が何と呼ばれていたかについて見ていく。江戸時代の洋学資料（辞書や語学書）では、『母音』には、「韻字」が多く使われている。

(VII 17 (一部ⅡⅢ 41) 句字ヲ「キリンクレーテル」[kinkletter]ト云。又「ホカーレン」[vocalen]トモ称ス。Aeou 是ナリ。又々字ヲ添テ、六字ノ「ホカーレン」ト云。余ノ十九字ヲ「メデキリンクレーテル」[medekinkletter]ト称ス。又「ストーメ」[sionne]トモ云。「メデ」[mede]トハ連ルノコト也。「ホカーレン」ニ連從シテ、「セイラブ」[sylabe]ヨナスナリ。「ストーメ」トハ癡字（啞字）ト云コト也。愚按ルニ、此十九字「ホカーレン」ニ從ハザレハ、音句ヲ如何トモ発スルコト能ハス。故ニ此称アルナルヘシ。〔句〕は「韻（韵）」の略体〔句読点は筆者〕

（前野良沢『和蘭訳文略草稿』一七七・一識語）

(VII 18) 上ノ二十六字ノ中六字ハ、ア、ンエ、ンイ、オ、ンウ、ンエイ、[aeiouy]ノ韻字ニシテ、其名即ソノ音也。「キリンクレッテルス」[kinkletters]ト号ス。「キリンク」[kink]ハ即韻字の義、余ノ二十字

(VII 26) 彼邦の国字を「アベセ」といふ。吾邦のいろはの如し。**父字**二十字に**母字**五字をつゞりて万の音をしるす。〔句点は筆者〕

(森嶋中良『紅毛雜話』卷之三「唐土の文字」一七八七成立、一七九六刊…一一ウ)

(VII 27) 按スルニ。A E I O U Yノ六字ハ。单呼定音ヲ做シ。他音ニ変ゼズ。故ニ之ヲ**韻母**トシ。其余二十字ヲ**子字**トス。

(藤林普山『訳鍵凡例并附言』一八一〇刊…七ウ)

(VII 28) **vowel** 音母

(本木庄左衛門ら編『諸厄利亜語林大成』一八一四成立)

(VII 29) 古来、「アイウエオ」ノ五音ヲ、**字母**ト称ス、今日ヲカヘテ、**音母**ト云フ、実ニ音ノ母ニシテ、何レノ音モ、此ノ「ア」行ノ音ヨリ、出デザル者無ク、且何レノ音モ、此ノ「ア」行ノ音ヲ、含マザル者無シ、

(鳥海松亭『音韻啓蒙』「総論」一八一六刊…九ウ)

(VII 30) 之「ア、イ、ウ、エ、オ」ヲ漢土ヨリ先ツ邦々ニ求ムルニ、此五**音母**ナキ国ナク、ソノ仮字ナキ地モ亦ナシ。サレハ、此五**韻母**字コソ天然ノ音ナル可ケレ。／ア A E I O U／以下ノ**啞字**即**父字**二十字皆協**合**以上五**韻母**字ヲ。〔句説点は筆者〕

(大槻玄幹『和音唐音対注西音發微』一八二六刊…三オ、二一オ)

(VII 31) 但し此ノ音図、すでに再訂せる神字日文伝にも出せるが、彼ノ書に収たる、**母韻**アイウエオ、**父声**ウクスツヌフムユウルの説等を合せ考へ、彼此相発して其ノ精義を索むべきなり。〔日文は省略〕

(平田篤胤『古史本辭経』「五十音図訂正第三」一八三九成立、一八五〇刊…二五ウ)

ほかに、平安時代の日本の悉曇字書には、『母音』に「韻音」や「音韻」を用いた例も見られ、鎌倉時代以降は、『母音』と『子音』とに、それぞれ、「韻」と「音」とが使われるようになった(釘貫二〇七…二九、三五)。

(VII 23) 阿等ノ十六音ハ皆ナ是レ韻音ナリ

(安然『悉曇藏』八八〇成立、『校正悉曇藏』「序」一七八九刊…四オ)

なお、VII 17 (および、VII 30) にある「啞字(啞字)」は、引用文中にあるように、「ストーメ」[sotome] (江戸ハルマ)によると「啞人」の翻訳語である。この名称は、『子音』のもつ「聞こえが小さい」という性質に基づいたものであろう。VII 20では、「音母」が、『母音』と『子音』の両方に使われているが、これは、(表音文字における「字母」と同じように)「言語音(の二つ)」というような意味で用いられているのではないかと思われる。VII 21の「合音」は、VII 17・VII 18に説明のある「メデキリンクレテル」(メデキリンケルス)と同様に、「母音に合わる音」(VII 24の「所合ノ声」に当たる)という意味での造語(翻訳語)ではなからうか(英語の consonant も、『母音』と一緒に響く音)が原義』である(『ジーニアス英和大辞典』大修館書店、二〇〇一)。

ほかに、江戸時代の文献では、『母音』には、「音母」、「母字」、「母韻」、「韻母」のように、「母」を含むものが多くあり、『子音』には、「父字」、「子韻」、「子字」など、「父」や「子」を含むものが見られる。

(VII 24) 今此ノア等ノ五字ノ短声ニ而モ撰メナ長声及ヒ空(撥音)涅槃(入声)ノ声ヲ、能ク出シ生ス一切ノ音韻ヲ。就テ出シ生スニ之ヲ以テカカタナ等ノ九字ヲ為ニ所合ノ声ト、ア等ノ五字ヲ為ニ能合ノ韻ト、所合ノ声ヲ為ニ父字ト、能合ノ韻ヲ為ニ母字ト、声ノ韻各々合成シ反音ス。〔句説点は筆者。梵字はローマ字に翻字した〕

(盛典『新增韻鏡易解大全』「卷一 韻鏡易解改正卷一 第二五韻拗直図説門」一七一八刊…一三ウ)

(VII 25) 図面七音清濁ノ差別ニヨリテ三十六母(三十六種の声母)ノ配位アリ。又左辺ニ各各韻母ノ字ヲ識ス。

是音韻ノニツナリ。〔句説点は筆者〕

音」の符号を称して『声母』と曰いてより後、声韻字を治むる者、亦多く之を用いる。」とある（林尹、林炯陽註  
 釈『修訂増註中国声韻学通論』黎明文化事業 一九八二・四七）。また、『東方雜誌』一九一四年三月号の邢島「読  
 音統一会公定国音字母之概説」には、「韻」と「母」とが使われ、同誌一九一六年二月号の詹父「論国音字母」  
 には、「韻母」と「声母」とが使われている。この「母」は、声母を意味する「字母」の略称であり『修訂増註中  
 国声韻学通論』一九八二・四六、日本語における『母音』を表す「母」とは、用法が異なる。これについて、江  
 戸時代の学僧、文雄は、「母ハ反切ノ下ナル字〔母音〕ヲ指スト云フハ非ナリ」としている（文雄『磨光韻鏡後篇  
 伐柯篇』「反切字義」一七三刊・一三才）。

ここで、『母音』に使われる「母」、《子音》に使われる「父」と「子」がどこから来たのかについて考えてみた  
 い。これらは、反切の用語から転用されたものである。反切とは、ある漢字の音を、他の漢字二字で表す  
 方法で、一字目が声母を示し、二字目が韻母を示す。たとえば、「東」の音は「德紅」で表される（『広韻』。こ  
 れは、「德」*dek*の声母*t*と、「紅」*yun*の韻母*un*とを合わせると、「東」*un*の音になることを示している）*[un]*は  
 「*[u]*」の後ろ寄りの音。『広韻』（中国中古音）の推定音は、断りがない限り、『広漢和辞典』大修館書店一九八  
 一・一九八二による。以下同じ）。日本の音韻学（日本韻学）、悉曇学と漢字音研究が混交して発生した日本独特の  
 学問（馬淵・出雲一九九二・二六）では、伝統的に、この一字目（反切上字）を「父字」、二字目（反切下字）  
 を「母字」と呼んできた。また、目的の字（反切母字）を「子字」と呼ぶこともあったようである。

（VII 36）上父字行<sup>レ</sup>堅下母字行<sup>レ</sup>横其隅生<sup>二</sup>子字<sup>一</sup>／例伊上父和下母反<sup>二</sup>阿隅子<sup>一</sup>

（明魏『倭片仮字反切義解』一四二九頃成立、一八〇〇親弥写）

（VII 37）反切ニ用フル所ノ二字ヲ切韻トモ又ハ父字<sup>二</sup>母字<sup>一</sup>トモ称ス。二字ノ用ヲ成スコトハ、父字ニテ字<sup>二</sup>母<sup>一</sup>  
 音トヲ知ラシメ、母字ニテ韻ヲ知ラシメタルナリ。父字ニテ字<sup>二</sup>母<sup>一</sup>及ヒ音ヲ知ルトハ、字<sup>二</sup>母<sup>一</sup>ト云ハ三十六

（VII 32）*kinker* 母韻／*medekinker* 子韻

（飯泉士護『和蘭文典字類前編』一八五六刊）

（VII 33）母子之別 第一韻母 A a [中略] 第二韻母 E e [以下略]

（以下略）／*voortdryven van medekinkers* 語首<sup>二</sup>子字<sup>一</sup>

直進

（柳川春三『洋学指針』一八五七刊・三ウ、五ウ）

（VII 34）*Consonant* 子字／*Vowel* 音母

（堀達之助『英和对訳袖珍辞書』（初版）一八六二刊）

（VII 35）字ニ母子ノ別アリ。韻母<sup>マカウヤ</sup>*vowel*ハ一字独用シテ音ヲ発ス。子字<sup>ロソクネント</sup>*consonant*ハ必ス韻母ニ合シテノミ音  
 ヲ生ズ。独用スルコト無キナリ。

（柳川春三『洋学指針 英学部』一八六七刊・四才）

以上のうち、「母韻」と「子韻」とは、明治以降も日本文典などで使われている（VII 10、VII 11、VII 13参照）。と  
 ころで、「母音」と「子音」の読み方には、「…いん」と「…おん」とがある。今日では、両音とも「…いん」と  
 読まれることが多いが、これは、「母韻」と「子韻」の読み方が継承されたものかと思われる。

さて、上の例に見られる「韻母」は、今日の中国の音韻学で使われる、「一個音節中声母後面的部分」（一つの  
 音節中の声母の後ろの部分）（『中国語言文字学大辞典』中国大百科全书出版社、二〇〇七）である。「韻母」と同  
 形語である。しかし、この両者には、直接の関係はないようである。中国の音韻学で「韻母」と「声母」が使わ  
 れるようになったのは、一九一八年に中華民国教育部が公布した「注音字母表」で用いられてからのようで（な  
 お、同表では、*i*、*ü*、*u*、*ü*は、「介音」として、「韻母」から切り離されている、これは、一九一三年に  
 教育部の読音統一会が「国音字母」を定めたときに用いた、「韻」と「母」とを改めたものである。一九三七年刊  
 の林尹『中国声韻学通論』に、「自注音字母称発音之符号曰『声母』後、治声韻学者、亦多用之。」（注音字母の「発



使われている。

(VII 39) 一 創定音中。有自鳴。有同鳴。／一 創定同鳴為父。自鳴為母。父母相合。共生字子。(一、創定す、音中に「自鳴」(母音)有り、「同鳴」(子音)有りと。一、創定す、「同鳴」を「父」と為し、「自鳴」を「母」と為し、父母相合して、共に「字子」を生ずと。)

(金尼閣『西儒耳目資』「西儒耳目資釈疑」一六二六刊)

これについて、張世禄は「此或声母与韻母之名所由来歟。」「此れ或いは声母と韻母との名の由来する所か。」「(前掲『中国声韻学概要』四六ページ)と述べているが、この点については不明である。しかし、少なくとも、日本では、これと同様の「父・母・子」の使い方が、さらに古い時代から行われており、それが、江戸時代を経て、明治以降の「母音」、「父音」、「子音」の名称につながっていったことはいえるように思う(中国では、この使い方は、あまり一般的ではなかったようである。文雄は、「又切韻〔反切〕ノ二字ヲ父字母字ト称スルコト華人ハ多ク言ハサル所ナリ」と述べている(前出『磨光韻鏡後篇伐柯篇』一三才)。ただし、伝統的な反切における「父・母・子」の関係は、「父字+母字」であり、この用法は、明治中期の日本文典における「父音+母音」には継承されたが、英文典では、採用されず、「子音+母音」のほうが一般的になった(「音節」の使用は、次節で述べるように、明治後期からである)。今日では、日本語学でも、『母音』に「母音」が、『子音』に「子音」が使われているが、これは英語学(洋学)における、「母音」と「子音」の用法が取り入れられたものである。なお、内田(二〇〇八：二四)は、consonant の訳語に、「父音」ではなく、洋学に由来する「子音」が採用されたことについて、「父音」は「ウ段音」という『単子音+単母音』を示すもので、「反切を意識するときにのみ使用され、力行以下45音を意味する『子音』を説明するための概念」であるのに対し、洋学者の使う「子音」は、「音素文字の獲得によって現代の子音の概念を手に入れた」ものだとしている。しかし、この「父音」ウ段音」については、日本文典において、「父音」をウ段音(「u」を含む音節)と見ているものは、ごく少数で

母ノ中ノ一字ナリ。音トハ呼ヒ出ス音ナリ。母字ニテ韻ヲ知ルトハ、韻ハ其呼ヒアラハス所ノ字音ノ尾ノ余声ナリ。〔句読点は筆者〕

(文雄『磨光韻鏡後篇』「伐柯篇 反切総論」一七七三刊：一ウ)

VII 36 は、『日本国語大』で、「母字(ははじ)」と「父字(ちちじ)」の用例として挙げられているものである。ほかに、馬淵(一九八四：五五、六八)には、鎌倉時代の悉曇学者である、承澄や了尊の韻図(五十音図)に使われた、「母」(母字)、「父」(父字)の例が見える。

(VII 38) 已上ノ五字「ヤイユエヨ」通「本末」<sup>ニ</sup>。為「母」<sup>ト</sup>。第二「イ段」<sup>ニ</sup>。一之時、為「中」<sup>ト</sup>。故「ヤ」通「二音韻」<sup>ニ</sup>也。但「ユ」字ハ非「シ」ノ下「無」<sup>レ</sup>成「ス」<sup>ト</sup>音。〔馬淵一九八四：五六を参考に、句読点、訓点を施した〕

(承澄『反音鈔』一二九九写、馬淵一九八四：五五の影印による)

この「母(字)」「父(字)」は、梵語で《母音》(字)を表す「摩多 mata」から来ているようである。『漢訳対照梵和大辞典増補改訂版新装版』(講談社、一九八六)によれば、mata (『maty』は「母」を意味する語である)「英語の mother と同源 (Oxford English Dictionary (June 2017 update))」。<sup>1)</sup>これについて、内田(二〇〇八：一八)は、「他の音を『生む』という意味で『母』なのである。」と述べている(諸音の生成説については、第四章三・二・一参照)。

一方、「父(字)」は、梵語で《子音》(字)を表す「体文 vāṇāna」から来たのではなく『漢訳対照梵和大辞典』によれば、vāṇāna の「漢訳」は「語、文、字、文字、言辞、文辞、文詞」などである)、「母」との対応から用いられるようになった語ではないかと思われる。また VII 36 にある「字子」は、「父字+母字」字」という意味であるうが、『日本国語大』の見出しにもなく、反切用語としては、あまり使われなかったようである。

ところで、『母音』を表す「母」、《子音》を表す「父」、《音節》を表す「子」は、中国の明代末にフランスのエズス会の宣教師ニコラ・トリゴー(金尼閣 Nicolas Trigault)が著した中国語の音韻書『西儒耳目資』の中でも

次に、「音節」という語について見ていく。

『日本国語大』に挙げられている、「音節」の、現代的な意味（①言語における音声の単位の一つ。ひとまとまりとして意識される音声連続。（中略）シラブル。）における最も古い用例は、上田万年『国語学の十講』（一九一六）の「日本の言葉は多音節主義である。一つの言葉が多くの音節から成立つのを原則としてゐる」であるが、これは、先に挙げた一九〇九年の読売新聞の記事（VII 01～VII 04）よりも新しいものである。VII 03に挙げた記事に、「音節」について、「語学者は普通にこれまで使用して来たのだ。」とあることから、この語は、少なくとも、明治後期には、すでに（「語学者」の間では）よく使われていた語だと思われる。しかし、VII 04に「音調の曲折変化する調子だ。短くいへば音律だ、音階だ、音度だ。」とあるように、「音節」の本来の意味は、「声、または音楽の調子。ふしまわしやリズム。」（『日本国語大』「音節②」）であった。『日本国語大』には、「日本にむぎつき歌と云も、何事をもうたへども、其音節がむぎづくにあうを云ぞ」（『四河入海』一五三四成立、慶長元年間刊）、「右之本煩句音節墨譜等令加筆候」（浄瑠璃『新うすゆき物語』一七四一刊）などの例が挙げられている。このうち、後者は、浄瑠璃本開板における常套句のようである（「ジャパンナレッジ」『日本古典文学全集』の「全文」検索による）。

この「音節」本来の意味は、中国から伝来したもので、『日本国語大』や『辞源第3版』（商務印書館、二〇一五）では、『後漢書』「南衡」の「南衡善擊鼓、乃召為鼓吏、因大会賓客、閱視音節」（「衡の善く鼓を撃つを聞き、乃ち召して鼓吏と為す。因つて大いに賓客を会し、「音節」を閲視す。」が最古の例である。中国語には、今日でも、この用法が残っている（ほかに、『音節』の意味でも使われる）。

『音節』の意味で使われる「音節」の用例は、一九〇〇年ごろから現れる。

あり、大多数の文典では、「父音」を《子音》の意味で用いている。筆者が、明治初年から一九〇〇（明治三三）年までに刊行された日本文典のうち、七三種（第四章二節）について調べた結果では、「父音」が使われていた三十六文典のうち、「父音」をウ段音としていられるものは四文典のみであった（井田秀生『皇国小文典』一八九四、遠藤国太郎・鈴木重尚『日本文典教科書』一八九四、中邨秋香『皇国文法』一八九八、大林徳太郎・山崎庚午太郎『中学日本文典上巻』一八九八）。日本文典には、「父音」について、次のような説明が多く見られる。（VII 40）こゝにまた、五十音の外に、母音と配合して、子音を生ずる、九個の声音あり。これを父音といふ。その音幽微にして、いまだ明に、音声にあらはれたるものにあらず。されば、これにあつる文字あることなし。今仮に、片仮字をもて、これを書きあらはす時は、ク、ス、ツ、ヌ、フ、ム、ユ、ル、ウ、の九個の子音より、母音の音の幽微なるものなり。

（落合直文・小中村義象『日本文典』一八九〇…四）

（VII 41）父音とは、母音と融合して、子音をつくる一種の音なり。その音幽微にして、いまば、判然と口外にあらはれたるものにあらず。／されば、また、これを標すべき文字あることなし。今、仮に、片仮字を以て示すときは、五十音の字列の、ク、ス、ツ、ヌ、フ、ム、ユ、ル、ウ、の九個の子音より、母音を引き去りたる跡に残れるもの、即ちこれなり。

（大宮宗司『初等教育日本文典』一九八四…四）

これらの「父音」は、明らかに《子音》を表している。ただ、いずれにしても、「父音」は「力行以下45音を意味する『子音』を説明するための概念」であり、《子音》を表す「子音」は、洋学に由来するといふことはいえるようである。

### 三 「音節」

(VII 45) 音節篇 (Prosody) の一篇は、却て文法科に属すべきものなれど、余が文典には、姑く欠きたり。さるは、発音符の「アクセント」(Accent) の如き、我が国にては、今、定めがたき事情あればなり。

(大槻文彦『広日本文典別記』一八九七・例言六)

明治前期く中期の日本文典・英文典には、このほかに、《音節》を表すのに非常に多くの語が使われている。なかでも、日英両文典に多いのは、「熟音」(大学南校助教訳『格賢勃斯英文典直訳卷之上』一八七〇が古い)で、日本文典に多いのは、「子音」(中金正衡『大倭語学手引草 前篇』一八七一が古い)と、「子韻」(古川正雄『絵入智慧の環二編下詞の巻』一八七一が古い)である。「子音」と「子韻」とについては、その数を四五(五十音からア行音を除いた数)としているものが多く、(母音のみの音節などが含まれないため) 厳密な意味での《音節》とはいえないが、ここでは《音節》を表すものとして扱う(これに対し、「成音」、「成熟音」、「音節」などは、広く《音節》を表す)。

なお、反切における「父字+母字||子字」では、(反切は、あらゆる漢字を対象とするため)「子字」(反切母字)が母音のみの音節である場合もある。たとえば、「阿」は「烏何反」であり、「烏」[uo]の声母と「何」[ya]の韻母とで「阿」[a]の音になる(・)はゼロ子音)。これは、「父字」は《子音》とは限らないということでもある。つまり、音韻学における「声母」は(音声的には)《子音》とは限らないということになる。なお、母音始まりの音節における声母は、「影母」と呼ばれ、その音は、声門閉鎖音 [ʔ] と推定されることが多いが(竺一九九二・二九三)、この [ʔ] は、「あまり強い閉鎖ではなく、要するに音節が母音ではじまることを示すとみてさしつかえない」ものである(全訳漢辞海第四版『三省堂、二〇一七・一六九〇)。また、前出の王力『漢語音韻学』(一九八〇・四〇)は、「有許多人往往把声母誤解為『子音』(consonant)、把韻母誤解為『母音』(vowel)；其實声母就是一個字起頭的音素、這個音素固然可以是『輔音』但也可以是『元音』如『応』(ing) 字的声母便是 i；韻書上所謂喻紐，也就是元音的紐。」多くの人がしばしば声母を「子音」(consonant)と誤解し、韻母を「母音」

(VII 42) 現今、学生ノ一般ニ字ブ、英語ナドノ如キ外国語ニアリテハ、其ノ音トイフモノハ、所謂字母ノ音ニシテ、通常、コノ音ドモ相集リテ、一ノ合音ヲ成ス。之ヲ音節トイフ。(岡沢鉦次郎『初等日本文典 前編上』一九〇〇・三四)

(VII 43) 今若し一塊の音を「音節」と云ふとすれば、父音はいつも母音と組みあつて一つの音節を成し、之に初めて、ことばの中へ用ゐこまれるのが常であるから、(岡倉由三郎『発音学講話』一九〇一・一一、一一三)

この「音節」は、従来からある「音節」とは別に、syllable の翻訳語として生まれたものである [syllable は、『寄せ集められたもの、団結したもの』が原義] である(『ジーニアス英和大辞典』)。

これ以前の英文典・日本文典には、《音節》以外の意味を表す「音節」が見られる。英文典では、青木輔清の『英学之初編 横文字独学』(一八七一)と『英学童子通初編』(一八七二)とに、「音節書」や「音節変化」などの表現が見られる。

(VII 44) 彼の国の用法にては。字を綴るに規則あり。又其読音も種々変化て。一朝に説難し。よく下の字綴の部。音節変化の部を見るべし。(青木輔清『英学童子通初編』一八七二・一七ウ)

同書にある「音節変化の符号」は、「ウェプストル氏の篇著せる。字典中に用る所の符号」であるが、梅村守纂訳、ノアウェブストル音符『和訳英字典大全』(一八八五)に照らすと、この「音節変化の符号」は「KEY TO THE PRONUNCIATION」のようであり、「音節変化」は pronunciation の訳だと思われる。

日本文典では、大槻文彦『広日本文典別記』(一八九七)に、「音節篇 (Prosody)」という、音節本来の意味に基づいた使い方が見られる(大槻は、『音節』には「熟音」を用いている。VII 13 参照)。

「綴音」(大石高德『仏蘭西文法詳解』一八九九) など  
日本文典のもの

「複音」(古川正雄『絵入智慧の環二編下 詞の巻』一八七二)

「単音」(春山弟彦『小学科用 日本文典 卷一』一八七七)

「單子音」(大和田建樹『和文典 上巻』一八九二)

「合音」(高津鐵三郎『日本中文典』一八九二)

「子母音」(大久保初雄『中等教育 国語文典』一八九二)

「成熟音」(小田清雄『応用 日本文典』一八九三)

「客音」(秦政治郎『皇国文典』一八九三)

「配合韻」(豊田伴『新撰 日本文典 上巻』一八九五)

「成音」(中島幹事『中学 日本文典』一八九七)

「複雜音」(渡辺弘人『新撰 国文典』一八九七)

「綴字」(上谷宏『中等教科 新体 日本文典』一八九八) など

英文典では、表記(つづり)に関係する名称が多く、日本文典では、音(構造)に関係する名称が多く見られる(VII 03やVII 05の記述と異なり、『子音』に「熟音」を用いた例や、『音節』に「父音」を用いた例は見られなかった)。これは、英文典の関心は正書法にあり、日本文典の関心は五十音にある(第四章三・二)という、両者の関心の違いを表しているように思う。

最後に、江戸時代～明治中期の対訳辞典、一九世紀の英華字典における、「syllable」「syllabe」を見つお。

「SYLLABLE 切音・分音」(前出メドハーストの英華字典 一八四七～一八四八)

「Syllable 字符ノ綴リ」(前出『英和对訳袖珍辞書』一八六二、薩摩辞書 一八六九)

(vowel) と誤解しているが、実は声母は一つの字(音節)の頭の「音素」であり、この「音素」は、もちろん「輔音」(子音)でもいいが、「元音」(母音)でもよく、たとえば、「応」(ing)の声母は i である。韻書のいわゆる「喻紐」(喻母)は、「元音」の紐(声母)である。」と述べている。なお、漢語音韻学では、一般に、「応」の声母は「影母」で、i は介音とされる。また、喻母(以母)を母音の声母(ゼロ子音)とするのは、カールグレン(高本漢)の説である(同書「新版自序」には、「這部書受高本漢的影響很深。我差不多無批判地接受了他的学説」[この本はカールグレンの影響を深く受けている。私はほとんど無批判にその学説を受け入れた。]とある)。今日では、ㄩ とする説も有力である(竺一九九二：二九三)。ところで、服部四郎は、日本語の、母音のみの「[mōra] に、/ という音素を認めている(「アイウエオ」は「a i u e o」となる)。これは、当初(一九四九年、「母音フォネームで終る他のすべての mōra が『子音フォネーム+母音フォネーム』という二つずつのフォネーム連続より成っている」)のに合わせて、「子音フォネーム『ゼロ』を有する」と考えた、「ゼロフォネーム」であったが(服部一九九〇：一七三)、後に、「無声子音素 / に対立する有声子音素」であり、「積極的 (positive) な子音フォネームだ、と考えるようになる」(服部一九九〇：三四八)。

《音節》を表す名称には、ほかに、次のようなものが現れている(各名称につき、文典名を一つ挙げる。ほかの名称とともに現れる(単独では現れない)ものには、( ) を付した)。

英文典(あるいは、ほかの洋文典)のもの

「連綴」(亜遊居人『英学教授』一八七二)

「綴り」(山田正精訳『英学必携 上』一八七二)

「(重音)」(片山清太郎・堀江章一『独修新法 英語学全書 前編』一八八六)

「綴字」(菊池武信『英語発音秘訣』一八八六)

「連字」(グールドブロン、長野一枝『英吉利文典講義』一八八六)

表七― 日本文典における《母音》、《子音》、《音節》の名称

文典	《母音》	《子音》	《音節》
古川正雄『絵入智慧の環』初編上・四編下 70-72	母韻 <small>ははん</small> 母音 <small>ははん</small>	もじ <small>もじ</small> ・ゑ <small>ゑ</small>	子韻 <small>いん</small> 複音 <small>ふたおと</small>
中金正衡『大倭語学手引草』前篇 71	母音	—	子音
高田義南・西野古海『皇国文法階梯』一 73	—	—	—
黒川真頼『皇国文典初学』一 73	—	—	—
藤沢親之『日本消息文典』上・下 74	母韻	—	子韻
渡部栄八『啓蒙詞のたづき』一 75	母音 <small>ははん</small>	—	—
田中義廉『小学日本文典』一 75	母韻	—	子韻
中根淑『日本文典』上・下 76	母音 母韻	—	子音 綴字(?)
小笠原長道『日本小文典』76	母韻	父音	子韻 子音
藤田維正・高橋富兄『日本文法問答』77	—	—	—
安田敬斎『日本小学文典』上 77	母音	—	子音
春山弟彦『小学科用日本文典』一 77	母韻 声 <small>こゑ</small>	子韻 響 <small>こゑ</small>	単音
藤井惟勉『日本文法書』上・下 77	母音	—	子音 綴字(?)
旗野野十一郎『日本詞学入門』上 77	母韻	—	子韻
物集高見『初学日本文典』上 78	母音 単音	原音	子音 複音
関治彦『語学階梯 日本文法』一・二 79	母音	父音	—
中島操『小学文法書』上 79	母音	—	子音
加部厳夫『語学訓蒙』上 79	母音	—	子音
拝郷運苗『ちまたの石ふみ』上 79	あ本音 いゝお韻	—	かゝわ声 他子音
林魏臣『小学日本文典入門』一 81	母音	—	子音

「syllable 文字綴」(前出『仏語明要』一八六四)

「Syllable 字、字音、言之切音」(前出ロブシャイド『英華字典』一八六六)

「Syllable 音、分音、切音、」(前出『英華字典集成』一八九九)

「Syllable 字音、連字」(柴田昌吉・子安峻『附音挿図 英和字彙』一八七三)

「Syllable 字音、連字・単字、単語」(島田豊・辰巳小次郎増訂『附音挿図 和訳英字彙』一八八八)

「Syllable 字音、連字・単字、単語」(イーストレイキ、棚橋一郎訳『ウェブスター氏新刊大辞書 和訳字彙』一八八八)

「Syllable 字音、連字・単字、単語、単語」(島田豊纂訳『双解英和大辞典 再版』一八九二) など

これらには、英文典同様、表記に関係する名称が多く現れている。なお、英華字典で、「音節」が見られるのは、ヘミング(赫美玲 K. Hemeling) の『官話 English-Chinese Dictionary of the Standard Chinese Spoken Language and Handbook for Translators』(一九一六) の「Syllable 并音、音節、綴音」であるが、おそらくこの「音節」は、日本語の用法を借りたものである。その後、「音節」は中国語にも普及し、言語学関係の文献に、「音節」が現れるようになっていく(黎錦熙「漢字革命軍前進的一条大路」『黎錦熙語言学論文集』商務印書館二〇〇四：三一(一九二二初刊)、前出『中国音韻学研究』一九四〇など)。

本章の最後に、明治・大正期の日本文典に見られる《母音》、《子音》、《音節》の名称の一覧を挙げておく(発行年は、西暦の下二桁で略称する。詳しくは、第四章二節参照)。

	文典	《母音》	《子音》	《音節》
大槻修二『小学日本文典』上 81	母音	母音	一	一
稲垣千順『小学用語格』 81	母韻	母韻	一	一
弘鴻『詞乃橋立』 84	母音	一	一	一
近藤真琴『ことばのそと』はじめのまき 85	母音	一	一	一
B・H・チャンブレン『日本小文典』 87	母音	一	一	一
大槻文彦『語法指南』(『日本辞書言海』) 89	母韻 (Vowel)	母音 (Consonant)	一	一
岡直虚『国語指掌』 90	母音	一	一	一
佐藤雲詔『普通文典』 90	母音	一	一	一
落合直文・小中村義象『日本文典』 90	母音	一	一	一
手島春治『日本文法教科書』 90	母音	一	一	一
大和田建樹『和文典』上 91	母音	一	一	一
高津敏三郎『日本中文典』 91	母音	一	一	一
関根正直『国語学』 91	母音	一	一	一
岡倉由三郎『日本新文典』 91	母音	一	一	一
井口隆太郎『普通文典』 91	母音	一	一	一
村山自彊『普通教育 国語学文典』前編 91	母音	一	一	一
大久保初雄『中等教育 国語文典』 92	母音	一	一	一
木村春太郎『日本文典』 92	母音	一	一	一
小田清雄『応用 日本文典』 93	母音	一	一	一
大川真澄『普通教育 日本文典』 93	母音	一	一	一
村田鈔三郎『国語文典』 93	母音	一	一	一
秦政治郎『皇国文典』 93	母音	一	一	一

	文典	《母音》	《子音》	《音節》
大宮宗司『初等教育 日本文典』 94	母音	母音	父音	子音
井田秀生『皇国小文典』 94	母音	母音	父音	子音
遠藤国次郎・鈴木重尚『日本文典教科書』 94	母音	母音	一	クゝウ 父音 他 子音
岡崎遠光『日本小文典』 95	母音	母音	父音	子音 複音
富山房編輯所『国語問答』 95	母音	母音	父音	子音
峰原平一郎『普通文典』 95	母音	一	一	一
豊田伴『新撰日本文典』 95	母音	母音	父音	子音 複音 配合韻
大宮兵馬『日本語法』 96	母音	母音	父音	子音 複音
新保磐次『中学国文典』 96	母音	母音	父音	子音
柏木重総『東文典』 96	母音	母音	一	子音
西山実和『日本文典』上 97	母音	母音	父音	子音
大槻文彦『広日本文典』 97	母音	母音	父音	成音 成音 音 Syllable
中島幹事『中学日本文典』 97	母音	母音	父音	子音
中等学科教授法研『中学教程 日本文典』 97	母音	母音	父音	子音
渡辺弘人『新撰国文典』 97	母音	母音	父音	子音
島山譲『国文の葉』 97	母音	母音	父音	子音
塩井正男『中学日本文典』 97	母音	母音	父音	子音
和田万吉『新撰国文典』 97	母音	母音	父音	子音
杉敏介『中等教科 日本文典』 98	母音	母音	父音	子音
中郷秋香『皇国文法』 98	母音	母音	父音	子音
上谷宏『中等教科 新撰日本文典』 98	母音	母音	父音	子音
大林徳太郎・山崎庚午太郎『中学 日本文典』上 98	母音	母音	一	クゝウ 父音 他 子音

文典	《母音》	《子音》	《音節》
白田寿恵吉『日本口語法精義』09	母韻	父音	成熟音 子音
兵庫県姫路師範学校『普通教育国語綱要』10	母韻	發声	子音
本多龜三『普通文語文漢文法集成』10	母韻	—	—
教育研究会『小学教員検定受験用国文法講義』11	母音	父音	成音
鴻巣盛広『新撰国語法』20	母音 (Vowel)	子音 (Consonant)	熟音 (Syllable)
小林好日『標準語法精説』22	母音	子音	音節
松下大三郎『標準日本文法』24	母音	父音	音節 化成音
荒瀬邦介『問答式学生の国文法』25	母韻	父音 發声	子音

# 【第七章のまとめ】

第七章では、音韻論・音声学分野の基本的な用語である、「母音」、「子音」、「音節」（および、それぞれの類似の概念を表す語）について、その語誌をたどった。

— はじめに

昭和の初めの主な日本語音韻論・音声学の概論書には、今日と同様に、「母音」、「子音」、「音節」が使われているものが多いが、別の用語も見られる。このころまでは、これらの概念を表すのに、複数の用語が使用されていた。

— 「母音」と「子音」

「母音」と「子音」とは、vowel, consonant の翻訳語として、明治元年（ろから使われ出した和製漢語のようである。「母音」と「子音」とは、明治中期に、英文典（洋文典）で一般的になったが、日本文典では、明治中期～後期には、

文典	《母音》	《子音》	《音節》
高田宇太郎『中等国文典』99	母音 単音	父音 發声	子音 熟音
佐方鎮子・後閑菊野『女子教科普通文典』99	母音	父音	子音
瓜生篤忠・瓜生喬『国文法詳解』99	母音 原声	父音	子音
大平信直『中等教育国文典』99	母音 単純音	發声 原声	子音 配合音
下田歌子『女子普通文典』99	母音	—	子音
鈴木忠孝『新撰 日本文典』99	母音	父音	子音
永井一孝、岡田正美『国語法階梯』00	母韻	—	子音
普通教育研究会『中学教程 新撰日本文典』00	母韻 単純音	發声 父音	成熟音 子音
岡沢鉦次郎『初等日本文典』前編上 00	母音	子音	音節
金井保三『日本俗語文典』01	母声 母音	父音	子音
石川倉次『はなしことばのきそく』01	ぼいん	ふをん	しをん
新美金橘『中等教育実用日本文典』上巻 02	母韻	父韻	子音
小林稲葉『新編 日本俗語文典』02	母音	父音	子音
糸左近『雅俗対照和漢之文典』02	母韻	父音	子音
鈴木暢幸『日本口語典』04	母韻 (Vowel)	子音 (Consonant)	綴音 (Syllable)
教育學術研究会『師範教科国語典』上巻 04	母音	發声	子音 成熟音
小山左文二『日本文法の解説及練習』05	母音	—	子音
高橋竜雄『漢訳日語文法精義』06	—	—	—
岸田時夫『日清対訳実用日本語法』06	母音	發声	子音
林治一『日本文法講義』07	母韻	發声	子音 ヤ・ワ行半母韻
阪本芳太郎『女子日本文典参考書』07	母韻 ア行母音	父音	成熟音 子音
三矢重松『高等日本文法』08	母韻	子音	成音 成熟音

竺家寧（一九九二）『声韻学』（二版）五南圖書出版（一九九一初版）  
 沈国威（二〇〇八）『改訂新版 近代日中語彙交流史・新漢語の生成と受容』笠間書院（一九九四初版）  
 高野繁男（二〇〇四）『近代漢語の研究・日本語の造語法・訳語法』明治書院  
 H. E. Palmer 音声学協定会報編輯部訳（一九一九）「Phoneme, Phone, Diaphone に就て（佐伯三浦二氏の論争を觀て）」  
 『音声学協定会報』一五 音声学協会  
 服部四郎（一九九〇）『新版 音韻論と正書法・新日本式つづり方の提唱』（再版）大修館書店（一九七九初版、一九五  
 一旧版初版）  
 馬淵和夫（一九八四）『日本韻学史の研究 増訂版Ⅱ』臨川書店（一九六三初版）  
 馬淵和夫・出雲朝子（一九九九）『国語学史・日本人の言語研究の歴史』笠間書院

【第七章の使用データベース類】（ウェブの閲覧は、二〇一七年六月〜九月）  
 「漢典」漢典 <http://www.zdic.net/>  
 「近代史數位資料庫」中央研究院近代史研究所 <http://mhdb.mh.sinica.edu.tw>  
 「グーグルブックス」グーグル <https://books.google.co.jp>  
 「国文学研究資料館」電子資料館 <https://www.nijl.ac.jp/pages/database/>  
 「国立国会図書館デジタルコレクション」国立国会図書館 <http://dl.ndl.go.jp>  
 「ジャパンナレッジ」叢書 日本古典文学全集「ジャパンナレッジ」 <http://japanknowledge.com>  
 「中国哲学書籍電子化計劃」中国哲学書電子化計劃 <http://text.org/zh>  
 「読売新聞記事データベース」（ヨミダス歴史館）読売新聞 <http://www.yomiuri.co.jp/database/rekishikan/>  
 「早稲田大学図書館 古典籍総合データベース」早稲田大学図書館 <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotensoku/>

「母音」と「父音」とが多く使われていた（ほかに、母音には「母韻」、子音には「発声」なども使われた）。日本語学の分野において、「子音」が一般的になるのは、大正期以降のことである。「母音」と「子音」とは、中国語にも取り入れられたが、中国では、「元音」と「輔音」のほうがより一般的になった。

「母音」と「子音」とが使われる以前の江戸時代には、洋学を中心に、母音を表すのに、「韻字」、「母韻」、「韻母」、「音母」、「母字」などが使われ、子音を表すのに、「父字」、「子韻」、「子字」などが使われていた。この「父・母・子」は、漢字の反切において、反切上字を「父字」、反切下字を「母字」、反切母字を「子字」と呼んだことに由来するようである。このうちの「母（字）」は、梵語で母音を表す「摩多 mata」から来たものと思われる。

### 三 「音節」

「音節」は、本来「ふしまわしやリズム」という意味の語であったが、一九〇〇年ごろから syllable の翻訳語として使われるようになった。それ以前は、日本文典では、「子音」、「子韻」、「熟音」、「複音」、「単音」など、音（構造）に関する名称が主に使われ、英文典では、「連綴」、「綴字」、「綴音」、「連字」など、つづりに関する名称が主に使われた（「熟音」は英文典でも使われた）。この両者における名称の違いは、日本文典と英文典における関心の違い（日本文典における五十音、英語における正書法）を示すものだと思う。 「音節」は、中国語でも、使われるようになっていく。

### 【第七章の参考文献】

内田智子（二〇〇八）「母音・子音の概念と五十音図」『名古屋言語研究』二 名古屋言語研究会  
 菊沢季生（一九三五）『国語音韻論』賢文館  
 釘貫亨（二〇〇七）『近世仮名遣い論の研究・五十音図と古代日本語音声の発見』名古屋大学出版会



以下、「音素」と「単音」とに分けて見ていく。なお、「音素」については、すでに第一章二・三や、第二章五・二で触れており、以下には重複する部分も含まれる。

## 二・一 「音素」

『日本国語大』によれば、「音素」は、「英）phoneme（ドイツ）Phonem（フランス）phonème の訳語」であり、「ある言語の音声を音韻論的に考察して得た単位。〔以下略〕という（専門的な）意味（だけ）をもつ語である（用例は挙げられていない）。

「音素」は、イギリスの音声学者である、D・ジョーンズやH・E・バーマーらが、一九一六年ごろに、「一國語に於て語義に影響しないで互に交換し得る二つの若くは二つ以上のsounds」(Partner 一九二九：四)を表すのに使い始めたphoneme(フランス語phonèmeからの借用)を、田中館愛橘や菊沢季生ら日本式ローマ字論者が、昭和の初めごろ(一九二八年以前)に、訳して使い始めた語のようである。次の例は、「音素」の使用の比較的に早い例である。

(Ⅷ 01) 母音ノ方ハマダ研究会ノ問題ニモナラズ、将来ドノ程度マデ分化ヲ認メラレルカ不明デスガ、子音ノ方デハ大体、低母音(仮称：a e o) ニツクモノガ同一ノ音素ニ属スルモノト認メラレテキルラシイ。A e oニ着クダケノ開キ(発音部位ノズレ)ハ許サレル訳デアル。

(Ⅷ 02) 「ローマ字ひろめ会」は、最初あらゆる種類のローマ字国字論者を包含してゐた。〔中略〕前者の主張は、ローマ字なる外国の文字を採用する以上は、外国に於ける―特にイギリス語に於ける―慣用に照して我が国語の音声を写し出すべきであるとの写音主義を採るものであり、後者は国字とは我が国語を

## 第八章 音韻関連用語の語誌(二)―「音素」、「単音」、その他―

### 一 はじめに

本章では、「音素」と「単音」、その他の音韻用語について、これらの用語が、いつごろから(今のような意味で)使われるようになったのか、ほかにどのような意味・用法で使われたか、などについて見ていく。以下、(用語と区別して)専門的な概念を示すときは、《》でくくって示す。ただし、ここでは、それぞれについて、細かい定義は行わない。用例の収集には、書籍や雑誌のほか、「国立国会図書館デジタルコレクション」、「国文学研究資料館電子資料館」、「早稲田大学図書館古典籍総合データベース」、「グーグルブックス」、「近代史数位資料庫」などを用いた。明治期までの文献については、出版元を省略して記す。

### 二 「音素」と「単音」

「音素」と「単音」とは、今日では、それぞれ、「ある特定の言語において音の違いが意味の違いに係するかどうか」によって設定される音韻論(phonology)の最小単位、「意味の区別とは関係なく言語音そのものを細かく観察・記述する」ための音声学(phonetics)の最小単位(斎藤二〇一〇：三四)とされる。

この両語は、語誌的には大きな違いが見られる。「音素」は、その概念自体が比較的新しく、(その概念を表す)phonemeの翻訳語として形成された語であるのに対して、「単音」は、今日の音声学的概念(phoneやspeech sound、segmentなどに相当)を担う以前に、いくつかの異なる概念(「単一の音」という基本的な意味をもつ点は共通する)を表すのに使われていた語である。

から何処までを一区劃と限定され得ないもので、部分の見方が無限大だといふ風のものであるから、其所で出来る素音の数も無限大である。従つてそれを悉く扱ふことは不可能であるが、色々な点から見て、或る明瞭な型と認め得る素音の、一定の数を見定めることだけは出来る。之等の代表的の素音を主として、その近似の変態音の中、吾吾の知つて置かねばならぬものを、幾つか加へて考へることにする。

(石黒魯平『国語教育の爲の音声学』(茗溪会パンフレット第二輯)目黒書店、一九二八・三七)

(Ⅷ 04) パーマ氏の呼ぶ **phone** (素音) はジョウンスの **phoneme** (音族) の中の一員、即ち **Narrow Notation** (精密記号) で示すものに該当し、パーマ氏の **phoneme** はジョウンスの **phoneme** 中の **Broad Notation** (簡略記号) で示すものに当つてゐるが、パーマ氏は前者を「**□**」で囲み、後者を「**◇**」で囲むことを提案してゐる。

(大西雅雄『音声学史』(国語科学講座Ⅱ九音声学)明治書院、一九三四・一一九)

Ⅷ 03 の「素音」は、『音素』と『単音』との区別がまだ明確ではないころの例といえようが、(一)には、H・スウィートやJ・ジョーンズの「簡略表記」と「精密表記」の考え方が見られる。Ⅷ 04 の「ジョウンスの **phoneme** (音族) の中の一員、即ち **Narrow Notation** (精密記号) で示すもの」とは、**allophone** (異音) のことである(詳しくは、第一章四節参照)。この例では、『単音』に「素音」が、『音素』に「音族」が用いられている。

なお、**phoneme** に当てたのではないと思われる「音素」の例としては、一九一〇年刊の兵庫県姫路師範学校編『普通教育国語綱要』に、「各行に発声と称する特殊の音素あり。」が見えるが、おそらく、この「音素」は、専門用語として使われたものではないであらう(同書では、用語は、上欄に挙げられており、「発声」(子音)は上欄にあるが、「音素」はない)。

ところで、「音素」は、中国語では、日本語の「単音」(**phone**) に相当する用語である。たとえば、『語学辞典 増訂版』(三民書局、二〇〇五)には、「音素 **phonetic element/phone** 語音的最小単位。〔…音声の最小単

表現するものである以上、単に分析的な写音主義に止まらず総合的に国語の性質を考慮し、国語の音声組織に適した綴り方を用ふべきであるとの音素主義を主張するものである。

(菊沢季生「国字問題の研究(第二)・国字論の発達(続)」『学士会月報』五〇九、一九三〇・二二)

(『国字問題の研究』一九三二による)

しかし、ほぼ同時期に、F・de ソシュールの言語学やブラーク学派(N・S・トゥルベツコイ)の **phonology** の単位である **phoneme** が、小林英夫によつて「音韻」と訳され(フェルディナン・ド・ソッスュール述、シャルル・バイイ、アルベール・スシエ編、小林英夫訳『言語学原論』岡書院一九二八・八二(原著一九一六)、トルベツコイ、小林英夫訳『形態音韻論』について『方言』二二・一九三二・一四(原著一九二九)など)、**phoneme** の訳としては、こちらが主に使われるようになった。また、ブラーク学派の **phonology** は、神保格や菊沢季生らによつて、「音韻論」と訳された。

その後、戦後の言語学においては、服部四郎の影響で、**phoneme** の訳語については、「音素」が主流になった(亀井一九七一・一六一)。服部(一九四〇・一一)は、「音素 (**phoneme**)」と「**phoneme** の外に、音の長短の段階、強勢、アクセントの型、文強勢の型、音調の型、強調の型などのやうに、**phoneme** と同等の資格を有し、いはゆる **langue** に属するもの」の総称としての「音韻」とを区別した。この考えは、今日の言語学に引き継がれている。**Phoneme** には、当初「素音」や「音族」などの訳もあった。「素音」については、一九二七年刊の『音声の研究 I』(音声学協会)の「音声学用語選定委員案」に、「**phone** 素音、音素、語音」とある(**phoneme** は「まだ現れていない」)が、これより少しあとの、佐久間(一九三五・二)や『大辞典』(平凡社、一九三四・一九三六)などでは、「素音」を **phoneme** の訳と見ている。そのほかの例を挙げる。

(Ⅷ 03) 素音は、音節などの様にその要素の本質に基づいて眺めるべきでなく、その前後左右に関連させて初めて、その個々の特性が判明するといふ様な性質のものである。勿論、吾吾の発音器官の各部は何処

『元音』(vowel) 和『輔音』(consonant) 二種。〔は改行を示す。以下同じ〕「世界の表音文字の字母は、およそ二種類に分けられる。(一)「音綴」(syllable) を単位とするもの。定められた字母は、ほぼそれぞれの「音綴」を代表して用いられる。たとえば、梵字や日本の仮名など。(二)「音素」(Sound element) を単位とするもの。定められた字母は、ほぼそれぞれの「音素」を代表して用いられる。たとえば、ギリシヤやローマの字母。「音素」は言語音を組成する元素であり、通常「元音」(vowel) と「輔音」(consonant) との二種に分かれる。」

(張世禄『中国音韻学史上』台湾商務印書館、一九七五・三三(初刊一九三八))

VII 05に見られるのは、国際音声記号(IPA)における単独の記号(補助記号などの付かないもの)を「音素」とするような、「音素」(《単音》のとらえ方である。VII 06は、「音素(Sound element)」とあり、この「音素」は、『単音』を表すと思われる。

一方、phoneme は、中国語では、一般に「音位」と訳される。「音位」は、趙元任、羅常培、李方桂による翻訳語のようで、B・カールグレンの著作を訳した『中国音韻学研究』の「名辞表」に、次のようにある。

(VII 07) phoneme 音、音類 偏重於指音類。這個名詞在本書見次比較的不多，大半可訳作「音」。至於今年 Jones 跟 Bloomfield 等提倡(我們訳作「音位」)的英文字 phoneme，在本書出版以前還沒有通行，它的意義在那時還沒有確定化。[phoneme 音、音類。主に「音類」を指す。この名詞は、本書では、現れる回数がそれほど多くなく、大半は「音」と訳される。今年に至って Jones と Bloomfield らが提唱した(われわれが「音位」と訳した)英単語 phoneme は、本書出版以前にはまだ通用しておらず、その意味は、そのころにはまだ確定していなかった。]

(高本漢、趙元任・羅常培・李方桂訳『中国音韻学研究』一九四〇・二五)

なお、日本語で「音韻論」と訳される phonology は、中国語では、「音系学」と呼ばれる(phonemics の訳と

位)とある。ただし、「音素」を phoneme とする概論書などもあり、用語がやや混乱している。これは、とくに台湾のものに多いようで、たとえば、台湾の言語学の教科書である、謝国平『語言学概論』(三民書局、二〇一・一九五)では、『音位』(phoneme、亦称音素)「…また「音素」ともいう」となっているが、鍾榮富『当代言語学概論』(五南圖書出版、二〇〇六・六三)では、「音素(phone)」となっている。

「音素」という語の使用は、日本語より中国語のほうが早かったようである(ただし、主に《単音》を表す)、一九一三年に中華民国教育部が召集・開催した「説音統一会」の「議程」(第二項)に「核定音素」(「音素を定める」という表現が見られる(周一九七九・三三))ほか、その後の「国音字母」(注音字母)制定をめぐる議論のなかでも、「音素」はよく使われている(第七章二・一VII 14の『東方雜誌』の記事など)。ただし、そのとらえ方には、さまざまなものがあつた。たとえば、錢玄同や、張世禄は、次のように述べている。

(VII 05) 単声和單韻都是音素。複声、声化之韻、複韻和附声之韻都不是音素。但單声中的ㄅ和ㄆ、ㄆ和ㄈ、都只是「一個音素」。「單声」(「破擦音以外の」声母)と「單韻」(「單母音の韻母」)は、みな「音素」である。「複声」(「破擦音の声母」、「声化之韻」(音節主音の子音の韻母)、「複韻」(「重母音の韻母」)、「附声之韻」(「母音+鼻音韻尾」の韻母)は、みな「音素」ではない。ただし、ㄅ(b)とㄆ(p)と、ㄆ(p)とㄆ(p)と、ㄆ(p)とㄆ(p)とは、みなただ一つの「音素」である(ローマ字は「漢語拼音方案」による)

(錢玄同「注音字母与現代国音」『錢玄同文字音韻学論集』上海古籍出版社、二〇一・一一・一五(初出一九二二))

(VII 06) 世界上標音文字の字母、大致可以分为兩類：／(一)以『音綴』(syllable) 為單位的。所定的字母，大都是用来代表各個的音綴；例如梵文字母和日本的仮名。／(二)以『音素』(Sound element) 為單位的。所定的字母，大都是用来代表各個的音素；例如希臘和羅馬字母。／音素是組成語音的原素，通常分為

多より。のこり四十五音はうまるゝものにて。いつゝのこゑは母のごとく。四十五おんは子のごとし。これより母韻子韻てふなはいできぬるなり。韻とは音といふもおなじやうなるころとしるべし／またぼいんのことを単音たんおんといひ。しいんのことを複音ふくおんといふ。そは単とはひとへの。複とはふたへのといふころにて。ぼいんはひとへのこゑ。しいんはふたへのこゑなればなり

(古川正雄『絵入智慧の環二編下詞の巻』(再版) 一八七三…一オ(一八七初版))

(Ⅷ 09) たんおん 単音 五十音図中ノあいうえおノ称。單純ナルモノトシテノ語。複音ノ対。

(山田美妙『大辞典下卷』一九一二)

(Ⅷ 10) たんおん 単音 其のものみにて一音をなす音。即ち、五十音図のあ・い・う・え・おなどの音。(複音・綴音の対) 漢字三音考皇国字音格「単音とはあいう・かきく等の如く、単にして余響なき音にして」「同辞典によれば、「複音」は、「父母音の複合して成れる音。子音。」「綴音」は、「或る音と他の音と綴りあはせて成りたる音。」である)

(上田万年・松井簡治『大日本国語辞典』金港堂書籍、一九一五―一九一九)

Ⅷ 10 の『大日本国語辞典』にある『漢字三音考』の用例は、『日本国語大』の「単音」②にある用例と同じものであるが、両辞典の解釈は、異なっている。この用例は、「単音とはあいう・かきく等の如く」とあることから、『大日本国語辞典』の「単音」の語釈「其のものみにて一音をなす音。即ち、五十音図のあ・い・う・え・おなどの音。」には合わない(「かきく」は、同辞典の「複音」(「父母音の複合して成れる音」)に当たる)。

ここで、『漢字三音考』の「単音」と同じく、『日本国語大』の「単音」②(「長母音や二重母音をもたずに一音節をなす音。」)に当たる「単音」の例を挙げておく。

(Ⅷ 11) 単音とは長短の諸韻チヤウケン シヨケンを添へざる者ソウを云ふ。「このあと、「直音の単音」の例として、「阿ア以イ宇ウ衣エ於オ」などが挙げられている)

ては「音位学」と呼ばれる。ただし、台湾では、phonology を「音韻学」と呼び、中国の伝統的な音韻学を「声韻学」と呼ぶことが多い(第六章二節)。

## 二・二 「単音」

次に、「単音」について見ていく。「単音」は、『日本国語大』に、次の四つの意味が挙げられている(「たんおん」のほかに、「たんいん」という読み方もあるが、ここでは読み方の問題については触れない)。

① 音声学で、音声の連続を分解して得られる最小の記述単位。個々の母音・子音、k t p ŋ a i などの類。

② 長母音や二重母音をもたずに一音節をなす音。

\* 漢字三音考 (1785) 皇国字音の格「単音とは、あいうかきく等の如く、単にして余響なき音にして」

③ 音楽で、単一の音声部でできている音楽。また単声、モノフォニーのこと。

\* 音楽字典 (1909) 「Unisone ユニソン、同音、単音」

④ 同時に一つだけこえる音。単一の音。

\* 医師高間房一氏 (1941) 〈田畑修一郎〉三「単音でなく、微弱な重音があるので弁膜症の気味があるとも診られた」

このうち、言語音に関するものは①と②であるが、今日の言語学・日本語学では、①の意味でしか使われない。しかし、明治期には、「単音」は「母音」の意味で使われることが多かった。第七章二・一に大槻文彦の例(Ⅷ 13)を挙げたが、ほかの日本文献や辞書における例を挙げておく。

(Ⅷ 08) 母韻ぼいんとはアイウエオのいつゝの音おとなり。子韻しいんとはのこり四十五の音のことなり／みぎのいつゝのこ

または子音のやうな、いはゆる**單音**も、具体的な音声系列にはそのまゝの姿であられるのではない。むしろそれぞれの**單音**を恒常的なものと見るべきでないといふ主張には、かなり首肯すべきものがある。

(佐久間鼎『音声心理学と国語』岩波書店、一九三一・六)

(Ⅷ 16) 世界に現在行はれてゐる文字の中で、ローマ字が発音を写すのに最も都合のよい文字の一つであることは、誰も認めてゐるところであるが、その性質は一字一字が大体**單音**を表はし得るといふ性質に基づくのであるから、ローマ字を使ふ以上は、此の**單音**を表はすといふ大切な性質を殺してはならない。

(佐伯功介『日本語をローマ字で書く上の綴方に関する意見』に対する批評『国字問題の理論』

日本のローマ字社、一九四一・二七六(一九三二発表)

以上の例からは、この時期、《**單音**》と《**音素**》とが未分化であつた(《**單音**》が《**音素**》の意味を含んでいる)ようすがうかがえるが、Ⅷ 14の神保の「抽象音」の理論は、D・ジョーンズの「音素解釈」に影響を与えたものであり(ジョーンズ一九三九・五、また、Ⅷ 16の著者である佐伯は、「一字一音素式」の日本式ローマ字表記を提唱する(佐伯功介「一字一音主義と五十音図」『国字問題の理論』日本のローマ字社、一九四一・三二六(一九三三初出))など、このあとぐらゐの時期(昭和の初め)から、《**音素**》をめぐる論議が盛んになつていく。

「**單音**」を音声学的な単位として、音韻論の単位である「**音素**」(「**素音**」)とはつきり区別して用いている例としては、次のようなものがある。

(Ⅷ 17) 音声学にいふ**單音**は、一定の音色をもつて特徴とする単位語音である。(中略)耳に聞える音色の相異は、心理的な事実であるが、これは**單音**の成立に際しての物理的および生理的条件における相異に対応する。語音を心理的印象から系統的に類別するときは、いはゆる「**素音**」(《**音素**》)を得るが、その類別の精密と明確とを期しがたいこと、あたかも味または匂におけると同様である。そこで従来音声学では、主として音声を発するに当つての生理的物理的条件を考察して、特定の**單音**を定立し、かくて

ほかに、明治期の日本文典には、「**單音**」を、《**音節**》を表すのに使っている例も見られる。  
(大槻修二『小学日本文典上』一八八一・一五〇)

(Ⅷ 12) 問 音はすべて幾個にして字はすべて幾個なるや／答 **單音**は八十一〔清音50十濁音20十半濁音10十鼻音1〕にして其字は僅に四十八個なり(第四章表四―参照。〔内は筆者。以下同じ〕)

(春山弟彦『小学科用日本文典卷二』一八七七・六〇)

今日の「**單音**」の意味『日本国語大』①に近い用例は、明治・大正期には少なく、昭和になつて多く現れる。

(Ⅷ 13) **Tan-on** (**單音**) A single sound, one letter-sound.

(井上十吉『新訳和英辞典』一九〇九)

(Ⅷ 14) 具体的音声、或一人が或時發した音声、その時の臨時要素までも尽く考へたもの。／抽象的音声、多くの人が多くの場合に發する音声に共通な固有的性質のみを取り出して考へたもの。／(イ) **單音**―音質上一種の音をいふ。／(ロ) **單音**の連結―連結上、表れる高さ、強さ、大きさ。／今仮に音声ばかりを分析してその最小単位を求めらば、それは一つの**單音**となる。例へば、(a)とか(k)とか(s)とかいふものはである。

(神保格『言語学概論』岩波書店、一九二二・四八、八一)

(Ⅷ 15) アクセント小節の分節支乃至成員として、さらに小さい単位を求めるとき、音節(syllable, Sibe)が自発的分節においてあらはれる一層技巧的な分析的な構へ方で、なほ小さい単位たる個々の母音および子音に到達することができる。さらに分析的態度を徹底させて、音声器官の各部の位置などに分解することも試みられた。かういふ「音声元子」から具体的な音声を組み立てるやうな仕方は科学のある進程においては効能をもち得るが、究極において正当な方法ではない。単独に取出したやうな個々の母音

図八一 「音素」・「単音」関連の用語と研究分野名

	日本語		中国語		
	phone	phoneme	音素 (單音)	音位 (音素)	語音学
	日本語		中国語		
	單音	音素 (音韻)	音素 (單音)	音位 (音素)	語音学
	中国語		日本語		
	音素 (單音)	音位 (音素)	音素 (單音)	音位 (音素)	語音学

「中国語」の欄の（）内は、ほかに（主に台湾で）使われることのあるもの。

三 その他の用語

次に、「発音」、「音声」、「声音」について、簡単に見ていく。

三・一 「発音」

『日本国語大』によれば、「発音」（音）特に、言語の音声を発すること。また、その音声の出し方。」の初出例は、『玉葉』の仁安二（一六七）年三月三日の「次唱二人発音」である（読み仮名はなし）。「発音」には、「はっおん」、「はっついん」、「はっとうん」の読み方（言い方）があったようである（ただし、「はっとうん」は、「頭

すべての語音を系統的に排列することを得たのである。（〔〕内は筆者）

（佐久間鼎『日本音声学』京文社・柳原書店、一九二九・五八）  
（Ⅷ 18）之「音素」に対し、言語行動に属する「音声」に於ける最小単位を「単音」と称しては如何であらうか。單音は元来 Einzellaut の訳語であらうと思ふが、Einzellaut は大体 Jones の第一度の abstract sound（抽象音）たる speech-sound に当るが、concrete sound（具体音）に当るものもある。「單音」は concrete sound に限定したいと思ふ。（〔〕内は筆者）

（服部四郎「Phoneme について」『音声学協会会報』六〇、六一 音声学協会、一九四〇：一一）  
Ⅷ 18 の Jones の説について、補っておく。ジョーンズ（一九三九：五）によれば、「第一度の abstract sound」と「concrete sound」とは、ともに、神保格が提唱し、H・E・パーマーが実用化したもので、前者は「諸書中で『話音』（speech sound）なる語で通称されてゐる所のもの」、後者は「単一発音（a single utterance）に際して聴取し得るもの」である。たとえば、同一人が母音 u を、同じ調子で二十回発音した場合、人々は二十の「具体音」を聞き取るが、同じ音だと見なす（第一度の抽象音）。「第一度の抽象音」は、国際音声記号（IPA）の精密表記のレベルに当たるようである。

ところで、現代中国語には、音声学（語音学）用語としての「単音」という語は、とくに用いられていないようである（ただし、台湾の言語学の教科書である、謝国平『語音学概論』（三版）（三民書局、二〇一一：九五）には、「單音（phone）」とある。「單音詞」という語があるが、この語中の「單音」は「單音節」（漢字一字に相当）を意味する（「單音節詞」という言い方もある）。中国語で「單音」が使われる場合は、単に「一つの音（音節）」という意味（の普通名詞）であるようである。

この節の最後に、日中両語における《單音》と《音素》に関連する用語を、まとめて、図八一に示しておく。

(Ⅷ 22)『音』是由声与韻相配合而成、發音的是『声』、收音的是『韻』、有声無韻、是不能成音的。〔音〕は声と韻とが結合して成り、「発音」するのが「声」、「收音」するのが「韻」で、声あって韻がなければ、音を成すことはできない。〕

(林尹、林炯陽註釈『修訂増注中国声韻学通論』黎明文化事業、一九八二・二五五(一九三七初出か))

### 三・二 「音声」と「声音」

はじめに、『日本国語大』における「音声」および「声音」の語釈・用例を見ておく。『日本国語大』には、「音声」で表記される漢語として、「いんじょう」、「いんせい」、「おんじょう」、「おんせい」、「おんぞう」の五つが、「声音」で表記される漢語として、「せいいん」、「せいおん」の二つが、見出し語として立てられている。

○いんじょう 音声

(「いん」は「音」の、「じょう」は「声」の漢音) 声。おんせい。

\*落葉集(1598)「音声 いんじやう」

\*日葡辞書(1603-04)「インセイ、または、Inxō (インシャウ)。コエ」

○いんせい 音声

(「いん」は「音」の漢音) 声。おんせい。いんじょう。

\*文明本節用集(室町中)「音声 インセイ」

\*日葡辞書(1603-04)「Inxei (インセイ)、または、インシャウ。コエ(訳「声」)

\*歌謡・松の葉(1703)序「是「一より二を生じ、二より三を生じ、三より万物のいんせいを生ずる理いた

役が声明の唱句をとなえ始めること。また、その役をつとめる職業。」となっている。

今日では、「発音」は、単に「声(音)」を出す(「こ」ではなく、「音声器官を使って」特定の音声を正しく出す(「こ」)という意味(英語の pronounce (動詞)、pronunciation (名詞)に当たる意味)で使われるのがふつうである『日本国語大』の「発音」には、これに当たる用例として、一八八七年刊の『尋常国語読本』の「正しく発音して、ゆるやかに読むべし」が載っている。辞典類に、pronounce, pronunciation に当った「発音」が現れるのは、J・C・ヘボンの『和英語林集成第三版(一八八六)の「Hatsu-on ハッオン 発音 Pronunciation; enunciation; articulation」、『PRONOUNCE lu; hanasu, hatsu-on suru」、『PRONUNCIATION li-kata, li-yō, toritsu, hatsu-on」が早い例のようである(同辞典の初版、第二版には見えない)。英華辞典では、一九〇八年刊の顔惠慶編『英華大辞典』の Pronounce, Pronunciation に「発音」が現れる。一方で、明治初めの英文典や日本文典に、次のような例が見られ、明治初年には、この意味の「発音」が使われていたようすがうかがわれる。

(Ⅷ 19) car ト云フ言ヲ 発音セヨ ○ carpet ト云フ言ヲ 発音セヨ ○ carpeting ト云フ言ヲ 発音セヨ

(大学南校助教訳『格賢勃斯 英文典直訳卷之上』一八七〇・二ウ)

(Ⅷ 20) いゐをおゑゑなど、その音おなじやうなれども、各その行の異なるによつて発音の差別あり。しかるに、あ行のいゝや、行のいゝ、あ行のうゝ、わ行のうゝ、其文字同じけれども、其発音はもとより同じからず。実は其字体を異にしてありたし。〔句読点是一部筆者〕

(中金正衡『大倭語学手引草 前篇』一八七一・五才)

ほかに、「発音」には、(第七章二・一に見た「発声」と同様)とくに中国の音韻学において、「音を出し始める(こと)、音の出し始め」という意味の使用例も見られる。

(Ⅷ 21) 古称發音相同之字曰双声・收音相同之字曰疊韻。〔古には「発音」同じき字を称して「双声」と曰い、「收音」同じき字を「疊韻」と曰う。〕

ふこと第一なり」

\*浄瑠璃・夏祭浪花鑑(1745) 一「今様朗詠さまさまに、音声(オンセイ)微妙(みめう)を尽さん事」

\*滑稽本・浮世風呂(1809.13) 四・下「贅女(ぜ)節をはじめとして、すべての田舎唄は濁音で音声(オンセイ)がだみてゐやす」

\*宋玉・登徒子好色賦「寤「春風」兮發「鮮榮」、潔斎俟兮惠「音声」」

②雅楽で楽器の音をいう。音色(ねいろ)。おんじょう。

③人間が、音声器官を使って話しことばとして発する音。言語音。

\*開化の入口(1873.74)「横河秋濤」下「イーヤ夫でも彼等は何処やらに臭みがある、イーヤ舌が短かいの、音声(ランセイ)が違がつてゐるのと無理に彼を隔て我身を立てるは」

○おんぞう 音声

「おんじょう」を直音にした語 「おんせい(音声)」に同じ。

\*栄花物語(1028.92頃) 駒競の行幸「いとめでたう尊くて、塔の内の二世尊の出し給ふところのおんじょうとも思なされ給ふ事限りなし」

○せいじん 声音

「じん」は「音」の漢音 「せいおん(声音)」に同じ。

\*いろは字(1559)「声音セイキンコエヲ」

\*通俗孝肅伝(1770) 三・二「八人四対面貌服色声音(セイイン)まで一つの違ふ処なく」

\*造化妙々奇談(1879.80)「宮崎柳条」三「声音(セイイン)は言語(げんきよ)の本(もと)にして、思ひ内に有れば、其情外に発する者也」

○せいおん 声音

れり」

\*小説神髓(1885.86)「坪内逍遙」上・小説総論「其音声(インセイ)姿態に発するや詩歌音楽舞蹈等の幽趣佳境となる」

○おんじょう 音声

①人や動物の声。また、節をつけて唱えたり歌ったりする声。おんせい。

\*田氏家集(892頃)上・山寺聽鶯「音声軟弱太嬌<sub>レ</sub>春、山寺聞時感更頻」

\*文明本節用集「室町中」「音声 ランジャウ」

\*天草本伊曾保物語(1593) 鳥と狐の事「Vongga (ランジャウガ) イササカ ハナゴエデ アキラカニナ イト マウスガ」

②「おんじょうよく(音声欲)」の略。

\*仮名草子・竹斎(1621.23)上「めんしやう、けいじつ、せんはく、さいこつ、ゐぎ、をんじやうとて、これを六欲と申候」

③雅楽の管弦の音。また、楽器、鐘などの音。音色(ねいろ)。

\*靈異記(810.824)上・五「和泉の国の海中に楽器の音声有り」

\*九暦・九暦抄・天暦七年(953)正月五日「次雅楽興「音声」、二曲、舞間出穩座」

\*東大寺統要録(1281.1300頃)「諸楽奏「音声」」

\*周礼・地官・鼓人「鼓人掌<sub>レ</sub>教「六鼓四金之音声」、以節「声楽」、以和「軍旅」

○おんせい 音声

①人の声。おんじょう。いんじょう。おんぞう。

\*歌謡・松の葉(1703) 五・歌音声「歌の事、音声(オンセイ)ゆたかにして、始終たるまぬやうにうた



事也。

(鴨東萩父『仮名文字使蜺縮涼鼓集』上「凡例」一六九五刊・七才)

VIII 23 の「音声の高低」は、(高低) アクセントのことであり、この「音声」は「言語音」(より詳しくは「発音」)を表していると見ることができであろう。

次の三例には、いずれも同じ文中に、「音韻」と「音声」(読み仮名なし)とが現れている。

(VIII 24) 音韻トハ、人ノ音声ナレハ、其口ヨリ出テ耳ニ聞クヘキ者ニシテ、形ナケレハ、図画ニモ写スヘキヤウナキヲ、四声七音ヲ経緯ニシ、二百六韻ヲ収メテ、漏ルコトナク音ノ是非ヲ知ラシメタルハ、妙ナル寔ニ珍敬スヘキノ書ナリ。(句読点は筆者)

(文雄『磨光韻鏡後篇指要録 韻鏡大旨』一七七三刊・一才)

(VIII 25 (≡ III 51)) 殊に音韻言語ハ。太古より毎国<sup>ミツクニ</sup>にとなへ来たりし者なるを。我国にハ。西土の字を仮て。音を習ふにハ。一旦彼土の音声に転<sup>ウツ</sup>るが如くすれど。はた年を歴てハ。我<sup>われ</sup>音声に移るべき事。自然の理也。

(上田秋成『靈語通』一七九五序・六才)

(VIII 26 (≡ III 52)) 音韻ノコト、古来云フ者、多シト雖モ、皆一方ノ私言ニシテ、世界同一ノ公論ニ非ズ、夫活物ニ、音声アルコト、何レノ国ニテモ、同一ノコトニシテ、此ノ国ニ限り、此ノ地ニ限りテ、無シト云フコト、有ルベカラズ、

(鳥海松亭『音韻啓蒙』一八一六刊・一才)

これらの例では、「音韻」が(体系・要素としての)「言語音」を表し、「音声」は、一般的「人の声」(あるいは、「発音」)を表しているようである。

①こえ。音声(おんせい・おんじよう)。せいいん。

\*今昔物語集(1120頃か)一・四「城の北の門を自然(おのづか)ら開しむ、其の声音無し」

\*和訓栞(1777-1862)「こゑ、声音をいふ、言笑の義なるべし」

\*西国立志編(1870-71)(中村正直訳)一一・一四「蓋しその人、骨已に朽と雖ども、その声音なほ生るが如く」

\*青年(1910-11)(森鷗外)一八「おちやらの表情や声音(セイオン)が余りはっきり純一の心に浮んでは来なく」

\*礼記・楽記「楽必発<sup>ニ</sup>於声音<sup>一</sup>、形<sup>ニ</sup>於動靜<sup>一</sup>、人之道也」

②音楽。声楽。せいいん。

\*文部省訓令第二号・明治三十六年(1903)三月九日「音楽第一学年(略)声音練習」

\*孟子・梁惠王・上「声音不<sup>レ</sup>足<sup>ニ</sup>聽<sup>ニ</sup>於耳<sup>一</sup>与」

以上のうち、(単なる「声」ではなく)「言語音」という語釈が載せられているのは、「おんせい 音声」だけであり、その初出例の出典は、横河秋濤『開化の入口下』(一八七三刊)となっている。これに基づけば、「言語音」の意味の「音声」は、明治になってから、「おんせい」の読み方(言い方)で現れたことになる。以下、「言語音」を意味する「音声」と「声音」とについて見ていく。

### 三・二・一 「音声」

まず江戸時代の文献に現れた「音声」で、「言語音」を表すともとれるものを挙げておく。

(VIII 23) 誠に端<sup>はし</sup>箸<sup>はし</sup>橋<sup>はし</sup>などゝて<sup>おんせう</sup>音声の高低自由なる都<sup>みやこ</sup>人の此四<sup>よ</sup>つの音ばかりを言<sup>い</sup>得<sup>え</sup>ざらん事ハ最口惜き

ニシテ、人各々高低強弱ノ別アルハ天賦ノ然ラシムル所ナリ。〔句読点は筆者〕

〔栗原亮一纂訳『泰西名家演説集 附演説法』一八七九・三八〕  
釘貫(二〇一三・六七)によれば、「學術用語としての『音声』の用例は近世から明治前半においては稀であり、この語の本格的な使用は、明治の終わり頃から流入した *phonetics* の訳語として『音声学』があらわれて以後のことである。」という。次の例は、明治後期のものであるが、「音韻学」が *phonetics* の意味(訳)で使われているのに対し、その研究対象となる音については、「音声」が使われている。

(Ⅶ 33 (Ⅲ 75) 音韻学とは人の発する音声の元になるもの、即ち発音の元素となる所のものを探求して、それを言出すこと、又それを結び付けること、従つて之に附随して来る調子の如きものまでも含んで、それを研究するのが音韻学の本領である。

〔伊沢修二「視話法について」一九〇四〕

〔信濃教育会編『伊沢修二選集』信濃教育会、一九五八・七六七〕  
*phonetics* の訳としては、明治後期には、このほかに、「声音学」、「音声学」、「発音学」などが使われていたが、必ずしも *phonology* との区別が明確ではなかった(第三章三・六)。一九二七年刊の『音声の研究 I』(音声学協会)の「音声学用語選定委員案」を見ても、「*phonetics* 音声学、発音学、音韻学」とあり(*phonology* は、まだ現れていない)、両者が未分化であつたようすがうかがえる。*Phonetics* (《音声学》)と *phonology* (《音韻論》)とを峻別したのは、ブラーク学派の N・S・トウルベツコイ(主著『音韻論の原理』一九三九刊)で、トウルベツコイの研究によつて *phonology* (《音韻論》)が誕生したともされるが(太田二〇五・一七、三三)、それ以前にも *phonetics* と *phonology* という二つの用語(分野)の使い分けがあつたようである(大西一九三四・三)その使い分けについては、金田一京助による H・スウィートの訳書に、次のようにある。

(Ⅶ 34) 言語の音の研究は、音韻学(若しくは音韻論)に関する、音変遷の歴史や原則のことも此の中の部

明治に入ると、「音声」は、日本文典などに、体系・要素としての「言語音」(＝「音韻」)の意味で現れるようになる。

(Ⅶ 27) 伊呂波トハ日本ノ音ニシテ、今日々々人類ノ相集シ森羅万象ノ言語ヲ通ハスルト雖、其音声ハ纔カニ四十七止マル。即チ伊呂波四十七ニシテ、其字数モ四十七アリ。〔句読点は筆者〕

(Ⅶ 28) さて人の音声の基は清音四十七と濁音二十と鼻音一となり。この六十八の音を重ねて言葉となし、其言葉を列ねて文章を作るなり。〔句読点は筆者〕  
(大槻修二『小学日本文典上』一八八一・二オ)

(Ⅶ 29) 偕又羅馬字ノ便ナルヲ確知シ、之ヲ実地ニ用フルニ方リテハ、先ツ一定ノ規則ヲ設ケ、之ニ拠ラサル可ラス、此規則ハ簡易ヲ主トシ煩雜ヲ省キ、仮名ノ用法ニ拘泥セス、勉テ音声ヲ以テ標準ト為スコシ、然レトモ亦此ニ稍々困難ノ事アリ、例ヘハ日本各地方ノ音声一様ナラス  
(矢田部良吉「羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ説」一八八二初出)

〔国語教育研究会編『国語国字教育史料総覧』国語教育研究会、一九六九・三二〕  
ほかに、明治初期には、「音声」は、物理学、生理学、演説法などの分野の用語としても使われている。

(Ⅶ 30) 音声ノ速力ハ驗温器三十二度ノ時ニ当ツテ大約一千〇九十尺ナルヲ通例トス

〔関口開『算法窮理問答下編』一八七四・四二オ〕  
(Ⅶ 31) (問) 人類ノ音声ヲ何如ニ区別スルヤ。(答) 男子に於テハ「バス」ト「テノール」の二音ニ分チ、婦人ニ於テハ「コントフルト」ト「ソプラノ」ノ二音ヲ分ツ。〔句読点は筆者〕  
(内務省衛生局訳『医学七科問答生理学』一八七九・一七五)

(Ⅶ 32) 音声ノ種類ヲ区別シテ、常声・成声・仮声ノ三ト為ス。常声ハ通常ノ談話弁説等ニ用ユル所ノモノ

明治期には、「言語音」を表す「声音」のほか、phonetics の訳である「声音学」が見られるようになる。これは、英華字典における、sound などの訳である「声音」や、phonetics, phonics の訳である「声音之学」を取り入れたものではないかと思われる。sound は、モリソン（一八三二刊）、ウィリアムズ（一八四四刊）、メドハースト（一八四七〜一八四八刊）、ドーリットル（一八七二刊）の英華字典に「声音」とあり、phonetics, phonics は、メドハースト、ロブシャイド（一八六六刊）、ドーリットルの英華字典に「声音之学」とある（ただし、メドハーストのものは phonics のみ。英華字典の正式名称等については、第七章二節を参照）。

(VII 37) 此五十ノ音標字ヲ用テ呼ブ所ノ声音ハ其数五十個ニシテ、母音アリ、子音（カ行音ノワ行音）アリ。母音ハ子音ヲ生ズル声ニシテ、子音ハ母音ニ因テ生ズル声ナリ。（一）内は筆者。句読点は筆者）

（物集高見『初学日本文典上』一八七八・一ウ）  
(VII 38) 日本の国語を記すには音標の文字ありて彼是の用を弁するなり。これ談話上にありては声音の相互に通ずるものゆゑ毫も妨げなきを、筆談上に至りては声音を頭はす音標なくてはえあるまじ。さればこそ音標の文字も出来にけれ。／其文字の数五十ありて二体に分る。一体を片仮字といひ、一体を平仮字といふ。（句読点は筆者）

（大久保初雄『中等教育国語文典上篇』一八九二・一）  
(VII 39) 我国人の純正固有の声音はその数五十あり。これを五十音と称す。（句点は筆者）

（西山実和『日本文典卷之上』一八九七・一ウ）  
(VII 40) 音字が言語を記録するにつきて義字より便利なる所あるは声音の区別には限りがあるが故に音字の数は少なくて可なりと雖も意義の種類は限りなきが故に義字の数は従ひて多きを要するが故なり

（市村瓊次郎「文字と言語との関係」一九〇〇初出）  
（国語教育研究会編『国語国字教育史料総覧』国語教育研究会、一九六九・一二〇）

門である。音研究の学問には今一つ「音声学」（或いは「声音学」といふものがある。此の方は、音変遷の歴史や其の原則のことは属しない。其の代りに、吾々の発音器官から生ずる音声の分析や分類などを主としてやる。

（ヘンリ・スウィート、金田一京助訳『新言語学』一九二二・四一（原著一九〇〇））  
なお、「音声」の読み方については、山田美妙『日本大辞書 第六改版』（一八九五刊）の「おんせい（音声）」に、「おんじやうトオナジ語。今多ク普通ニツカフ。」とあり、明治中期ごろには、「おんせい」が一般的になってきていたようである。

### 三・二・二 「声音」

「言語音」を表す「声音」は、江戸中期の、新井白石『東雅』や、青木昆陽『和蘭話訳』に見えるものが古い例ではないかと思う。

(VII 35) 我東方の言ほど。声音の少なきはなく。西方の言ほど。声音の多きはなし。中土またそれに次ぐ

（新井白石『東雅』「総論」一七一七成立）  
（新井白石『東雅』「吉川半七、一九〇三・五」）  
(VII 36) 阿蘭陀ノ声音我國ト大ニ異ナレバ、阿蘭陀文字<sup>オランダ文字</sup>寄合ノ委キヲ阿蘭陀人へ尋問スレドモ、口授ヲ專ラトシテ、筆記スルコトアタハズ。

（青木昆陽『和蘭話訳』一七四三序）  
（沼田次郎・松村明・佐藤昌介校注『洋学上』（日本思想大系六五）岩波書店一九六七・一一）  
VII 35 は、谷川士清『和訓栞』（一七七七〜一八三〇）などにも引用されている。

## 二 「音素」と「単音」

「音素」は、イギリスの音声学者の、D・ジョーンズやH・E・パーマーらの用語である *phoneme* の訳語として、昭和の初めに、田中館愛橘や菊沢季生ら日本語ローマ字論者が使い始めた語のようである。同じころに、F・de ソシユールの言語学やブラーク学派の *phonology* の単位である *phonème* が、小林英夫によって「音韻」と訳され、こちらが主に使われるようになった。戦後の言語学においては、「音素」が主流となった。中国語では、「音素」は、主に *phone*（日本語の「単音」）に当てて使われ、*phoneme* には「音位」が使われている。

「単音」は、明治期には、母音の意味で使われることが多かった。音声学の最小単位としての「単音」の用法は、昭和になってから多く現れる。ただし、当初は、(音声学と音韻論とはっきり分かれていなかったため) 音素の概念を含んだ使い方が見られる。

### 三 その他の用語

「発音」は、明治の初めころから、「音声器官を使って」特定の音声を正しく出す(こと)の意味で使われるようになった。「音声」は、江戸時代までは、主に「おんじょう」と読まれ、「人の声」を表したが、明治中期ころから「おんせい」という読み方で、体系・要素としての「言語音」を表すようになった。また、明治期・大正期には、同じく「言語音」を表す語として、「声音」も使われた。これは、英華字典から取り入れられたもののようである。「声音」は、この時期の口語文典に多く使われたが、やがて、「音声」がこれに代わって使われるようになっていった。

## 【第八章の参考文献】

太田 聡 (二〇〇五) 『SPE 理論とそれ以前の音韻論』西原哲雄・那須川訓也編『音韻理論ハンドブック』英宝社  
大西雅雄 (一九三四) 『音声学史』(国語科学講座Ⅱ九音声学) 明治書院

(Ⅷ 41 (ⅡⅢ 68)) コノ書ノハジメニハ、問答体ニテ、声音学ノ基礎トナルベキ生理オヨビ解剖上ノ概説ヲ  
カガゲ、ソレヨリ母韻・父音・子音・拗音等ニワタツテ、

(伊沢修二『視話応用 国語発音指南』金港堂、一九〇二・緒言一)

Ⅷ 37 くⅧ 39 は、日本文典の例であるが、これらの「声音」は、(五十音を基本とする)「音韻」とほとんど同じ意味で使われている。

明治後期・大正期の口語文典になると、「声音」は、音声学的な(音声)を表すのに、多く使われるようになる(第五章四節)。しかし、やがて、「声音」や「音声学」に代わり、「音声」や「音声学」が使われるようになっていった(「国立国会図書館サーチ」での検索結果では、「音声学」は、一九二〇年代から、書籍名に多く現れている)。

なお、「音声」と「声音」とは、構成要素が逆に並ぶ、いわゆる「反転語」の関係にある。この両語は、ともに、中国の古い文献に見える語であるが(『日本国語大』の用例参照)、日本語では、主に「音声」が使われ、中国語では、主に「声音」が使われてきている。この理由は、よくわからないが、あるいは、日本語の場合、「母音優先の原理」(「母音で始まるものが前にくる」(中川二〇〇五・一六八))に従って、「音声」(「おん」＋「じょう」(じやう))、あるいは、「おん」＋「せい」(など)が選ばれたのかもしれない(第一章三・二)。

## 【第八章のまとめ】

第八章では、音韻論・音声学分野の用語である、「音素」、「単音」、「発音」、「音声」、「声音」について、その語誌をたどった。

### 一 はじめに(省略)

## 結論

最後に、本研究の主要なテーマである「音韻とは何か」について、各章で見てきたことを、時代・分野ごとにまとめ、また、日本語研究における用語として、「音韻」がどのように使われてきたかをまとめて、結論とする。

### 一 「音韻とは何か」についての、時代・分野ごとの見方

#### 〔現代…音韻論〕

現代の音韻論では、「音韻とは何か」について、さまざまな考え方があつた。日本語学においては、主なものとして、音韻を、機能的な単位とするものと、母語話者のもつ音の概念とするものがある。音韻として扱う範囲については、これを分節音（音素や音節など）のみとするもの、分節音＋非分節音（アクセントやリズムなど）とするもの、音声生成までの過程とするものなどがある。音韻の基本単位については、音素とすると、音節（モーラ）とするとある。前者は、「言語学的な」現代音韻論によるとらえ方で、後者は、国語に始まる五十音図（五十音＝音韻）に由来するとらえ方である。（第一章）

#### 〔現代…一般〕

現代日本語における「音韻」は、「詩や文章のことばの響き」と「言語学的に見た言語音」という、二つの代表的な意味をもつ。前者は、「音韻」の一般語としての（情緒的で、プラスのイメージをもつ）意味であり、「音楽の音の響き」と「詩の韻律」という、二つの周辺的な意味をもつ。後者は、「音韻」の専門語としての（論理的で、中立的なイメージをもつ）意味であり、「漢字音の構造」と「ことばの具体的な発音」という、二つの周辺的な意

亀井孝（一九七二）『「音韻」の概念は日本語に有用なりや』『亀井孝論文集―日本語学のために』吉川弘文館（一九五六年初出）

釘貫亨（二〇一三）『国語学』の形成と水脈『ひつじ書房

斎藤純男（二〇一〇）『言語学入門』三省堂

佐久間鼎（一九三五）『音声学』かといふこと『音声学協会会報』三五 音声学協会

周有光（一九七九）『漢字改革概論第三版』文字改革出版社（一九六二初版）

ダニエル・ジョウンス、大西雅雄訳（一九三九）「具体音と抽象音」『音声学協会会報』五九 音声学協会（原著一九三八）

服部四郎（一九四〇）『Phoneme について』『音声学協会会報』六〇、六一 音声学協会『新版音韻論と正書法』新日本式つづり方の提唱』大修館書店、一九七九に収録）

【第八章の使用データベース類】（ウェブの閲覧は、二〇一七年六月～一〇月）

「近代史數位資料庫」中央研究院近代史研究所 <http://mhdb.mh.sinica.edu.tw>

「グーグルブックス」グーグル <https://books.google.co.jp>

「国立国会図書館デジタルコレクション」国立国会図書館 <http://dl.ndl.go.jp>

「国文学研究資料館電子資料館」国文学研究資料館 <https://www.nijl.ac.jp/pages/database/>

「早稲田大学図書館古典籍総合データベース」早稲田大学図書館 <http://www.wvl.waseda.ac.jp/kotenseki/>

系としてとらえにくいものであったため、新たに言語音の体系化をめざす試みも生まれてきた。(第五章)

#### 「く近現代…漢語音韻学・日本漢字音研究」

漢語音韻学において、「音韻」は、「中国語音(漢字音)の、声母・韻母・声調の総称」とされる。日本漢字音研究では、「漢字の音(声母)と韻(韻母)」とされる。この分野の「音韻」研究は、音の体系的な類別(音類)の設定と、具体的な発音(音値)の探求という二方面から行われる。この二つは、現代言語学でいえば、音韻論的な研究と音声学的な研究とに近い。ただし、この研究は、漢字(の同一性)に基づいて行われるため、とくに「音類」の設定は、共時的な研究ではなく、時代や地域を超えて行われる。たとえば、「男」や「内」の声母(頭子音)は、「泥母」と呼ばれる「音類」に属するが、この「音類」の「音値」(音価)は、日本吳音では、ナ行音「ニ」、日本漢音では、ダ行音「ニ」、現代中国語(北京音)では、n「ニ」、広東語(広州音)では、「ニ」になり、また、中国中古音では、「ニ」だったと推測されている。このように、漢語音韻学の「音韻」は、方言間の音(借用音を含む)の対応関係や、通時的変遷をも取り込んだ、幅広い概念を担うものとなっている。(第六章)

## 二 日本語研究における用語としての「音韻」の使われ方

江戸時代、言語の研究において使われる「音韻」には、総体的な「言語音」(具体的な単位としては音節)を表す用法とともに、「音十韻」という分析的なとらえ方をした「言語音」を表す用法があった。後者は、本来漢字音の分析に用いられたものであったが、これが、五十音図に基づく日本語音の研究に应用され、明治期の日本語研究においては、「音韻」は、主に、五十音を基本とする音のことを指すようになった(「音韻」の代わりに、「音声」や「声音」が使われることもあった)。五十音図の音体系は、たぶん理念的なものであったが、日本語に見られ

味をもつ。全体に共通する意味としては、「音の響き」が考えられる。(第二章)

#### 「古代く近代…一般」

語誌的に見ると、「音韻」は、本来「音楽的に調和した美しい音」という意味であった。そこから、「楽器の音色」や「歌声」、「ことばの音楽的な響き」という意味が生まれ、さらに、「詩のリズムや韻律」という意味や、「漢字音」(中国語音)、詳しくいえば、その要素・体系・発音・研究などの意味が派生した。この用法は、さらに「梵語音」などにも応用され(以上、中国における派生)、日本では、広く「言語音」を表す用法が発達した。明治以降、「音韻」は、西洋由来の言語研究の影響を受け、「言語学的分析に基づく言語音」(および、その研究)を表す用語となった。(第三章)

#### 「明治初期・中期…日本語研究」

明治初期・中期の日本語研究(とくに日本文典)における「音韻」は、主として、五十音図に基づく音概念を担う用語であった(「音韻」という用語は、明治中期以降に多く使われている)。この時期の日本文典には、(国学の影響で)五十音図を日本語の基本音韻図と考え、五十音図の行を「音」、列を「韻」とし、「五十音〓音韻」とする意識が広く見られた。(第四章)

#### 「明治後期・大正期…日本語研究」

明治後期・大正期の日本語研究(とくに口語文典)では、それまでの五十音中心の音韻観が薄れ、「音韻」という用語があまり使われなくなった。代わりに、(西洋由来の)音声学的な分析によって、言語音がとらえられるようになり、「声音」という用語が主に使われるようになった。「声音」は、五十音図に基づく音韻とは異なり、体

【参考文献（日本語）】（著者の五十音順）

阿久津智（一九九二）『漢字圏の学生に対する漢字教育について』『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』六 筑波大学留学生教育センター

阿久津智（一九九八）「入声と形声音符」『立教大学日本語研究』五 立教大学日本語研究会

阿久津智（二〇一五）『現代日本語における漢音と呉音の対応について』『拓殖大学日本語紀要』二五 拓殖大学留学生別科・日本語教育研究所

安部清哉（二〇〇九）『語彙史研究と語彙的カテゴリー…その多様性と体系化』安部清哉・斎藤倫明・岡島昭浩・半沢

幹一・伊藤雅光・前田富祺『語彙史』（シリーズ日本語史2）岩波書店

有坂秀世（一九三五）「音韻に関する卑見」『音声学協会会報』三三五

有坂秀世（一九四〇）『音韻論』三省堂

伊沢修二、信濃教育会編（一九五八）『伊沢修二選集』信濃教育会

上田万年、安田敏朗校注（二〇一一）『国語のため』（東洋文庫）平凡社（一八九五初刊）

上原聡・熊代文子、山梨正明編（二〇〇七）『音韻・形態のメカニズム…認知音韻・形態論のアプローチ』（講座認知言語学のフロンティア1）研究社

牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編（一九六七）『言語』（中国文化叢書1）大修館書店

内田智子（二〇〇八）「母音・子音の概念と五十音図」『名古屋言語研究』二 名古屋言語研究会

上野善道（二〇〇四）「音の構造」風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健『言語学第2版』東京大学出版会

上野善道編、北原保雄監修（二〇〇三）『音声・音韻』（朝倉日本語講座3）朝倉書店

大島正二（一九九八）『中国言語学史増訂版』汲古書院（一九九七初版）

大島正二（二〇〇九）『唐代の人は漢詩をどう詠んだか…中国音韻学への誘い』岩波書店

る諸現象を説くのに有効と考えられ、これからはずれた音は（本来の音から）変化したものなどに見なされた。

その後、明治後期に、西洋から科学的な言語音研究である phonetics が導入されると、その手法に基づいて分析された音が、「声音」や「音声」と呼ばれるようになり、こちらが言語音研究の主流になるとともに、「音韻」という語の使用が減っていった。しかし、西洋で、(phonetics に対して)言語音の系統的研究という面の強かった「phonology」が、現代語における機能的な音（体系）の研究を表すのに使われるようになると、日本では、この phonology における単位としての音を表すのに「音韻」が使われるようになり、その後、これが「音韻」という語の主な意味・用法になった。また、phonetics と phonology とには、昭和になって、それぞれ「音声学」と「音韻論」という訳が定着した。

金田一京助（一九三三）「我観『音韻学』」『音声学協会会報』三五 音声学協会  
 釘貫亨（二〇〇七）『近世仮名遣い論の研究・五十音図と古代日本語音声の発見』名古屋大学出版会  
 釘貫亨（二〇一三）『国語学』の形成と水脈「ひつじ書房  
 黒田龍之介（二〇〇四）『はじめての言語学』（講談社現代新書一七〇）講談社  
 国語教育研究会編（一九六九）『国語国字教育資料総覧』国語教育研究会  
 小林英夫（一九三七）『言語学通論』三省堂  
 小林英夫編訳（二〇〇〇）『20世紀言語学論集』みすず書房  
 小山鉄郎（二〇一六）『白川静入門…真・狂・遊』平凡社  
 斎藤純男（二〇一〇）『言語学入門』三省堂  
 佐久間鼎（一九二〇）『リズムと人生』心理学研究会  
 佐久間鼎（一九二九）『日本音声学』京文社・柳原書店  
 佐久間鼎（一九三五）『音声学』かといふこと『音声学協会会報』三五 音声学協会  
 佐々木勇（二〇〇九）『平安時代鎌倉時代における日本漢音の研究』及古書院  
 佐藤喜代治編（一九八七～一九八九）『漢字講座』（全二巻）明治書院  
 佐藤亨（一九七六）『文法』の語誌『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』桜風社  
 山東功（二〇〇二）『明治前期日本文典の研究』和泉書院  
 柴谷方良・影山太郎・田守育啓（一九八二）『言語の構造・理論と分析音声・音韻篇』くろしお出版  
 島岡丘、佐藤寧（一九八七）『最新の音声学・音韻論・現代英語を中心に』研究社出版  
 下定雅弘・松原朗編（二〇一六）『杜甫全詩訳注四』講談社  
 ダニエル・ジョウンス、大西雅雄訳（一九三九）『具体音と抽象音』『音声学協会会報』五九（原著一九三八）

太田聡（二〇〇五）『SPE理論とそれ以前の音韻論』西原哲雄・那須川訓也編『音韻理論ハンドブック』英宝社  
 大西雅雄（一九三四）『音声学史』（国語科学講座Ⅱ 九音声学）明治書院  
 小川環樹、尾崎雄二郎筆録、高田時雄編（二〇一〇）『中国語学講義』臨川書店  
 沖森卓也・阿久津智編著、岡本佐智子・小林孝郎・中山恵利子（二〇一五）『ことばの借用』（日本語ライブラリー）朝倉書店  
 沖森卓也・木村義之・田中牧郎・陳力衛・前田直子（二〇一一）『図解日本語の語彙』三省堂  
 小倉肇（一九九五）『日本音の研究 第一部研究篇』新典社  
 音声学協会（一九二七）『音声の研究Ⅰ』音声学協会  
 音声学協会（一九三五）『音声学協会会報』三五（日本語音韻論我観 特輯号）音声学協会  
 亀井孝（一九七二）『音韻』の概念は日本語に有用なりや』『亀井孝論文集Ⅰ 日本語学のために』吉川弘文館（一九五六初出）  
 菊沢季生（一九三〇）『国字問題の研究（第五）：ローマ字の綴り方の変遷（続、終結）』『学士会月報』五一『国字問題の研究』（一九三二）として合本  
 菊沢季生（一九三二）『国字問題の研究』菊沢季生  
 菊沢季生（一九三五）『国語音韻論』賢文館  
 岸田武夫（一九八四）『国語音韻変化の研究』武蔵野書院  
 岸田知子（二〇一五）『空海の文字とことば』吉川弘文館  
 木田章義編（二〇一三）『国語史を学ぶ人のために』世界思想社  
 木村義之（二〇〇六）『音声・音韻』沖森卓也・木村義之・陳力衛・山本真吾『図解日本語』三省堂  
 金田一京助（一九三五）『国語音韻論増補版』刀江書院（一九三二初版）



築島裕（二〇一四）『歴史的仮名遣い…その成立と特徴』吉川弘文館（一九八六初刊）  
 時枝誠記（一九四〇）『国語学史』岩波書店  
 土岐哲（二〇〇九）「現代の音声学・音韻論」工藤浩・小林賢次・真田信治・鈴木泰・田中穂積・土岐哲・仁田義雄・島弘巳・林史典・村木新次郎・山梨正明『日本語要説改訂版』ひつじ書房  
 N・S・トゥルベツコイ、長嶋善郎訳（一九八〇）『音韻論の原理』岩波書店（原著一九三九）  
 マーガレット・トマス、中島平三総監訳、瀬田幸人・田子内健介監訳（二〇一六）『ことばの思想家50人…重要人物からみる言語学史』朝倉書店  
 トルベツコイ、小林英夫訳（一九三三）『形態音韻論』について『方言』二一一  
 中川正之（二〇〇五）『漢語からみえる世界と世間』（もつと知りたい！日本語）岩波書店  
 永野賢（一九九二）『文法研究史と文法教育』明治書院  
 西周述、永見裕筆、大久保利謙編（一九八二）『西周全集第四卷』宗高書房  
 西川哲雄・那須川訓也共編（二〇〇五）『音韻理論ハンドブック』英宝社  
 西田龍雄（一九八六）「言葉と音声（Ⅱ…音韻論）」西田龍雄編『言語学を学ぶ人のために』社会思想社  
 仁田義雄（二〇〇五）『ある近代日本文法研究史』和泉書院  
 沼本克明（一九八六）『日本漢字音の歴史』（国語学叢書第1期10）東京堂出版  
 沼本克明（二〇一四）『帰納と演繹とのほさまに揺れ動く字音仮名遣いを論ず…字音仮名遣い入門』汲古書院  
 H. E. Palmer, 音声学協会会報編輯部訳（一九二九）「Phoneme, Phone, Diaphone に就て（佐伯三浦二氏の論争を観て）」音声学協会会報一五  
 H・E・パーマー、語学教育研究所編（一九九五）『パーマー選集第10巻 雑録編』本の友社  
 服部四郎（一九四〇）「Phoneme についで」『音声学協会会報』六〇、六一 音声学協会『新版 音韻論と正書法…新日

沈国威（二〇〇八）『改訂新版 近代日中語彙交流史…新漢語の生成と受容』笠間書院（一九九四初版）  
 神保格（一九二二）『言語学概論』岩波書店  
 神保格（一九二五）『国語音声学』明治図書  
 菅原真理子編、中野弘三・服部義弘・西原哲雄監修（二〇一四）『音韻論』（朝倉日英対照言語学シリーズ3）朝倉書店  
 鈴木豊（二〇〇四）『連濁』の呼称が確立するまで…連濁研究前史『国文学研究』一四二 早稲田大学国文学会  
 フェルディナン・ド・ソッスニール述、シャルル・バイイ、アルベール・スシュエ編、小林英夫訳（一九二八）『言語学原論』岡書院（原著一九一六）  
 孫建軍（二〇一五）『近代日本語の起源…幕末明治期につくられた新漢語』早稲田大学出版部  
 高野繁男（二〇〇四）『近代漢語の研究…日本語の造語法・訳語法』明治書院  
 高橋幸雄（二〇一二）「音の構造について…音声学・音韻論」西原哲雄編『言語学入門』朝倉書店  
 高松政雄（一九八二）『日本漢字音の研究』風間書房  
 高山知明（二〇一四）『日本語音韻史の動的諸相と蜷縮涼鼓集』笠間書院  
 高山倫明（二〇一二）『日本語音韻史の研究』ひつじ書房  
 高山倫明・木部暢子・松森晶子・早田輝洋・前田広幸（二〇一六）『音韻史』（シリーズ日本語史1）岩波書店  
 田中伸一（二〇〇五）『韻律音韻論』西原哲雄・那須川訓也編『音韻理論ハンドブック』英宝社  
 田中伸一（二〇〇九）『日常言語に潜む音法則の世界』開拓社  
 田中館愛橘（一九三八）『葛の根』日本のローマ字社  
 壇辻正剛（一九八九）「音声学と音韻論」崎山理編『言語学要説』（講座日本語と日本語教育第11巻）明治書院  
 陳力衛（二〇〇一）『和製漢語の形成とその展開』及古書院

- 前田富祺（二〇〇二）「語彙史」北原保雄監修、斎藤倫明編『語彙・意味』（朝倉日本語講座4）朝倉書店
- 前田富祺（二〇〇九）「文化からみた語彙史」安部清哉・斎藤倫明・岡島昭浩・半沢幹一・伊藤雅光・前田富祺『語彙史』（シリーズ日本語史2）岩波書店
- 前田正人（二〇〇三）『国語音韻論の構想』和泉書院
- 牧野勤（一九七三）『イギリスの音声学』小泉保・牧野勤『音韻論1』（英語学大系1）（3版）大修館書店（初版一九七二）
- 馬淵和夫（一九八四）『日本韻学史の研究 増訂版Ⅰ』臨川書店（一九六二初版）
- 馬淵和夫（一九八四）『日本韻学史の研究 増訂版Ⅱ』臨川書店（一九六三初版）
- 馬淵和夫（一九九三）『五十音図の話』大修館書店
- 馬淵和夫・出雲朝子（一九九九）『国語学史…日本人の言語研究の歴史』笠間書院
- 宮島達夫（一九八二）『専門語の諸問題』（国立国語研究所報告六八）秀英出版
- 森岡健二（一九九〇）『私の五十音図観』『日本語学』九一一（一九九〇年二月号）明治書院
- 森博達（一九九二）『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館書店
- 柳文章（一九八二）『翻訳語成立事情』（岩波新書黄版一八九）岩波書店
- 山田孝雄（一九七二）『国語学史』宝文館出版（一九四三初刊）
- 吉村公宏（二〇〇四）『はじめての認知言語学』研究社
- 吉村公宏編、池上嘉彦・河上誓一監修（二〇〇三）『認知音韻・形態論』（シリーズ認知言語学入門 第2巻）大修館書店
- 羅濟立（二〇〇五）『客家語と日本漢音、鎌倉宋音の比較対照研究…閩南語文語音、浙江呉語との関わりをめぐって』致良出版社

- 本式つづり方の提唱』大修館書店、一九七九に収録）
- 服部四郎（一九六五）「日本の記述言語学（一）」『国語学』六二 国語学会
- 服部四郎（一九九〇）『新版 音韻論と正書法…新日本式つづり方の提唱』（再版）大修館書店（一九七九初版、一九五二旧版初版）
- 服部四郎・川本茂男・柴田武編（一九八〇）『日本の言語学 第2巻 音韻』大修館書店
- 服部隆（二〇一七）『明治期における日本語文法研究史』ひつじ書房
- 浜田敦（一九五七）『音韻体系』岩瀬悦太郎ほか編『講座現代国語学 第2ことばの体系』筑摩書房
- 早田輝洋（二〇〇五）『諸言語の音韻と日本語の音韻』北原保雄監修、早田輝洋編『世界の中の日本語』（朝倉日本語講座1）朝倉書店
- 原口庄輔（一九九四）『音韻論』（現代の英語学シリーズ3）開拓社
- 飛田良文（一九六八）『明治大正期における漢音呉音の交替』『近代語研究 第2集』近代語学会（『東京語成立史の研究』東京堂出版、一九九二に収録）
- 飛田良文（一九九二）『東京語成立史の研究』東京堂出版
- 肥爪周二（二〇一五）『現代日本語の音韻』月本雅幸編『日本語概説』放送大学教育振興会
- 福井久蔵（一九五三）『増訂版 日本文法史』風間書房（一九〇七初刊）
- L・ブルームフィールド、三宅鴻・日野資純訳（一九七〇）『言語』（新装版）大修館書店（一九六二初版、原著一九三三）
- 古田東朔、山東功解説（二〇一〇）『日本語近代への歩み…国語学史2』くろしお出版
- 古田東朔・築島裕（一九七二）『国語学史』東京大学出版会
- 古田東朔・山口明徳・鈴木秀夫（一九八〇）『新国語概説』くろしお出版

嚴復、王叔主編（一九八〇）『嚴復集第二冊詩文（下）』（中國近代人物文集叢書）中華書局  
黃笑山（二〇〇四）「語音史研究中的音位原則」中國音韻研究會・石家莊師範專科學校編『音韻論叢』一一一 齊魯書社

耿振生（二〇〇四）『20世紀漢語音韻學方法論』北京大學出版社

胡奇光（二〇〇五）『中國小學史』上海人民出版社（一九八七初刊）

吳玉章等、易熙吾、中國語文學社編（一九五〇）『簡化漢字問題 簡體字源（合刊本）』（文字改革問題參考資料）中華書局

高本漢、趙元任・羅常培・李方桂合訳、吳宗濟・林燾主編（二〇〇七）『中國音韻學研究』（李方桂全集 二二）清華大學出版社（一九四〇初刊、原著一九一五～一九二六）

國人（一九二〇）「注音字母與萬國音標」『東方雜誌』一七一〇（一九二〇年五月號）商務印書館

國人（一九二〇）「注音字母與萬國音標（續）」『東方雜誌』一七一〇（一九二〇年六月號）商務印書館

吳敬恒（一九一八）「通信注音字母」『新青年』四一三（一九一八年三月號）群益書社（影印：上海書局，一九八八）

吳敬恒、劉紹唐主編（一九六〇）『國音國語國字第一集』伝記文學出版社

蔡元培、高平叔編（一九八五）『蔡元培語言及文學論著』河北人民出版社

蔡根祥（二〇〇七）「聲韻學在國文教學之應用」中華民國聲韻學學會『聲韻論叢』一五 台灣學生書局

施向東（二〇〇八）「等韻學與音位學」中國音韻學研究會編『中國音韻學』南京大學出版社

竺家寧（一九九二）『聲韻學』（第二版）五南圖書出版（一九九一初版）

竺家寧主編（二〇〇六）『五十年來的中國語言學研究（1950-2000）』台灣學生書局

謝國平（二〇一〇）『語言學概論』（三版、一九八五初版）三民書局

周祖謨、周士琦編（二〇〇〇）『周祖謨語言文字論集』人民教育出版社

李思敬、慶谷壽信・佐藤進編訳（一九八七）『音韻のはなし：中國音韻學的基本知識』光生館（原著『音韻』一九八五）和田利政・金田弘（二〇〇三）『國語要説 五訂版』大日本圖書（初版一九八一）

【参考文献（英語）】（著者のアルファベット順）

Chomsky, Noam & Morris Halle(1968) *The sound pattern of English*. New York, Harper & Row.

Jones, Daniel (1960) *An Outline of English Phonetics (Ninth Edition)*, Cambridge, W. Heffer & Sons, Manzen. (初版一九一八)  
Sweet, Henry (1877) *A Handbook of phonetics*, Oxford, the University of Oxford. (複製：木原研三編『<ンリー・スウィー  
ト 音声学提要』三省堂 一九九八)

【参考文献（中国語）】（著者の日本語読みによる五十音順）

王華南編著（二〇一五）『淵遠流長話台語』秀威資訊科技

王洪君（一九九四）「甚麼是音系的基本單位」『現代語言學：理論建設的新思考』語文出版社

汪寿明選注（二〇〇三）『中國歷代音韻學文選』華東師範大學出版社

王松木（二〇〇七）「金針如何度與人？……論聲韻學之課程設計與教材教法」中華民國聲韻學學會『聲韻論叢』一五 台灣學生書局

王文瀾（一九七二）『實用聲韻學』台灣商務印書館

王理嘉主編（二〇〇三）『二十世紀現代漢語語音論著索引和提要』（二十世紀現代漢語研究資料叢書）商務印書館  
王力（一九八〇）『漢語音韻學』（重版）中華書局（一九三五初刊『中國音韻學』を改題）

何大安（一九九三）『聲韻學中的觀念和方法』（第二版）大安出版社（一九八七初版）  
邢島（一九一四）「說音統一會公定國音字母之概説」『東方雜誌』一〇一八（一九一四年三月號）商務印書館

- 傅定森（二〇〇三）『反切起源考』上海古籍出版社
- 北京大學中文系現代漢語教研室編（二〇〇四）『現代漢語重排本』商務印書館（一九九三初版、邦訳：松岡榮志・古川裕監訳『現代中国語総説』三省堂、二〇〇四）
- 姚榮松（二〇一四）『六十年来（1950-2010）台灣聲韻學研究成果之評述与展望』中華民國聲韻學学会『声韻論叢』一八台灣學生書局
- 羅莘田（羅常培）（一九三五）『中国音韻學的外來影響』『東方雜誌』三二一四（一九三五年六月号）商務印書館
- 羅常培（一九七八）『羅常培語言學論文選集』九思出版社
- 羅常培（一九七八）『京劇中的幾個音韻問題』『羅常培語言學論文選集』九思出版社（一九三五初出「旧劇中的幾個音韻問題」を改題）
- 羅常培（二〇〇四）『羅常培語言學論文集』商務印書館
- 李存智（一九九九）『從日本吳音的形成及其現象看閩語与吳語的關係』『國立台灣大學文史哲學報』九一 台灣大學文學院
- 李存智（二〇〇一）『介音对漢語声母系統的影響』中華民國聲韻學学会・國立中正大學中國文學系所主編『声韻論叢』一一 台灣學生書局
- 李葆嘉（一九九八）『当代中国音韻學』廣東教育出版社
- 李無未主編（二〇〇七）『音韻學論著指要与總目』作家出版社
- 龍異騰（二〇〇三）『基礎音韻學』巴蜀書社
- 劉綸鑫（二〇〇一）『音韻學基礎教程』中国社会科学出版社
- 廖立勛編、黎錦熙訂正（一九二二）『实用国音学三版』（一九二〇初版）商務印書館
- 林尹、林炯陽註釈（一九八二）『修訂増注 中国声韻學通論』黎明文化事業（一九三七初刊）

- 周有光（一九七九）『漢字改革概論第三版』文字改革出版社（一九六一初版）
- 鍾榮富（二〇〇六）『当代言語學概論』五南圖書出版
- 沈祥源・楊子儀主編、沈祥源・楊子儀・曹文安・馬寅生編著（一九九一）『实用漢語音韻學』山西教育出版社
- 錢玄同（一九一八）『論注音字母』『新青年』四一（一九一八年一月号）群益書社（影印：上海書局、一九八八）
- 錢玄同（一九一八）『論注音字母（統第一号）』『新青年』四一三（一九一八年三月号）群益書社（影印：上海書局、一九八八）
- 九八八）
- 錢玄同（一九一八）『通信 注音字母』『新青年』四一三（一九一八年三月号）群益書社（影印：上海書局、一九八八）
- 錢玄同（二〇一一）『錢玄同文字音韻學論集』上海古籍出版社
- 錢玄同（二〇一一）『注音字母与現代国音』『錢玄同文字音韻學論集』上海古籍出版社（初出一九二二）
- 詹父（一九一六）『論国音字母』『東方雜誌』一三一五（一九一六年二月号）商務印書館
- 趙元任、葉蜚声訳、伍鉄平校（一九八五）『趙元任言語學論文選』中国社会科学出版社
- 張世祿（一九三二）『中国音韻學史之鳥瞰』『東方雜誌』二八一（一九三二年六月号）商務印書館
- 張世祿（一九七五）『中国音韻學史台四版上・下』台灣商務印書館（一九三八初刊）
- 陳新雄（一九七八）『重校増訂音略証補』文史哲出版社
- 陳新雄（二〇〇七）『声韻學的功効』中華民國聲韻學学会『声韻論叢』一五 台灣學生書局
- 唐作藩（一九七九）『漢語音韻學常識』上海教育出版社（一九五八初刊、邦訳：本橋春光訳『漢語音韻學入門』明治書院、一九七九）
- 董同龢（一九六八）『漢語音韻學』（増補改題版）文史哲出版社（一九五四初刊『中国語音史』を改題）
- 藩文国（二〇〇四）『漢語特色的音韻學研究』中国音韻研究会・石家莊師範專科學校編『音韻論叢』一二一八 齊魯書社

『新明解国語辞典 第七版』(二〇一一) 山田忠雄・柴田武・酒井憲一・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之編 三省堂

『全訳 漢辞海 第四版』(二〇一七) 戸川芳郎監修、佐藤進・濱口富士雄編 三省堂

『大漢和辞典 修訂二版』(一九八九～一九九〇) 諸橋轍次 大修館書店

『大辞泉 第二版』(二〇一二) 小学館大辞泉編集部編 小学館

『大辞典』(一九三四～一九三六) 平凡社

『大辞林 第三版』(二〇〇六) 松村明編 三省堂

『中国語学事典』(一九五八) 中国語学研究会編 江南書院

『日本国語大辞典 第二版』(二〇〇〇～二〇〇二) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 小学館

『日本語大事典』(二〇一五) 佐藤武義・前田富祺編集代表 朝倉書店

『日本大百科全書』(一九九四～一九九七) 小学館編 小学館

『日本文学大辞典』(一九三二～一九三五) 藤村作編 新潮社

『明鏡国語辞典 第二版』(二〇一〇) 北原保雄編 大修館書店

【辞書類 (中国語)】(書名の日本語読みによる五十音順)

『大辞海 語詞巻』(二〇一一) 大辞海編輯委員会編 上海辞書出版社

『漢語大詞典』(一九八六～一九九四) 漢語大詞典編輯委員会・漢語大詞典編輯處編 上海辞書出版社

『教育部 重編国語辞典 修訂版』(二〇一五) 中華民国教育部

『現代漢語詞典 二〇〇二年増補版』(二〇〇二) 中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編編 商務印書館

林燾・王理嘉(一九九二)『語音学教程』北京大学出版社

林燾・耿振生(一九九七)『声韻学』三民書局

黎錦熙(二〇〇四)『黎錦熙語言学論文集』商務印書館

【辞書類 (日本語)】(書名の五十音順)

『岩波国語辞典 第七版 新版』(二〇一一) 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編 岩波書店

『学研現代新国語辞典 改訂第五版』(二〇一四) 金田一春彦・金田一秀穂編 三省堂

『漢字語源義辞典』(二〇一四) 加納喜光 東京堂出版

『漢字語源辞典』(一九六五) 藤堂明保 學燈社

『漢訳対照 枕和大辞典 増補改訂版 新装版』(一九八六) 荻原雲来編纂、辻直四郎協力、鈴木学術財団編 講談社

『言語学大辞典 第六卷 術語編』(一九九六) 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著 三省堂

『現代国語例解辞典 第五版』(二〇一六) 林巨樹・松井栄一監修 小学館

『広漢和辞典』(一九八一～一九八二) 諸橋轍次・鎌田正・米山寅太郎 大修館書店

『広辞苑 第六版』(二〇〇八) 新村出編 岩波書店

『三省堂国語辞典 第七版』(二〇一四) 見坊蒙紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大編 三省堂

『三省堂 五十音引き漢和辞典 第二版』(二〇一四) 冲森卓也・三省堂編修所編 三省堂

『ジーニアス英和大辞典』(二〇〇二) 小西友七・南出康世編集主幹 大修館書店

『集英社国語辞典 第三版』(二〇一二) 森岡健二・徳川宗賢・川端善明・中村明・星野晃一編 集英社

『新英和大辞典』(一九二七) 岡倉由三郎 研究社

『新選国語辞典 第九版』(二〇一一) 金田一京助・佐伯梅友・大石初太郎・野村雅昭編 小学館

「ジャパンナレッジ JKbooks 東洋文庫」<http://japanknowledge.com>  
「ジャパンナレッジ」叢書 日本古典文学全集」<http://japanknowledge.com>  
「ジャパンナレッジ」日本語 日本国語大辞典」<http://japanknowledge.com>  
「ジャパンナレッジ」歴史 古事類苑」<http://japanknowledge.com>  
「太陽コーパス」国立国語研究所 [http://pj.nijl.ac.jp/corpus\\_center/cmj/aiyou/](http://pj.nijl.ac.jp/corpus_center/cmj/aiyou/)  
「奈良地域関連資料画像データベース」奈良女子大学学術情報センター <http://mahoroba.lib.nara-wu.ac.jp>  
「読売新聞記事データベース」(ヨミダス歴史館) 読売新聞 <http://www.yomiuri.co.jp/database/tekishikan/>  
「早稲田大学図書館 古典籍総合データベース」早稲田大学図書館 <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>

# 【データベース類 (英語)】

*Oxford English Dictionary*, Oxford University Press <http://www.oed.com/>

【データベース類 (中国語)】 (日本語読みによる五十音順)  
「漢典」漢典 <http://www.zdic.net/>  
「漢籍電子文献資料庫」中央研究院 歴史語言研究所 <http://hanchi.lib.sinica.edu.tw>  
「漢珍知識網 報紙篇」漢珍數位圖書 <http://oldnews.lib.nmnu.edu.tw>  
「教育部 重編國語辭典修訂版」中華民国教育部 <http://dict.revised.moe.edu.tw/cbdict/>  
「近代史數位資料庫」中央研究院 近代史研究所 <http://mhdp.nh.sinica.edu.tw>  
「光明日報」(光明網) 光明日報社 <http://www.gmw.cn>  
「新浪博客」(新浪網) 新浪公司 <http://blog.sina.com.cn>

『現代漢語大詞典』(二〇〇〇) 現代漢語大詞典編委會編 漢語大詞典出版社  
『校正宋本廣韻 校正五版』(一九八二) 藝文印書館  
『語言學辭典 增訂版』(二〇〇五) 陳新雄・竺家寧・姚榮松・羅肇錦・孔仲溫・吳聖雄  
『辞海 一九八九年版』(一九八九) 辞海編輯委員會編 上海辞書出版社  
『辞源 第三版』(二〇一五) 何九盈・王寧・董現・商務印書館編輯部編 商務印書館  
『中国語言文字学大辞典』(二〇〇七) 唐作藩主編 中国大百科全书出版社  
『20世紀中国學術大典 語言学』(二〇〇二) 林蕙主編 福建教育出版社

# 【データベース類 (日本語)】 (五十音順)

「青空文庫」青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp>  
「朝日新聞記事データベース」(聞蔵Ⅱビジュアル) 朝日新聞社 <https://database.asahi.com/index.shtml>  
「書き言葉均衡コーパス 少納言」国立国語研究所 <http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>  
「京都大学 電子図書館 貴重資料画像」京都大学 図書館 <http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp>  
「グーグルブックス」グーグル <https://books.google.co.jp>  
「芸能人・有名人ブログ」Ameba <http://official.ameba.jp>  
「国文学研究資料館 電子資料館」国文学研究資料館 <https://www.nijl.ac.jp/pages/database/>  
「国立国会図書館 デジタルコレクション」国立国会図書館 <http://dl.ndl.go.jp>  
「駒澤大学 電子貴重書庫」駒澤大学 図書館 <http://repo.komazawa-u.ac.jp/retrieve/kityou/>  
「ジャパンナレッジ JKbooks 群書類従 (正・続・続々)」ジャパンナレッジ <http://japanknowledge.com>  
「ジャパンナレッジ JKbooks 太陽」ジャパンナレッジ <http://japanknowledge.com>

## あとがき

本稿は、筆者がこれまで執筆した（これから発行されるものを含む）「音韻」に関する論文七編に加筆修正を加えたものを各章（第一章～第七章）とし、別に一章（第八章）を書き足して、まとめたものである。もとの論文の題名と掲載誌を、以下に挙げて、「あとがき」に代えたい。

第一章 日本語研究における「音韻」…「音韻と日本語学習」『拓殖大学日本語教育研究』三 拓殖大学日本語教育研究所、二〇一八（予定）

第二章 現代日本語における「音韻」…「現代日本語における『音韻』の意味」『立教大学日本語研究』二三、二二～三九 立教大学日本語研究会、二〇一六

第三章 「音韻」の語誌…『『音韻』の語誌』『拓殖大学 語学研究』一三六、一七七～二〇一 拓殖大学言語文化研究所、二〇一七

第四章 明治初期・中期の日本文典における「音韻」…「明治期の日本文典における音韻」『立教大学日本語研究』二四、一三～四一 立教大学日本語研究会、二〇一七

第五章 明治後期・大正期の口語文典における「音韻」…「明治後期・大正期の口語文典における音韻」『歴史言語学の射程』三省堂、二〇一八（予定）

第六章 漢語音韻学における「音韻」…「漢語音韻学と日本語漢字字習」『拓殖大学日本語教育研究』二、八一～一〇四 拓殖大学日本語教育研究所、二〇一七

第七章 音韻関連用語の語誌（一）―「母音」、「子音」、「音節」―：『母音』、『子音』、『音節』という用語について『『拓殖大学 語学研究』二三七 拓殖大学言語文化研究所、二〇一八（予定）

第八章 音韻関連用語の語誌（二）―「音素」、「単音」、その他―書き下ろし

## 資料一 「音韻」の用例（中国・古典）

### 【凡例】

- ・清代までの中国の文献に現れた「音韻」の用例（筆者が採集したもののうち、主なもの）を、その用例が現れる著作の成立（あるいは刊行、発表）年順に、表にして挙げる（頭に「中」を付けて、通し番号を付す）。
- ・表には、用例の現れた「本文」（部分）のほか、「著作名」、「著者」（あるいは編者）、著作の成立（あるいは刊行、発表）年、「出典」、「音韻」の当該例における「意味」を挙げる。
- ・「本文」には、「中国哲学書電子化計画」、「漢籍電子文献資料庫」などによって、くぎり符号（句読点など）を付す。ただし、引用符はカギ括弧に改める。当該語の部分（音韻）には、網かけを行う。同様の本文（記事）が他の文献に見える場合には、欄の最後に、その資料の番号を挙げる。
- ・「出典」欄には、底本名と、用例採集に用いたデータベース名を略号で挙げる（データベースを用いていない場合は、挙げない）。底本は、主に影印版を用いた。データベース名の略号は、以下のとおりである。
- 「漢籍電子文献資料庫」↓漢籍
- 「国立国会図書館デジタルコレクション」↓国会
- 「中国哲学書電子化計画」↓中国
- 「百度百科」↓百度
- ・意味・欄には、「音韻」の当該例における意味を、『漢語大詞典』（「漢大」と略す）の意味区分の番号で示す。同辞典における「音韻」の意味区分・意味記述は、次のとおりである。
- ① 抑揚頓挫的の諧声音。（めりはりがあって調和した音。）
- ② 亦指女子的風度儀態。（また、女子の容姿・態度を指す。）
- ③ 指文学作品の音節韻律。（文学作品のリズムや韻律を指す。）
- ただし、「音韻」が「漢字字音」（中国語音）以外の言語音（梵語音など）に使われる場合は、「③」とする。また、「音韻」が書名（の一部）である場合は、「書名」とする。
- ・漢字の字体は、現代日本語の通用字体を用いる。「音韻」・「音韵」・「音均」の表記は、元のままにする。
- ・数字に関しては、「著作名」欄では漢数字を、「出典」欄では算用数字を用いる。「著者・年」欄では、漢数字を用いるが、十百千などを用いず、一〇のみを用いる（例…四百八十八↓四八八）。

(1)

## 謝辞

この論文を執筆できたことについて、まず何よりも、沖森卓也先生に心よりお礼を申し上げます。沖森先生には、修士論文指導から教えて、三十年以上にわたってお世話になりつばなしましたが、沖森先生がいらつしやなかったら、とてもこの論文を執筆することはできませんでした。沖森先生が論文の執筆を強く勧めてくださり、また、拙い論文を受け入れてくださることに対して、ただただ感謝申し上げるばかりです。この論文は、いやしくも長年教育研究職にある者の書いたものとしては、恥ずかしいような、不十分なものではありますが、これを新たな研究に向けての出発点と考えると、励んでいこうと思っております。

そのほか、多くの方にお世話になりました。二〇一六年四月〜九月には、立教大学文学部文学科日本文学専修に、客員研究員として受け入れていただきました。その際、とくに、石川巧先生には、受入先になつていただいたばかりでなく、アンケート調査にもご協力いただきました。心より感謝申し上げます。アンケート調査については、ほかに、石川巧先生のゼミの一年生（当時、および、中国・ハルビン師範大学東語学院の、黄明侯先生と商務日語専攻の三年生（当時）にも、ご協力いただきました。また、立教大学大学院文学研究科日本文学専攻の沖森研究室の大学院生のみなさんには、データベースやコーパスについて、いろいろ教えていただきました。ありがとうございます。

二〇一六年五月〜六月には、台湾・東呉大学日本文学系で、研究の機会をいただきました。その際、日本文学系の先生方にお世話になりました。とくに、羅済立先生は、たいへんお忙しいなか、受け入れをお引き受けくださり、また、漢語音韻学（声韻学）の資料の収集等について、ご便宜をはかってくださいました。心より感謝申し上げます。



中 007	中 006	中 005	中 004	中 003	中 002	中 001	番号
詞採蔥菁，音韻鏗鏘，使人味之聲響不倦。 中 079	為《上堵吟》，音韻哀切，有惻人心，今水次尚歌之。	洧水又東南逕辰亭東，俗謂之田城，非也。蓋田、辰聲相近，城、亨音韻聯故也。	洧水又東南逕辰亭東，俗謂之田城，非也。蓋田、辰聲相近，城、亨音韻聯故也。	至於高言妙句，音韻天成，皆闇与理合， 中 012	欲使宮羽相變，低昂互節，若前有浮聲，則後須切響。 一簡之內，音韻尽殊，兩句之中，輕重悉異。 中 103 日 001 日 002 中 009 中 011 中 033 中 078 中 093	暢隨宜応答，吐属如流，音韻詳雅，風儀華潤，孝伯及左右人並相視歎息。 中 038	「：旧京荒廢，今既散亡，音韻曲折，又無識者，則於今難以意言。」于時以無雅樂器及伶人，省太樂并鼓吹令。 中 033 中 053 中 074
詩評（詞品）・卷上	水經注・卷二十八 沔水	水經注・卷二十二 沔水	水經注・卷二十二 沔水	宋書・卷六十七 謝靈運	宋書・卷六十七 謝靈運	宋書・卷六十九 張暢	著作名
鍾嶸・南朝梁代	酈道元撰・五一五	酈道元撰・五一五	酈道元撰・四八八	沈約撰・四八八	沈約撰・四八八	沈約撰・四八八	著者・年
中国 欽定四庫全書 本？（卷上 71）	中国 欽定四庫全書 要本（卷 28 17）	中国 欽定四庫全書 要本（卷 22 22）	中国 欽定四庫全書 本（卷 67 43）中国	中国 欽定四庫全書 本（卷 67 43）中国	中国 欽定四庫全書 本（卷 59 13）中国	中国 欽定四庫全書 本（卷 19 10）中国	出典
漢大②	漢大①	漢大③	漢大②	漢大②	漢大①	漢大①	意味

(2)

中 014	中 013	中 012	中 011	中 010	中 009	中 008	番号
永熙二年，出帝幸平等寺。僧徒講說，救同軌論難。音韻閑朗，往復可觀，出帝善之。 中 017	蕭蹟使庾華來朝，華見澄音韻適雅，風儀秀逸， 中 045 中 069 中 070	至於高言妙句。音韻天成。皆暗与理合。 中 004	欲使宮羽相變，低昂互節。若前有浮聲，則後須切響。一簡之內，音韻尽殊。兩句之中，輕重悉異。 中 103 日 001 日 002 中 003 中 009 中 033 中 078 中 093	若以文章之音韻，同弦管之聲曲，則美惡妍蚩，不得順相乖反。 中 043	「宮羽相變，低昂互節。若前有浮聲，則後須切響。一簡之內，音韻尽殊。兩句之中，輕重悉異。」 中 103 日 001 日 002 中 003 中 011 中 033 中 078 中 093	故三祖之詞，文或不工，而韻入歌唱，此重音韻之義也，与世之言宮商異矣。	本文
魏書・卷三十四 李順族	魏書・卷三十七 中 任城王	文選・卷五十二 宋書謝靈運 論一	文選・卷五十二 宋書謝靈運 論一	南齊書・卷五十二 列傳第三十三 陸厥	南齊書・卷五十二 列傳第三十三 陸厥	詩評（詞品）・卷上	著作名
魏收撰・五五四	魏收撰・五五四	蕭統編・南朝梁代	蕭統編・南朝梁代	蕭子顯撰・南朝梁代	蕭子顯撰・南朝梁代	鍾嶸・南朝梁代	著者・年
欽定四庫全書 本（卷 36 26）中国	欽定四庫全書 本（卷 17 4）中国	胡刻本縮小影印（華正書局 1984）704	胡刻本縮小影印（華正書局 1984）703	欽定四庫全書 本（卷 52 14）中国	欽定四庫全書 本（卷 52 11）中国	中国 欽定四庫全書 本？（卷下 17）	出典
漢大①	漢大①	漢大②	漢大②	漢大②	漢大②	漢大②	意味

(3)

中 021	中 020	中 019	中 018	中 017	中 016	中 015	番号
野。李季節著音韻決疑，時有錯失；陽休之造切韻，殊為疎。	自茲厥後，音韻蜂出，各有土風，遽相非笑，指馬之論，未知孰是。共以帝王都邑，參校方俗，考覈古今，為之折衷。權而量之，独金陵与洛下耳。 <sup>中 011</sup>	苟有一毫所得，皆開心抱，豈必要經師授然後為奇哉！但仲儒自省膚淺，才非一足，正可粗識音韻，纔言其理致耳。 <sup>中 057</sup>	逮漢魏之間，樂章復闕，然博採音韻，粗有篇条。	永熙二年，出帝幸平等寺，僧徒講法，勅同軌論難，音韻閑朗，往復可觀，出帝善之。 <sup>中 014</sup>	遂語及為國之道，肅陳說治乱，音韻雅暢，深会帝旨。	高子敷陳事理，申枳是非，辞義清辯，音韻高亮。	本文
十八	十八	九	九	四	三	八	著作名
下音辭篇第	下音辭篇第	魏書·卷一百九	魏書·卷一百九	魏書·卷八十一	魏書·卷六十一	魏書·卷四十六	著者・年
六〇〇頃	六〇〇頃	魏收撰・五五四	魏收撰・五五四	魏收撰・五五四	魏收撰・五五四	魏收撰・五五四	出典
37) 中国	36) 中国	欽定四庫全書本 (卷 109, 15) 中国	欽定四庫全書本 (卷 109, 7) 中国	欽定四庫全書本 (卷 84, 26) 中国	欽定四庫全書本 (卷 63, 1) 中国	欽定四庫全書本 (卷 48, 14) 中国	漢大①
書名	漢大③	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	意味

中 028	中 027	中 026	中 025	中 024	中 023	中 022	番号
又後魏初定中原，軍容号令，皆經夷語，後染華俗，多不能通，故錄其本言，相伝教習，謂之「国語」，今取以附音韻之末。	別採新声，為無愁曲，音韻窈窕，極於哀思，使胡兒聞官之聲，齊唱和之，曲終樂闕，莫不隕涕。 <sup>中 054 中 075</sup>	儻身長八尺，鬚鬢皓然，容止端詳，音韻清明。 <sup>中 046 中 071 中 082</sup>	因命諷誦，音韻清雅，高祖因賜王羲之書一卷。 <sup>中 080</sup>	既長，博學多通，尤精義理，善誦書，背文諷說，音韻清升。 <sup>中 039</sup>	昔開皇初，有儀同劉臻等八人，同詣法言門宿。夜永酒闌，論及音韻。	非唯音韻舛錯，亦使其兒孫避諱紛紜矣。	本文
学七二	隋書·卷二十四	周書·卷三十九	梁書·卷二十九	切韻・序	下音辭篇第	著作名	著者・年
經籍一小	魏徵等撰・六三六	魏徵等撰・六三六	魏徵等撰・六三六	陸法言・六〇一	顏之推・六〇〇頃	著者・年	出典
六三六	魏徵等撰・六三六	魏徵等撰・六三六	魏徵等撰・六三六	陸法言・六〇一	顏之推・六〇〇頃	著者・年	出典
欽定四庫全書本 (卷 32, 45) 中国	24) 中国	欽定四庫全書本 (卷 37, 4) 中国	欽定四庫全書本 (卷 44, 6) 中国	欽定四庫全書本 (卷 25, 1) 中国	注華東師範大學出版社 2003, 13	中国歷代音韻学 (汪寿明選)	漢大③
書名	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大③	漢大③	意味

中 035	中 034	中 033	中 032	中 031	中 030	中 029	番号
宜。一本不差而万物皆正，及其差也，事皆反是。 日 132	初，勛於路逢趙賈人牛鐔，識其声。及掌樂，音韵未調，乃曰：「得趙之牛鐔則諧矣。」 中 051 日 022	旧京荒廢，今既散亡，音韻曲折，又無識者，則於今難以意言。 中 003 中 009 中 011 中 078 中 093 中 103 日 002	漢末紛乱，亡失雅樂。魏武時，河南杜夔精識音韵，為雅樂郎中，令鑄銅工柴玉鑄鍾，其声均清濁多不如法，數毀改作， 中 056	善之通博，在何妥之下，然以風流醞藉，俯仰可觀，音韻清朗，聽者忘倦，由是為後進所歸。 中 029 中 044 中 072 中 081	武帝嘗有事太廟，審之說祝文，音韻清雅，觀者屬目。 中 048	善之通博，在何妥之下，然以風流醞藉，俯仰可觀，音韻清朗，聽者忘倦，由是為後進所歸。 中 031 中 044 中 072 中 812	本文
考步兩儀，則天地無所隱其情；準正三辰，則懸象無所容其謬；施之金石，則音韵和諧；措之規矩，則器用合宜。一本不差而万物皆正，及其差也，事皆反是。 日 132	初，勛於路逢趙賈人牛鐔，識其声。及掌樂，音韵未調，乃曰：「得趙之牛鐔則諧矣。」 中 051 日 022	旧京荒廢，今既散亡，音韻曲折，又無識者，則於今難以意言。 中 003 中 009 中 011 中 078 中 093 中 103 日 002	漢末紛乱，亡失雅樂。魏武時，河南杜夔精識音韵，為雅樂郎中，令鑄銅工柴玉鑄鍾，其声均清濁多不如法，數毀改作， 中 056	善之通博，在何妥之下，然以風流醞藉，俯仰可觀，音韻清朗，聽者忘倦，由是為後進所歸。 中 029 中 044 中 072 中 081	武帝嘗有事太廟，審之說祝文，音韻清雅，觀者屬目。 中 048	善之通博，在何妥之下，然以風流醞藉，俯仰可觀，音韻清朗，聽者忘倦，由是為後進所歸。 中 031 中 044 中 072 中 812	本文
著者・年	著者・年	著者・年	著者・年	著者・年	著者・年	著者・年	著者・年
出典	出典	出典	出典	出典	出典	出典	出典
漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	意味

(6)

中 042	中 041	中 040	中 039	中 038	中 037	中 036	番号
「宮商相变，低昂舛節，若前有浮声，則後須切響， 中 093 日 001 日 002	五字之中，音韻悉異，兩句之內，角徵不同，不可增減。	從容有風儀，音韻和弁，引接朝士，人人自以為得意。	及長博學，尤精義理，善誦詩書，音韻清弁。 中 024	雅，風儀華潤。 中 002	敬容接对賓朋，言詞若訥，酬答一宮，則音韻調暢。	文辭婉密音韻循環。或一言貫多義。或一義綜多言。有抑揚。調裁清濁。 声	本文
南史・卷四十八 陸厥	南史・卷四十八 陸厥	南史・卷四十八 陸厥	南史・卷四十八 陸厥	南史・卷四十八 陸厥	南史・卷四十八 陸厥	南史・卷四十八 陸厥	著作名
初唐	初唐	初唐	初唐	初唐	初唐	初唐	著者・年
欽定四庫全書本 (卷 48・10) 中 国・漢籍	欽定四庫全書本 (卷 48・10) 中 国・漢籍	欽定四庫全書本 (卷 44・3) 中 国・漢籍	欽定四庫全書本 (卷 34・23) 中 国・漢籍	欽定四庫全書本 (卷 32・11) 中 国・漢籍	欽定四庫全書本 (卷 30・19) 中 国・漢籍	欽定四庫全書本 (卷 12・32) 中国 国・漢籍	出典
漢大②	漢大②	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大③	意味

(7)

中 049	中 048	中 047	中 046	中 045	中 044	中 043	番号
鄴下士大夫多伝済音韵。	武帝有事大廟，審之說祝文，音韻清雅，觀者屬目。 中 030	高子敷陳事理，申釈是非，辞義清辯，音韻高亮。	僞身長八尺，鬚鬢皓然，容止端詳，音韻清朗。 中 026 中 071 中 082	齊庾華來朝，見澄音韻道雅，風儀秀逸， 中 013 中 069	善之通博，在何妄之下，然以風流醞藉，俯仰可觀，音韻清朗，由是為後進所帰。 中 029 中 031 中 072 中 081	若以文章之音韻，同絃管之声曲，美惡妍蚩，不得頓相乖反，譬猶子野操曲，安得忽有闕緩失調之声。 中 010	本文
北史・卷八十三 列伝第七十一 荀濟	北史・卷六十四 列伝第五十二 柳審之	北史・卷三十九 列伝第十一 高允	北史・卷二十七 列伝第十五 寇偶	北史・卷二十八 列伝第十六 跋澄	北史・卷十六 列伝第四拓跋善	南史・卷四十八 列伝三十八 陸厥	著作名
李延寿撰・六五九	李延寿撰・六五九	李延寿撰・六五九	李延寿撰・六五九	李延寿撰・六五九	李延寿撰・六五九	李延寿撰・初唐	著者・年
欽定四庫全書本 (卷 83・13) 中国	欽定四庫全書本 (卷 64・38) 中国	欽定四庫全書本 (卷 31・11) 中国	欽定四庫全書本 (卷 27・26) 中国	欽定四庫全書本 (卷 18・3) 中国	欽定四庫全書本 (卷 16・13) 中国	欽定四庫全書本 (卷 48・12) 中国・漢籍	出典
漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大②	意味

中 056	中 055	中 054	中 053	中 052	中 051	中 050	番号
魏武帝時，杜夔精識音韻，為雅樂郎中。 中 032	乃命太常卿祖孝孫正宮調，起居郎呂才習音韻，協律郎張文收考律呂，平其散濫，為之折衷。 中 064 中 112 中 113	遂倚絃而歌，別採新声，為無愁曲，音韻竊窅，極於哀思；使胡兒闍官之輩，斉唱和之， 中 027 中 075	旧京荒廢，今既散亡，音韻曲折，又無識者， 中 001 中 033 中 053	与唐書旧翻兼詳中天音韻不無差反考覈源濫所帰悉曇 日 017 日 025 日 010	初勛於路逢趙買人牛鐔識其声及学楽音韻未調乃曰得趙之牛鐔則諧矣 中 034 日 021	蓋文字聿興，音韻乃作。	本文
代製造 十三 楽三歴	通典・卷一百四十二 楽二 歴代沿革下	通典・卷一百四十二 楽二 歴代沿革下	通典・卷一百四十一 楽一 楽序	悉曇字記	蒙求・卷上 荀勖音律	唐韻・序	著作名
杜佑・八〇一	杜佑・八〇一	杜佑・八〇一	杜佑・八〇一	智広・七九四以降	李瀚撰・七四六以降	孫愐・七三二以降	著者・年
欽定四庫全書本 (卷 143・15) 中国	欽定四庫全書本 (卷 142・14) 中国	欽定四庫全書本 (卷 142・14) 中国	欽定四庫全書本 (卷 141・16) 中国	悉曇字記(根来会 寺往生院 147) 国	佚存叢書(卷下・30) 中国	中国歴代音韻学文選(汪寿明選注 華東師範大学出版 2003・19)	出典
漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大③	漢大①	漢大③	意味

中 063	中 062	中 061	中 060	中 059	中 058	中 057	番号
鵲飛山月曙，蟬噪野風秋。 音韻清亮，群公望之若神仙。	妙女謳歌，神色自若， 音韻奇妙清暢不可言。	有頃，見一女人，年可二八，容華端麗，音韻幽閑，綺羅繽紛，薰灼動地，盤旋良久，調戲無為。	泛積翠池，自吹紫玉笛，音韻朗暢。	詔曰：「偏旁文字，音韻懸殊，止避正呼，不宜全改。楊檀賜名光遠，余依旧。」	義玄少愛章句之學，《五經》大義，先儒所疑及音韻不明者，兼採衆家，皆為解詁，傍引証據，各有条疏。	但仲儒自省庸淺，才非瞻足，正可識音韻，纔言其理致耳。 中 019	本文
儀 太平広記・卷二百一 上官	太平広記・卷六十七 妙女	太平広記・卷四十四 蕭洞 玄	太平広記・卷十八 柳婦舞	旧五代史・卷四十七	旧唐書・卷七十七 列伝第七 崔義玄	通典・卷百四十三 樂三 歷代製造	著作名
李昉等撰・九七八	李昉等撰・九七八	李昉等撰・九七八	李昉等撰・九七八	薛居正等撰・九四七	劉昫撰・九四五	杜佑・八〇一	著者・年
欽定四庫全書本（卷201・1） 中国	欽定四庫全書本（卷67・6） 中国	欽定四庫全書本（卷44・6） 中国	欽定四庫全書本（卷18・2） 中国	欽定四庫全書本（卷47・7） 中国	欽定四庫全書本（卷77・25） 中国	欽定四庫全書本（卷143・21） 中国	出典
漢大①	漢大①	漢大①亦	漢大①	漢大②	漢大③	漢大①	意味

中 070	中 069	中 068	中 067	中 066	中 065	中 064	番号
蕭頤使庾華來朝，見澄音韻道雅，風儀秀逸， 中 013 中 045 中 069	蕭頤使庾華來朝，華見澄音韻道雅，風儀秀逸， 中 013 中 045 中 070	會淄青諸將合衆酒樓，使人請翊，翊強応之，然意色皆爽，音韻悽咽。	鼓琴為南風弄。音韻清暢。爽朗心骨，生因發言曰。妙哉。乃遂驚悟。	上因令阿翹奏《涼州曲》，音韻清越，聽者無不愴然。	山甫早疑其音韻，殆似神工，又見王生之說，即知古之《広陵散》或伝於世矣。	起居郎呂才習音韻，協律郎張文收考律呂。 中 055 中 112 中 113	本文
太平御覽・卷二百二十 職官部十八	太平御覽・卷一百五十一 皇親部第十	太平広記・卷四百八十五 柳氏伝許堯佐誤	太平広記・卷三百一十 張生	太平広記・卷二百四 沈阿翹	太平広記・卷二百三 王中散	太平広記・卷二百三 唐太宗	著作名
李昉等撰・九八四	李昉等撰・九八四	李昉等撰・九七八	李昉等撰・九七八	李昉等撰・九七八	李昉等撰・九七八	李昉等撰・九七八	著者・年
欽定四庫全書本（卷220・5） 中国	欽定四庫全書本（卷151・10） 中国	欽定四庫全書本（卷485・8） 中国	欽定四庫全書本（卷310・13） 中国	欽定四庫全書本（卷204・5） 中国	欽定四庫全書本（卷203・16） 中国	欽定四庫全書本（卷203・5） 中国	出典
漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	意味

中 077	中 076	中 075	中 074	中 073	中 072	中 071	番号
汝南周顒善識聲韻，約等文皆用宮商，將平上去入四聲，以此制韻，有平頭、上尾、蜂腰、鶴膝，五字之中音韻悉異，兩句之內角徵不同，不可增減，世為「永明體」。	貴妃每抱琵琶，奏於梨園，音韻淒清，飄如雲外。	又造無愁曲，音韻竊窈，極於哀思。 中 027 中 054	旧京荒廢，今既散亡，音韻曲折，又無識者，則於今難以音言。 中 001 中 033 中 053	籍乃嚶然長笑，音韻響亮。	又曰元善洛陽人也，以風流蘊藉，俯仰可觀，音韻清朗，聽者忘倦。 中 029 中 031 中 044 中 081	雋身長八尺，鬚髮皓然，容止端詳，音韻清朗。 中 026 中 046 中 082	本文
太平御覽・卷第五百八十五文部一	太平御覽・卷第五百八十三樂部二十	太平御覽・卷第五百六十八樂部六	太平御覽・卷第五百六十六樂部四	太平御覽・卷第五百九十二人事部三十三	太平御覽・卷三百七十九人事部二十一	太平御覽・卷三百七十七人事部十八	著作名
李昉等撰・九八四	李昉等撰・九八四	李昉等撰・九八四	李昉等撰・九八四	李昉等撰・九八四	李昉等撰・九八四	李昉等撰・九八四	著者・年
欽定四庫全書本（卷 585・6）中国	欽定四庫全書本（卷 583・5）中国	欽定四庫全書本（卷 568・1）中国	欽定四庫全書本（卷 566・5）中国	欽定四庫全書本（卷 392・5）中国	欽定四庫全書本（卷 379・13）中国	欽定四庫全書本（卷 377・6）中国	出典
漢大②	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	意味

中 084	中 083	中 082	中 81	中 080	中 079	中 078	番号
勸知漢魏尺漸長於古四分，變依為律，故不諧，乃令佐著作劉恭依《周礼》制古尺，新律呂以諧音韻。 中 071	歌呼踴躍，一人唱，衆皆和，音韻哀怨。	儻容止端詳，音韻清朗，帝与之談，不覺為之前席。 中 071 中 022 中 046	元善通博在何妥之下，然以風流醞藉，俯仰可觀，音韻清明，聽者忘倦。 中 029 中 031 中 044 中 072	因令諷誦，即誦《周南》，音韻清雅。 中 025	其辭彩蔥蒨，音韻鏗鏘，使人味之麀臺不倦。 中 007	一簡之內，音韻尽殊，兩句之中，輕重悉異。 中 103 日 001 日 002 中 003 中 009 中 011 中 033 中 093	本文
太平御覽・卷第八百三十三資產部十	太平御覽・卷第七百八十四夷部五	太平御覽・卷第六百十七學部十一	太平御覽・卷第六百十五學部九	太平御覽・卷第六百十四學部八	太平御覽・卷第五百八十六文部二	太平御覽・卷第五百八十五文部一	著作名
李昉等撰・九八四	李昉等撰・九八四	李昉等撰・九八四	李昉等撰・九八四	李昉等撰・九八四	李昉等撰・九八四	李昉等撰・九八四	著者・年
欽定四庫全書本（卷 830・1）中国	欽定四庫全書本（卷 784・7）中国	欽定四庫全書本（卷 617・4）中国	欽定四庫全書本（卷 615・5）中国	欽定四庫全書本（卷 614・2）中国	欽定四庫全書本（卷 586・3）中国	欽定四庫全書本（卷 585・6）中国	出典
漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大②	漢大②	漢大②	意味

中 091	中 090	中 089	中 088	中 087	中 086	中 085	番号
觀其字音韻次序，皆有理法，後世殆不以其為燕人也。	然梵學則有華、竺之異，南渡之後，又雜以吳音，故音韻扞駁，師法多門。	大都自沈約為四聲，音韻愈密。	音韻之學，自沈約為四聲，及天竺梵學入中國，其術漸密。	因以通音韻聲偶，暇則課學書史。	詩人不以事害意，古者用事簡而當，亦不以字害句，故音韻清濁隨宜改易。	胡盧笙…交趾人多取無柄之瓠，割而為笙，上安十三簧。吹之音韻清響，雅合律呂。	本文
夢溪筆談・卷十五	夢溪筆談・卷十五	夢溪筆談・卷十五	夢溪筆談・卷十四	新五代史・卷一百八十九 列傳第七十九 六韓建	宋景文公筆記・卷中考古	太平御覽・卷第九百七十九 九菜茹部四	著作名
沈括・北宋代	沈括・北宋代	沈括・北宋代	沈括・北宋代	歐陽脩撰・北宋代	宋祁撰・一〇六一	李昉等撰・九八四	著者・年
欽定四庫全書本（卷15・4）中国	欽定四庫全書本（卷15・2）中国	欽定四庫全書本（卷15・2）中国	欽定四庫全書本（卷14・3）中国	武英殿二十四史本（卷189・5）中国	百川學海本（卷中・12）中国	欽定四庫全書本（卷979・3）中国	出典
漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	漢大②	漢大①	意味

中 098	中 097	中 096	中 095	中 094	中 093	中 092	番号
詩中頭項多，一項是音韻，一項是訓詁名件，一項是文體。	「詩音韻間有不可曉處」因說…「如今所在方言，亦自有音韻与古合處。」	詩之音韻，是自然如此，這箇与天通。古人音韻寬，後人分得密後，隔開了。	只要音韻相叶，好吟哦諷誦，易見道理，亦無甚要緊。	《韻鏡》之作，其妙矣夫！余年二十始得此，学字音。往昔相傳，類曰《洪韻》，杲子之所撰也。有沙門神珙 <sup>（音珙，音珙，音珙）</sup> ，号知音韻，嘗著《切韻圖》，載《玉篇》卷末。	其論文則曰…「欲使宮羽相變，低昂殊節。若前有浮聲，則後須切響。一簡之內，音韻尺殊，兩句之中，輕重悉異。妙達此旨，始可言文。」 中003 中009 中011 中033 中078 中103 中101 中102	古人文章，自應律度，未以音韻為主。	本文
朱子語類・卷八十 論說詩	朱子語類・卷八十 詩一網	朱子語類・卷八十 詩一網	朱子語類・卷八十 詩一網	韻鏡・序作	夢溪筆談・卷十五	夢溪筆談・卷十五	著作名
黎靖德編・一二七〇	黎靖德編・一二七〇	黎靖德編・一二七〇	黎靖德編・一二七〇	張麟之序・南宋代	沈括・北宋代	沈括・北宋代	著者・年
欽定四庫全書本（卷80・29）中国	欽定四庫全書本（卷80・28）中国	欽定四庫全書本（卷80・26）中国	欽定四庫全書本（卷80・25）中国	中国歷代音韻学文選（汪寿明選注）華東師範大学出版社2003・28	欽定四庫全書本（卷15・4）中国	欽定四庫全書本（卷15・4）中国	出典
漢大②	漢大②	漢大②	漢大②	固有	漢大②	漢大③	意味

中 105	中 104	中 103	中 102	中 101	中 100	中 099	番号
呂靜韻集夏侯該韻客陽休之韻客周思言音韻李季節音譜 杜台卿韻客等各有乖	唐楊收曰均言韻也古無韻字韻客之名謂音韻各有畛畧也	一簡之內音韻尽殊兩句之中輕重悉異 <small>中 003 中 009 中 011 中 033 中 078 中 093 日 001 日 002</small>	孫炎始作字音於是有音韻之學 <small>中 108</small>	新旧鐘聲音韻高下以聞	龔大然之。謂之無有，皆不是，謂之音韻乃是。	陳問：「古詩有平仄否？」李云：「無平仄，只是有音韻。」	本文
下 五 芸文 小学	上 四 芸文 小学	上 四 芸文 小学	上 四 芸文 小学	上 四 芸文 小学	上 四 芸文 小学	上 四 芸文 小学	著作名
王忠麟編・ 南宋末	王忠麟編・ 南宋末	王忠麟編・ 南宋末	王忠麟編・ 南宋末	王忠麟編・ 南宋末	王忠麟編・ 南宋末	王忠麟編・ 南宋末	著者・年
欽定四庫全書本 (卷 45・154) 中国	欽定四庫全書本 (卷 44・41) 中国	欽定四庫全書本 (卷 44・40) 中国	欽定四庫全書本 (卷 44・1) 中国	欽定四庫全書本 (卷 8・12) 中国	欽定四庫全書本 (卷 87・5) 中国	欽定四庫全書本 (卷 87・5) 中国	出典
書名	書名	漢大②	漢大③	漢大①	漢大②	漢大②	意味

中 112	中 111	中 110	中 109	中 108	中 107	中 106	番号
呂平其散濫為之折衷 <small>中 655 中 064 中 113</small>	乃命太常卿祖孝孫正宮調起居郎呂才習音韻張文收考律	自茲厥後音韻錄出各有土風遂相非笑 <small>中 020</small>	書目鄭樵字始連環一卷論字画音韻	其三音韻謂呼吸有清濁高下之不同沈約四聲譜及西域反切之學	孫炎始作字音於是有音韻之學 <small>中 102</small>	音韻有韻音唐韻韻銓韻英韻海鏡源切韻加字	本文 聲類集韻零辨嫌音四声韻零四声部韻篇切韻証俗音音隱叙同音爾雅音魏則音韻之學也
玉海・卷一百五音樂樂三	玉海・卷四十下芸文小学	玉海・卷四十下芸文小学	玉海・卷四十下芸文小学	玉海・卷四十下芸文小学	玉海・卷四十下芸文小学	玉海・卷四十下芸文小学	著作名
王心麟編・南宋末	王心麟編・南宋末	王心麟編・南宋末	王心麟編・南宋末	王心麟編・南宋末	王心麟編・南宋末	王心麟編・南宋末	著者・年
欽定四庫全書本 (卷 105 <sup>ウ</sup> )中国	欽定四庫全書本 (卷 45 <sup>リ</sup> )中国	欽定四庫全書本 (卷 45 <sup>リ</sup> )中国	欽定四庫全書本 (卷 45 <sup>リ</sup> )中国	欽定四庫全書本 (卷 45 <sup>リ</sup> )中国	欽定四庫全書本 (卷 45 <sup>リ</sup> )中国	欽定四庫全書本 (卷 45 <sup>リ</sup> )中国	出典
漢大①	漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	意味



中 119	中 118	中 117	中 116	中 115	中 114	中 113	番号
音韻清越，拱以九竜，立於宮架之中，以為君罔。	制煉玉屑，入於銅沚，精純之至，音韻清越。	後周嘗以相生之法擊之，音韻克諧。國朝亦用隨均合曲，然但施殿庭，未及郊廟。	大凡動細樂，比之大樂，則不用大鼓、杖鼓、羯鼓、頭管、琵琶等，每只以簫、笙、篳篥、嵇琴、方響，其音韻清且美也。	俺去他那月明中信步階除，聽三弄瑤琴音韻非俗。	依旧制則音韻難和	乃命太常祖孝孫正宮調起居郎呂才習音韻協律郎張文收考律呂， 中 055 中 064 中 112	本文
宋史・卷一百三十三 志第八十三 樂五	宋史・卷一百二十八 志第八十一 樂三	宋史・卷一百二十六 志第七十九 樂一	夢梁錄・卷二十 妓樂	張生煮海・第四折	玉海・卷一百一十 音樂 樂三	玉海・卷一百一十五 音樂 樂三	著作名
脱脫等撰・一三四五	脱脫等撰・一三四五	脱脫等撰・一三四五	吳自牧・一三三四 夢粱錄	李好古・元代前期	王忠麟編・南宋末	王忠麟編・南宋末	著者・年
欽定四庫全書本（卷 130 頁 74）中国	欽定四庫全書本（卷 128 頁 23）中国	欽定四庫全書本（卷 126 頁 21）中国	經典名著解說中国古代民俗二（黑竜江人民出版社 2006 頁 189）	百度	欽定四庫全書本（卷 110 頁 66）中国	欽定四庫全書本（卷 105 頁 27）中国	出典
漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	意味

中 126	中 125	中 124	中 123	中 122	中 121	中 120	番号
斯乃音韻之祖因之配合而生生無窮焉其土有五天竺文字稍異独以中天竺為正	於西域其書左行皆以音韻相生而成字諸蕃之書悉其變也	雖重百訳之遠一字不通之処而音韻可伝	其他若天文、地理、典章、制度、食貨、刑法、字学、音韻、医経、術数之説，亦靡不該貫，旁而积、老之言，亦洞究其蘊。	何十歳識音韻，十五能属文，篤学嗜古，為文必本経義，在實籍中甚有声。	子之詞詩雖工，而音韻猶啞。	釈元冲《五音韻鏡》一卷	本文
書史会要・卷八 外域	書史会要・卷八 外域	書史会要・卷七 元	元史・卷一百八十九 列伝第六十六 孫何	宋史・卷三百九 李虚己	宋史・卷三百九 李虚己	宋史・卷一百一十五 芸文	著作名
陶宗儀・一三七六	陶宗儀・一三七六	陶宗儀・一三七六	宋濂等撰・一三七〇	脱脫等撰・一三四五	脱脫等撰・一三四五	脱脫等撰・一三四五	著者・年
欽定四庫全書本（卷 8 頁 84）中国	欽定四庫全書本（卷 8 頁 74）中国	欽定四庫全書本（卷 7 頁 27）中国	欽定四庫全書本（卷 189 頁 94）中国	欽定四庫全書本（卷 306 頁 64）中国	欽定四庫全書本（卷 300 頁 28）中国	欽定四庫全書本（卷 202 頁 37）中国	出典
漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	漢大②	書名	意味

中 133	中 132	中 131	中 130	中 129	中 128	中 127	番号
書契而後繫易刪詩， 《玉篇》《字統》《字林》 《集韻》《韻略》《廣韻》， 皆自成一家。	音韻日月灯叙	只聽得挖撲響声如爆竹， 叮噹音韻似敲金。	仙樂玄歌音韻美， 鳳簫玉管響声高。	邑考彈至曲終，只見音韻幽揚， 真如戛玉鳴珠，万壑松 濤，清婉欲絕，今人塵襟頓爽， 恍如身在瑤池風闕；而 笙簧簫管，檀板謳歌， 覺俗氣逼人耳。	切謂字母者猶倉頡之古文也 其音韻会合而成字猶古文華 孕而成篆也	諸蕃文字雖變遷各殊然其音韻 莫不祖述梵音故今日梵音 而不曰梵書以音律交合而成字 載音以導意非若華文有六 義也	本文
灯・音韻日月 ・自序	灯・音韻日月 ・自序	縛妖魔 遭毒手 十六回 彌勒	西遊記・第六 回 山下 定心猿	西遊記・第七 回 八卦 爐中	封神演義・第 十九回 伯邑 考進貢 贖罪	書史会要・卷 八 外域	著作名
呂維祺・ 一六三四	呂維祺・ 一六三四	明代中 期	吳承恩・ 明代中 期	吳承恩・ 明代中 期	許仲琳・ 明代	陶宗儀・ 一三七六	著者・年
中国 古籍 (自序4)	中国 古籍 (自序1)	中国	中国	中国	中国	欽定四庫全書本 (卷8・9) 中国	出典
漢大③	書名	漢大①	漢大①	漢大①	漢大③	漢大③	意味

中 140	中 139	中 138	中 137	中 136	中 135	中 134	番号
曉星寥落春雲低， 初聞百舌聞閑啼。 花樹滿空迷処所， 搖動繁英墜紅雨。 笙簧百轉音韻多， 黃鸝吞声燕無語。	曾將黃鶴樓上吹， 一声占尽秋江月。 如今老去語尤遲， 音韻高低耳不知。 氣力已微心尚在， 時時一曲夢中吹。	昔聞阻山川， 今聽同匡床。 人情便所遇， 音韻豈殊常。	自顧音韻乖， 無因合宮商。 幸君達精誠， 為我求回章。	玉府標孤映， 霜歸去不疑。 激揚音韻徹， 籍甚衆多推。 潘陸忘同調， 孫吳亦異時。	周思玄音韻 李季節音譜	司馬溫公作音韻指掌圖 自謂天造神授	本文
禹錫百舌吟	人說笛歌 全唐詩・卷三 百五十六 劉禹錫 武昌老	兼送張美游 幽州 全唐詩・卷三 百五十五 劉禹錫 酬樂天 聞新蟬見贈	寄李益少監 兼送張美游 幽州 全唐詩・王 建 李益 監	暮春江陵送 馬大卿公， 恩命追赴闕下 全唐詩・杜 甫 暮春江陵送 馬大卿公， 恩命追赴闕下	灯・音韻日月 ・首之四	灯・音韻日月 ・首之一	著作名
一七〇五	康熙帝・張 玉書等編・ 一七〇五	康熙帝・張 玉書等編・ 一七〇五	康熙帝・張 玉書等編・ 一七〇五	康熙帝・張 玉書等編・ 一七〇五	呂維祺・ 一六三四	呂維祺・ 一六三四	著者・年
356 (10) 中国	356 (9) 中国	355 (16) 中国	297 (11) 中国	232 (7) 中国	国 古籍 (1・4 2) 中	国 古籍 (1・1 2) 中	出典
漢大①	漢大①	漢大①	漢大②	漢大②	書名	書名	意味

中 147	中 146	中 145	中 144	中 143	中 142	中 141	番号
鮑廷璽吹笛子，來道土打板，王留歌唱了一隻「碧雲天，——長亭饒別」。音韻悠揚，足唱了三頓飯時候纔完。	出石溫然玉，瑕瑜素在中。妍媸因異彩，音韻信殊風。	長風吹竅木，始有音韻吐。無木亦無風，笙簧由喜怒。	蜀琴木性寒，楚糸音韻清。調慢彈且緩，夜深十數聲。	彈琴人以膝上琴，聽琴人以匣中弦。二物各一处，音韻何由伝。無風質氣兩相感，万般悲意方纏綿。	經章音韻細，風聲清冷翻。離腸繞師足，旧憶隨路延。	後日有使者兩輩持書并詩計其日時已是臥疾手筆盈幅翰墨尚新律詞一篇音韻弥切收淚握管以成報章雖広陵之弦於今絶矣而蓋泉之感猶庶聞焉	本文
觀：俊訪友神樂	儒林外史・第三十回	掩師瑕瑜不相	全唐詩・卷七	龜蒙雜諷九首	全唐詩・卷六	易夜琴	著作名
一七五〇	吳敬梓・一七〇五	康熙帝、張玉書等編・	康熙帝、張玉書等編・	康熙帝、張玉書等編・	康熙帝、張玉書等編・	康熙帝、張玉書等編・	著者・年
中国	780(7)中国	御定全唐詩欽定四庫全書本(卷619(2))中国	御定全唐詩欽定四庫全書本(卷430(18))中国	御定全唐詩欽定四庫全書本(卷389(4))中国	御定全唐詩欽定四庫全書本(卷379(10))中国	御定全唐詩欽定四庫全書本(卷362(11))中国	出典
漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大②	漢大②	意味

中 154	中 153	中 152	中 151	中 150	中 149	中 148	番号
請問九公：小弟素於反切雖是門外漢，但『大老』二字，按音韻呼去，為何不是『鳥』字？	適因才女談論切音，老夫偶然想起《毛詩》句子總是叶著音韻。	你看這斷紋，不是牛旄似的麼？所以音韻也還清越。	如何忽作變徵之聲！音韻可裂金石矣！只是太過。	又將琴譜翻出，借他《猗蘭》《思賢》兩操，合成音韻，与自己做的配齊了，然後寫出，以備送与宝釵。	那鸚哥便長嘆一聲，竟大似黛玉素日吁嗟音韻。	音均明而六書明。六書明而古經伝無不可通。	本文
：潛逃黑齒邦	鏡花緣・第十回	詞：物在公子墳	紅樓夢・第八回	紅樓夢・第八回	紅樓夢・第八回	紅樓夢・第八回	著作名
一八一八	李汝珍・一八一八	曹雪芹・清代中期	曹雪芹・清代中期	曹雪芹・清代中期	曹雪芹・清代中期	曹雪芹・清代中期	著者・年
中国	中国	中国	中国	中国	中国	音韻学叢書六書音均表(広文書局1966)	出典
漢大③	漢大②	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大③	意味

中 161	中 160	中 159	中 158	中 157	中 156	中 155	番号
剛才老夫同他說幾句閑話，趁勢談起音韻，求他指教。	唐敖道：「九公既言語可通，何不前去探聽音韻來路呢？」	唐敖道：「小弟正因音韻學問，盼望岐舌，為何總不見到？」	唐敖道：「九公既言語可通，何不前去探聽音韻來路呢？」	唐敖道：「九公既言語可通，何不前去探聽音韻來路呢？」	唐敖道：「九公既言語可通，何不前去探聽音韻來路呢？」	唐敖道：「九公既言語可通，何不前去探聽音韻來路呢？」	本文
鏡花緣·第二回 ：仗義舞老 ：義舞老 ：義舞老	鏡花緣·第二回 ：仗義舞老 ：義舞老 ：義舞老	鏡花緣·第二回 ：仗義舞老 ：義舞老 ：義舞老	鏡花緣·第二回 ：仗義舞老 ：義舞老 ：義舞老	鏡花緣·第二回 ：仗義舞老 ：義舞老 ：義舞老	鏡花緣·第二回 ：仗義舞老 ：義舞老 ：義舞老	鏡花緣·第二回 ：仗義舞老 ：義舞老 ：義舞老	著作名
李汝珍·一八一八	李汝珍·一八一八	李汝珍·一八一八	李汝珍·一八一八	李汝珍·一八一八	李汝珍·一八一八	李汝珍·一八一八	著者・年
中国	中国	中国	中国	中国	中国	中国	出典
漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	意味

中 168	中 167	中 166	中 165	中 164	中 163	中 162	番号
他恐隣國再把音韻學問，更難出人頭地，因此禁止國人，母許私相傳授。	老夫也曾打聽，原來國王因近日本處文風，不及鄰國，其能與隣邦並駕齊驅者，全仗音韻之學，就如周饒國能為機巧，以飛車為不傳之秘，都是一意。	費盡唇舌，四處探問，要想他們露出一字，比登天還難。我想問問少年人或者有些指望，誰知那些少年聽見問他音韻，掩耳就走，比年老人更難說話。」	到了下午，多九公回來，不住搖頭道：「唐兄！這個音韻，拋老夫看來，只好來生托生此地再學罷。今日老夫上去，或在通衢僻巷，或在酒肆茶坊。」	唐敖不覺發愁道：「送他珠寶尚且不肯，不意習學音韻竟如此之難，這卻怎好？惟有拜求九公，設法想個門路，也不枉小弟盼望一場。」	唐敖不覺發愁道：「送他珠寶尚且不肯，不意習學音韻竟如此之難，這卻怎好？惟有拜求九公，設法想個門路，也不枉小弟盼望一場。」	唐敖不覺發愁道：「送他珠寶尚且不肯，不意習學音韻竟如此之難，這卻怎好？惟有拜求九公，設法想個門路，也不枉小弟盼望一場。」	本文
鏡花緣·第二回 ：仗義舞老 ：義舞老 ：義舞老	鏡花緣·第二回 ：仗義舞老 ：義舞老 ：義舞老	鏡花緣·第二回 ：仗義舞老 ：義舞老 ：義舞老	鏡花緣·第二回 ：仗義舞老 ：義舞老 ：義舞老	鏡花緣·第二回 ：仗義舞老 ：義舞老 ：義舞老	鏡花緣·第二回 ：仗義舞老 ：義舞老 ：義舞老	鏡花緣·第二回 ：仗義舞老 ：義舞老 ：義舞老	著作名
李汝珍·一八一八	李汝珍·一八一八	李汝珍·一八一八	李汝珍·一八一八	李汝珍·一八一八	李汝珍·一八一八	李汝珍·一八一八	著者・年
中国	中国	中国	中国	中国	中国	中国	出典
漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	意味

中 175	中 174	中 173	中 172	中 171	中 170	中 169	番号
又因婉如、蘭音韻學甚精，都在那裡談論「双声、疊韻」。	當他們因談反切，曾有『問道於盲』的話：俺自從在岐舌國學會音韻，一心只想同人談談，偏不遇見知音。	多九公道：「兩位姪女在此，不該說這頑話。而且音韻一道，亦莫非學問，今林兄以屁夾雜在學問裡，豈不近於褻瀆麼？」	多九公道：「枝小姐既不曉得音韻，我想婉如姪女他最心靈，或者教他幾遍，她能領略，也未可知。」	誰知蘭音因自幼多病，雖說過幾年書，並未學過音韻。	國王雖然歡喜，因想起音韻一事，甚覺後悔，意欲多送銀兩，不佞韻學。	他定的是：如將音韻傳與隣邦，無論臣民，其無妻室者，終身不准娶妻，其有妻室者，立時使之離異；此後如再冒犯，立即閹割。	本文
：鏡花緣・第七回 ：靈心講射迷	：鏡花緣・第五回 ：秋羅錦繡談春	：鏡花緣・第三回 ：妙語指迷	：鏡花緣・第三回 ：妙語指迷	：鏡花緣・第三回 ：妙語指迷	：鏡花緣・第二回 ：藥童子回春	：鏡花緣・第二回 ：生仗義舞龍	著作名
李汝珍・一八一八	李汝珍・一八一八	李汝珍・一八一八	李汝珍・一八一八	李汝珍・一八一八	李汝珍・一八一八	李汝珍・一八一八	著者・年
中国	中国	中国	中国	中国	中国	中国	出典
「蘭音韻學」	漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	意味

中 176	番号
棗兒葡萄 七月下旬則棗実垂紅葡萄綴紫担負者往往同亮秋声入耳音韻淒涼抑鬱多愁者不禁有歲時之感矣	本文
記・燕京歲時 ：棗兒葡萄	著作名
敦宗・一九〇六	著者・年
88) 編輯時記(富察敦宗 ：文書局1969)	出典
漢大①	意味

番号	日 001	日 002	日 003	日 004	日 005
本文	<p>若シ前<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>ハ<sup>二</sup>浮声<sup>一</sup>則<sup>レ</sup>後<sup>ニ</sup>須<sup>二</sup>切響<sup>一</sup>ル。一簡之内音韻<sup>ヲ</sup>尽<sup>ク</sup>殊<sup>ニ</sup>。兩句之内輕重悉<sup>ク</sup>異<sup>リ</sup>。妙ニ達シメ<sup>レ</sup>ハ<sup>二</sup>此ノ旨<sup>一</sup>ニ始<sup>テ</sup>可<sup>シ</sup>言<sup>ツ</sup>レ文<sup>ヲ</sup>。</p> <p>日 002 ほかは左欄参照</p>	<p>前<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>ハ<sup>二</sup>浮声<sup>一</sup>則<sup>テ</sup>后<sup>ロ</sup>ニ有<sup>二</sup>切響<sup>一</sup>。一簡之内<sup>ニ</sup>音韻<sup>ヲ</sup>尽<sup>ク</sup>殊<sup>ナリ</sup>。兩句之内<sup>ニ</sup>輕重悉<sup>ク</sup>異<sup>リ</sup>。妙ニ達スレ<sup>ハ</sup>。此ノ旨<sup>ニ</sup>始<sup>テ</sup>可<sup>シ</sup>言<sup>ツ</sup>レ文<sup>ヲ</sup>。</p> <p>中 103 日 001 中 003 中 009 中 011 中 033 中 078 中 093</p>	<p>叔虞封枝月影抱<sup>レ</sup>判是歌舞無<sup>二</sup>勞曲<sup>一</sup>。通霄砧杵未<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>足。音韻<sup>ヲ</sup>填<sup>ニ</sup>饒<sup>ニ</sup>相讓<sup>一</sup>。響添<sup>レ</sup>佩暗連統。</p>	<p>故<sup>ノ</sup>從五位上勳十一等晋卿<sup>ノ</sup>之第九男也。父晋卿<sup>ノ</sup>遙<sup>ニ</sup>慕<sup>テ</sup>聖風<sup>ヲ</sup>遠<sup>ク</sup>辞<sup>ス</sup>本族<sup>ヲ</sup>。誦<sup>シ</sup>テ<sup>二</sup>兩京之音韻<sup>一</sup>。改<sup>ム</sup>三吳之訛響<sup>ヲ</sup>。口ニハ吐<sup>イ</sup>テ<sup>二</sup>唐言<sup>一</sup>。發<sup>ス</sup>揮<sup>ス</sup>嬰學之耳目<sup>ヲ</sup>。</p> <p>日 005</p>	<p>故從五位上勳十一等晋卿之第九男也。父晋卿遙慕聖風。遠辞本族。誦兩京之音韻。改三吳之訛響。口吐唐言。發揮嬰學之耳目。</p> <p>日 004</p>
著作名	文鏡秘府論・天	文鏡秘府論・天	經国集・卷十三 雜言 奉和搗衣引一首 巨識	性靈集・卷四 為藤真川舉淨豊啓	高野雜筆集・卷上・弘仁七年十二月廿七日
著者・年	空海・八二〇以前	空海・八二〇以前	良岑安世他編・八二七頃	空海・八三五頃	空海・八三五頃
出典	弘法大師全集・第3輯・卷8 (祖風宣揚會編 吉川弘文館・六次新報社 1910・9) 国会	弘法大師全集・第3輯・卷8 (祖風宣揚會編 吉川弘文館・六次新報社 1911・20) 国会	群書類從・第8輯・卷第125 (塙保己一編 続群書類從完成会 1932・524) ジャ	弘法大師全集・第3輯・卷10 (祖風宣揚會編 吉川弘文館・六次新報社 1911・451) 国会	続群書類從・第12輯上・卷第319 (続群書類從完成会 1926・74) ジャ
意味	日国①	日国①	日国①	日国②	日国②

資料二 「音韻」の用例 (日本・古典)

【凡例】

- ・江戸時代までの日本の文献に現れた「音韻」の用例(筆者が採集したもののうち、主なもの)を、その用例が現れる著作の成立(あるいは刊行、発表)年順に、表にして挙げる(頭に「日」を付けて、通し番号を付す)。
- ・表には、用例の現れた「本文」(部分)のほか、「著作名」、「著者」(あるいは編者)、著作の成立(あるいは刊行、発表)「年」、「出典」、「音韻」の当該例における「意味」を挙げる。ただし、著者(編者)が未詳の場合には、著者(編者)名を挙げない。
- ・「本文」には、当該語の部分(「音韻」)に網かけを行う。同様の本文(記事)が他の文献に見える場合には、欄の最後に、その資料の番号を挙げる。
- ・「出典」欄には、底本名と、用例採集に用いたデータベース名を略号で挙げる(データベースを用いていない場合は、挙げない)。底本は、主に影印版を用いた。データベース名の略号は、以下のとおりである。  
「デジタルブックス」→グー
- ・「国文学研究資料館電子資料館」→国文学
- ・「国立国会図書館デジタルコレクション」→国会
- ・「駒澤大学電子貴重書庫」→駒大
- ・「ジャパンナレッジ」(JBooks 群書類從(正・続・続々)「JBooks 東洋文庫」)→ジャ
- ・「奈良地域関連資料画像データベース」→奈良
- ・「早稲田大学図書館 古典籍総合データベース」→早大
- ・「意味」欄には、「音韻」の当該例における意味を、『日本国語大辞典 第二版』(「日国」と略す)の意味区分の番号で示す。同辞典における「音韻」の意味区分・意味記述は、次のとおりである。
- ①音とひびき。また、その調和。音色(ねいろ)。
- ②(漠然と)言語音をいう。
- ③漢字の表わす一音節の頭初の子音とそれを除いた後の部分。音(声母・頭子音)と韻(韻母)。
- ④言語学で、具体的な音声から音韻論的な考察を経て抽象された言語音をいう。
- ・漢字の字体は、現代日本語の通用字体を用いる。「音韻」・「音韻」の表記は、元のままにする。
- ・数字に関しては、「著作名」欄では漢数字を、「出典」欄では算用数字を用いる。「著者・年」欄では、漢数字を用いるが、十百千などを用いず、一〇のみを用いる(例…八百二十一→八二〇)。

日 010	日 009	日 008	日 007	日 006	番号	
無 <sup>キ</sup> 二 <sup>ニ</sup> 差 <sup>一</sup> 反 <sup>一</sup> 考 <sup>一</sup> 覈 <sup>一</sup> スル <sup>一</sup> ニ <sup>一</sup> 源 <sup>一</sup> 蓋 <sup>一</sup> ヲ <sup>一</sup> 一 <sup>一</sup> 炊 <sup>一</sup> 婦 <sup>一</sup> 悉 <sup>一</sup> 曇 <sup>一</sup> アリ <sup>一</sup> 中 <sup>一</sup> 052	与 <sup>一</sup> 唐書ノ旧翻兼 <sup>テ</sup> 詳 <sup>シ</sup> スル <sup>ニ</sup> ニ <sup>一</sup> 中 <sup>一</sup> 天ノ音韻ヲ <sup>一</sup> 一 <sup>一</sup> 不 <sup>レ</sup>	此ノ二 <sup>一</sup> 八 <sup>一</sup> 声 <sup>一</sup> ニ <sup>一</sup> 各 <sup>一</sup> 有 <sup>一</sup> 三 <sup>一</sup> 種 <sup>一</sup> 一 <sup>一</sup> ニ <sup>一</sup> ハ <sup>一</sup> 喉内ノ声ニ <sup>一</sup> ハ <sup>一</sup> 舌内ノ声ニ <sup>一</sup> ハ <sup>一</sup> 唇内ノ声並ニ <sup>一</sup> 与 <sup>ニ</sup> 梵文ニ <sup>一</sup> 対檢シテ <sup>一</sup> 撫 <sup>レ</sup> 蹏 <sup>ト</sup> 実ヲ <sup>一</sup> 。亦述ス本韻ノ大空涅槃ノ音中ニ並ニ有 <sup>ニ</sup> 此 <sup>レ</sup> 等ノ三 <sup>一</sup> 種ノ音韻 <sup>一</sup>	造書天造リ <sup>ニ</sup> 四十七字ヲ <sup>一</sup> 。光音天説 <sup>ニ</sup> 四十二字ヲ <sup>一</sup> 。故ニ有 <sup>ニ</sup> 二十 <sup>一</sup> 十六 <sup>一</sup> トノ音韻 <sup>一</sup> 一十四 <sup>一</sup> 十六 <sup>一</sup> 十四 <sup>一</sup> トノ音聲五音三書八体六文 <sup>一</sup> 。	次一僧作梵、如来妙色身等兩行偈、音韻共 <sup>ニ</sup> 唐一般、作梵之会、一人擊 <sup>ニ</sup> 香盆 <sup>一</sup> 、	何於 <sup>ニ</sup> 此經究竟 <sup>一</sup> 到 <sup>ニ</sup> 彼岸 <sup>一</sup> 、願仏開 <sup>ニ</sup> 微密 <sup>一</sup> 、広為 <sup>ニ</sup> 衆生 <sup>一</sup> ノ説。音韻絶妙、作梵之間、有 <sup>ニ</sup> 人分 <sup>一</sup> レ <sup>ニ</sup> 經 <sup>一</sup> 、	本文
源一梵文本	悉曇藏・卷	悉曇藏・序	入唐求法巡礼行記・卷第二新羅誦經儀式	入唐求法巡礼行記・卷第三十一月廿四日	著作名	
八八〇	安然・	安然・八八〇	平安初期	平安初期	著者・年	
悉曇藏・序(台宗書林・柏屋喜兵衛1789・21) 国文(普通寺藏本)	悉曇藏・序(台宗書林・柏屋喜兵衛1789・7) 国文(普通寺藏本)	悉曇藏・序(台宗書林・柏屋喜兵衛1789・1) 国文(普通寺藏本)	続々群書類従・第12(続群書類従完成会1970・198) ジャ	続々群書類従・第12(続群書類従完成会1970・174) ジャ	出典	
日国②	日国②	日国②	日国②	日国①	意味	

日 015	日 014	日 013	日 012	日 011	番号
<p>巡<sup>一</sup>礼<sup>一</sup>処<sup>一</sup>々<sup>一</sup>靈<sup>一</sup>駭<sup>一</sup>勝<sup>一</sup>地<sup>一</sup>。薰<sup>一</sup>修<sup>一</sup>年<sup>一</sup>尚<sup>一</sup>矣<sup>一</sup>。就<sup>一</sup>中<sup>一</sup>其<sup>一</sup>音<sup>一</sup>微<sup>一</sup>妙<sup>一</sup>幽<sup>一</sup>美<sup>一</sup>。雖<sup>一</sup>不<sup>一</sup>加<sup>一</sup>曲<sup>一</sup>不<sup>一</sup>致<sup>一</sup>音<sup>一</sup>韻<sup>一</sup>任<sup>一</sup>運<sup>一</sup>出<sup>一</sup>声<sup>一</sup>。聞<sup>一</sup>人<sup>一</sup>傾<sup>一</sup>耳<sup>一</sup>。</p>	<p>親<sup>一</sup>自<sup>一</sup>傳<sup>一</sup>授<sup>一</sup>ス<sup>一</sup>。即<sup>一</sup>令<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>学<sup>一</sup>生<sup>一</sup>四<sup>一</sup>百<sup>一</sup>人<sup>一</sup>ヲ<sup>一</sup>シ<sup>一</sup>テ<sup>一</sup>習<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>五<sup>一</sup>經<sup>一</sup>三<sup>一</sup>史<sup>一</sup>。明<sup>一</sup>法<sup>一</sup>算<sup>一</sup>術<sup>一</sup>。音<sup>一</sup>韻<sup>一</sup>檔<sup>一</sup>案<sup>一</sup>等<sup>一</sup>ノ六<sup>一</sup>道<sup>一</sup>ヲ<sup>一</sup>。其<sup>一</sup>後<sup>一</sup>代<sup>一</sup>代<sup>一</sup>下<sup>一</sup>レ<sup>一</sup>勅<sup>一</sup>ヲ<sup>一</sup>。給<sup>一</sup>フ<sup>一</sup>テ<sup>一</sup>罪<sup>一</sup>人<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>日<sup>一</sup>016日<sup>一</sup>061日<sup>一</sup>062日<sup>一</sup>129</p>	<p>伽<sup>一</sup>藍<sup>一</sup>丹<sup>一</sup>身<sup>一</sup>哉<sup>一</sup>彼<sup>一</sup>持<sup>一</sup>沼<sup>一</sup>夏<sup>一</sup>之<sup>一</sup>日<sup>一</sup>緒<sup>一</sup>何<sup>一</sup>蛻<sup>一</sup>蟬<sup>一</sup>之<sup>一</sup>鳴<sup>一</sup>暮<sup>一</sup>芝<sup>一</sup>鶴<sup>一</sup>蛻<sup>一</sup>蟬<sup>一</sup>終<sup>一</sup>日<sup>一</sup>鳴<sup>一</sup>暮<sup>一</sup>甜<sup>一</sup>。想<sup>一</sup>像<sup>一</sup>伶<sup>一</sup>倫<sup>一</sup>八<sup>一</sup>音<sup>一</sup>韻<sup>一</sup>。春<sup>一</sup>夏<sup>一</sup>輪<sup>一</sup>転<sup>一</sup>冷<sup>一</sup>声<sup>一</sup>切<sup>一</sup>。落<sup>一</sup>餐<sup>一</sup>葉<sup>一</sup>服<sup>一</sup>育<sup>一</sup>一<sup>一</sup>單<sup>一</sup>身<sup>一</sup>一<sup>一</sup></p>	<p>問<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>秀<sup>一</sup>才<sup>一</sup>三<sup>一</sup>善<sup>一</sup>ノ清<sup>一</sup>行<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>文<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>条<sup>一</sup>。音<sup>一</sup>韻<sup>一</sup>清<sup>一</sup>濁<sup>一</sup></p>	<p>五<sup>一</sup>天<sup>一</sup>ノ之<sup>一</sup>中<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>中<sup>一</sup>天<sup>一</sup>ヲ<sup>一</sup>為<sup>一</sup>レ<sup>一</sup>最<sup>一</sup>ト<sup>一</sup>中<sup>一</sup>天<sup>一</sup>ノ之<sup>一</sup>外<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>無<sup>一</sup>レ<sup>一</sup>有<sup>一</sup>ル<sup>一</sup>ヲ<sup>一</sup>ト<sup>一</sup>勝<sup>一</sup>処<sup>一</sup>一<sup>一</sup>、若<sup>一</sup>以<sup>一</sup>テ<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>此<sup>一</sup>ノ理<sup>一</sup>ヲ<sup>一</sup>準<sup>一</sup>シ<sup>一</sup>テ<sup>一</sup>判<sup>一</sup>ハ<sup>一</sup>ニ<sup>一</sup>優<sup>一</sup>劣<sup>一</sup>ヲ<sup>一</sup>。可<sup>一</sup>シ<sup>一</sup>道<sup>一</sup>中<sup>一</sup>天<sup>一</sup>ノ音<sup>一</sup>韻<sup>一</sup>ヲ<sup>一</sup>以<sup>一</sup>テ<sup>一</sup>為<sup>一</sup>レ<sup>一</sup>美<sup>一</sup>正<sup>一</sup>ト<sup>一</sup>、余<sup>一</sup>国<sup>一</sup>ノ清<sup>一</sup>濁<sup>一</sup>而<sup>一</sup>多<sup>一</sup>シ<sup>一</sup>訛<sup>一</sup>謬<sup>一</sup>一<sup>一</sup></p>	本文
命阿闍梨	意見十二箇条一請加給大学生徒食料事	新撰万葉集・卷下夏歌二十二首	菅家文章・卷八問秀才三善清行文二条	悉曇私記	著作名
一〇四一頃	鎮源・九一四	九一三頃	菅原道真・九〇〇	宗叡・八八四	著者・年
続群書類従・第8輯上・卷第194(続群書類従完成会1927・173) ジャ	群書類従・第27輯・卷第474(塙保己一編經濟雑誌社1932・122) ジャ	群書類従・第16輯・卷第284(塙保己一編続群書類従完成会1932・86) ジャ	菅家文章・卷8(1667・跋) 早大	悉曇私記(虚心堂1732) 9) 国文(普通寺藏本)	出典
日国①	日国③	「八音」か	日国②	日国②	意味

日 020	日 019	日 018	日 017	日 016	番号
貴彩寧唯誇「漠々」。靈功兼有至「蒼々」。春穠誠富千年外。音駒爭迷万里疆。見「大素清経」。桓景遊「山撰」咎恙」。	大惠大法師者。安然和尚之入室也。大法師依知糸竹之曲調。明通悉曇之音韻。凡内外兼学。管絃俱習云々。	玄肆所訳十一面経疏云。○此菩提樹用都魯色迦香油漬之也。法花経曰。兜盧皮香此云草香。与此中都魯色香音韻少異。大意相似也。謂彼香燻油以香詔香。	故「欲」レ「取」ント「梵文」ノ「正旨」ヲ。不「レ」專「セ」ニ「文」ヲ「也」。又判「シ」ニ「般若菩薩所伝」ヲ「云」。与「二」唐書ノ「旧翻」。兼「二」詳「ル」ニ「中天」ノ「音韻」。不「レ」無「二」差反「一」考「二」數「二」源流「一」。攸「レ」帰「悉」曇「ナリ」。中 052 日 010 日 025	至「リ」テ「于」天平之代「ニ」。右大臣古備朝臣。恢「弘」シ「道」芸「ヲ」。親自「ヲ」伝「レ」授「ル」。即令「三」學生四百人「ヲ」シ「シ」。習「ハ」五経、三史、明法、算術、音韻、稽察等ノ六道「ヲ」。日 014 日 061 日 129	本文
本朝無題 二・植物賦 残菊大江 匡房	拾遺往生 伝・卷中・ 大法師淨藏	香字抄・安 息香 平安後期か	悉曇要訣・ 卷第一 明覚・ 一一〇一	本朝文粹・ 意見十二箇 条善相公 藤原明衡・ 一〇六〇頃	著作名
一一六四頃	三善為康・ 一一二三				著者・年
群書類従・第9輯・卷第128（塙保己一編） 群書類従完成会1932（12） ヤ	群書類従・第8輯 上・卷第196（統群書類 従完成会1927（244） ジャ	群書類従・第30輯 下・卷第894（統群書類 従完成会1928（519） ジャ	群書類従・第1（錢 屋善兵衛1774（1） 駒大	本朝文粹註釈・上冊卷 第2（内外出版1922（279） 国会	出典
日国①	日国②	日国③	日国②	日国③	意味

日 025	日 024	日 023	日 022	日 021	番号
又云与「唐書」旧翻「兼テ詳スルニ」中天「音韻」ヲ「不レ無ニ」差反「云々」中 052 日 010 日 017	自礼仏頌以「平調」唱「レ」之、則「御帳中有」箏声「一本云笙、六種」之間、「音韻暗合、不「レ」堪「御感」、則賜「御衣」	習「学」悉曇、法師元依「知」糸竹之曲調、殊朗横川苔洞、	樂官ニナサレニケリ。昔遇趙商人於路。懸鐸於牛角。識其声。後「音駒イマタト、ノホラサルニ。荀島力云ク。中 034 中 051	催「促」道俗「勸進」上下。捧「白妙之幣帛。備二紅墨之供膳。調「勸請」音韻」。唱「啓白句義」。当「于」此時「一」	本文
悉曇字記聞書（悉曇字記）・卷二	大法師淨藏	大法師淨藏	蒙牛和歌・第十二・管弦部十首 荀島音律	走湯山縁起・神記第四雷電	著作名
信範・鎌倉時代	宗蓮・一一三二	宗蓮・一一三二	源光行・一二〇四	平安末期か	著者・年
群書類従完成会1932（12） ヤ	群書類従完成会1970（465） ジャ	群書類従完成会1970（465） ジャ	群書類従・第15輯 上・卷第405（統群書類 従完成会1924（130） ジャ	群書類従・第2輯・卷第25（塙保己一編） 群書類従完成会1932（324） ジヤ	出典
日国②	日国①	日国②	日国①	日国①	意味



日 030	日 029	日 028	日 027	日 026	番号
<p>惠心檀那尽<sub>二</sub>台宗也、兼習<sub>一</sub>声曲、悦<sub>二</sub>物情意<sub>一</sub>、真喜仲算<sub>一</sub>、唯識也、傍学<sub>一</sub>音韻、導<sub>二</sub>人信解<sub>一</sub>、</p>	<p>韻有<sub>二</sub>甲乙<sub>一</sub>、割<sub>二</sub>乾坤於<sub>一</sub>五、悦<sub>二</sub>人心<sub>一</sub>者、是調子也、五調、六調、七調子、各有<sub>二</sub>靈德<sub>一</sub>、劬<sub>二</sub>物情<sub>一</sub>者、是音韻也、</p>	<p>音与韻倫次ナルカ<sub>一</sub>故ニ音韻倫次ト云フ</p>	<p>也</p> <p>・超<sub>ト</sub>声<sub>ト</sub>者音韻不倫次故云超声ト遍口ノ十字等</p>	<p>ナツク</p> <p>・毗<sub>ト</sub>声<sub>ト</sub>者音韻倫次故ニ毗声ト云謂<sub>二</sub>〔ka〕<sub>一</sub>〔kha〕<sub>一</sub>〔ga〕<sub>一</sub>〔gha〕<sub>一</sub>〔ṅa〕<sub>一</sub>等也〔ṇ〕は梵字</p>	本文
<p>声明源流記</p>	<p>声明源流記</p>	<p>反音鈔私聞書・中・五音字小論事又各小五音</p>	<p>反音鈔私聞書・中・五音字小論事又各小五音</p>	<p>反音鈔私聞書・中・五音字小論事又各小五音</p>	著作名
<p>凝然・鎌倉末期</p>	<p>凝然・鎌倉末期</p>	<p>寛□?・一三〇八?</p>	<p>寛□?・一三〇八?</p>	<p>寛□?・一三〇八?</p>	著者・年
<p>続々群書類従・第12(続群書類従完成会1970・289)</p>	<p>続々群書類従・第12(続群書類従完成会1970・289)</p>	<p>反音鈔私聞書・中(賢範写1383・27)奈良</p>	<p>反音鈔私聞書・中(賢範写1383・16)奈良</p>	<p>反音鈔私聞書・中(賢範写1383・16)奈良</p>	出典
日国①	日国①	日国②	日国②	日国②	意味

日 035	日 034	日 033	日 032	日 031	番号
或時法花経ヲ読誦スルニ年十六歳ノ児童数多左右ニ來テ同経ヲ誦。其容貌奇麗而音韻又清雅也。	寄「我活業詔誦交生変態百出、揺身首婉」音韻言貴偶儷 <sup>一</sup> 、理主 <sup>二</sup> 哀讀 <sup>一</sup>	自 <sup>一</sup> 此世推 <sup>ス</sup> 忍 <sup>二</sup> 之業焉繼 <sup>三</sup> 其後者、受 <sup>二</sup> 忍之感応 <sup>一</sup> 、只受 <sup>一</sup> 音韻 <sup>二</sup> 因 <sup>一</sup> 是太原之地成梵唄ノ場、方今天下言声明者、皆祖 <sup>ス</sup> 于忍 <sup>一</sup> 焉	本朝以 <sup>一</sup> 音韻 <sup>二</sup> 、鼓吹 <sup>三</sup> 吾 <sup>カ</sup> 道者四家焉、 <sup>一</sup> 曰經師 <sup>一</sup> 、焉曰梵唄、焉曰唱導、焉曰念仏、焉初与 <sup>一</sup> 三科 <sup>二</sup> 、 <sup>一</sup> 于梁伝 <sup>一</sup> 、	衆習 <sup>レ</sup> 之 <sup>一</sup> 不 <sup>レ</sup> 偏、長音供養文、羅漢勸誡、是声明之秘曲、儀法悲歎声、梵網說戒、乃音韻密事、九条錫杖重 <sup>一</sup> 清曲 <sup>一</sup> 也、	本文
天皇	七	七	七	七	著作名
神皇正統 錄・上・六 十二代村上天皇	元亨釈書・ 卷第二十 九・音芸志	元亨釈書・ 卷第二十 九・音芸志	元亨釈書・ 卷第二十 九・音芸志	元亨釈書・ 卷第二十 九・音芸志	声明源流記
南北朝頃	虎関師鍊・ 一三二二	虎関師鍊・ 一三二二	虎関師鍊・ 一三二二	虎関師鍊・ 一三二二	著者・年
続群書類従・第29輯 上・巻第851（続群書類 従完成会1925 34）ジャ	元亨釈書・巻第二十九 （大菴吞碩写1558）国会	元亨釈書・巻第二十九 （大菴吞碩写1558）国会	元亨釈書・巻第二十九 （大菴吞碩写1558）国会	元亨釈書・巻第二十九 （大菴吞碩写1558）国会	出典
日国①	日国①	日国①	日国①	日国①	意味

日 040	日 039	日 038	日 037	日 036	番号
大 <sup>ニ</sup> 成 <sup>レ</sup> 願 <sup>密</sup> 、帝深有 <sup>ニ</sup> 優 <sup>幸</sup> 、入 <sup>レ</sup> 宮而進 <sup>席</sup> 、 令 <sup>レ</sup> 歸 <sup>三十七尊之真言</sup> 、音韻雅麗隠々如 <sup>レ</sup> 鈴、 聞者不 <sup>レ</sup> 覺 <sup>悦</sup> 予。	爨 <sup>下</sup> 梧桐誰所伝、曉来凍合落階泉、夜寒古曲無 音韻。只有松風統斷絃。	反音大意事。右反切ノ大道者。声明ノ根本也。 音韻ノ學業之述作ノ軌範也。 嗜 <sup>マシム</sup> 文道輩	不 <sup>シテ</sup> 就呼吸スルハ開ナリ。奇宜等是ナリ。或ハ 又納 <sup>ル</sup> 音ノ韻。時有 <sup>ニ</sup> 開合不同 <sup>一</sup> 。仙先等ノ字ハ。 以舌頭付斷ノ間 <sup>ハシ</sup> 。開 <sup>ク</sup> 唇是ヲ開口ト云フ。	無 <sup>ク</sup> 願 <sup>トシテ</sup> 不 <sup>ト</sup> 云 <sup>コト</sup> レ <sup>往</sup> 。無 <sup>シト</sup> ハ <sup>ハ</sup> 善 <sup>トシテ</sup> 不 <sup>ト</sup> 云 <sup>コ</sup> ト廻 <sup>モ</sup> 。言 <sup>ハ</sup> 三心既具無行不成。願行既成若不 生者無有是処。今住 <sup>ト</sup> 廻 <sup>ト</sup> 不 <sup>ナル</sup> コト次 <sup>ニ</sup> 為 <sup>ス</sup> 音 韻ノ。一念清淨一座華台トハ。	本文
真雅僧正伝	用凍琴・器	反音抄・反 音大意事	反音抄・開 口合口事	鹿島問答・ 上衍極致鷄 距蹈開	著作名
智灯・ 一六八四	か 春沢永恩・ 一五七四頃	志玉照珍・ 一四〇八	志玉照珍・ 一四〇八	聖岡・ 一三七七	著者・年
群書類從完成会 1970(450) 続々群書類從・第3(続 群書類從完成会 1970(450) ジャ	続群書類從・第13輯 下・卷第351群書類從完 成会 1926(784) ジャ	続群書類從・第30輯 下・卷第888群書類從完 成会 1928(257) ジャ	続群書類從・第30輯 下・卷第888群書類從完 成会 1928(252) ジャ	続群書類從・第33輯 上・卷第962群書類從 完成会 1927(153) ジャ	出典
日国①	日国①	日国③	日国③	日国①	意味

日 045	日 044	日 043	日 042	日 041	番号
文字皆音韻也	凡言語皆音韻也	一文不通の兒女子なりといへ共、強に教ふる事 もなければども自然に聞習ひて常々の物語にも 其音韻を混乱する事なし	証拠を挙て、いはば京都中国板東北国等の人に 逢て其音韻を聞に総て四音の分弁なきがごと し唯筑紫方の辞を聞に大形明に言分る也	東寺の悉曇。中印度を伝へて、南天竺を兼たり。 山門は南天竺を伝ふ。南天ハ中天に次で、東天 北天よりも音韻詳雅なり。中天ハ漢音おほく。 南天ハ吳音おほし。	本文
集・上凡例	集・上凡例	集・上凡例	集・上凡例	和字正濫 鈔・卷一	著作名
一六九五刊	一六九五刊	一六九五刊	一六九五刊	契沖・ 一六九三成 一六九五刊	著者・年
集・上(1695ウ)国会	集・上(1695ウ)国会	集・上(1695オ)国会	集・上(1695オ)国会	和字正濫鈔・卷一(1695ウ) 早大	出典
日国②	日国②	日国②	日国②	日国②	意味

日 050	日 049	日 048	日 047	日 046	番号
倭語ニ異国ノ音韻相雜ル漢音ヲ為シ先、是則応神帝ノ御宇阿直岐王仁等来朝シテ、文字ノ沙汰セシヨリノ事也、	十行五位の音韻の図を以て本とすべし	音韻の学ハ <sup>がく</sup>	故に仮名使を沙汰せん人は必音韻を論じて後に其言語文字を明らむべし	仮名文字使も亦音韻也	本文
本朝学原浪 華鈔・二	仮名文字使 蜺縮涼鼓 集・上凡例	仮名文字使 蜺縮涼鼓 集・上凡例	仮名文字使 蜺縮涼鼓 集・上凡例	仮名文字使 蜺縮涼鼓 集・上凡例	著作名
松下見林・ 一六九八序 一七一六刊	鴨東萩父・ 一六九五刊	鴨東萩父・ 一六九五刊	鴨東萩父・ 一六九五刊	鴨東萩父・ 一六九五刊	著者・年
続々群書類従・第10(続) 群書類従完成会 1969(491) ジャ	仮名文字使「蜺縮涼鼓 集・上(1695 <sup>ウ</sup> 10)国会	仮名文字使「蜺縮涼鼓 集・上(1695 <sup>ウ</sup> 10)国会	仮名文字使「蜺縮涼鼓 集・上(1695 <sup>ウ</sup> 10)国会	仮名文字使「蜺縮涼鼓 集・上(1695 <sup>ウ</sup> 10)国会	出典
日国③	日国②	日国②	日国②	日国②	意味

日 055	日 054	日 053	日 052	日 051	番号
猶歴代読書音韻等ノ委シク成シ事末章ニ記ス、	事物紀原ニ筆談曰、音韻之学自沈約為四声一、及天竺梵字入中国、其学漸密也ト、		音韻トハ四声也、有文云音叶之云韻、	延暦十七年格太政官宣曰、諸読書出身等令読漢音ハ勿用吳音ト、此時ヨリ音韻ノ事委ク成レリ、	本文
本朝学原浪 華鈔・二	本朝学原浪 華鈔・二	本朝学原浪 華鈔・二	本朝学原浪 華鈔・二	本朝学原浪 華鈔・二	著作名
松下見林・ 一六九八序 一七一六刊	松下見林・ 一六九八序 一七一六刊	松下見林・ 一六九八序 一七一六刊	松下見林・ 一六九八序 一七一六刊	松下見林・ 一六九八序 一七一六刊	著者・年
続々群書類従・第10(続) 群書類従完成会 1969(496) ジャ	続々群書類従・第10(続) 群書類従完成会 1969(496) ジャ	続々群書類従・第10(続) 群書類従完成会 1969(496) ジャ	続々群書類従・第10(続) 群書類従完成会 1969(496) ジャ	続々群書類従・第10(続) 群書類従完成会 1969(496) ジャ	出典
日国③	日国③	日国③	日国③	日国③	意味

日 060	日 059	日 058	日 057	日 056	番号
按スルニ載ニ伊呂波字一者ハ書史会要・音韻字海・海篇心鏡・日本風土記等ニアリ、	空海ハ讃岐ノ人也、其伝釈書詳也、四十七字ノ母字異国ニ伝テ音韻字海、又ハ書史会要共ニ載タリ、	抑我上世音韻ノ沙汰モ亦不忽故ニヤ、古事記ニハ專音ノ事ヲ書シ、殊ニ神名ノ傍注ニ上去等ノ字ヲ附タルモ、昔ヨリ唱伝シ、	声ニ有ニ四声一平上去入是也、此唇舌牙齒喉ノ做レ文者也、音韻叶調ノ微ハ和漢共ニ自然ニ備ルト云ヘドモ、吾人日ニ用テ不レ曉レ之、	先正音韻極ニ白読ニテ然後講義ノ次序ハ學者自然ノ階級ヲ云ノミニ非ズ、学令又ハ大学寮式等ノ制格也、	本文
華鈔・三	華鈔・三	華鈔・三	華鈔・三	華鈔・二	著作名
一七一九八序 一七一九八刊	松下見林・ 一六九八序 一七一九八刊	松下見林・ 一六九八序 一七一九八刊	松下見林・ 一六九八序 一七一九八刊	松下見林・ 一六九八序 一七一九八刊	著者・年
続々群書類従・第10(続) 群書類従完成会 1969(516) ジャ	続々群書類従・第10(続) 群書類従完成会 1969(516) ジャ	続々群書類従・第10(続) 群書類従完成会 1969(515) ジャ	続々群書類従・第10(続) 群書類従完成会 1969(514) ジャ	続々群書類従・第10(続) 群書類従完成会 1969(501) ジャ	出典
書名	書名	日国③	日国③	日国③	意味

日 065	日 064	日 063	日 062	日 061	番号
史称、沈約撰「四声譜」、独得レ於ニ胸襟、窮其妙旨、此編雖レ非音韻之書、而其得ニ胸襟、不ニ多譲ニ焉、	霧鬢風鬟、灼嬪聯娟、冠珮交珊、法曲未闌、僊樂又起。音韻劉亮、若速若遲。歌詠讀嘆。	算術モ亦四道ノ其一ツニシテ算道ヲ掌レリ、音韻ハ吾書ノ類四声開合等ヲ弁知スル事也、縮篆ハ古文也、	右大臣古備朝臣眞備恢弘道芸、親自伝授、即令ニ學生四百人習ニ五經ニ吏明法算術音韻縮篆等六道一 日 014 日 016 日 061 日 129	親自伝ニ授學生四百人、五經ニ吏明法算術音韻縮篆等六道ヲ講シ、此外諸葛亮ノ八陣ヲ始メ、軍術迄ヲ弘ムト也、 日 014 日 016 日 062 日 129	本文
澹泊斎文 集・卷七 東雅序乙巳	万瑛和尚文 集・極楽賦 并序	本朝学原浪 華鈔・六	本朝学原浪 華鈔・六	本朝学原浪 華鈔・六	著作名
安積澹泊・ 一七一四	万瑛・ 江戸中期	松下見林・ 一六九八序 一七一六刊	松下見林・ 一六九八序 一七一六刊	松下見林・ 一六九八序 一七一六刊	著者・年
続々群書類従・第13(続) 群書類従完成会 1970(400) ジャ	続群書類従・第13輯 下・巻第355(群書類従完成会 1926(970) ジャ	続々群書類従・第10(続) 群書類従完成会 1969(537) ジャ	続々群書類従・第10(続) 群書類従完成会 1969(537) ジャ	続々群書類従・第10(続) 群書類従完成会 1969(536) ジャ	出典
日国③	日国①	日国③	日国③	日国③	意味

日 070	日 069	日 068	日 067	日 066	番号
然るに今朝鮮音韻の学を問ふに。此国にはなき所の音でもあるなり。	日 095 凡言詞の間。声音の相成す所にあらずといふものなし。我国古今の言に相通せば。音韻の学によらずして。また他に求むべしとも思はれず。	我東方の如きは。其尚ふ所言詞の間にありて。文字音韻等の学は。相尚べる所にもあらず。日 094	中土の如きは。其尚ふところ文字にありて。音韻の学の如きは。西方の長じぬるに及ばず。日 093	西方諸国の如きは。方俗音韻の学を尚びて。其文字の如きは尚ふ所にはあらず。僅に三十余字を結びて。天下の音を尽しぬれば。其声音もまた猶多からざる事を得べからず。日 092	本文 番号
東雅・一総 論	東雅・一総 論	東雅・一総 論	東雅・一総 論	東雅・一総 論	著作名
新井白石・一七一一	新井白石・一七一一	新井白石・一七一一	新井白石・一七一一	新井白石・一七一一	著者・年
東雅・一（吉川半七 1903） 6）国会	東雅・一（吉川半七 1903） 5）国会	東雅・一（吉川半七 1903） 5）国会	東雅・一（吉川半七 1903） 5）国会	東雅・一（吉川半七 1903） 5）国会	出典
日国②	日国②	日国②	日国②	日国②	意味

日 075	日 074	日 073	日 072	日 071	番号
夫人言有自然之音韻焉古人任其自然罕有訛舛蓋夷蛮戎狄言語各殊待訳而通中国則受先王同律同文之治	美音遇和蘭人獲觀其国字因以其字写東方音韻因第一行喉音五字止是一音一字其他字並皆二合三合必取喉音之字以合其体即是方密之所謂外国喉音特多者耳因知五音皆統于宮亦見此図之妙	一 東方音韻五十母字蓋本于悉曇金剛文殊問而有数字重出者猶華嚴字母両阿蔵因今從旧図	能ク有 <sup>レ</sup> 信 <sup>ニ</sup> 受スルコト之ヲ一者ノハ <sup>レ</sup> 設 <sup>キ</sup> 童蒙頑愚 <sup>ナリト</sup> ニ使 <sup>シ</sup> 音韻ノ妙ヲシテ <sup>一</sup> レ獲易キコトヲ <sup>一</sup> レ解 <sup>ス</sup> 焉	学者欲セハ <sup>ニ</sup> 必ス通セント <sup>一</sup> 音韻ノ妙ニ <sup>一</sup> 応 <sup>ニ</sup> 須ク <sup>レ</sup> 以テス <sup>ニ</sup> 於此 <sup>ノ</sup> 書ヨリ <sup>一</sup>	本文 番号
序 上 太宰純	例 東音譜・凡	例 東音譜・凡	解 <sup>ノ</sup> 起 新増韻鏡易解大全・卷一 韻鏡易	解 <sup>ノ</sup> 起 新増韻鏡易解大全・卷一 韻鏡易	著作名
文雄・一七四四刊	新井白石・一七一九序	新井白石・一七一九序	盛典・一七二八	盛典・一七二八	著者・年
磨光韻鏡・上太宰純序（八幡屋四郎兵衛 1744） 1）早大	新井白石全集 4（吉川半七 1907・397）	新井白石全集 4（吉川半七 1907・397）	新増韻鏡易解大全・卷1（揚文軒 1718・5） 1）早大	新増韻鏡易解大全・卷1（揚文軒 1718・5） 1）早大	出典
日国②	日国②	日国②	日国③	日国③	意味

日 080	日 079	日 078	日 077	日 076	番号
予蒙古字ヲ以テ元明ノ間ノ音韻ヲ考索スルニ、和字全ク「ヲホ」ノ音ナリ。最モ「 <sup>ヲホ</sup> 」ノ合音ニ協ヘリ。是明人ノ書ナレバ、「ヲホランド」ト証スベキ事ナリ。	訳家トイヘドモ間々音韻ノ通ジ難キ事アリ。ソレニ就テハ「ホルコ」ノ話アリ。又言義ノ多キニツキテハ「ヲーテルホット」ノ話アリ。	俗称ニ謂ス唐音ト「其音也呼法嚴如トシテ七音四声輕重清濁開口合口齊齒撮口等ノ之条理分明ナリ也正スニ之ヲ音鏡ニ」則如シ合スルカ「符節ヲ」故ニ学フ「音韻」者必不 <sup>レ</sup> 可カラ <sup>レ</sup> 不 <sup>レ</sup> 由 <sup>ラ</sup> ニ華音ニ学フ「華音」者必不 <sup>レ</sup> 可カラ <sup>レ</sup> 不 <sup>レ</sup> 由 <sup>ラ</sup> ニ音鏡ニ	韻鏡ハ者音韻ノ之譜ナリ也夫 <sup>レ</sup> 音韻ノ之有 <sup>ル</sup> ヤ譜也猶 <sup>ニ</sup> 三方円ノ之有 <sup>ル</sup> カニ規矩 <sup>一</sup> 有 <sup>テ</sup> 規矩 <sup>一</sup> 而シテ后ニ方円正シ有 <sup>テ</sup> 譜而シテ后ニ音韻調 <sup>ヲ</sup>	而其言自然正所以古人未有精覈音韻者也	本文
蘭語隨筆	蘭語隨筆	下 磨光韻鏡・ 隠 韻鏡索	上 磨光韻鏡・ 隠 韻鏡索	序 上 磨光韻鏡・ 太 宰 純	著作名
前野良沢・ 一七七〇頃	前野良沢・ 一七七〇頃	文雄・ 一七四四刊	文雄・ 一七四四刊	文雄・ 一七四四刊	著者・年
東洋文庫 612・前野蘭化 3 著訳篇(岩崎克己平 凡社 1997・18) ジャ	東洋文庫 612・前野蘭化 3 著訳篇(岩崎克己平 凡社 1997・10) ジャ	磨光韻鏡・下 韻鏡索隠 (八 幡屋 四郎兵衛 1744・ 6) 早大	磨光韻鏡・上 韻鏡索隠 (八 幡屋 四郎兵衛 1744・ 1) 早大	磨光韻鏡・上 太宰純序 (八 幡屋 四郎兵衛 1744・ 1) 早大	出典
日国②	日国②	日国③	日国③	日国②	意味

日 085	日 084	日 083	日 082	日 081	番号
音韻トハ人ノ音声ナレハ其口ヨリ出テ耳ニ聞クヘキ者ニシテ形ナケレハ図画ニモ写スヘキヤウナキヲ四声七音ヲ経緯ニシ二百六韻ヲ収メテ漏ルコトナク音ノ是非ヲ知ラシメタルハ	故ニ此書ヲ作リテ同類ノ音韻ヲ経緯シ四四十六音同類ニ照シ正セハ直ニ是正是俗ナルコトヲ辨ヘ知ル師授ヲ冀サレトモ書ヲ読ムニ誤ルコトナシ	韻鏡ノ書ハ本反切ノ図ニハ非ス文字ノ音韻ヲ正スノ鏡ナリ夫書ヲ読ム者文字ノ音ヲ知ラサレハ読ムコト能ハス	愚按ルニ、此十九字「ホカーレン [vocalen]」ニ從ハザレバ、音韻ヲ如何トモ発スルコト能ハズ。故ニ此称アルナルベシ。	凡音韻正アリ、転アリ。初学者、專ニ正シキモノ以テスルヲ可ナリトス。	本文
磨光韻鏡後篇・指要録 韻鏡大旨	磨光韻鏡後篇・指要録 韻鏡大旨	磨光韻鏡後篇・指要録 韻鏡大旨	和蘭訳文略	和蘭訳文略	著作名
文雄・ 一七七三刊	文雄・ 一七七三刊	文雄・ 一七七三刊	前野良沢・ 一七七一頃	前野良沢・ 一七七一頃	著者・年
磨光韻鏡後篇・指要録 (山本長兵衛 1773・1) 早大	磨光韻鏡後篇・指要録 (山本長兵衛 1773・1) 早大	磨光韻鏡後篇・指要録 (山本長兵衛 1773・1) 早大	1976・佐藤昌介校注 岩波書店 (86)、同草稿(早大)	1976・上(沼田次郎・松村明・佐藤昌介校注 岩波書店 (86)、同草稿(早大)	出典
日国③	日国③	日国③	日国②	日国②	意味

日 090	日 089	日 088	日 087	日 086	番号
若シ旧慣ノ如クをヲ実行。おヲわ行トスルトキハ悉ク輕重錯乱シテ一字モ音韻ニカナフ者アルコトナシ		又御国ノ音韻ハ甚悉曇ニ似タルコト多シ	江南先生 <sup>コ</sup> 是に所見有 <sup>リ</sup> て、素説には古の呉漢の本音を攷 <sup>カ</sup> へ、四声 <sup>カ</sup> 音韻 <sup>シ</sup> を正して直下に誦読せしめ、今音の訛を反し、続華音の胡説を黜 <sup>シ</sup> け、	古者 <sup>イニシ</sup> 読書の法、初め音声博士に就き、漢音直下に暗誦熟読し、音韻 <sup>イニシ</sup> 四声を詳にす。之を素説と謂ふ。	本文 毛晃力増脩礼部韻ノ切ノ字ノ註ニ云音韻展転シテ相協謂 <sup>テ</sup> 之ヲ反 <sup>シ</sup> 、(一)
属弁 字音仮字用 格・おを所	行弁 字音仮字用 格・喉音三	訓・附言 田中江南・ 一七七四	六朝詩選俗 訓・附言 田中江南・ 一七七四	磨光韻鏡後 篇・伐柯篇 反切総論 文雄・年 一七七三刊	著作名 著者・年 出典
本居宣長・ 一七七六刊	本居宣長・ 一七七六刊	東洋文庫 666 俗訓(都留春雄・釜谷 武志校注平凡社 2000 396) 396 早大	東洋文庫 666 俗訓(都留春雄・釜谷 武志校注平凡社 2000 396) 396 早大	磨光韻鏡後篇・伐柯篇 (山本長兵衛 1773 8ウ) 早大	意味
日国②	日国②	日国②	日国②	日国③	

日 095	日 094	日 093	日 092	日 091	番号
されと凡言詞の間声音の相成す所にあらすといふものなければは我国古今の言に相通せんハ音韻の学によらずしてまた他に求へしともおもはれすといへり <sup>日 069</sup>	我東方の如きハ其尚ふ所言詞の間にありて文字音韻の学ハ尚ふ所にしもあらすされは天地の間本自ら方言あり我東方の声音のすくなき其声音のすくなきにあらず <sup>日 068</sup>	漢土のときハ其尚ふ所文字にありて音韻の学のこときハ西方の長しぬるに及はず <sup>日 067</sup>	○西方諸国のときハ方俗音韻を尚ひて文字のときハ尚ふ所にあらす僅に三十余字をもて天下の事を尽しぬれハ其声音もまた多からざる事を得へからず <sup>日 066</sup>	天平の時に至り右大臣吉備ノ朝臣音韻ノ学に長せし事善相公の封事に見え悉曇の伝ハ釈ノ円仁入唐して南天の宝月三蔵より得たる事三代実録に見えたり	本文 著者・年 出典
和訓栞・卷 之一大綱 谷川士清・ 一七七七刊	和訓栞・卷 之一大綱 谷川士清・ 一七七七刊	和訓栞・卷 之一大綱 谷川士清・ 一七七七刊	和訓栞・卷 之一大綱 谷川士清・ 一七七七刊	和訓栞・卷 之一大綱 谷川士清・ 一七七七刊	著作名 著者・年 出典
和訓栞・卷之二 (須原 屋茂兵衛ほか 1777 3ウ) 早大	和訓栞・卷之二 (須原 屋茂兵衛ほか 1777 3ウ) 早大	和訓栞・卷之二 (須原 屋茂兵衛ほか 1777 3ウ) 早大	和訓栞・卷之二 (須原 屋茂兵衛ほか 1777 3ウ) 早大	和訓栞・卷之二 (須原 屋茂兵衛ほか 1777 3ウ) 早大	意味
日国②	日国②	日国②	日国②	日国③	

日 100	日 099	日 098	日 097	日 096	番号
世ノ韻学者タ、漢字ノ韻書ニノミ執滞セル故ニ天下ノ音韻ノ大体ヲ知ラズ。	凡ソ音韻ヲ学バム者、必悉曇ヲ知ラズバアルベカラズ。	サテ其五十ノ音ハ。縦ニ五ツ横ニ十ツ、相連リテ。各縦横音韻調ヒテ乱ル、コトナク。其音暗朗ナルガ故ニ。イサ、カモ相渉リマギラハシキコトモナク。	其連合シテ音韻ヲナスヲ「シルラーベン」[Silaben]ト云フ其法支那ノ切韻、印度ノ悉曇ノ義ニ大同ク小ク異ナル者ナリ	文ヲ為シ辞ヲ成スニハ上ノ二十六ノ文字ヲ二字或三四字以上ヲ連合シテ音韻ヲ諧ヘ諸々ノ文辞・言語ヲナスナリ	本文
漢字三音考・天竺国ノ韻	漢字三音考・天竺国ノ韻	漢字三音考・皇国ノ正音	蘭学階梯・下巻配韻	蘭学階梯・下巻配韻	著作名
本居宣長・一七八四序 一七八五刊	本居宣長・一七八四序 一七八五刊	本居宣長・一七八四序 一七八五刊	大槻玄沢・一七八三成一七八八刊	大槻玄沢・一七八三成一七八八刊	著者・年
漢字三音考（前川善兵衛1900（ウ）6）国会	漢字三音考（前川善兵衛1900（ウ）6）国会	漢字三音考（前川善兵衛1900（ウ）2）国会	蘭学階梯・下巻（ウ）4	蘭学階梯・下巻（ウ）4	出典
日国②	日国②	日国②	日国②	日国②	意味

日 105	日 104	日 103	日 102	日 101	番号
皆其首ニ字体・音韻ノ浅考ヲ載ス。是ノ編、唯其大略ヲ挙ゲテ、初学ヲシテ、文字・読音ノ由ツテ来ル所ヲ知ラシム。	訳字体音韻予管テ『和蘭訳文略』、同ジク『字学小成』ヲ著ス。	此ノ文字及ビ次紙ニ録ス所ノ者ハ、初学ヲシテ字音ヲ認得セシメンガ為メニコレヲ附ス。宜シク上ノ字体・音韻ヲ検シテ、コレヲ読ムベシ。	字体音韻和蘭ニテ文字ヲ「レッテル」ト云フ。其数ニ十六アリ。総テ名ケテ「アベセ」ト云フ。	因ッテ今和蘭字ニテ和蘭言語ヲ採録シテ本編トシ、国字ニテ彼音韻訳文等ノ解ヲ記シテ未編トス。遂ニ正シク題シテ『和蘭訳筌』ト云フ。	本文
和蘭訳筌・本編訳字体音韻	和蘭訳筌・本編訳字体音韻	和蘭訳筌・本編訳字体音韻	和蘭訳筌・本編訳字体音韻	和蘭訳筌・序	著作名
前野良沢・一七八五	前野良沢・一七八五	前野良沢・一七八五	前野良沢・一七八五	前野良沢・一七八五	著者・年
東洋文庫612・前野蘭化3著訳篇（岩崎克己平凡社1997（131））ジャ	東洋文庫612・前野蘭化3著訳篇（岩崎克己平凡社1997（131））ジャ	東洋文庫612・前野蘭化3著訳篇（岩崎克己平凡社1997（125））ジャ	東洋文庫612・前野蘭化3著訳篇（岩崎克己平凡社1997（120））ジャ	東洋文庫612・前野蘭化3著訳篇（岩崎克己平凡社1997（119））ジャ	出典
日国②	日国②	日国②	日国②	日国②	意味



日 110	日 109	日 107	日 106	日 105	番号
反切ノ法ヲ音韻ノ学ト云。故ニ上古ヨリシテ音ト云ヘバ。唇舌等ノ七音ノ称ヲサシ。韻トイヘバ。東冬江等ノ一百七韻ノ称ヲ差コト也。	日本ナドノ如キハ。音韻ノ差別甚ダ疎ニシテ。廿三音一百七韻ノ精密ノ法ナシ。	「ヘブレエウス」ハ和蘭ノ書ニ出タルヲ略抄シ得タルノミナリ。余ノ六種モ只文字音韻ヲ考察シタルマデニテ、其書ヲ読ム事難シ。	一、「ロシヤ」ノ人、若シ「ヘブレエウス」ノ文字・音韻ヲ知ル事アラバ、コレヲ伝ハラン事ヲ得ベキヤ。因ツテ云フ。素素ヨリ奇字ヲ好ム。	字名ヲ註スルニ、彼音ヲ正シク訳シ難キモノアリ。故ニ旧訳ノ中ヨリ音韻相紛レザル者ト、彼此トニ近ク似タル者トヲ取ツテ、コレヲ用ユ。	本文
韻学筌蹄・音韻ノ意義 近藤篤・一七九四	韻学筌蹄・音韻ノ意義 近藤篤・一七九四	東察加志・請問 前野良沢・一七八九	東察加志・請問 前野良沢・一七八九	和蘭訳筌・本編訳字 前野良沢・一七八五	著作名
韻学筌蹄・音韻ノ意義 （雁屋久兵衛 <sup>1794</sup> ）国文（静岡県立中央図書館蔵本）	韻学筌蹄・音韻ノ意義 （雁屋久兵衛 <sup>1794</sup> ）国文（静岡県立中央図書館蔵本）	東洋文庫 <sup>612</sup> ・前野蘭化 <sup>3</sup> 著訳篇（岩崎克己平 <sup>1997</sup> ） <sup>219</sup> ）ジャ	東洋文庫 <sup>612</sup> ・前野蘭化 <sup>3</sup> 著訳篇（岩崎克己平 <sup>1997</sup> ） <sup>218</sup> ）ジャ	東洋文庫 <sup>612</sup> ・前野蘭化 <sup>3</sup> 著訳篇（岩崎克己平 <sup>1997</sup> ） <sup>132</sup> ）ジャ	著者・年
韻学筌蹄・音韻ノ意義 （雁屋久兵衛 <sup>1794</sup> ）国文（静岡県立中央図書館蔵本）	韻学筌蹄・音韻ノ意義 （雁屋久兵衛 <sup>1794</sup> ）国文（静岡県立中央図書館蔵本）	東洋文庫 <sup>612</sup> ・前野蘭化 <sup>3</sup> 著訳篇（岩崎克己平 <sup>1997</sup> ） <sup>219</sup> ）ジャ	東洋文庫 <sup>612</sup> ・前野蘭化 <sup>3</sup> 著訳篇（岩崎克己平 <sup>1997</sup> ） <sup>218</sup> ）ジャ	東洋文庫 <sup>612</sup> ・前野蘭化 <sup>3</sup> 著訳篇（岩崎克己平 <sup>1997</sup> ） <sup>132</sup> ）ジャ	出典
日国③	日国③	日国②	日国②	日国②	意味

日 115	日 114	日 113	日 112	日 111	番号
初ノ論トハ「三國音韻ノ之学」者、梵ニ言撰括必駄ト、	將 <sup>レ</sup> 講 <sup>ニ</sup> 磨光韻鏡 <sup>一</sup> 、先論 <sup>ニ</sup> 玄意 <sup>一</sup> 、次 <sup>ニ</sup> 解 <sup>レ</sup> 文 <sup>一</sup> 、論 <sup>ス</sup> 玄意 <sup>一</sup> 、略 <sup>シテ</sup> 為 <sup>ニ</sup> 三 <sup>一</sup> 、一 <sup>ニ</sup> 論 <sup>シ</sup> 梵漢和ノ音韻ノ之学 <sup>一</sup> 、二 <sup>ニ</sup> 辨 <sup>シ</sup> 韻鏡ノ流行 <sup>一</sup> 、三 <sup>ニ</sup> 示 <sup>ス</sup> 韻鏡ノ註疏 <sup>一</sup> 、	天明八年秋のころ。肥前ノ国の長崎に物して。於蘭陀人のまうで来てあるに逢て。音韻の事どもを論じ。皇国の五十音の事をかたりて。そを其人となへさせて聞しに。	既に云。一字をだに画ぬ奴僕等が口にも。かよふべきハ。習はずしてかよふこそ。自然の音韻なれ。	殊に音韻言語ハ。太古より毎国にとなへ来たりし者なるを。我國にハ。西土の字を仮て。音を習ふにハ。一旦彼土の音声に転るが如くすれど。	本文
磨光韻鏡余論・上	磨光韻鏡余論・上	玉勝間・二五十連音をもらんだびとに唱へさせたる事	靈語通・第五仮字篇	靈語通・第五仮字篇	著作名
文雄・一八〇五	文雄・一八〇五	本居宣長・一七九九	上田秋成・一七九五序	上田秋成・一七九五序	著者・年
磨光韻鏡余論・上（積玉圃文栄堂 <sup>1</sup> ）国会	磨光韻鏡余論・上（積玉圃文栄堂 <sup>1</sup> ）国会	玉勝間・二五十連音をもらんだびとに唱へさせたる事（林伊兵衛 <sup>1799</sup> ） <sup>42</sup> ）国文	靈語通・第五仮字篇（ <sup>1795</sup> ） <sup>15</sup> ）国文（東京教育大学附属図書館蔵本）	靈語通・第五仮字篇（ <sup>1795</sup> ） <sup>6</sup> ）国文（東京教育大学附属図書館蔵本）	出典
日国②	日国②	日国②	日国②	日国②	意味

日 120	日 119	日 118	日 117	日 116	番号
サレトモ音韻ノ学ハ蒙土曉リ難キヲ苦ミテ困ミ学フモノ鮮シ		音韻ノ原ヲ知ルハ韻鏡ニ如クモノナシ	字音ヲ善知ントスルハ工ノ必先ソノ器ヲ利スルガ如シ故ニ字音ヲ善知ンコトヲ思ハ、先著韻ノ原アルヲ知ルベシ	昔者墳索之入我也音韻俱矣與音先伝漢音後來皆所口授於彼也仮彼字音享此方言不取義訓而依音声稱為仮字仮權也字名也於是時也声韻無訛邦語雅馴	唐ハ訳スニ声明ト「天竺音韻ノ之学ノ名也、
漢呉音図・下漢呉音図説	漢呉音図・下漢呉音図説	漢呉音図・下漢呉音図説	漢呉音図・上序	磨光韻鏡余論・上	本文
太田全斎・一八一五	太田全斎・一八一五	太田全斎・一八一五	太田全斎・一八一五	文雄・一八〇五	著者・年
漢呉音図・下漢呉音図説(1815.1オ)早大	漢呉音図・下漢呉音図説(1815.1オ)早大	漢呉音図・下漢呉音図説(1815.1オ)早大	漢呉音図・上序(1815.1オ)早大	磨光韻鏡余論・上(積玉圃文榮堂1オ)国会	出典
日国③	日国③	日国③	日国③	日国②	意味

日 125	日 124	日 123	日 122	日 121	番号
文政号、雖有文化寛政之佳例、窃案ル、与ニ文正音韻全同、且如ニ文正天変之事、最不可然。於レ被「挙用」者可レ在如何「候波牟」と。	『詩』に若ク天若レ帝と云へるも、天と帝と稀と音近き故に、敢て同言と為るものなり。後世の如く少々の音韻呼法を以て区別することには非りしと見ゆ。	俗間の謡に、こんなえにしが唐にもあるかと唄ふ。エニシとは、何かに書くや。抑何にレとぞと云たれば、流石音韻の学に通ぜし男にて、即云ふ。	明亡テ航シ海ニ。寓ルコト長崎ニ二十有余年。僕之親炙也久。而其語言音韻。則不レ期而頗ル解ス焉。至レ今ニ皓首猶操ニ南音ヲ。	音韻ノコト、古来云フ者、多シト雖モ、皆「方ノ私言ニシテ、世界同一ノ公論ニ非ズ、夫活物ニ、音声アルコト、何レノ国ニテモ、同一ノコトニシテ、	本文
甲子夜話続五篇・卷五十五	甲子夜話・卷七十六	甲子夜話・卷五十六	先哲叢談・卷之五高玄岱	音韻啓蒙・総論	著作名
松浦静山・一八二二(一八四一)	松浦静山・一八二二(一八四一)	松浦静山・一八二二(一八四一)	原念斎・一八一六刊	鳥海松亭・一八一六刊	著者・年
東洋文庫381・甲子夜話続篇五(中村幸彦・中野三敏校訂平凡社1980.40)ジャ	東洋文庫338・甲子夜話五(中村幸彦・中野三敏校訂平凡社1978.258)ジャ	東洋文庫333・甲子夜話四(中村幸彦・中野三敏校訂平凡社1978.121)ジャ	先哲叢談・卷之五高玄岱(原念斎・東条琴台松田幸助等1816.1ウ)国会	音韻啓蒙・総論(鳳翔館1816.1ウ)グー	出典
日国②	日国③	日国③	日国②	日国②	意味

日 130	日 129	日 128	日 127	日 126	番号
上州屋隠居（宇兵衛）・豆腐屋甚助、執事たり。宴半にて辞し還る。甚助送り来る。この日、師門の書、説文段注・六書音韻表・爾雅正義および校勘記を返す。	天平中、公学生四百人をして五經・三史・明法・算術・音韻・繪象等の六道をみずから伝授し、大学積奠の儀、その備わらざる所を稽え、器物の足らざるを補い、 日 014 日 016 日 061 日 062	六日 旦涼、午熱。陰山子と香林院に詣でて香を上る。山梨玄度の小祥の故なり。遂に玄度の主を携えて渋谷の大型寺に入つて会集し、玄度の主前に就いて六書音韻表を読む。	十四日宿醒。午後、陰山生と六書音韻表を読む。石斎来つて釈名を携え去る。	十一日 黙斎は早に去る。午、陰山生来り、ともに段氏の六書音韻表一卷を読む。精斎また来宿し、箱根温泉に浴せんことを議す。	本文
天保六年六月二十八日	天保六年六月二十八日	文政十年七月	文政十年閏六月	文政十年閏六月	著作名
松崎 謙堂・一八二六	林元美・一八二八稿	松崎 謙堂・一八二六	松崎 謙堂・一八二六	松崎 謙堂・一八二六	著者・年
東洋文庫 213・謙堂日曆四（山田琢訳注 平凡社 1978） 185）ジャ	東洋文庫 332・爛柯堂棋話一 昔の碁打ちの物語（山田琢訳注 平凡社 1978） 14）ジャ	東洋文庫 213・謙堂日曆二（山田琢訳注 平凡社 1972） 103）ジャ	東洋文庫 213・謙堂日曆二（山田琢訳注 平凡社 1972） 99）ジャ	東洋文庫 213・謙堂日曆二（山田琢訳注 平凡社 1972） 98）ジャ	出典
書名	日国③	書名	書名	書名	意味

日 135	日 134	日 133	日 132	日 131	番号
既に僧文雄が、韻鏡余論と標せる書にも、中世古備公、制ス、和字五十文図一、云ク音韻経緯繁カル、焉ニ、	十七日 晴 諸子と音韻之事を論ず。午後より雨。紙帳之損じたる補ひ、風を入るる為に羅を貼る。	天皇祖大神たちの。天津神語をし、弥継々に。云ヒ継ぎ語り継ひし故に。宇都志世人の。音韻言語の道。また曼に万ノ図に優りて。	之れを金石に施せば、則ち音韻は和諧し、之れを規矩に措ふれば、則ち器用は宜しきに合ふ。一本差はずして、万物は皆な正し。 中 035	「語学語書、聞く、其の先生去年上方より来ると、未だ其の人の何如を詳にせず」と。客曰はく、「宜なるかな、其の音韻に 審かなること。上方役者は 率是れなり」と。	本文
例 音韻考証・音韻考証凡	記 柴田収蔵日・嘉永三年 庚戌日 六月	叙 古史本辞・一 発題 叙言第一	本 朝度量權衡 卷上之 田父玉尺	記 三篇書 舖	著作名
撰・一八六二	黒川 春村	平田篤胤・一八三九成 一八五〇刊	狩谷 穉斎・江戸後期	寺門 静軒・一八三四	著者・年
大 例（白井寛蔭写、3）駒	202）ジャ	古史本辞経・一 発題 叙言第一（伊吹 廼屋 1850） 3） 国文（弘前市立図書館蔵蔵本）	東洋文庫 537・本朝度量權衡 卷一（富谷至校注 平凡社 1991） 204）ジャ	東洋文庫 276・江戸繁昌記二（朝倉治彦・安藤 菊二校注 平凡社 1975） 223）ジャ	出典
日国③	日国②	日国②	日国①	日国②	意味

日 140	日 139	日 138	日 137	日 136	番号
<p>恢弘道芸親自伝授、乃令<sub>下</sub>学生四百人各徒<sub>二</sub>科業<sub>一</sub>、習<sub>中</sub>五経三史明法算術音韻<sub>上</sub>、楷篆等之道<sub>上</sub>、</p>	<p>音韻の書ハ数部ありといへども、簡便にして可解易きハ、韻鏡にまさるものなし、其韻鏡ハ数版ある中にも、漢吳音図を最上と云べし。</p>	<p>予ハ舍<sub>レ</sub>之ヲ不<sub>レ</sub>取<sub>テ</sub>也、幸<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>三韻鏡ノ行<sub>ル</sub>、<sub>二</sub>于本邦<sub>一</sub>・当<sub>ニ</sub>学<sub>テ</sub>之ヲ正<sub>シ</sub>・<sub>二</sub>音韻ヲ<sub>一</sub>・何<sub>ノ</sub>有<sub>テ</sub>不足<sub>一</sub>・随<sub>ニ</sub>国字<sub>一</sub>反切<sub>ニ</sub>乎・以上と云へるを見るに、</p>	<p>或ハ以<sub>テ</sub>二悉談ノ音韻ヲ<sub>一</sub>・寓<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>縦横講究ス、</p>	<p>反切モ亦从<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>・故本邦学<sub>ニ</sub>二音韻ヲ<sub>一</sub>之徒無<sub>シ</sub>・リキ不<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>之者<sub>一</sub>・</p>	本文
漢学紀源・卷一 古備第十一	音韻考証・皇国积音音韻考証凡	音韻考証・音韻考証凡	音韻考証・音韻考証凡	音韻考証・音韻考証凡	著作名
伊地知季安・江戸後期	黒川春村撰・一八六二	黒川春村撰・一八六二	黒川春村撰・一八六二	黒川春村撰・一八六二	著者・年
続々群書類従・第10(続群書類従完成会 1969 565) ジャ	音韻考証・皇国积音音韻考証凡例(白井寛蔭写、1) 駒大	音韻考証・音韻考証凡例(白井寛蔭写、4) 駒大	音韻考証・音韻考証凡例(白井寛蔭写、3) 駒大	音韻考証・音韻考証凡例(白井寛蔭写、3) 駒大	出典
日国③	日国③	日国③	日国③	日国③	意味

日 141	番号
<p>檀信婦鸞瑞雲湧・竜鉢、参学蔽唱清風起・鳥勝一、布穀当軒者裡絶<sub>二</sub>音韻<sub>一</sub>、銀槐盛雪何処惹<sub>二</sub>塵埃<sub>一</sub></p>	本文
香宗我部氏記録・宝鏡寺追遠記	著作名
江戸時代	著者・年
続々群書類従・第4(続群書類従完成会 1970 264) ジャ	出典
日国①	意味

番号	朝 001	朝 002	朝 003	朝 004	朝 005
本文	此書ハ同省にて英人チャンブレン氏に囑して著さしむる所にして理法を歐洲に資り以て日本語の性質を明にし其言語の種類を分ち及文章法音韻論を示し卷中多く表を挿みて学者の捷覽に備へたり	国語調査委員会ハ本年四月より同六月に涉りて九回委員会を開き調査方針に付き左の如く決定せり「文字ハ音韻文字（フオノグラム）を採用することとし仮字羅馬字等の得失を調査すること 二文章ハ言文一致体を採用することとし是に関する調査を為すこと 三 国語の音韻組織を調査すること 四 方言を調査して標準語を選定すること	国語調査会にては近日中に各府県知事へ向け標準語制定の材料として各地方の音韻並に方言取調の照会を発する由	国語調査委員会は調査資料蒐集の爲め各地方の音韻并に口語法調査方を各府県知事に委嘱したり	一 文字ハ音韻文字（フオノグラム）を採用することとし仮字羅馬字等の得失を調査すること 二 文章ハ言文一致体を採用することとし是に関する調査を為すこと 三 国語の音韻組織を調査すること 四 方言を調査して標準語を選定すること
見出し	日本小文典出版	項 国語調査会決議事	標準語制定材料	国語調査地方囑託	国語問題に就きて（統）国語会に於て伊沢修二氏談 国語問題に就きて（統）国語会に於て伊沢修二氏談 国語問題に就きて（統）国語会に於て伊沢修二氏談
年 月 日	1887/ 6/14	1902/ 7/5	1903/ 08/2	1903/ 9/11	1905/ 5/27
意味	複合	複合	固有	固有	複合

資料三 「音韻」の用例（朝日新聞）

【凡例】

- ・朝日新聞記事データベース（開蔵Ⅱビジュアル）の「朝日新聞縮刷版（一八七九～一九九九）」（見出しとキーワード）検索を利用、および「朝日新聞（一九八五）・週刊朝日・アエラ」（「全文」検索を利用）に現れた「音韻」の用例（二〇一五年以前のものを）を、掲載紙誌ごとに、その記事の掲載紙誌の発行年月日順に、表にして挙げる（頭に「朝」を付けて、通し番号を付す。同一記事中の用例は、同一番号とする）。
- ・表には、用例の現れた「本文」（部分）のほかに、当該記事の「見出し」、掲載紙誌発行の「年月日」、「音韻」の当該例における「意味」を挙げる。
- ・「本文」には、当該語の部分（「音韻」）に網かけを行う。ルビは省略する。
- ・「意味」欄には、「音韻」の当該例における意味を、『日本国語大辞典第二版』（「日国」と略す）の意味区分の番号で示す。同辞典における「音韻」の意味区分・意味記述は、次のとおりである。
- ① 音とひびき。また、その調和。音色（ねいろ）。
- ② （漠然と）言語音をいう。
- ③ 漢字の表わす一音節の頭初の子音とそれを除いた後の部分。音（声母・頭子音）と韻（韻母）。
- ④ 言語学で、具体的な音声から音韻論的な考察を経て抽象された言語音をいう。

ただし、固有名詞と複合語については、意味区分の番号を挙げず、それぞれ、「固有」、「複合」とだけ示す。

・漢字の字体は、現代日本語の通用字体を用いる。「音韻」・「音韻」の表記は、元のままにする。

朝 007		朝 006		朝 005		番号
いくらが発音的に写すといふても音韻学者が単純に考へるやうに、歴史文学のある国語を容易に改めることは出来ぬ。		その浅薄な音韻常識でやつて見ても、従来の字音仮名遣は我が新領地又は隣邦に現在行はれ居る発音に密接の関係がある。		私は素より浅学であるが聊か音韻の事は研究して居ります、		本文
これは彼の三文の価値もない音韻調査報告書などとは違ひ学術界を裨補すること偉なるものであらう。		明治三十五年の六月二十七日に『文字は音韻文字（フォノグラム）を採用すること』と決議して居るではないか。		支那、朝鮮、台湾の語も音韻学者の取調べて居る位のこととは私も取調べて居るが、		見出し
これは彼の三文の価値もない音韻調査報告書などとは違ひ学術界を裨補すること偉なるものであらう。		その浅薄な音韻常識でやつて見ても、従来の字音仮名遣は我が新領地又は隣邦に現在行はれ居る発音に密接の関係がある。		私は素より浅学であるが聊か音韻の事は研究して居ります、		年月日
いくらが発音的に写すといふても音韻学者が単純に考へるやうに、歴史文学のある国語を容易に改めることは出来ぬ。		その浅薄な音韻常識でやつて見ても、従来の字音仮名遣は我が新領地又は隣邦に現在行はれ居る発音に密接の関係がある。		私は素より浅学であるが聊か音韻の事は研究して居ります、		意味

朝 012	朝 011	朝 010	朝 009	朝 008	番号
著者は韻鏡音韻の法則を研究し韻鏡の真価を発揮し	韻鏡音韻考（大島正健）	千葉県にては果下各地に於ける音韻並に口語に就き調査する所ありしに下総と上総安房とは勿論外洋に瀕したる地方と内湾に面したる地方における差異甚だしく之を統一せんとするが如きは容易の業にあらざるべしと 今日迄に写し終りたるは礼部志稿二百巻、滋溪文稿三十巻、宣徳鼎彝譜八巻、梅花道人遺墨三巻、中原音韵十巻にして	音韻口語の調査	来る一月總會を開き總裁以下の役員を定め日、清、韓三国に渉り大いに會員を募集し政治經濟教育軍事実業等に現在必要なる漢字を選び日、清、韓、英共通の音韻字典を作り漢字の統一普及を謀ると云ふ 音韻学の原理（？）を按ずるに音の少き者を頭にして其多きものを後にするは句調を整ふる所以の道たり、	本文
新刊雑書	新刊雑書	音韻口語の調査	音韻口語の調査	漢字統一会	見出し
1912/ 8/17	1912/ 8/17	1912/ 5/14	1910/ 7/16	1910/ 7/16	年月日
日国③	固有	固有	固有	複合	意味
				桐生足利記 楚人冠はしがき	
				桐生足利記 楚人冠はしがき	
				1909/ 11/11	
				1909/ 11/11	
				1906/ 12/26	
				複合	
				複合	
				複合	

朝 016	朝 015	朝 014	朝 013	朝 012	番号
<p>項</p> <p>本書は漢字創造制字起原形成法乃至字体の沿革等より音韻に関する一切の事</p> <p>佐藤仁之助著 漢字音韻提要</p>	<p>然らば日本語はどこから来たか、其処に大島先生の如き音韻的研究も星氏の如き比較研究も出てくる。</p> <p>先生は同時に支那音韻字の研究をされてゐて其の方面の著も四五ある。</p>	<p>一人は大島正健先生（内村鑑三先生及新渡戸博士等の先輩）で、其の著「国語の組織」はよい本であつて、語源の説明を根本的に音韻字の原理からわり出してゐる。</p> <p>言語部にも、皆さう出てゐる。</p>	<p>今国語改良案の分掌規程なるものを一読するに、標準語の制定、方言の研究、語原、外来語調査、文体統一、文法の整理、文字の整理改善、音韻組織の調査等、中には国語調査会に於て未だ研究の歩を進めざりし問題を</p> <p>琉球は別に蛇をミミといつたと、明朝に出来た華夷訳語のうちの琉球語辞書にも、同代の音韻自海といふ琉球辞典にも、又清朝では名高い中山伝信録の言語部にも、皆さう出てゐる。</p>	<p>新しき意義に於て韻鏡を支那音韻字の宝典となさむとせり</p> <p>本文</p>	
<p>「広告」明善社</p>	<p>「広告」明善社</p>	<p>蛇の語原（上）▽ 南北に系統を引く 日本語 新村出 鉄帯国語の問題</p>	<p>国語改良案</p>	<p>新刊雑書</p> <p>見出し</p>	
<p>1924/10/8</p> <p>日国③</p>	<p>1924/10/8</p> <p>固有</p> <p>1917/5/6</p> <p>日国④</p>	<p>1917/5/6</p> <p>複合</p> <p>1917/5/6</p> <p>複合</p> <p>固有</p>	<p>1915/2/1</p> <p>複合</p>	<p>1912/8/17</p> <p>複合</p>	<p>年月日</p> <p>意味</p>

朝 018	朝 017	朝 016	番号
<p>脱落の例として挙げたものの中には、語構成上当然のことに属し、音韻の変化とは思はれぬものがあるのは著者がその主張に反して「語形を取扱ふ上において歴史的観念」を閑却したためではなからうか。</p> <p>主査委員会における神保教授と佐伯教授との論争のごときは、特にヘボン式側が表音主義、点張りの旧い音声学を支持するに對して、日本式側は新しい音韻学的研究をもつて、ヘボン式の不合理性を明かにした</p>	<p>著者がもととも力を注いだと思はれるのは第三章の「音韻変化」で、従来音便といふばかりたる概念語を以て表示せられたものを、脱落、同化、異化（不同化）相通等に分類し、声学上から科学的に詳説し、広く例証を求め、殊に著者の創定した音韻相通の三十六則は、今の所では唯一の標準たり得べきものである。</p>	<p>及音韻研究の標準なる韻鏡諸則其他字書等に就いても最も要用ありと思ふ限りを簡明に叙述したるものなり。</p> <p>本書ページ 国語音韻論 金田一氏の快著 くだけた態度に先づ喜ぶ 松岡靜雄</p>	<p>本文</p>
<p>時的话题ローマ字論争 日本式に軍配する</p>	<p>読書ページ 国語の快著 松岡靜雄</p> <p>音韻論 金田一氏</p>	<p>読書ページ 国語の快著 松岡靜雄</p> <p>音韻論 金田一氏</p>	<p>見出し</p> <p>「広告」明善社</p>
1934/7/15	1932/5/13	1932/5/13	年月日
複合	日国④	複合	意味

朝 022	朝 021	朝 020	朝 019	番号
支那語音韻学の權威たる京都帝大教授倉石武四郎博士（四三）は生きた支那語学習のため我国最初の支那式音標符号『注音符号』応用の新教科書全五巻を完成、	音韻構造の大勢が唇音の減退と口蓋化の優勢にある事を発見した。 菊沢季生	筆者も、国語音韻の歴史を調査した上、 東京では来る一二日午後一時から麹町三年町の霞山会館で中国音韻系統、中国語の特性、中国語文演変の趨勢等につき講演することになつてゐる スエーデンの音韻学者カールグレン氏の著書「中国語と中国文」の翻訳も完成してゐる 同氏は中国中央研究院語言研究所の趙之（二）任氏とならび称せられ本年三十三歳その著書としては語言学原理、語言学概論、音韻学、中国古音学其他数十あり 支那の言語学第一 人者来朝	上海真茹の国立暨南大学教授で言語学音韻学者として民国当代の第一人者である張世禄氏は支那語学会の招聘で十六日來朝した。 支那の言語学第一 人者来朝 支那の言語学第一 人者来朝 支那の言語学第一 人者来朝 支那の言語学第一 人者来朝	本文 「広告」日本ローマ字社 見出し 年月日 意味
1936/6/30 夕	1936/4/28	1935/6/18 夕	1935/6/18 夕	1935/1/18
複合	複合	複合	複合	固有

朝 028	朝 027	朝 026	朝 025	朝 024	朝 023	朝 022	番号
古代国語の音韻に就いて (橋本進吉明世堂)	古代国語の音韻に就いて 橋本進吉	支那の音韻学を研究するものも、わが国の古典を研究するものも、将来にわたつて長くその恩沢を蒙るに相違ない。	有坂秀世著 音韻論	子供はこのやうな象徴教育によつて発音訓練をし、音声言語の基礎を与へられる許りでなく、ある音韻が日本語でいかなる感情価値をもつかを有意味の単語を通してでは知り得ない程的確に知り、	されば点字そのものは万国共通であるけれども、これを使用する場合には国々の文字組織または音韻組織に合致せしめなければならない。	同博士は大正十年東大卒業後文部省留学生として渡支、支那文学及び音韻学を研究し  今春『支那音韻学』の論文で文学博士となつた斯界の権威者	本文
文協の推薦図書 (下)	「広告」明世堂	飯田利行著『日本に残存せる支那古韻の研究』倉石武四郎	「広告」三省堂	面白味、誘発性「ヨミカタ」批判(中) 波多野完治判	国語問題の検討諸問題を解決日本点字より見たる仮名大原京彦	生きた支那語の教科書実を結んだ倉石博士の研究生きた支那語の教科書実を結んだ倉石博士の研究	見出し
1942/8/12	1942/7/25	1941/9/22	1941/7/6	1941/3/12	1941/1/22	1936/6/30 夕	年月日
固有	固有	複合	固有	日国④	複合	複合	意味



番号	朝 029	朝 030	朝 031	朝 032	朝 033	朝 034
見出し	（教養）「古代国語の音韻に就いて」（橋本進吉述）	古代国語の音韻に就いて 橋本進吉	英語音韻論 上坂泰次著	東大教授橋本進吉 古代国語の音韻に就いて	橋本進吉 古代国語の音韻に就いて	一冊の本（212） 橋本進吉 「古代国語の音韻について」 岩淵悦太郎
文部省推薦図書	「広告」 明世堂	「広告」 明世堂	「広告」 三省堂	「広告」 明世堂	「広告」 明世堂	一冊の本（212） 岩淵悦太郎
年月日	1942/10/17	1942/10/22	1942/12/22	1943/2/25	1943/7/30	1965/4/25
意味	固有	固有	固有	固有	固有	固有
	複合	複合	複合	複合	複合	複合
	日国④	日国④	日国④	日国④	日国④	日国④

朝 036	朝 035	朝 034					番号	
音韻法則の検証は厳密に『日本語の成立』の書評に反論する大野晋	金田一春彦氏の『日本語音韻の研究』は、専門家ばかりでなく初学者にとつても有益な本だと思う。	えつらん室 金田一春彦著『日本語音韻の研究』	そして翌十七年に、売品として明世堂書店から発行された。(橋本進吉博士著作集『国語音韻の研究』にも収めてある)	一書にまとめられたのが『古代国語の音韻について』である。	このような古代の音韻に関する研究を	室町から現代へと、音韻がどのように変化したかを明らかにしたものである。	それから奈良時代の音韻の状態を記述した上で、奈良から室町へ、	本文
論成厳音四一えつらん室金田 す密韻春つら金田 る法則の著るる金田 大に法研究の服部 野書評に語証反の	見出し	岩の音進吉の本(212) 悦韻太(古) 郎について	岩の音進吉の本(212) 悦韻太(古) 郎について	岩の音進吉の本(212) 悦韻太(古) 郎について	岩の音進吉の本(212) 悦韻太(古) 郎について	岩の音進吉の本(212) 悦韻太(古) 郎について	岩の音進吉の本(212) 悦韻太(古) 郎について	見出し
1980/11/17	1967/6/6	1967/6/6	1965/4/25	1965/4/25	1965/4/25	1965/4/25	1965/4/25	年月日
複合	固有	固有	固有	固有	日国④	日国④	日国④	意味

[illegible]

朝 048	朝 047	朝 046	朝 045				朝 044	番号
物語「平安時代の音韻」。	講座は18日と3月18日の2回に分け、立川市の中央公民館で開かれた「源氏物語」	文法・音韻・語彙などの研究にも大きな価値をもつものという。	このシステムに、米国などで試作されている、単語を読んで、音韻記号列に直すシステムを組み合わせれば、書かれた文章を朗読できるようになる。	実験では、「朝早くバンガローに電報が届いた」という、読み上げ時間約4秒の文章を0.01秒ごとに区切り、それぞれに1つの音韻記号を割り当てた。	最初の層に、文章の音韻記号が打ち込まれると、最後の層から、呼吸の強さ、声帯の振動、声道の広さなど声の特徴を表す13の項目が「答え」として打ち出される。	開発されたのは、ローマ字表記に似た音韻記号の配列を読み上げるシステム。	アルファベットに準拠するケンセン文字と発音記号に始まる第1課から、第162課ケンセン語訳聖書まで、入念に考証、立論、記述してある。むろん、シとス、チとツ、ジ・ズ・ヂ・ツの区別のない独自の音韻の説明もいてねい。	本文
源氏物語題材に講座主婦らの劇団「多摩市座主婦らの劇団」	言語	見	テム開発	朗読上手の電算機人間の声手本に学ぶ富士通がシス	朗読上手の電算機人間の声手本に学ぶ富士通がシス	人間の手電算機人間の声手本に学ぶ富士通がシス	山浦地名研究さん大会で風土研究賞を受賞	見出し
1989/2/17	1988/7/13	1988/6/6	1988/4/24	1988/4/24	1988/4/24	1988/4/24	1987/5/3	年月日
固有	複合	日国④	複合	複合	複合	複合	日国④	意味

朝 054	朝 053	朝 052	朝 051	朝 050	朝 049	朝 048	番号
故郷の言葉の持つ美しい音韻と音調は、日本語の文字体系では表記できないと、ローマ字に似たケセン文字を自らあみだし、464ページにわたって独創的といえるケセン語文法の体系を解説。	日本にはすぐれた国語、国字、音韻学者がいっぱいいる。	中国文献学の代表的な学者で、中国の小説の変遷を究明し、中国語の音韻、文法に鋭い考察を加えた。	語彙、音韻体系、文法とあわせ、日本語と同系の条件をすべて満たす他の言語はこれまでのところ、特定されていない。	中世韓国語の根幹は新羅語と考えられるにしても、音韻体系はかなり違っていたともみられる（李基文『韓国語の形成』）。	かなり違う音韻体系	訓令式、日本式は1音素1文字を保持している。日本語の音韻構成に、よりふさわしいローマ字だ。	源氏物語の朗読で知られる女優関弘子さんが「桐壺」「若紫」「須磨」の3帖を解説も交えて古代音韻で朗読する。
							本文
							見出し
山浦玄嗣さんケセン語学者（現代人物誌）							年月日
1990/10/29	1990/3/6	1989/12/13	1989/10/2	1989/9/26	1989/9/26	1989/6/1	意味
日国④	複合	日国④	複合	複合	複合	複合	

朝 062	朝 061	朝 060	朝 059	朝 058	朝 057	朝 056	朝 055	番号
<p>それに對し、シラノの雄弁は、まさにフランスの美德だ。しかも詩の音韻を踏みつつ剣を振るい、相手をやり込める。</p> <p>本文</p> <p>見出し</p>								
それだけの言語は独自の音聲・音韻構造を持つ。	「マザーグース」には、最近では谷川俊太郎さんの名訳がありますが、中には原詩の意味は正確に伝えていても、音韻が変わっているものがある。私なら音の面から、違った訳をするのになあと思つた」のが、翻訳するきっかけ。	岸田武夫氏（きした・たけお）元京都教育大学長、元梅花女子大学長・国語学音韻論）24日夕、肺炎のため、京都市山科区大塚北溝町87の3の自宅で死去、82歳。	が、音韻の変化などの専門的な勉強を重ね、ついにこれは「惚れ者」という愛すべき語源を持つ言葉であることにたどりつく。	音韻・文体・翻訳の工夫など、上演の実際に即した劇作家のシェイクスピア理解。	特徴としては、共通語と方言の両方で引けること、共通語を軸に全国各地の言い方が列挙されていることのほか、現代の発音に基づいた国際音声表記と音韻的カタカナ表記、さらにアクセントを明記したことなどが挙げられる。	インドから2人の音楽家を迎え、北インド古典音楽の「音韻渺々（むいんびょうびょう）」と題した2日連続のコンサートが、横浜市西区北幸1丁目のSTスポットで開かれる。		
1994/4/6	1994/3/12	1994/1/27	1993/9/5	1993/7/18	1992/6/1	1992/3/15	1992/1/28	年月日
複合	日国①	複合	日国④	日国①	固有	日国④	日国①	意味

朝 070	朝 069	朝 068	朝 067	朝 066	朝 065	朝 064	朝 063	番号
日本手話は、独自の音韻構造や文法を持つ言葉なのです。	「ていねいに」の繰り返し、「て」「に」の音韻の重なりは沈痛な内容を盛りあげ、技巧的にもすぐれている。	化粧品会社の「すべすべミルクでメイク落とし」と、「さつぱりジェルでメイク落とし」は似たような音韻であるとし、コピーのなかには五・七・五形式が少なくないという。	曹洞宗全長寺東堂・飯田利行『音韻字の大家で、耶律楚材らの功績を紹介した』	「記紀には大和言葉の原点がある。漢語はなるべく排除しました。とても簡潔で音韻もきれいで、音律もいい。言葉と音楽を一体のものとして楽しんでほしい」	東北方言は構文的にも音韻的にも東京方言と異なるだけで、決して東京方言より劣っているわけではない。	金田一春彦氏らが古代の音韻を再現した源氏物語のレコードを作ったときに読み手をつとめたのがきっかけだ。	専攻は「古代の音韻史」と「国語史」。	本文
ルブリケーションが出版	壇／奈良	2月の奨励賞決	文化賞（短信）	第29回仏教伝道	東北の方言に誇りを 持とう（声）	氏物語全巻CDに源 完成は5年後 優・関弘子さん	生田隆さん 校長 退職し京大の聴講 生に（ひと模様）	見出し
1995/9/7	1995/3/4	1995/1/28	1995/1/24	1994/10/14	1994/7/22	1994/6/17	1994/4/25	年月日
複合	日国①	日国①	複合	日国①	日国④	日国④	複合	意味

朝 078	朝 077	朝 076	朝 075	朝 074	朝 073	朝 072	朝 071	番号
しらは三十一文字の音数律であつたり、音韻律であつたりするだろう。	語いの面で外国語との対照を通じて分析・解明した。	各地点で若年層（十一・二十歳代）、中年層（三十一・四十歳代）、壮年層（五十一・六十歳代）、老年層（七十歳以上）の四世代から一人を選び、表現方法、語い、音韻などに関する約百二十の質問をした。	講演会「中央埋め込み文理解困難さへの名詞反復の影響と格標識における音韻的識別性の役割」	入門書の体裁をとりながら、比喩、詞書き、連作、機会詩と即興詩、序詞や枕詞、音韻といった先端の話題にもふれる「短歌の世界」は、岡井の現在の短歌観がコンパクトにまとめられて興味深かった。	入門書の体裁をとりながら、比喩、詞書き、連作、機会詩と即興詩、序詞や枕詞、音韻といった先端の話題にもふれる「短歌の世界」は、岡井の現在の短歌観がコンパクトにまとめられて興味深かった。	資料編では異体字集、中国・韓国・日本の音韻対照表、ワープロ用漢字が特色だ。	ナンセンスの中に意味があり、意味の中に無意味が潜んでいる。この歌は案外、短歌という詩型のもつ、リズムと音韻と意味との関係の、伝統的な本質を示したといえる	本文
む）佐重郎（短歌を詠	歌のしらべ 前川	／宮崎 60歳超すまで 踊りたいたい文化功	「デスヨ」は「新	やまほこ・やまほこ（こ）ば学入門	岡井隆の読み方	漢字・漢語の百科	現代百人一首岡	見出し
1998/3/8	1997/10/21	1997/5/8	1997/1/11	1996/6/20	1996/2/25	1996/2/11	1996/1/21	年月日
複合	日国④	日国④	固有	日国②	日国①	複合	日国①	意味

朝 086	朝 085	朝 084	朝 083	朝 082	朝 081	朝 080	朝 079	番号
<p>こういう詩を読んでいると、意味よりも言葉のひびきの面白さや日本語の音韻のことに思いが走り、つい谷川俊太郎の詩集「ことばあそびうた」など出してきたりしますが、詩にとって音韻、音楽性はとても重要なこと。</p>	<p>しかし、外国語の侵略と言うよりも日本人が自ら進んで取り入れ、日本語の音韻体系や文構造に合うように形状を変え日本語化しているというのが実情だろう。</p>	<p>頼惟勤氏（らい・つとむ）お茶の水女子大名誉教授・中国音韻学）15 日午後 11 時 10 分、呼吸不全のため千葉県習志野市の病院で死去、77 歳。</p>	<p>バードよりほぼ半世紀古いタヴァナーも、すでに十分に和音が輝かしい音楽だが、テキストの言葉は、見事なばかりに個々の音韻に解体されていて、旋律の多層の織り目模様が美しい音楽だ。</p>	<p>シェークスピアの言葉は、（１）意味（２）イメージ（３）音韻のおもしろさ、という『三位一体』でできています。</p>	<p>中国の短歌が、旧来の定型詩がもつ山水詩、田園詩とは異なり、実情実感に近づくとする。のびやかに人間味を出そうとすることに気づく。音韻などの制約も、いちじるしく緩やかなことが特徴的である。</p>	<p>で、ホグの語源はタミル語のプカルで、音韻変化したフォク↓ホク↓ホグ、それにコトがつく。</p>	<p>三連構成の各行の頭の音韻は、「ナ・ナ・ナ・カ／＼ハ・ハ・ハ／カ・〇・ナ・〇」で、おおむね「ア（a 音）の頭韻を踏み、明るい、さわやかなイメージをつくっています。</p>	<p>本文</p>
<p>／外枝子（小さな目） ／石川</p>	<p>本応言語学会 森</p>	<p>頼惟勤氏死去</p>	<p>美し世界…8 リス・スコラー 生（音楽評） 宮芳</p>	<p>翻訳時代 感覚反映（知 アの世界…8 アの世界…8</p>	<p>翻訳時代 感覚反映（知 アの世界…8 アの世界…8</p>	<p>翻訳時代 感覚反映（知 アの世界…8 アの世界…8</p>	<p>翻訳時代 感覚反映（知 アの世界…8 アの世界…8</p>	<p>見出し</p>
1999/9/30	1999/7/27	1999/7/17	1999/7/5	1999/2/6	1999/1/7	1998/5/18	1998/5/7	年月日
日国①	複合	複合	日国①	日国①	複合	日国①	日国①	意味

朝 093	朝 092	朝 091	朝 090	朝 089	朝 088	朝 087	番号
<p>片桐英彦（福岡市）の『木苺摘み』（海鳥社）は優しい叙情の語りで、現代詩としては平面的で表現の面白さが少ない。淡彩な良さでもあるが、具体と抽象、真と偽の交わる音韻が欲しかった。</p>	<p>五、七、五、七……。重々しく続くリズム。「遠く万葉の時代を思わせる荘重な音韻は、忙しく、乾ききった現代にこそだと思ふのですが」と話す。</p>	<p>「音韻体系と、動詞が最初に来て主語が最後にくる基本的構文が分かりかけてきた。</p>	<p>目や耳など、体の呼び方を身ぶり手ぶりをまじえて聞くことから始め、仮説を立てながら、音韻の組み合わせを探りあてていく。</p>	<p>声明はどうつとりするものではない。とにかく一音をえんえんと長く長くのびして唱歌する。その音韻はただ長いだけでなく、微妙に揺れ動き、円を描き、なめらかに下降し、ゆるゆると昇りつめる。</p>	<p>久野真・高知大教授「琉球方言の音韻・語彙研究に対して」</p>	<p>これらに対し、岡崎正継・国学院大学名誉教授は、動かない力士へ勝負を促す場面により自然で「音韻変化などの点でも無理がないとして、『早競（はやきほ）へ』が変化した」とする説を唱えています。</p>	<p>本文</p>
ト・現代詩【西部】	達也（芸芸リボー）	万葉の長崎市長歌集	消えゆく言語伝	消えゆく言語伝	「大坂章」に残る	「大坂章」に残る	見出し
2000/2/25	2000/1/18	1999/11/30	1999/11/30	1999/10/25	1999/10/7	1999/10/2	年月日
日国①	日国①	複合	日国④	日国④	日国①	複合	意味

朝 101	朝 100	朝 099	朝 098	朝 097	朝 096	朝 095	朝 094	番号
国語審議会の前史となる国語調査委員会は一九〇二年に発足した。基本方針の第一に「音韻文字（フオノグラム）ヲ採用スルコト」とあり、漢字廃止をはっきりと目指していた。	このように、単語の中の二つの音または音のつながりが逆転する現象を「音韻（音位）転倒」あるいは「音韻転換」といいます。	また、「うらんど」と云うすばらしい音韻がこの句の竜頭となつて飾っている。	来日後まもなく日本では初めてとなる満州語口語の文法書の編さんに取りかかり、京都大文学部の木田章義教授（国語音韻学）との共著で来年度中にも刊行予定だ。	入力した声は、有声音部分を「正弦波重畳方式」で分析して歌声に幅をもたせ、無声音部分は「波形重畳方式」を使って音韻をはっきりと表現させた。	王梨の詩には律詩のような厳密な平仄の配列は見られないが、すぐれた詩文を数多く残した王梨は、すでに音韻に注目していたようだ。	日本の国語教育、とくに学校におけるそれは、言葉の「意味」ばかり問題にするから、生徒は飽きる。その終点が入試。作者の試みは逆に、音韻の働きの面白さ、重要性への開眼。	満員の会場の聴衆は、なるほど短歌は耳で聴くものなのだ、と実感しただろう。当日会場にいた私も、目で読むのと違った歌の音韻の力に深く心を動かされた。	本文 見出し 年月日 意味
「汚職」が生まれた（国語審議会物語…1）	屋・共通したづつみ（ことば談話室）／名古屋	歌壇・俳壇・柳壇／宮城	満州語生きているよ京大留学生ら、文法書出版へ【大阪】	音痴でも上手な歌に音声合成の新技術開発	漢字の声調が存在（海外文化）	ロバの鳴き声にも音の調子が存在	ぐんまのどんま：谷川俊太郎（折々のうた）	『安永路子全集』伊藤一彦（文芸リポート・短歌）
2001/2/15	2000/12/23	2000/10/25	2000/10/24	2000/9/20	2000/9/6	2000/4/18	2000/4/8	
複合	複合	日国①	複合	日国②	日国①	日国①	日国①	

朝 108	朝 107	朝 106	朝 105	朝 104	朝 103	朝 102	番号
外国語を学ぶ時、文法などの論理構造はあとで勉強しても身につきますが、言葉のリズムや抑揚といった音韻構造はそうはいかない。	佐賀県と福岡県筑後地方の難読地名を、類似した地名の音韻の比較研究や古代の日本と朝鮮半島との交流史から解明しようとして試みた本。	たとえば、「字音仮字用格」（筑摩書房版『全集』第5巻所収、次の2書も）では、日本語の音韻を研究して五十音図を完成に近づけた。	単語中の連続する音韻の出現回数を調整し、すべての音がなるべく同確率で出てくるように各段階1千語、計4千語を選んだ。	「ことばのしくみ」という点では、日本語の絶対的難易度は、世界の諸言語の中で中位くらいであるとされる。語彙と場面に応じた使い方の面では難しいが、音韻や文法の面では易しい方だからである。	約3000語を取り上げ音韻編、語法編、語彙編、方言地図、共通語・仙台弁対照表など9章に分けて紹介している。	もともと自然発生的に出来上がったわらべ歌であるだけに、このような音韻の法則は、自然の理になつて作られることが多いはずであろう。	本文 見出し 年月日 意味
野「発…14」	福岡情報／福岡	後新功績と批判皇国…2002年「宣長のなぞ」さんさんネット	発音が判断東北大開	聞き取る力を正しどが判断東北大開	史の視点から井上雄著（書評）	歌（山陰のわらべ歌）46／島根	
2002/1/17	2002/1/10	2001/11/5	2001/9/19	2001/9/19	2001/9/16	2001/5/30	2001/5/26
複合	日国④	日国④	日国④	日国④	日国④	複合	日国①

朝 115	朝 114	朝 113	朝 112	朝 111	朝 110	朝 109	番号
幼時から聞き続けた日本の唱歌、戦時歌謡が今も体から離れないことや、日本の音楽にも通じる短歌や俳句も含めた「歌」の叙情、美意識、音韻などの響き性が批評精神を鈍らせると考えてきたからだ。	担当してきた作曲家の間宮芳生が企画した。	桐朋学園大学で日本語の音韻学や音声学、作曲演習などを扱う講座を1年間	しかし問題はクセン語を表す方法である。「し」でも「す」でもない音韻、独特のアクセント表記の研究に、著者は二十五年を費やしたという。	これは言語学における音韻論的実証研究の一環でもあるのだ。	山浦さんはこれまでに独特の音韻を表す「クセン式ローマ字」を考案。	国語調査委員会は1902年、「音韻文字を採用する」という目標を掲げた。漢字を全廃し、仮名やローマ字で表記する。当面は漢字を制限するという方針だ。漢字学習の負担を軽減し、能率をあげる。欧米偏重の「文明開化」の風が、国字に持ち込まれた結果だ。だが満州事変以後、中国の人名・地名を表す必要に迫られ、漢字制限が崩れたのは、歴史の痛烈な皮肉といえる。敗戦後、音韻文字は再び脚光を浴びる。	本文
朗読【名古屋】	「今」歌人、孤高に心開き金氏が楽	「こえ・ことば・世を歌で表現	「言い間違いはどうして起こる？」（フツク）	『言い間違いはどうして起こる？』（フツク）	ケセン語訳「マタイによる福音書」	山浦玄嗣訳（書評）	見出し
2003/6/13	2003/2/20	2003/1/26	2003/1/19	2002/8/19	2002/7/14	2002/7/14	年月日
日国①	複合	日国④	複合	日国④	複合	複合	意味

朝 122	朝 121	朝 120	朝 119	朝 118	朝 117	朝 116	番号
万葉集から音韻の専門書まで参考文献は60冊近い。	「40年間音楽と踊ってきた、初めて言葉と踊ります。共演者のせりふを一音漏らさず聞き、日本語の音韻やリズムを僕の体と結びつけない」	音韻学が進歩し、「お」と「を」「い」と「あ」「え」と「ゑ」などが区別できなくなる前に仮名が作られたことがわかっている。	それより前の神代では、もともと音韻の数が多かったのが常識なのに、仮名時代とおなじ数というのはふしぎである。	月の宴・古代の音韻コンサート 23日午後5時、松江市大馬町の八雲立つ風土記の丘（0852・23・2485）。	デジタル技術を使えば、語彙だけではなく、音声（音韻やアクセント）も記録することができます。	それはによると大分の言葉は、平坦なアクセントの地域が多い九州にあつて、北九州などとともに東京に似た音韻が残る珍しい存在なのだという。	本文
成させた（ひと）	宮城信勇さん「石垣方言辞典」を完成	「試み野村萬斎芸集」監修「現代能楽集」	「古く現代つなぐ」監修「野村萬斎芸集」	「古く現代つなぐ」監修「野村萬斎芸集」	「古く現代つなぐ」監修「野村萬斎芸集」	「古く現代つなぐ」監修「野村萬斎芸集」	見出し
2004/2/25	2003/11/15	2003/11/10	2003/11/10	2003/10/18	2003/9/19	2003/8/29	年月日
日国④	日国①	日国④	複合	日国②	固有	複合	意味

朝 127	朝 126	朝 125	朝 124	朝 123	番号
<p>音声学の専門家によると、「ダス」は男性のバス音、「キン」は女性のソプラノ音で、一度聞いたら忘れられない音韻だという。</p>	<p>著書は、日本語の特色を豊富な実例をもとに分析した「日本語」(57年、88年改訂)、「日本語音韻の研究」(67年)、「日本語セミナー」(全6巻)など多数。</p>	<p>先生の間は、日本語の音韻やアクセントを主たる対象とし、まずは具体的な現代語諸方言の記述的研究から出発して、後にこれを歴史的な研究へと昇華するというスタイルを取っておられ、実証的な研究姿勢を貫かれている</p> <p>さらに、音韻やアクセントだけでなく、動詞のテンス・アスペクト(時制・相)を論じた文法論にも斬新さがみえ、その守備範囲の広さに驚愕(きょうがく)させられたものである。</p> <p>この趣味を、本業の音韻、音声の研究に生かされて、「正しいアクセントで、聞いてわかる歌曲を!」をモットーに、昭和六十年代に当時の歌曲界の大御所であった四家文子氏を会長とする「波の会」を結成された。</p> <p>東京外大教授、上智大教授、名古屋大教授などを歴任し、音韻を中心に国語を研究、アクセントの歴史的変化を体系づけた。(全二例)</p>		<p>「バラ」という音韻には、さして美しい響きはない。</p>	<p>本文</p>
<p>ダスキンの名は)</p>	<p>金田一春彦さん死</p>	<p>金田一春彦さん死</p>	<p>金田一春彦さん死</p>	<p>金田一春彦さん死</p>	<p>見出し</p>
<p>2004/7/10</p>	<p>2004/5/20</p>	<p>2004/5/20</p>	<p>2004/5/20</p>	<p>2004/5/20</p>	<p>年月日</p>
<p>日国①</p>	<p>固有</p>	<p>日国④</p>	<p>日国④</p>	<p>日国④</p>	<p>意味</p>

朝 134	朝 133	朝 132	朝 131	朝 130	朝 129	朝 128	番号
<p>記紀に登場する美しい桜の霊・木花開耶姫(このはなのさくやびめ)の名からサクヤが転化した説をはじめ、桜がサキムラガル(咲簇)ことからの音韻の変化説を挙げています。</p> <p>同大辞典ではこのほか、多くの花の中で優れて美しいサキハヤ(咲光映)の音韻変化説▽穀霊を表すサガミ(田神)のサと、神のやどる座の意味のクラが合わさって、サクらは穀霊の神座を指した説なども紹介。</p>	<p>言語学的に言えば音階論は音韻論に似て、音楽理論は文法にあたる</p>	<p>歴史上の文献や韓国語の音韻から紫川や小倉の名前の由来を探った「小倉のルーツ」、「森鷗外と紫川」といった文章も載せた。</p>	<p>日本語だけでなく、朝鮮語にもタミル語と共通する言葉が多いというのだ。具体的に112語を示し、音韻と意味の類似性を主張する。</p>	<p>音韻を識別する知覚機能は助けるように音声を選んだり、その特徴を誇張したりすることによって、学習不能だったこともでも、また外国人でも言語の学習が促進されるという。</p>	<p>三位を「さんみ」と読むのは「順応」などと同様、他の字と結びつく際の音韻上の変化によるものです。</p>	<p>かれの代表作『音韻法則について青年文法学派に反対する』(一八八五年)は、小林の編纂になる『20世紀言語学論集』(みすず書房)におさめてある。</p>	<p>本文</p>
<p>交差点)</p>	<p>交差点)</p>	<p>交差点)</p>	<p>交差点)</p>	<p>交差点)</p>	<p>交差点)</p>	<p>交差点)</p>	<p>見出し</p>
<p>2005/3/27</p>	<p>2005/3/27</p>	<p>2005/1/12</p>	<p>2005/1/7</p>	<p>2005/1/4</p>	<p>2004/12/9</p>	<p>2004/11/14</p>	<p>年月日</p>
<p>複合</p>	<p>日国①</p>	<p>複合</p>	<p>日国④</p>	<p>日国④</p>	<p>日国④</p>	<p>複合</p>	<p>意味</p>



朝 142	朝 141	朝 140	朝 139	朝 138	朝 137	朝 136	朝 135	番号
音韻体系の違いを乗りこえるひらがな表記法に持論を展開し、「沖縄語の書き言葉の確立」を掲げる。	入学早々、『元朝秘史』の翻訳で知られる小沢重男先生から「モンゴル語より音韻論（人間は無意識のうちに音声グループ化している）を覚えなさい」と教示される。	英語の独特のリズム、音韻を耳で習得してから、単語のつづりや文法を学べば高い学習効果が得られる、とした研究成果に基づいている。	7月15日から始まる講座「よみがえる古代の日本語」（大阪教室）では、京都産業大教授の森博達さんが、古代から中世にかけての音韻を復元する。	橋本博士（1882〜1945年）は同小卒の国語学者。東大教授になり文法学、音韻論などの分野で業績を残した。	「ニホン」と「ニッポン」、どちらが正しいかという問いを時々聞くが、それは「やはり」「やっぱり」などを並べて考えれば簡単に説明がつく。音韻の問題で、どちらがどうということではな。	東アジアの言葉は文字を中心に編成されているのに対して、西欧の言葉は声・音韻による。	日本の研究者の説に切り込み、中国語の音韻などをわかりやすく丁寧に説明。	本文
運動	高橋秀実	ATNが学習支援センター／大阪府	朝日カルチャーセンター／大阪府	福岡県	読者のひろば	意技／大分県	（テークオフ）古	見出し
2006/12/17	2006/10/30	2006/9/12	2006/6/28	2005/11/21	2005/8/19	2005/6/12	2005/4/6	年月日
複合	複合	日国②	日国④	複合	日国②	日国④	日国④	意味

朝 150	朝 149	朝 148	朝 147	朝 146	朝 145	朝 144	朝 143	番号
著書は古写本や音韻など万葉集に関する多面的な内容が論じられ、日本の研究者に劣らない	人の声は母音や子音などの音韻（音素）ごとに音色が大きく違う。	県立大人事環境科学部長に奥貫隆教授（63）＝景観計画、緑地計画＝、国際教育センター長に寺島迪子（みちこ）教授（62）＝史的音韻論、英語史＝を選出した。	漢文崩しの文の語感が子どもの頃から大好きで、見知らぬ漢語が不思議な音韻を響かせるグルーブ感に官能的な愉悅を覚えていた。	約60人の学生を前に教壇に月1、2回立つ。印税や著作権の問題、ヒット曲に共通するタイトルや日本語の音韻論。	一首の口調、音韻は夫の病いを告げ、夫へ哀訴していることが判る	ビン南語と台湾語は文法や音韻は同じだが、台湾語には日本語由来の表現など独自の語彙や表現が豊富に見られる。	豊臣秀吉が演じた豊公能の一つで、宗家宅で00年に見つかった「この花」の語本も、安明が調査を重ねてきた。ルビがなく不明確だった読み方や音韻を、別の古い語本などと突き合わせて特定した。	本文
業績を表彰「国際女性賞」【大阪】	「電子の歌姫」舞	揭示板／滋賀県	水内田樹・上幸徳・兆秋	小室哲哉さん	歌壇・俳壇・柳壇	上天理大学教授・初の本	能以前の古態を研究「金春流八	見出し
2008/2/27	2008/2/2	2008/1/23	2007/7/29	2007/7/25	2007/7/10	2007/6/30	2007/6/8	年月日
日国④	日国④	複合	日国①	複合	日国①	日国④	日国②	意味

朝 157	朝 156	朝 155	朝 154	朝 153	朝 152	朝 151	番号
地名が、古代の言葉の化石として、地形や地史、歴史や民俗と関連づけ、音韻学や統計学も駆使して解析されてきたのに比べ、自由に名字が作れる時代があったせいにか、名字の系統だった研究は少ない。	果教委社会教育・文化財課によると、聚分韻略は、漢詩をつくる際、漢字の音韻を調べるために用いられたもので、鎌倉時代末期の禅僧、虎関師錬がつくった。	1967年から約2年間のもので、音韻やリズムなど言葉の問題を真剣に書き連ねており、それぞれが詩論になっている。	持論、事業家としての経験などを月1〜2回、講義。学生約30人が受講していた。	沖永良部方言の音韻論の研究で奄美を訪ねた時でした。	音韻にも文法にも詳しくなかった。	43年に東京帝大（現東京大）国文科を卒業後、橋本進吉の上代特殊仮名遣いの研究を継承して音韻や文法の研究に取り組んだ。	本文
「等身大の本居宣長に触れて」来月まで松阪で企画展／三重県	大内版「聚分韻略」を県指定文化財に／山口県	前那珂太郎「群馬」著書や書簡など	全部なくした時代の龍児小室哲哉容疑者逮捕	江雅之「3出会い」に必要な努力	文化人類学者・西の国語学者	大野晋さん死去「日本語練習帳」の国語学者	見出し
2009/2/22	2009/1/5	2008/11/11	2008/11/4	2008/10/1	2008/7/14	2008/7/14	年月日
複合	日国③	日国①	日国①	複合	日国④	日国④	意味

朝 160	朝 159	朝 158	番号
1910〜12年に中国で調査を行い、『中国音韻学研究』を著した。	日本の漢字の歴史と中国の音韻体系との関わりを知りたくて、本書を手にした。	その音色は、曲の一部を収録したCDなどからうかがい知ることができる。光沢を感じさせるような男声。ゆらゆらと連続的に揺れ続ける声。太古から連綿と続く音韻が、大地をはって迫ってくる錯覚に陥る。	本文
清代に発展した音韻学をもとに実際の発音を解明したのは、スウェーデンの学者カールグレン（1889〜1978）である	当時の音を復元して詠むにはどうしたらよいか。それを解決するのが音韻学である。	「それでも、声、音の美しさこそ、美学の核心。それに基づき『音韻・響きのある動作』が生まれてくる」	見出し
大島正二著	大島正二著	大島正二著	大島正二著
2009/8/23	2009/8/23	2009/8/23	2009/8/23
複合	複合	固有	複合
複合	複合	複合	複合

朝 166	朝 165	朝 164	朝 163	朝 162	朝 161	朝 160	番号
一年の收穫を神々に感謝して献げ祭る月の意味で神の月と呼ばれたのが、かむがかみに音韻変化した段階で、生産に関わらない貴族の中から神の無い月との解釈が生まれ、神無月の字が当てられたもの、と思われる。	目玉は、中国宋代の音韻書「鉅宋広韻」や6世紀に成立した「弘明集」の零本、朝鮮の書物など。	音韻から文字の並びまで計算し抜いた作風は、圧倒的な朗読力とともに読者を魅了し続け、当局の介入に二の足を踏ませた。	俳諧、和歌、国字を学び、古典の音韻や解釈を巡って本居宣長と論争を繰り上げたことでも知られる。	題材として特殊ではないが、歌を支えているのは終極の「音韻」である	奄美語の特徴として、(一) 日本語にはない「テイ」などの音韻がある	また漢字を音韻で分類し、行列形式の表に配列した韻図も作られ、宋代には『韻鏡』も編まれた。	音韻学を手掛かりに奥深い漢字の世界を探索するのも楽しい。
							本文
							見出し
2010/11/13	2010/11/9	2010/7/31	2010/5/28	2009/11/10	2009/9/16	2009/8/23	年月日
複合	複合	日国①	日国④	日国①	日国④	日国③	意味

朝 173	朝 172	朝 171	朝 170	朝 169	朝 168	朝 167	番号
アイヌ語地名にかぎらず古来すべての地名は、文字ではなくまず音韻からはじまったのだろう。	「東北なまりのような音韻」で道民が聞くとなつかしく思いかもしれません」と宮下さん。	平安時代の音韻体系の研究を基にしており、	歯切れのいいリズムに呼応した歌唱、意味と音韻に工夫を凝らした歌詞などがた森魚ならではの。	教え子や沖縄県立芸大の言語研究者らが手伝いをかけて出て、7年かけて音韻表記や文法の専門的解説を加えた。	高山倫明・九大大学院教授が、日本の伝統的韻文形式の基本となってきた「五七調」「七五調」のリズムなど、音韻史について語る。	日本語と西欧語は音韻構成をまったく異にするのだから、カタカナ語が原音表記という点で不十分なものであるのはやむを得ない。	五七調の音韻律で整う情感、やさしさを叙情といっている気がするが、詩は、そうであってはいらないと思う。
							本文
							見出し
2012/5/23	2011/11/8	2011/11/8	2011/9/12	2011/2/16	2011/1/29	2011/1/28	年月日
日国②	日国②	日国②	日国①	複合	複合	複合	意味

朝 178	朝 177	朝 176	朝 175	朝 174	朝 173	番号
「赤い」が「アカエー」、「財布」が「サエーフ」、「お前」が「オマエー」、「帰る」が「カエル」というふうに、連母音アイ/aiとアエ/aeがアエー[a:]と発音される。伝統的な山口弁の音韻の特徴のひとつである。	十年ほど前、日本語のアクセントや音韻の研究をしている大学時代の恩師に、山口弁の発音調査を依頼されたことがあった。  それぞれの方言の豊かさ、面白さを感じながら、山口弁の様々な特徴、その語彙や文法の奥深さ、音韻の美しさを意識するようになった。	無声化された母音を、自分と会話する相手から直接聞くことは、それまでなかった。その他の音韻やアクセント、文末の助詞・助動詞の使い方も、電波の向こうと同じだった。	同時期に、現代語の音韻に合わせた「現代かなづかい」も定められた。  近代以降、外来語はもとからあつた日本語の音韻に沿って書かれてきたが、外国語へのなじみが増すにつれ、より原音に近い表記が広まった。	さらに分析すると、「た・と・ぼ・ん」の4音で組み立てていることが分かります。少ない音韻を様々に合成させて、快いリズムを生み出しているのです。	音韻の痕跡を文字でなぞるふるまいは、どこか写真に似ているかもしれない。	本文
力意識 上京・森川信夫の魅4 山口県方言研究	力意識 上京・森川信夫の魅4 山口県方言研究	力意識 上京・森川信夫の魅3 山口県方言研究	力意識 上京・森川信夫の魅3 山口県方言研究	力意識 上京・森川信夫の魅3 山口県方言研究	世田豊平川 氾濫の地に入植の記憶 谷口雅春/北海道（小さな目） 6月の月間賞）なんの音/徳島県	見出し
2013/4/19	2013/4/19	2013/4/12	2013/4/12	2012/10/27	2012/8/2	年月日
④国④	④国④	④国④	④国④	④国④	②国②	意味

朝 186	朝 185	朝 184	朝 183	朝 182	朝 181	朝 180	朝 179	番号
音韻といたったものが複雑に絡み合っている。の独特の風景がある。	それに、例えば、「のはな」の題による、「はなののはな／はなのなにあに／なすななのはな／なものはないのかな。この詩には、音韻による遊び言葉が並べられていて、特に感動といったものを感じられません。」有珠山が千年単位で作られたものと幕府と関係した寺・信仰の心、アイヌ語の音韻といふものは、言い回しや音韻などに当時の大人が使っていた方言の響きがある。	それには、例えば、「のはな」の題による、「はなののはな／はなのなにあに／なすななのはな／なものはないのかな。この詩には、音韻による遊び言葉が並べられていて、特に感動といったものを感じられません。」有珠山が千年単位で作られたものと幕府と関係した寺・信仰の心、アイヌ語の音韻といふものは、言い回しや音韻などに当時の大人が使っていた方言の響きがある。	僕たちは、アイヌ語の音韻もまた、世界を形づくる重要な要素であることに気づいていく。	今野真二著『かなづかいの歴史』(「川」の発音が「カハ」から「カワ」へ移行するなど音韻の変化が起こった11世紀ごろ)、日本語表記として「発音するように」ではなく「かてつて書いていたように」、仮名を使う原理が選択された。	例えば、デイスレクシアは読む書く記憶するのが苦手な脳の機能障害。字を読むには音韻の理解が必要で早くからその訓練をするのが理想。 論Ⅱを選出。	対して邪馬台国近畿説では、三重県の志摩半島付近にある説が多いのだが、それらは音韻が似ている以外、これといった根拠に乏しかった。	氏の山口弁には、                       	本文
風景探すほど未知の感風景【北海道】	(特集小さな目)ことばあそびと後藤惣一／大分県人気がなくなり可	北海道秀三と胆振・2知里真志保・山田	文庫・新書倍昭恵白石一文川安裕子子どもの未来、社会の役割製品川安裕香×白石一文川安裕会昭恵白石一文川安裕子	大阪大学人事・大阪府大臣	斯摩馬国は銅剣糸島の志摩氏御押しの集落史資料通西部・共済通	家森口信夫・9意識山口弁の魅力京山口弁の魅	見出し	年月日意味
2014/6/2	2014/5/28	2014/5/14	2014/5/11	2014/4/22	2013/11/15	2013/7/2	2013/5/24	
日国①	日国①	日国④	日国④	日国④	複合	日国②	日国②	

[illegible]

番号	朝 194	朝 195	朝 196	朝 197	朝 198	朝 199
本文	日本語歌詞の終盤は「一人家路をたどる コートの襟に雪が降り積もる」と、寂しさを感じさせる内容。音韻の関係から英語は日本語より一つの音符に単語がうまく乗るとい、日本語よりも情景や気持ちをは細かく書き込めた。 『週刊朝日』毎週掲載されているオヤジギャグの類にはよくこんな音韻連想が出てくるものだと感じしきり、脱帽。	『エエラ』そこで「繊細」と「流麗」をテコ入れするため、俳号を「整子（れいし）」としたのだそうである。尊敬する俳人山口誓子の音韻をなぞったともいわれる。	『エエラ』「中学、高等学校（旧制）のころ、漢文が好きでした。理科系も授業はありました。漢詩は韻を踏むでしょう。漢字には相似形の音韻があることがヒントになりました」	『エエラ』早大文学部でフランス語学を専攻し、11世紀の音韻についての卒業論文を書いた。	『エエラ』言語学の音韻論研究によれば、日本語の「ハ」行音のルーツは、p音と推測されています。	『エエラ』私たちがふだん無意識に使っている音韻体系は、他にも変わりつつあります。
見出し	教授の歌声、世界へ札幌大時崎さる日英中版を動画公開／北海道		巡り巡って宇野宗佑氏「万策尽き」政界迷走 根本清樹の森田電気工事務の森田正典さん現代之の肖像 森本英	フランス料理の辻静雄さん（現代の肖像）溝上瑛	城生百太郎（コムンタリ）・神野峯（読む） 城生百太郎（コムンタリ）・神野峯（読む） 城生百太郎（コムンタリ）・神野峯（読む）	城生百太郎（コムンタリ）・神野峯（読む） 城生百太郎（コムンタリ）・神野峯（読む） 城生百太郎（コムンタリ）・神野峯（読む）
年月日	2015/12/13	2011/10/21	1989/6/6	1990/4/24	1990/11/20	1995/2/20
意味	日国④	複合	日国②	日国③	日国④	複合

【凡例】  
・各種の日本語データベース（コーパス）を検索して得られた「音韻」の用例を、データベースごとに、表にして挙げる（頭にデータベースを表す略号を付けて、データベースごとに通し番号を付す。同一記事・同一作品中の用例は、同一番号とする）。  
利用したデータベースとその略号は、以下のとおりである。  
「太陽コーパス」国立国語研究所（一部「ジャパンナレッジ」の「JBooks太陽」による（「出所」欄に「ジャ」を付す））↓太  
「読売新聞記事データベース」（ヨミダス歴史館）の「明治・大正・昭和（一八七四―一九八九）」（「キーワード検索」を利用。一九六〇年以前のもの）読売新聞↓読  
「青空文庫」青空文庫（二〇一六年一月検索）↓青（一作品につき一例を挙げる）  
「書き言葉均衡コーパス」（少納言）を利用）国立国語研究所↓書（一作品につき一例を挙げる）  
「芸能人・有名人ブログ」（二〇一五年以前のもの）Anda↓ア  
表には、用例の現れた「本文」（部分）のほかに、当該記事の「出所」、新聞・雑誌・ブログ記事等に関しては、用例の現れた「本文」（部分）のほかに、以下のものを挙げる。  
・見出し、掲載紙誌発行（あるいは記事発表）の「年月日」、「音韻」の当該例における「意味」を挙げる。  
書籍に関しては、用例の現れた「本文」（部分）のほかに、「著作名（出典）」（あるいは「著作名（出版社）」、「著者」（あるいは編者）、著作の成立（あるいは刊行・発表）「年」、「音韻」の当該例における「意味」を挙げる。  
・「本文」には、当該語の部分（「音韻」）に網かけを行う。ルビは省略する。横書きの文献における「」と「」とは「」と「」とに改め、引用符は「」に改める。  
・書籍の「著作名（出典）」欄では、巻数や年などを表すのに、算用数字を用いる。  
・「意味」欄には、「音韻」の当該例における意味を、『日本国語大辞典第二版』（「日国」と略す）の意味区分の番号で示す（詳しくは、「資料三」の【凡例】参照）。同一作品に複数の用例がある場合は、（表に挙げた例に見られるような）代表的な意味を挙げる。  
・漢字の字体は、現代日本語の通用字体を用いる。「音韻」・「音韻」の表記は、元のままにする。

朝 204	朝 203	朝 202	朝 201	朝 200	番号
【アエラ】「何語、というんでしょかこれは。世間に染まっていな。宙を浮いている。日本語の音韻体系にはない発音とアクセントで、でもやっぱり日本語としか考えられない歌詞を歌う。」	【アエラ】声が発せられる直前まで、口蓋で言葉を転がしている。語尾をビブラートさせ、裏返し、かすれ、意想外のところでもトーンを伸ばし……。歌詞を構成する音韻の一つ一つを、大事にいとむ。	【アエラ】「脳」の四つの部分のうち「音韻」はこれが当てはまるらしい。	【アエラ】『言語の脳科学』の著書がある東京大学の酒井邦嘉助教授の研究では、言語に必要な脳の部分は「文章理解」「文法」「単語」「音韻」の4カ所に分かれていることが分かっている。	【アエラ】のちに沖永良部方言の音韻論を研究するサラ・アン夫人もフルブライト給費留学生で共に米国留学した。	本文
【アエラ】「日本方言地図」の音韻地図を見ると、東北弁に近い方言の分布が出雲地方に	【アエラ】「声」が発せられる直前まで、口蓋で言葉を転がしている。語尾をビブラートさせ、裏返し、かすれ、意想外のところでもトーンを伸ばし……。歌詞を構成する音韻の一つ一つを、大事にいとむ。	【アエラ】「脳」の四つの部分のうち「音韻」はこれが当てはまるらしい。	【アエラ】『言語の脳科学』の著書がある東京大学の酒井邦嘉助教授の研究では、言語に必要な脳の部分は「文章理解」「文法」「単語」「音韻」の4カ所に分かれていることが分かっている。	【アエラ】のちに沖永良部方言の音韻論を研究するサラ・アン夫人もフルブライト給費留学生で共に米国留学した。	見出し
2014/12/22 複合	2012/11/26 日国①	2006/6/5 日国④	2006/6/5 日国④	2005/9/19 複合	1998/9/28 複合

番号	太 001	太 002			太 003	太 004
本文	假令は本居翁の様な人は、私共が尤も敬慕する先生ではありまするが、しかし其音韻学などに至りましては、今日うけた生理学上、心理学上、言語学上の経験は、まるで其改革を要する事ゆえ、仏教の伝はりしよりかの土の言語文字頗る流入せしが、其の声韻を論ずること精密周緻なるを以て、支那是に於て音韻の学あり。	音韻の編制、人に依り、世に依り、互に異同なくばあらず、或は二百六韻となせるあり、或は一百七韻となせるあり、	音韻の学の成立せし時は、既に已に四声の判然たりし時にして、素と其学の梵法に基きしが為め、			吾国の散文は韻文に比して反て声調の変化と自在とを見るが如き、声調を重んじ音韻を命とする韻文にとりて極めて嘆すべき恨事なり。
出所	雑誌 太陽	雑誌 太陽	雑誌 太陽	雑誌 太陽	雑誌 太陽	雑誌 太陽
見出し	国語研究に就て 上田万年	字音の標準 三宅雪嶺	字音の標準 三宅雪嶺	字音の標準 三宅雪嶺	支那文学一斑小 柳司気太	韻文に就て 島崎藤村
年月日	1895/1/1	1895/3/5	1895/3/5	1895/3/5	1895/12/5	1895/12/5
意味	複合	日国③	日国③	日国③	日国③	日国①

太 009	太 008		太 007	太 006	太 005	太 004	番号
蒙古文より成吉思汗実録を翻訳したる故博士那珂通世氏の如き、説文音韻の学に造詣ある後藤朝太郎氏の如き、	世界にはこれよりも猶音韻の單純な国語があり、五十音よりも遙に簡単な音を以て、組織して居る言葉の少なからぬを証明して居る。	維新前の吾々の先輩は、我國の音韻は單純であり、五十音の整然たる所から立論して、日本の国言葉のやうに、善い言葉はないと結言した。	満載の詩篇、長短参差と春秋の粉脂を華め、粲然として人目を射る。或は音韻錯落、乱山雲に聳るが如く、或は余情依稀、暮笛風に咽ぶが如し。	僅なる音韻を単呼して之に應ずべからず、因て二音を綴りて語をなすに至り、是より單音語の民族は言語を文字に写すの漸く苦渋を感じ、一方には方音の異なるによりて文字に困難を生じたり、	第六、諺文説……朝鮮の諺文は精密に音韻を写すに適するが故に之を我國字となすべしと主張するものなり、	大なる調べを奏し、十全円満なる声調の変化と音韻の妙味とを見んとするは頗る難事といはざるべからず。	本文
雑誌 太陽	雑誌 太陽	雑誌 太陽	雑誌 太陽	雑誌 太陽	雑誌 太陽	雑誌 太陽	雑誌 太陽
日本現代の史学及び史家山路愛山	二十世紀に於ける国語学の位地上	二十世紀に於ける国語学の位地上	牛 新体詩集 高山樗牛	邦武 国字改良論 久米	井上哲次郎 国字改良論(承前)	藤村 韻文に就て 島崎	藤村 韻文に就て 島崎
1909/9/1 日国③	1905/6/15 日国④	1905/6/15 日国④	1901/10/5 日国①	1901/2/5 日国③	1898/10/5 日国④	1895/12/5 日国①	1895/12/5 日国①
							意味

番号	太 010	太 011	太 012	太 013
本文	同時代に於ける老人のアイヌは『今の若者はアイヌと呼ぶけれども、昔はカイヌと呼んで居った』と云って居る。Kamu-Ainu 音韻と次第に変化して来たものであらう。 字数以外のことでは、尚各文字の形の上の調査、音韻上の調査、訓讀又は意義上の調査等があり。	語彙の対照も、系統論上の一要件には相違ないけれど、それも表面上外見の似寄りばかりではなく、語の心髄が一致してをり、而も其一致が正確な音韻転化法の規則に適つて居なければならぬ。 之に加ふるに、語詞の構造法や語法の組成法も、同様な詮議を経て大体同一と定まり、尚又音韻の成立も同探であるといふことが、略ぼ分明になった後、同系統は始めて認められるのである。	国語研究としては音韻法(phonology: Sautleire)、単語法(morphology: Fomelche) 附けたり語源論(etyymology: Wortforschung)、文章法(syntax: Satzlehre) 及び韻律法(prosody: Metrick) の四面に互らねばならぬが、一般民衆の国語に対する観念としては音韻法中の発音法と文章法とだけで十分である。	
出所	雑誌 太陽	雑誌 太陽	雑誌 太陽	雑誌 太陽
見出し	人種学上より見たる『皇清職工図』鳥居龍藏	漢字新研究の機運 後藤朝太郎	国語系統の問題 新村出	国語問題と語学陶 治石黒魯平
年月日	1909/11/1	1909/12/1	1911/1/1	1923/3/1
意味	日国②	日国③	複合	複合

番号	本文	読 001	読 002	読 003
出所	見出し	読 売 新聞	読 売 新聞	読 売 新聞
「広告」	「広告」	「広告」	雑報・唱歌音楽を改良せむとす	左の一編は夙に音韻学熱心の聞えある東京音楽学校嘱託教師旗野士良氏（桜坪隠士）が大学総長に呈したる建議書なり録して斯道の士に示す 凡そ動物、声（音韻）あるものを用て以て情意を通ぜざるは無く、換言せば音韻の間に栖息すると云も可也、 就し中人は之を利用して言語と為し、之を符表して文字と為し、之を組織して文章と為すも、其实音韻の一原に出ざるなし、
1885/1/6	1885/1/6	1885/1/6	1893/9/12	1893/9/12
年月日意味	年月日意味	年月日意味	複合	複合
固有	固有	固有	日国②	日国②



読 004	読 003										番号
又万葉集の如きも第十七巻以下は大概漢字の音にて国語を記載しあれば音韻の学を講ぜざる時は古の載籍は其意味を料知し難きに至らん	学士会員の講演ハ一昨十二日午後一時より美術学校講義室に於て開きしが当日は木村正辞氏の「音韻学の要領」と杉亨二氏の「人の死と生」の二講演なりき	音韻学教科目次	就て音韻学は之を小視すれば、一学科の小部分に過ぎざるが如しと雖、之を大視すれば、国語国文の原始にして生を我日本に受くる者一日一時も常用離るべからざるの学理也	而して根原たる音韻学を放棄して今日の如くならしめば、何の時か外邦に向て言霊の幸ふ国を称道せん、	又号して文学と云ふも、唯言語組織の上に就て法則を講ずるに止まり、其音韻変化の因て然らしむる所以を究めず、	然るに今の学者はこゝに至らず、号して語学と云ふも、唯言語成立の上に就て意義を積くに止まり、其音韻原理の因て然る所以を攻せず、	又号して文学と云ふも、唯言語組織の上に就て法則を講ずるに止まり、其音韻変化の因て然らしむる所以を究めず、	而して根原たる音韻学を放棄して今日の如くならしめば、何の時か外邦に向て言霊の幸ふ国を称道せん、	就て音韻学は之を小視すれば、一学科の小部分に過ぎざるが如しと雖、之を大視すれば、国語国文の原始にして生を我日本に受くる者一日一時も常用離るべからざるの学理也	音韻学教科目次	本文
新説新聞	新説新聞	新説新聞	新説新聞	新説新聞	新説新聞	新説新聞	新説新聞	新説新聞	新説新聞	新説新聞	出所
学士会院講演要旨	学士会院講演要旨	十一良を請う建議を文科に音韻学の旗野	十一良を請う建議を文科に音韻学の旗野	十一良を請う建議を文科に音韻学の旗野	十一良を請う建議を文科に音韻学の旗野	十一良を請う建議を文科に音韻学の旗野	十一良を請う建議を文科に音韻学の旗野	十一良を請う建議を文科に音韻学の旗野	十一良を請う建議を文科に音韻学の旗野	十一良を請う建議を文科に音韻学の旗野	見出し
1896/4/14 日国③	1896/4/14 固有	1893/9/12 複合	1893/9/12 複合	1893/9/12 複合	1893/9/12 複合	1893/9/12 複合	1893/9/12 複合	1893/9/12 複合	1893/9/12 複合	1893/9/12 日国②	年月日 意味

読 007		読 006		読 005		読 004				番号
国語調査委員会に於ては国語調査資料蒐集の爲め音韻並に口語法取調に関する事項に対し		二、文章ハ言文一致体を採用することゝし是に関する調査を為すこと三、国語の音韻組織を調査すること		伊沢修二氏の計画に成る同会は愈来る八月一日より二十日間の予定を以て相州酒匂村小陶磯附近に開き祝話法原理及応用、日本語音韻及訛音矯正、英語発音速成、豊腔発音、台湾語学、唱歌、国文学等国語調査委員会は本年四月より同六月に涉りて九回委員会を開き其調査方針に就き左の如く決疑せり一、文字は音韻文字（フオノグラム）を採用することゝし仮字羅馬字等の得失を調査すること		実に我国学に於ける音韻の羅針盤なり、				本文
新説新聞		新説新聞		新説新聞		新説新聞		新説新聞		世上一部の論者は漢字全廃すべしと説けども是到底実行せらるべしとも信ぜざれば音韻の学遂に忽せにすべからざる也、
国語調査委員会の地方委嘱		国語調査の方針		国語調査の方針		学士会院講演要旨		学士会院講演要旨		而して音韻を講究するは韻鏡に如くもの無し
1903/9/11		1902/7/5		1899/6/24		1896/4/14		1896/4/14		之に依らば三万の漢字廿万の音韻立どころに弁知し得べき良書にして
固有		複合		日国④		日国③		日国③		日国③
										意

読 011	読 010	読 009	読 008	読 007	番号
<p>曩に国語調査会より各府県に対し音韻並に口語法取調方を依頼し既に回答ありたるは二十八県なるが同会に於て各県より回答全部到達の上委員に於て一応取調べ</p> <p>国語調査会と音韻口語法取調</p>	<p>国語調査会より各府県に向け照会したる音韻並に口語法に關し茨城三重の両県より回答ありたり</p> <p>音韻口語法に關する回答</p>	<p>明年一月よりは予て同会より各府県に向け取調方を委嘱したる音韻並に口語法の回答を取り繼め材料とし発言に關する標準語を調査し明年中に全国の標準を一定にせしむる由</p> <p>音韻口語法に關する回答</p>	<p>国語調査会にては曩に各府県に向け音韻並に口語法取調法を照会したるが既に回答ありたるは長崎県のみなれど個人より回答の向きは二三ある由</p> <p>国語調査委員会と音韻口語法取調</p>	<p>各地方の音韻並に口語法調査方は各府県知事に委嘱し来十二月卅日迄に其回答を求めたり</p> <p>国語調査委員会と音韻口語法取調</p>	<p>本文</p>
読売新聞	読売新聞	読売新聞	読売新聞	読売新聞	出所
国語調査会と音韻口語法取調	国語調査会と音韻口語法取調	音韻口語法に關する回答	国語調査会と調査事項	音韻口語法取調	見出し
1904/1/10	1904/1/10	1903/12/24	1903/12/24	1903/12/24	年月日
固有	固有	固有	固有	固有	意味

読 015	読 014	読 013	読 012	番号
<p>由來東洋には基礎を確たる科学に置きし音韻学なし</p> <p>伊沢修二新著 視話応用音韻新論</p>	<p>予が音韻学の研究に従事したる以來今日まで吃者を手に懸けたるもの凡そ八百名</p> <p>伊沢修二新著 視話応用音韻新論</p>	<p>音韻分布図の調査済みの分を日本書籍株式会社に命じて発売せしむる答にて目下印刷中なるが該書籍は各地方に於ける発音の誤謬を指摘したるものにして教育上の参考としては最も有益なるもの</p> <p>文部省国語調査委員会にて音韻調査報告並</p>	<p>曩に文部省より各府県に対し取調を依頼したる音韻口語法の件は既に府県よりの回答あり</p> <p>音韻調査報告並分布図の出版</p>	<p>本文</p>
読売新聞	読売新聞	読売新聞	読売新聞	出所
音韻新論	「廣告」伊沢修二新著 視話応用音韻新論	伊沢修二氏の吃音矯正談	音韻調査報告並分布図の出版	見出し
1906/10/5	1906/10/5	1905/12/19	1904/11/5	年月日
複合	固有	複合	固有	意味

読 020	読 019	読 018	読 017	読 016	読 015	番号
言語が国民の貴重なる財産である以上は、音韻も同時に貴重なる財産であるのだ。	言語は歳月と共に変遷、転移するものである。又増減するものである。音韻も変遷転移するもので、而も甚だしく増減を来すものである。	▲起草委員会議案「音韻に関する取調事項 口語法諮問事項 口語法諮問例」	「ヒルメ」と「ヘルメース」、と我国の神の御名と希臘の神の名とが如何に似て居るであらうか、更に音韻の転訛で、印度の神の「サラメヤ」とも相通であることも思はれる、	●視話応用音韻新論（伊沢修二著）	之を一読すれば何人にも音韻学最新の学理は勿論、視話法の原理及应用、日本語と外国語との比較、清韓語の学習法、吃音及訛音の矯正法、等実に先生独特の秘訣を容易に迅速に会得了解することを得	本文
新聞 読売	新聞 読売	新聞 読売	新聞 読売	新聞 読売	新聞 読売	出所
林鳴外氏（五十音改正新論）	林鳴外氏（五十音改正新論）	国語調査の経過	金三郎氏談 平井	沢柳文部次官談	新著「廣告」伊沢修二	見出し
1908/12/13 日国④	1908/12/13 日国④	1908/9/10 固有	1908/9/10 固有	1907/5/5 日国②	1907/1/28 複合	1906/11/9 固有
1906/10/5 複合	1906/10/5 複合	1906/10/5 複合	1906/10/5 複合	1906/10/5 複合	1906/10/5 複合	意味

読 020	番号
自国の音韻の多少等をも比較研究して、其上で音調論は成り得べき筈のものだ。	本文
新聞 読売	出所
林鳴外氏（五十音改正新論）	見出し
1908/12/13 日国④	年月日
1908/12/13 日国④	意味

読 023					読 022	読 021	番号
<p>僕は僕の字母音韻に対する意見は、始めから一糸も乱れてゐないことは確信する。</p> <p>其音韻のうちの熟音は箇々の単音に解き放ちうるのであるからだ。</p> <p>一箇の語は之を成立する箇々の音韻から解き放ちうるので、</p> <p>音を有せざる母音は何処の国語の字母であるか。響が音でないといふ音韻は何処の国にあるのか。</p> <p>音韻問題（附岩野泡鳴氏を追撃す） 前田林外</p>					本文		
新聞	読売	新聞	読売	新聞	読売	新聞	読売
前田林外	音韻問題（附岩野泡鳴氏を追撃す）	前田林外	音韻問題（附岩野泡鳴氏を追撃す）	前田林外	音韻問題（附岩野泡鳴氏を追撃す）	前田林外	音韻問題（附岩野泡鳴氏を追撃す）
1909/1/10	日国④	1909/1/10	日国④	1909/1/10	日国④	1909/1/10	日国④
日国④	意味	日国④	意味	日国④	意味	日国④	意味

読 027	読 026	読 025		読 024		番号
<p>近時漢字々形を論ずる流行に伴ひ、音韻を説くもの亦有り、韻学書のあるものゝ如き、これがため暴に過大の騰貴をなせるものすら有り、今我等の学に志す人々のため、韻鏡に関する書目を掲ぐ、</p> <p>安永本延享本に依る、韻鏡藤氏伝と題せり、富森一斎の校せるもの、明和六年の序有り、寛政己未刻の泰爵の音韻断二巻は上巻は磨光を、下巻は藤氏伝を駁したるものなり、</p>		<p>処でまだ「子音悉皆不独立説」と「頭音」だの、「音節」だのといふ曖昧な語で僻説を捏まはしてゐる。音韻上大切なることであるから、此の三個の謬論に向つても重ねて鉄錐を加へて置く。</p> <p>が土台の無い氏が語論及び音律論（新体詩の作法も含む）、音韻論を生かさうとするのは卑怯である。未練である。笑ふべきである。</p>		<p>泡鳴氏は僕の「音韻問題」を熟読して大分目を醒ました。</p> <p>国語学者が文典を著しても、それが土台たるべき字母音韻についてさへ、殆ど没交渉であつた。</p>		本文
新聞	読売	新聞	読売	新聞	読売	出所
風韻鏡書目 長井金	風韻鏡書目 長井金	小説材料問題 前田林外	小説材料問題 前田林外	三度、林外氏を駁す 岩野泡鳴	三度、林外氏を駁す 岩野泡鳴	見出し
1910/4/24	日国③	1909/1/31	日国④	1909/1/24	日国④	年月日
固有	日国③	複合	日国④	固有	日国④	意味

説 030	説 029	説 028	番号
<p>今後の国語が、この音韻論に導かれて正しく発展するであらうことを信じて疑はない。</p>	<p>地方的発音の研究に就いては、新に三四百図許りの全国音韻分布図と云ふのを作成しつゝある、</p> <p>今は明治三十七年に作製した全国音韻分布図に拠つて、更に精密なものを作製中であるが、今迄の様に各地方からの報告だけに頼つてゐたのでは物にならぬ、</p> <p>刀江書院増補国語音韻論 文学博士 金田 一 京助著</p>	<p>(問) 橋と箸との音韻如何 (白河デコ箭内)</p> <p>本文</p>	
<p>読売新聞</p> <p>増補国語音韻論</p>	<p>読売新聞</p> <p>増補国語音韻論</p>	<p>読売新聞</p> <p>滑稽問答</p>	<p>見出し</p> <p>年月日</p>
<p>1935/5/29</p> <p>複合</p>	<p>1935/5/29</p> <p>複合</p>	<p>1910/8/7</p> <p>日国②</p>	<p>意味</p>

番号	読030	読031	読032	読033	
本文	今回「音韻論」及日本語の一大特色たる「母音調和の問題」を増補し加ふるに「索引」を附してその完璧を期した。	早速同君に1931年バリの万国地理学会に於ける地名綴方統一に関する決議案の説明書及びその後パリ大学で講演したる日本式綴方の音韻論を送つてその批判を求めた処、京大教授支那音韻学の権威倉石武四郎博士によつて注音符号による新しい支那語教科書ができ、漢文といふ舊套を脱して生々した現代支那語となり、	有坂秀世著「音韻論」	言語学界に於て多年問題とされて来た「音韻及び音韻法則を研究解明せるもの。」	「音韻観念、発音運動の方向、音韻体系、
出所	読売新聞	読売新聞	読売新聞	読売新聞	読売新聞
見出し	「広告」刀江書院増補国語音韻論	日本式ローマ字論に對してフジヤマ紛失せず。田中愛橘	漢文は支那音で注音符号を勉強まず耳を通じて	「広告」有坂秀世著「音韻論三省堂」	「広告」有坂秀世著「音韻論三省堂」
年月日	1935/5/29	1938/4/19	1939/7/3	1940/12/29	1940/12/29
意味	固有	複合	複合	日国④	固有

読 036	読 035	読 034	読 033			番号
<p>「国語ローマ字」という方式と、話しことばの連語によってわかり書きする「ラテン化新文字」というローマ字つづりを考案した。</p>	<p>最近の文部省は、専ら子供の文字の負担ということのみにかゝらずらつて、音韻、抑揚、語法等の標準的なものを確立すべき要務を忘れてゐる。</p>	<p>古代国語の音韻に就いて橋本進吉</p>	<p>音韻論全般の総括的研究等に関して、言語学上からのみならず、社会学的、歴史的立場からも、厳密なる検討を加えてをり、斯界の権威書として見逃し難い良著である。</p>	<p>音韻変化の諸原因、</p>	<p>音韻変化の進行過程、</p>	<p>本文</p>
読売新聞	読売新聞	読売新聞	読売新聞	読売新聞	読売新聞	出所
「読書」さねと「中国の文字改革」	「気流」(読者の欄) 降る飴とたべる雨 高国道雄	「広告」明世堂	「広告」有坂秀世 著音韻論三省堂	「広告」有坂秀世 著音韻論三省堂	「広告」有坂秀世 著音韻論三省堂	見出し
1958/2/5 夕 複合	1947/12/29 日国④	1943/5/21 固有	1940/12/29 複合	1940/12/29 複合	1940/12/29 複合	年月日 意味

青 008	青 007	青 006	青 005	青 004	青 003	青 002	青 001	番号
<p>語句の持つ聯想や、音韻の弾力を、極度まで利用してゐるのだ。</p>	<p>「ひ」と「あ」とは、音韻に相違はあつても、此時代はまだ此二音の音価が定まらないで、転化の自由であつた時なのだから、仮字の違ひは、物の相違を意味せないのである。</p>	<p>同時に、未開の邑落生活では、言語の生滅・音韻の転訛が甚しい為に、叙事詩の中の用語の死語となる事が速い。</p>	<p>蝶の原音は「て・ふ」である。蝶の翼の空気をうつ感覚を音韻に写したものである。(全三例)</p>	<p>そのrの喉音や語尾の自然な音韻が紛れもないドイツの生粋の気分を旅客の耳に吹き込むものであつた。</p>	<p>それから、Rain rain go to Spain というような音韻上の引っかけことばのものは訳しようとするのがそもそもの無理であるから訳しなかつた。(全二例)</p>	<p>南陵高松先生の下に「先生名文熙、字季績、於音韻学尤精究、积文雄以来一人也」と註してある。(全一例)</p>	<p>人はこれらの終止段から出たらしい語を悉くあの韻がお(即ちう)にうつた音韻の転訛であるといふけれども、それでは何やら安心のならぬ所があるやうにおもふ。(全六例)</p>	<p>本文</p>
短歌本質成立の時代 (折口信全集1 中央公論社1995)	口信夫全集4 中央公論社1996	語部と叙事詩と (折口信全集1 中央公論社1995)	青猫 (萩原朔太郎全集1 筑摩書房1975)	旅日記から (明治42年) (寺田寅彦随筆集1 岩波書店1947)	まざあ・ぐうす (まざあ・ぐうす 角川書店1976)	伊沢蘭軒 (鵬外選集7 岩波書店1979)	用言の発展 (折口信夫全集12 中央公論社1996)	著作名 (出典)
折口信夫	折口信夫	折口信夫	萩原朔太郎	寺田寅彦	北原白秋 訳	森鷗外	折口信夫	著者
1926 日国①	1924 頃 日国④	1924 日国④	1923 日国①	1921 日国②	1921 日国①	1916-17 複合	1908 頃 日国④	年 意味

青 016	青 015	青 014	青 013	青 012	青 011	青 010	青 009	番号
それらが表面上は単なる音韻的な連鎖として用いられ、悪く言えば単なる言葉の遊戯であるかのとき観を呈しているにかかわらず、実際の効果においては枕詞の役目	「春の梅、秋の尾花のもつれ酒、それを小意気に吞みなほす」という場合の「いき」と「思」との関係は単なる音韻上の偶然的関係だけではないであろう。	おひら様と言ふ言葉については、古くから、私はひなの音韻変化だと考へて居た。	「をし／＼」と警蹕を写したのは、必しも発音を糺したのとも思へないし、第一其頃、既にお・をの音韻の混同がはじまつてゐるのである。(全三例)	何故に或る詩は本物として感じられ、或る韻文は非詩として感じられるかということは、実に言語の語意や音韻に於ける組み合わせの、複雑微妙なる関係にかかつてゐる。(全三例)	方言などは、其村々の本質を示してゐる傾向が著しいが、音価の動揺・音勢点の相違・音韻の放恣な離合・発声位置の不同などから、表面非常な相違があつても、実は根元一つと見える。(全二例)	あるいは「水に入る」特殊の為事と、み・にの音韻知識から、宛てたものともとれる。	ヴォルテールがもし田舎出のアカデミー会員から音韻の注意でも受けたら、やはりそんな一瞥を与えたことだろう。	本文
店 1948)	日本人の自然観(寺田寅彦随筆集 岩波書店 1979)	「いき」の構造 岩波書店 1979)	偶人(信仰の民俗化並びに伝説化せる道) 中央公論社 1996)	国文学の発生(第三稿)まれびと(折口信夫全集 1 中央公論社 1954)	雪の島 熊本利平氏に寄す(折口信夫全集 3 中央公論社 1995)	水の女(折口信夫全集 2 中央公論社 1995)	レ・ミゼラブル 第三部(レ・ミゼラブル 2 岩波書店 1987)	著作名(出典)
寺田寅彦	九鬼周造	折口信夫	折口信夫	萩原朔太郎	折口信夫	折口信夫	ゴル・ユート 与志雄訳	著者
1930	1930	1929	1929	1928	頃 1927-28	1927	年	
日国①	日国②	複合	日国④	日国①	日国④	複合	日国②	意味

青 024	青 023	青 022	青 021	青 020	青 019	青 018	青 017	番号
なぜなら詩の本来の意味といふものは、言葉の音韻や表象以外に存在しない。	なげなみの長閑のどかな印象をよく表現し、ひねもすという語のゆつたりとした語韻と合つて、(全二例)	西洋の言語学では k a s のような最小の音単位を基本的なものと認めてこれを音または音韻と名づけ、カ・サのようなそれから成立つ音単位を音節と名づけるが、(全七九例)	思はれるうたてがある。(全二例)	形が見えて居り、後に音韻分化によつて、うたゝを派出したと思はれるうたてがある。(全二例)	例えば明治大正の日本文壇の音韻使用のパーセンテージの概略的統計を試みて見るに A、Q、I、N、T、K、… Z、F、P などの順序に並ぶ様である。(全五例)	だれも知つてゐる名句であるが、のたりのたりという言葉の音韻のゆつたりとした語韻と合つて、(全二例)	満州の階級性からも、シャンハイをまつた取巻いた赤色プロレタリアの××からも、第二、世界経済恐慌の襲撃からも、…:…:しいにかの女の吹鳴らすラッパの音韻の沈黙して行くまに、一方亦あなに多(あなにや)に「し」のついた形から音韻変化で、「あなにやし」が現れたのだ。	本文
集 2 筑摩書房 1976)	宿命(萩原朔太郎全集 2 筑摩書房 1976)	大菩薩峠 京の夢おう坂の夢の巻(大菩薩峠 19 筑摩書房 1996)	代国語の音韻の変遷(古国語の音韻に就いて他二篇 岩波書店 1990)	言語の用語例の推移(折口信夫全集 12 中央公論社 1996)	郷愁の詩人と謝蕪村(郷愁の詩人と謝蕪村 岩波書店 1988)	「壇」の解体(増補美学的空間 新泉社 1977)	戦争のフアンタジイ(古行エイスケ作品集 文園社 1997)	著作名(出典)
萩原朔太郎	中里介山	橋本進吉	折口信夫	萩原朔太郎	中井正一	折口信夫	吉行エイスケ	著者
1939	1939	1938	1934 後	1933-36	1932	1932	1931	年
日国①	日国②	日国④	複合	日国①	日国④	複合	日国①	意味

青 031	青 030	青 029	青 028	青 027	青 026	青 025	番号
本文							
空海は、宗教界の偉人であるばかりでなく、わづか一年九箇月余の唐土留学に於て、絵画、彫刻、詩文、書法、音韻学、医道、薬物、その他土木、造筆、製墨、製紙の諸技術など、古典を読むについて何かその基礎になるようなことについて話してもらいたいという御依頼でございました。それで、我が国の古代の音韻についてお話上げたいと思います。(全六例)							
むしろ、現存諸本中最も書写年代の古い九条家本(室町中期の書写)その他の諸本におけることく、「いう」とある方が当時の音韻状態から見て正しいのであるまいかと思われる。							
言葉のうちには幾度も聞き返さねば分らぬ音韻がある。							
小は、く・ぐ(ハ・コ・ク)であるから、ぐわあと音韻上関係がありさうに見えるが、此は、別の語である。(全三例)							
たまたま現実の国語を写し伝えようとした場合にも、その表記は主として漢字に拠より、その音韻の判別は驚くべく精確であったとさえ言われている。(全二例)							
そこで、国語の語序による文字の位置や補助詞を音韻によつて表示する方法などが考案された。(全四例)							
古事記 解説 (古事記 角川書店 1956)	海上の道 (海上の道 岩波書店 1978)	日琉語族論 (折口信夫全集 12 中央公論社 1996)	夢は呼び交す 黙子覚書 (夢は呼び交す 岩波書店 1984)	駒のいななき (古代国語の音韻に就いて 他二篇 岩波書店 1980)	古代国語の音韻に就いて (古代国語の音韻に就いて 他二篇 岩波書店 1980)	二千六百年史抄 (菊池寛全集 18 文藝春秋 1995)	著作名 (出典)
武田祐吉	柳田国男	折口信夫	蒲原有明	橋本進吉	橋本進吉	菊池寛	著者
1956	1950-61	1950	1946-47	1944	1942	1940	年
日国④	日国④	日国④	日国②	複合	日国④	複合	意味

書 008	書 007	書 006	書 005	書 004	書 003	書 002	書 001	番号
本文								
つの母音調和 (Vowel Harmony) については、アルタイ系諸語にほぼ共通の音韻現象ですが、膠着現象は、アルタイ諸語だけでなくケチュア語をはじめとする南米の原住								
知れない。とはいふものの、ジャカルタの場合は訛りではあるが、別の言語ではなく、音韻法則さえ呑み込めば、少なくとも辞書で引けるくらいになってくるが、スンダ語の単語な								
いる。たとえば、サビア (1929) はわれわれが母音や子音の各々に対して抱く印象 (音韻象徴 phonetic symbolism と呼ばれるが、語音象徴と訳すこともできる (全二例))								
一文を草しことがあった。『ことばの旅』。タイマツは普通タキマツ (焚き松) の音韻転訛といわれている。だが、方々で聞くに必ずしも松を材料とするとは限らない。むしろ								
室へ響くようであった。鶏が鳴く、「東」と枕詞にもいうように、夷曲の言葉の意味も音韻も、人々の歌というよりは、何か異類の声のように聞えてくる。ただ、万葉も今も、東も								
に、唇を横に押し潰したまま発音しなければならず、それが私にはいささかならず凡庸な音韻構造のように聞こえる。しかしそんなことにこだわるのは針小棒大の物言いだ。言葉は結								
なども、とうてい自作とは考えられない。漢詩文の困難は漢字・漢語の正しい知識の外に音韻に関する深い理解を必要とすることにある。しかし『三韻一覽』の刊行が既に政弘時代に								
倭」の、その命名発生にまでは遡るまい。万葉の枕詞、殊に歌枕的地名と交つた時のその音韻と幻像は、天意と人智のいみじき合作といふ他はない美しさであった。現代人には最早、								
国語精粹記・大和言葉の再発見と漢語の復権のために創拓社	大内義隆 文芸春秋	サンチョ・キホーテの眼	社 鶴を抱く女 毎日新聞	書房 行事もののけ 新宿	閑 言語心理学入門 有斐	月は東に日は西に… 東南アジアと日本のあいだ 同文館出版	ケチュア語入門… 南米アンデス・インカの言語 泰流社	著作名 出版社
塚本邦雄	郎 福尾猛市	西部邁	子 福田百合	斎藤たま	芳賀純	永積昭	戸部実之	著者
1990	1989	1989	1989	1988	1988	1987	1987	年
日国①	日国③	複合	日国①	複合	複合	複合	複合	意味



書016	書015	書014	書013	書012	書011	書010	書009	番号
この本の知識「知識」の内容表現や理解は、日本語を使って運用されます。日本語の音韻・語彙・文法・文法の体系にもついて、表現と理解が宮まれます。したがって、結局の	も、こで教えている。つい	（一六世紀中国の地方改革・淳安における海瑞「一五五八―一五六二年」の著作がある。音韻学者のリガロフ教授 Alexei Ryabov	るいい商売になる。インド・ゲルマン語同士の間の訳ならは、お互いに同じ言語と音韻系統の言語なのだから問題はない。わからないところは、原語のままイタリクなどの形	構造型それ自体は保持されるか、あるいは復活する（Lg一八二頁）。ある言語の音韻の構造型は無変化ではないが、しかしその構造型を構成している一つ一つの音母では（全四例）	貢献した。今日までにベルシア人が用いた詩形には、音律（リズム）については約三〇、音韻（頭韻・脚韻）については約六つの形が区別される。そのうち純然たるアラビア起源のもの（全四例）	一畏友小林英夫時間が、私の試作、「国語音韻論」に対し、精読を賜わり、貴重な時間を割いて一行一行に、はた一字一字に、厳正な校（全二例）	ゼロ声母となる。（a）y-y-y-（b）y-y-w-2、韻母の類推広東語の韻母は鼻音韻尾に-m、-n、-ngがあり、入声韻尾に-p、-t、-kがあることから、普通話に（Z. Ruwet）コーエン（J. Cohen）らはテクストの形式上の特性（例えば音韻論、語彙論、文法論、統辞論、文体論の各レベルでの対応関係）を打ち樹てようとしたの	本文
出版部	日本語の音声表現…スビーチ・コミュニケーション 玉川大学	東西シノロジー事情 東方書店	ドイツと日本…国際文化交流論 講談社	サビアの言語論 勁草書房	ルバイヤート 岩波書店	金田一京助全集 三省堂	標準広東語同音字表 東方書店	著作名 出版社
長野正	坂出梓伸	小塩節	平林幹郎	ムハヤル・オハイラル・小川亮作	委員会	金田一京助全集 論学文庫	滑川明彦 日本文體論学文庫	著者
1995	1994	1994	1993	1993	1992	1991	1991	年
日国④	複合	複合	日国④	日国①	固有	複合	「鼻音韻尾」意味	

書 024	書 023	書 022	書 021	書 020	書 019	書 018	書 017	番号
<p>本文</p> <p>単数すべてと複数3人称の場合には、俗ラテン語からスペイン語への移行の過程で生じた音韻変化の法則に従い、eはieに、oはueに変化した。また、複数1・2人称ではe、o(主七例)う、漢字の竹という字の最古の音は何かということとは、まだ証明されていない。日本の音韻学者は、この竹の字と同音である筑という漢字を、tukすなわちツクという音とも通じ</p> <p>成分があり、前者は単独又は後者を伴って意味のまとまりを形成している。一方、拍は、音韻学上音楽の上位概念であるモーラに対応し、俳句は5・7・5、短歌は5・7・7・5・7・</p> <p>これらの人名に何か歴史をさぐる手がかりがあるのではないかと考えている。中国の古代音韻学を研究している森博達氏によると、難升米の難は『日本書紀』の地名表記では難(な)</p> <p>は一層難しくなったが、仮名という文字は、平安時代以後に変化したたり新しく発生したりした音韻に対応する記号をいちいち創作することにはせず、既存の字母を工夫することによって済まそうと(全八例)の研究者である服部健先生の知を得た。先輩の同僚であつておられたさんは当時三ツ語語音論論についての博士論文を書いておられた。第三章三ツ語問題に似た論文である。先生の下</p> <p>という雍正帝の主張が導かれた。しかし、清朝における官韻は、歴史上かつて存在した音韻上の区別なども含む仮構された枠組みであり、官語を含むいかなる方言の音韻体系とも一(全八例)ほとんどのヨーロッパの辞書にも掲載されている。現在の主要な七つの南部中国語は「音韻と声調において、概して北方方言より保守的である閩南方言は中国南東部の浙江省 福建(全三例)</p>								
で研究社	所	に草風館	先住民族言語のため	漢字百科大事典 明治書院	古代史の窓 新潮社	点字学習指導の手引 慶応通信	語源をさぐる 講談社	著作名 出版社
晶訳	S・R・フィッシャー 鈴木	編 高田時雄	金子亨	阪倉篤義 佐藤喜代 治他編者	森浩一	文部省	新村出	著者
2001	2001	1999	1996	1996	1995	1995	1995	年
日国④	日国④	複合	日国④	複合	複合	複合	複合	意味

書 032	書 031	書 030	書 029	書 028	書 027	書 026	書 025	番号
方言調査。1996年から2000年までの5年間で、市内5地点(重点調査地点)での音韻・文法等の体系的調査、生活語彙調査、自然談話の収録と、市内および隣接市町村の12(全二例)		し、3節で述べたように、山坂氏の場合、L2とH2の対立は中和しているはずだから、音韻論的な意味で式の転換があったとすることはできない。この例外的な音調が現れた理由	、当現象の生成原理には、いわゆるプロミネンスの問題が深く関わると思われ、その点、音韻論的な拍構造の問題とは焦点が異なる。しかし、特定のな意味表出のためのいわゆるスト	たのです。玄奘三蔵法師は真諦三蔵や鳩摩羅什三蔵による梵語のputgataの漢訳が音韻を訳しただけの「補特伽羅」であるが、この一事が唯識教学にとって重大事であることを	題材間の関連性を図った指導 唱歌を指導過程に位置づけ、生徒自身が唱歌を歌い、その音韻を発音することにより、旋律、リズム、プレス、フレージング、装飾法などの音楽的要素	N連続を持つ候補形をすべて排除する制約として機能する。ここで、鼻音化に関連する音韻過程である流音化に目を向ける。流音化は、/n/が/l/に隣接したときに流音になる(全七例)	恩師であるブレアルが19世紀の末に提唱した、それまでの言語学の主流は言語の音声や音韻の史的变化を問題とするものであった。ブレアルが始めた意味論は意味の変化に関する通	てきた面もあることを示している。(一) 現在のスラヴ諸語は、歴史言語学の伝統的な音韻対応の分析に基づき、ロシア語、ウクライナ語、ベラルーシ語を合わせて東スラヴ語、ポ
		京阪系アクセント辞典 勉誠出版	東北方言音声の研究 おうふう	安らぎを求めて…唯識が説く心のはたらき 善本社	日本音楽を学校で教えるということ 音楽之友社	韓国語音韻の研究 青山社	言葉とは何か 夏目書房	「た」の言語学 ひつじ書房
亮一他編	馬加藤良和編	古編著	大橋純一	胤 松久保秀	杉原孝福 土幸雄	征 平野日出	郎 丸山圭三	三谷恵子 語文化フ
2001	2002	2002	2001	2001	2001	2001	2001	2001
日国④	複合	複合	日国②	日国①	複合	日国④	複合	意味

書 040	書 039	書 038	書 037	書 036	書 035	書 034	書 033	番号
れるから、おそらく兼夏の誤写である。この訓の	被調査者の選定にあたっては声の質に注意を要する。発音が不明瞭な人や総入れ歯の人は音韻の調査には馴染まない。・静かな環境づくりに留意する。自動車の騒音や人の声、時計の(全四例)正しくて、唯一つ、止保を直ちに止於とする誤りや、原資料に起っていたということは、音韻史の見地からは、やや例外的と見られるから、おそらく兼夏の誤写である。この訓の	2011)のような接語代名詞の文の語順など、基本語順に含めていない。代名詞は、音韻的な要因(しばしば単音節で、接語的に他の単語に付属しやすい等)や情報構造的な要因	5・結論・音韻論の限界 音現象の総体を、それらの性質(最小音単位、アクセント、イントネーション(全九例)	論・構成論とわかれた論文集の題名は『新興国語学	位相論』(一九三三年)を担当した菊沢季生は一九三六年に論文論・構成論とわかれた論文集の題名は『新興国語学	内部の付属語境界。日本語にみるような#とllの揺れ(全二例)と激音はその特徴的な例にすぎない)、たぶん朝鮮語にとって非常に重要なものだ。この音韻を調音するために動員される発音器官の運動を、感覚のこまかな分析を単語表現のなかに(全三二例)	研究がある。言葉の運用は、言語活動の所産として(全五例)の記号の研究がある。言葉の運用は、言語活動の所産として(全五例)	いう点から、方言がある。方言は、それ自身、一つの体系とまとまりを持つ言語として、音韻・語彙・文法などについての記号の研究がある。言葉の運用は、言語活動の所産として(全五例)
	日本書紀 岩波書店	世界諸言語の地理的・系統的語順分布とその変遷 溪水社	現代言語学の諸問題 三修社	脱「日本語」への視座 三元社	私の朝鮮語小辞典…ソウル遊学記 河出書房新社	「語」とはなにか…エスキモー語から日本語をみる 三省堂	国語学概論 放送大学教育振興会	著作名 出版社
校注	大野晋坂 本太郎 他	佐藤和之 小林隆 崎晃一編	ゴッフックス ク佐野敦 至訳	安田敏朗	長璋吉	宮岡伯人	白藤禮幸 杉浦克己 編著	著者
2003	2003	2003	2003	2003	2002	2002	2002	年
複合	日国④	日国④	複合	複合	日国④	複合	日国④	意味

書 048	書 047	書 046	書 045	書 044	書 043	書 042	書 041	番号
れた左縁上回周辺（40野）に、また音韻同定時は、（全一〇例）	はJGの単一論を支持しており、概して日本語	にまとめてみる。第一に、ESは第一言語転移の影響も見られたが、	を分析してみよう。音韻的には「おけいはん↓おけいはん」というふうに「え」の長母音にはなっている。「エイ（全二例）	「―フランスの放浪の抒情詩人たち―」に関する文書も含まれていた。吟遊詩人と聖職者の音韻が似かよっているのは偶然ではない。トルバドゥールはマグダラのマリア教会のさまよう	「―フランスの放浪の抒情詩人たち―」に関する文書も含まれていた。吟遊詩人と聖職者の音韻が似かよっているのは偶然ではない。トルバドゥールはマグダラのマリア教会のさまよう	味」へと滑走することもある。とりわけ、通りの（全八例）	分野があり、この中で皆さんが高校まで学んできた」（全二例）	本文
動的を生み出すところからだのしくみ	くろしお出版	言語学と日本語教育	韓国を旅する会話…写真対応 三修社	関西弁講義 講談社	関西弁講義 講談社	読玩味 青土社	『バサージュ論』熟	著作名 出版社
増原光彦	共編 野真紀子	南雅彦 浅	修田忠幸 監	室遠森慶正 監	室遠森慶正 監	鹿島茂	編 史子友田英津	著者
2004	2004	2004	2004	2004	2004	2004	2003	年
日国④	日国④	複合	日国④	日国①	日国①	日国②	複合	意味

書 056	書 055	書 054	書 053	書 052	書 051	書 050	書 049	番号
といった現象に関する音声的側面（略）5 語彙の音	1012。復唱時には音韻の置換である音素性ないし字性錯語に加え、助詞の脱落など文法の障害が示唆された。ま（全三例）	6. 五世紀の音韻体系推定の端緒 当時の日本語音韻の体系は上代とどのように違っていたか、それは書き手の渡来人の耳にどの	。文法的アブローチとは、言語形式、もしくは我々が文法形式と呼ぶもの（すなわち、音韻形式、形態論的形式、統語的パターン、語彙項目）を基礎として構成され、それらの形式	味増は、蒸すのが本来の製法で	法に苦心があつたからでしよう。語源は「蒸し」です。蒸し mus、omus が、音韻変化により miso、omiso となったと思われます。	雑な現象である。言語を分割するのには、いろいろなやり方があるであろう。たとえば、音韻、意味、文法に分けるとか、語音、単語、文に分けるという考えもある。しかし、「	「十一世紀フランス語の音韻体系」というわけのわからぬテーマを選んだ。昭和三十三年ころでは珍しかった性質の卒	本文
出版	言語コミュニケーション障害の新しい視点と介入理論 医学書院	イギリス中等音声国語教育史研究 東洋館	文化と歴史の中の学習と学習者 凡人社	ズルーツベストセラー	読谷山風土記 金城印刷・編集工房東洋企画	言語と脳 講談社	辻静雄コレクション 筑摩書房	著作名 出版社
安直哉	小森憲治 郎 池田学 田邊敬貴	犬飼隆	義永未央 子 西口光 一編著	増井金典	渡久山朝 章	杉下守弘	辻静雄	著者
2005	2005	2005	2005	2005	2004	2004	2004	年
「母音韻」	日国④	日国④	複合	複合	複合	日国④	複合	意味

書 056	書 055	書 054	書 053	書 052	書 051	書 050	書 049	番号
てあらゆることが研究対象です。発音（物理的な音声、ある言語内で機能的に用いられる音韻、アクセント、声調それらの変化）、文法、意味（語の意味、その変化、意味の認識）	が、確かに「言う（いう）」の書き方は必ずしも表音的ではありませんね。「言う」の音韻を正しく表記すれば、「ユー」になります。それまで複雑で「ゆれ」の多かった仮名遣い	るために昭和61年、内閣によって「現代仮名遣い」が訓令されました。これは現代語の音韻に従って書き表すことを原則としますが、表記の慣習を尊重して、一定の特例が設けられ	す。糾「叫」の音符は、もともと「キユウ」という音を表すものですが、「叫」では音韻変化が起こって「キョウ」と発音するようになったのです。原因は、読み間違いの定着か	以前、かなり古い時代に音韻変化は起こっていたと考えられます。文字の成り立ちに思いをめぐらせるのは楽しいものです。	中国語でも発音が異なりますので、日本に漢字として伝わるより	母音＋子音というまとまり、あるいはそれと同等の長さの単位として一拍を形成している音韻論的単位をさす。日本語の場合、モーラは仮名1字に相当している。日本語のモーラは1	巻十九と巻二十四から巻二十七、β群：巻一から巻十二と巻二十二、二十三）、それは「音韻」の差であり、漢字音の相違に基づいていることを、まず突き止めている。そして、こ（全二例）	本文
								著作名 出版社
								著者
2005	2005	2005	2005	2005	2005	2005	2005	年
日国④	日国④	日国④	複合	複合	日国④	複合	日国④	意味

ア 008	ア 007	ア 006	ア 005	ア 004	ア 003	ア 002	ア 001	番号
様々な音楽ジャンルが生まれた歴史的背景や、楽曲のコード・音韻・音色等を分析し、他曲との類似性を探る 「楽曲分析（アナリゼ）」	この前のレポート、その課題とは「この言語の例文を比較・分析し、シンジャ・ンジャ語の文法体系・音韻体系を説明せよ」というもの	レッドムーンという名称は俺がつけたが理由は諸説ある：一番大切な事は音韻だった。言葉は文化だからいい響きが欲しかった	えーと、山口弁は東京弁と音韻とかほとんど同じやけえ、いくつかの特有単語を除いて通じないことはまずないと思います	赤ちゃんの名前はじめての男の子ー画数・イメージ・音韻でつけるよい名前秋山勉唯絵	視覚的な情報処理や記憶が苦手なのか、音の弁別や音韻の理解など聴覚的な分野が苦手なのか。〔産経新聞の記事引用〕	マサミは文字を音に変換させたり、言葉を一ko/to/ba」というように1音ずつ分解したりする音韻認識の力が弱いということ。〔産経新聞の記事引用〕	刃頭 (KEMURI PRODUCTIONS 音韻王香)	本文
								出所
								見出し
2010/3/16	2010/2/4	2009/3/7	2009/4/12	2008/8/23	2008/8/7	2008/8/3	2007/2/17	年月日
日国①	複合	日国①	日国④	固有	日国④	複合	固有	意味

資料五 「音韻」の用例（中国・現代）

【凡例】

・「光明日報」（「光明網」の「新聞全文」で「搜索」、および「新浪博客」（「名博」「搜文章」「按全文」で「搜索」）に現れた「音韻」の用例（「光明日報」は二〇一四・二〇一五年、「新浪博客」は二〇一四年のもの）を、表にして挙げる（頭に「光」（「光明日報」）、または「新」（「新浪博客」）と略号を付けて、データベースごとに通し番号を付す。同一記事中の用例は、同一番号とする）。

・表には、用例の現れた「本文」（部分）のほか、当該記事の「出所」、「見出し」、掲載紙発行（あるいは記事発表）の「年月日」、「音韻」の当該例における「意味」を挙げる。

・「本文」には、当該語の部分（「音韻」）に網かけを行う。くぎり符号（句読点など）は、原文のままとする。ただし、引用符はカギ括弧に改める。同様の本文（記事）が他の文献に見える場合には、欄の最後に、その資料の番号を挙げる。

・「意味」欄には、「音韻」の当該例における意味を、『漢語大詞典』（「漢大」と略す）の意味区分の番号で示す。同辞典における「音韻」の意味区分・意味記述は、次のとおりである。

① 抑揚頓挫的和谐声音（めりはりがあって調和した音。）

亦指女子的風度儀態。（また、女子の容姿・態度を指す。）

② 指文学作品の音節韻律（文学作品のリズムや韻律を指す。）

③ 漢字字音中声母、韻母、声調三要素の総称。（「漢字字音中の声母・韻母・声調の三要素の総称。」）

ただし、固有名詞と複合語については、意味区分の番号を挙げず、それぞれ、「固有」「複合」とだけ示す。

・漢字の字体は、原文どおり、現代中国語の字体（簡体字）を用いる。

番号	本文	出所	見出し	年月日	意味
ア 009	「苦を搗（く）く」音韻から九日餅（くんちもち）と呼び、年の暮れの数日間のうちその日だけは餅をついたり購入を避けたりする風習がある一方で、二九を音韻からフク（福）と読み29日を迎える地域もあるそうです。	都筑のくまのルーキー日記くまさ剛	もち。もち。	2010/12/11	日国②
ア 010	GUEST DJ: DJ UII（音魂 SOUND FACTORY／音韻王者 REC）	B.I.G. JOE オフィシャルブログ	場所	2月京都・名古屋	日国②
ア 011	・ポピュラー音楽においては、各ビートの連なり全体をいう（音韻、リズム、グループといった意味における）。[wikiの引用]	ザ・リアル boy オフィシャルブログ「グレイッシュ」	ビューマンビートボックスのあれこれ【第三弾】ビー	2011/5/21	日国①
ア 012	その昔『音韻王者』（オーティノージャと読む）という伝説のグループがあり、そこには EQUAL TOKONA-X ならに G-TON も入っ	浅倉卓弥 オフィシャルブログ「それはなんというか、音韻の理（ことわり）」	全曲解説『でら NAGOYA feat. E. qual&Socks 編』	2012/5/4	固有
ア 013	まあ促音の前に、アクセントが来ているところは共通しているかもしれないが、それはなんというか、音韻の理（ことわり）」	浅倉卓弥 オフィシャルブログ「それはなんというか、音韻の理（ことわり）」	91 You Spin Me Round	2015/9/24	日国②

光 007	光 006	光 005	光 004	光 003	光 002	光 001	番号
该书第一篇有《鄂与鄂陵》专节，从方位、距离两个方面否定了鄂陵说，然后引用吕调阳氏《群经释地》，参考《河南通志》《荥阳县志》有关记载，并从音韵学的角度考证鄂与炳然、索古音相通。	由央视首席编辑中整合任总导演，将书画与音乐有机地结合，通过邀请书画家与音乐家畅谈彼此间「翰墨」与「音韵」的结缘之路，本次六期连播，著名书画家吴长江、刘大为、欧阳中石、李铎、靳尚谊、冯远，京剧名家李维康，歌唱家郁钧剑，作曲家徐沛东等政协委员以不同的方式演绎翰墨与音韵的缘分。	《翰墨音缘》是2013年央视音乐频道倾力打造的一档访谈综艺性节目，它由央视首席编辑中整合任总导演，将书画与音乐有机地结合，通过邀请书画家与音乐家畅谈彼此间「翰墨」与「音韵」的结缘之路，本次六期连播，著名书画家吴长江、刘大为、欧阳中石、李铎、靳尚谊、冯远，京剧名家李维康，歌唱家郁钧剑，作曲家徐沛东等政协委员以不同的方式演绎翰墨与音韵的缘分。	他写作《颜氏家训》的目的，是为了教育子孙礼仪、道德与学术、文化，保持其门风、传承其家学，故而书中不仅涉及立身处世之道，而且还对当时的社会风俗、文学、经学、史学与音韵训诂之学等多有介绍，邢氏后人邢日安在箱底找出厚厚一本《邢氏宗谱》，熟练地翻到《绣娘传略》那一页，饶有兴致地向记者介绍邢绣娘：她是清代乾隆年间人，出身贫寒，自幼喜爱歌唱，且歌喉婉转，音韵悠扬，	学生不明所指，他解释说：「『观』就是要多多观察生活；『世』就是要明白社会上的人情世故；『音』就是文章要讲音韵；『菩萨』就是要有救苦救难，为广大人民服务的菩萨心肠。」	「徐雪依林成玉树，残霰点岫即瑶岑。」这种对仗、互文、铺排和格律、音韵的运用，体现出一种结构性体验和声乐美。	域打下了坚实的基础；	徐超读本科是在北师大中文系，攻读硕士学位是在山东大学中文系，专业是汉语言文字学，主要得力于章黄学派的传承，在文字音韵训诂字领域打下了坚实的基础；
光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	出所
《郑伯克段于鄢》之一「鄢」罗卿孔	央视《翰墨音缘》播出政协委员专辑	央视《翰墨音缘》播出政协委员专辑	唱黄梅凡有井水处 尽皆	学林新语	上官婉儿和她的山水诗王卢生	以人格、学问滋养艺术品	见出し
2014/4/8	2014/3/15	2014/3/15	2014/2/24	2014/2/19	2014/2/11	2014/1/25	年月日
複合	漢大①	漢大①	漢大①	漢大②	漢大②	漢大③	意味

光 014	光 013	光 012	光 011	光 010	光 009	光 008	番号
整部诗集的语言朴素、清新，音韵和谐、流畅。	他著述宏富，留存下来的文字涉及经学、史学、音韵学、训诂学、医学等各个领域。	「种下一首诗，长出一树梦」音韵和谐、意境曼妙的朗诵，在孩子们心中播种梦想，帮助孩子们树立正确的世界观、人生观和价值观，鼓励孩子们接过时代的接力棒，成为中国梦的追梦者、圆梦人。	著有《从碧词》《从碧书画录》《红氍毹梦诗注》《京剧音韵》等书。	在印刷术尚未发明之前，文章书籍的传播，依赖于口诵与传抄。因此，中古以前的文章，大抵音韵天成，读来朗朗上口。	周兴嗣熬了一个通宵，将这些杂乱无章的千纸碎片，编排联缀成首尾完整、音韵铿锵的一篇好文章。	47 语言学 历史语言学方法论与汉语方言音韵史个案研究 王洪君 北京大学	本文 番号
光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	出所
克方——诗人勃洛	复旦大学教授徐洪兴谈明代名士爱国情怀：「天下为怀」	种下一首诗 长出一树梦	《章太炎全集》第一辑）首发记	六月光明书榜	《千字文》的创作与流传 程水金张宜斌	01年度《国家哲学社会科学成果文库》入选作品表彰决定	见出し
2014/8/11	2014/7/7	2014/6/27	2014/6/11	2014/6/6	2014/6/3	2014/5/13	年月日
漢大②	複合	漢大②	複合	固有	漢大②	漢大②	意味

光 019	光 018	光 017	光 016	光 015	番号
国学主要是对经史子集四部之学的研究和学习，并补充以重要的出土文献，以及文字、音韵、版本等传统研究方法。	先生自叙：「盖学问以语言为本质，故音韵训诂，其管籥也；以真理为归宿，故周秦诸子，其堂奥也。」	俞曲园（樵）之绪余，下后近代各专门学科之兴盛。先生好顾、江、戴、段、王、孔音韵之学，及繙阅大徐《说文》十数过，灼然见语言文字之本原，著《文始》（《新方言》）。	大爷说着递过来一条小板凳；后来又听得陇州小调，这一受甘肃、宁夏少数民族歌曲和陕西西府民歌影响的曲种，音韵动听，方言风趣。	通过参观，记者获知，王懿荣发现甲骨文并非偶然，他广泛涉猎经史、义理、训诂、音韵等学问，青年时期就撰写了金石文字考释著作30多种。	本文
光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	出所
「国遇」：师资、升学压力影响推广	命世之大儒 许嘉璐	命世之大儒 许嘉璐	命世之大儒 许嘉璐	非存一年级课本的古诗删除而是重新编排	見出し
2014/9/22	2014/9/9	2014/9/9	2014/9/9	2014/9/4	年月日
漢大③	漢大③	漢大③	漢大③	漢大②	意味

光 025	光 024	光 023	光 022	光 021	光 020	番号
「古典文献」专业方向只有1个二级学科，就是古典文献，主要研习古籍整理方法，通常要涉及版本、目录、音韵、训诂等学科分支。	他对汉语方言、汉语语法、中国音韵学、音位学理论都有精深的研究，被誉为「中国现代语言学之父」。	武汉大学国学院的课程特别突出文字学和经学，其专业核心课程包括古代汉语、古文獻学、音韵学、训诂学、中国哲学史、中国经学史，以及《诗经》《楚辞》《史记》等经典的研读。	应该用写作来提高生命本身的纯度，调整它的音韵、节奏、气息，生命本身就是诗，那才是写作的真谛。	赵元任先生作此文，是向世界阐述中国文字独有的音韵调式，以及与之相配合的表意形式，通篇文字均以shǐ音配合四声写就，全文如下：	音韵是汉语独有的语言体系，也是汉字不可分割的一部分。	本文
光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	出所
敏厚路向开温儒	缘绵延七十年家国情	赵元任钢琴回清华	80后作家，文艺的一代	汉字妙解：文化血脉之源	汉字妙解：文化血脉之源	見出し
2014/11/18	2014/11/11	2014/11/4	2014/11/3	2014/10/11	2014/10/11	年月日
漢大③	複合	複合	漢大②	漢大③	漢大③	意味

光 033	光 032	光 031	光 030	光 029	光 028	光 027	光 026	番号
由于意象派以来英美现代诗首先注重意象，如何传达意象就成为翻译中国诗最重要的任务，而为了意象，往往不得不舍弃原诗的格律形式和音韵。	体现了中华语言文字的「美」字，具有一字一音、节奏明快、音韵铿锵、朗朗上口的特点，它饱含深情、富有诗意、寓意哲理，又言简意丰，	中华诗词短小精悍、脍炙人口，它是从汉语言文字的土壤里生长出来的，	但乾嘉以来，由于文字狱大兴，学人远离经世之学而把精力转移到考据学上，致力于经典文献整理和文字考订，音韵、训诂上，虽在学术史上有重要贡献，但脱离现实关切，不能使儒学义理与时俱进，	他出生于1889年，1909在俄国学汉语，1911来西安，两年间调查20多种方言，1915年写成《中国音韵学研究》的博士论文并成为教授，	正字戏又称正音戏，也有「南下大戏」之称，以中州音韵官话（正音）唱念，距今已有800多年历史，是一个多声腔古老珍稀剧种，被中外戏剧界专家、学者誉为「中国戏剧活化石」，	张亚雄说，最难的课是「教音韵学的李建强老师的课」，听课不能中断，也不能从中间听起，那个课从中间听的话绝对听不懂，或者说缺一堂课还行，缺两堂课就连不上了」。	此外，新石器时代的龟腹甲刻符、陶缸，商代以来的卜甲、卜骨、青铜器铭文等大量珍贵文物，以及文字学、音韵学、文书、报刊等史料也尽收馆中，全面翔实地展现了汉字的起源、发展、演变的脉络。	现代著名语言学家赵元任，曾在美国多所大学任教，是中国音韵学、方言学、现代语言学的泰斗。
光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	本文
与挑战和翻译问题	中国文学和文化的翻译与传播：问题与挑战	想放歌、陈进玉	孔子是中华民族的精神导师	现实观照	保护珍稀剧种「正字戏」义不容辞黄贤嘉	人大国学院：从原典出发	为汉字插上翅膀	漫话绕口文
2014/12/15	2014/12/12	2014/12/9	2014/12/8	2014/12/1	2014/11/27	2014/11/24	2014/11/19	年月日
澳大②	澳大②	澳大③	固有	固有	複合	複合	複合	意味

光 041	光 040	光 039	光 038	光 037	光 036	光 035	光 034	番号
认为想要明白乾隆的真正心思，还得从他御制的《三希堂记》一文说起。	将语言文字的音韵融入音乐之中，让听者在领悟其意义之前，已经先被声音的美感打动，所谓「思无邪」，其中音乐的力量不可小觑。	钱先生读了毛诗英译后说：「译者带着音韵和节奏的镣铐跳舞，灵活自如，令人惊奇。」	二是纵向的，在古代文献中找出方言的音韵、词汇、语法的特性。	文、史、哲已然分开，文学系内部却也要分为语言文字、文学、文献三大块，因此学文学的学生，对版本、文献、音韵、文字、训诂皆不娴熟。	我发自肺腑地崇拜华夏文化先辈们的高妙才情，他们的意境邈远，辞约意丰，深刻幽默，音韵流转，无不令人如痴如醉！	正如作家所说：「小康不小，那里边不仅容纳着肢体需求的丰衣足食，还容纳着精神快乐的歌舞音韵。」	「至美至醇、玄妙无言、精美简约、形象生动、节奏鲜明、音韵和谐」，这是他对古典诗词的总体印象。	本文
光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	出所
楹联艺术	岳麓之遐——且说中国文学梦	从心所欲而不逾矩——谈诗词翻译与中国文化梦	方言数据库：留存乡音的符号	怎样的课才是有文化	母感谢我读私塾的父亲	大地上的唱响人民之歌——2014年散文随笔创作漫评	寻找大地上的亮色——作家李春雷的故事	見出し
2015/5/22	2015/4/28	2015/4/28	2015/4/20	2015/3/3	2015/2/10	2014/1/19	2014/12/26	年月日
漢大②	漢大②	漢大②	漢大③	漢大③	漢大②	漢大①	漢大②	意味



光 047	光 046	光 045	光 044	光 044	光 044	光 043	光 042	番号
上海师范大学教授潘悟云从事汉语音韵学研究已逾 50 多年，	馆借阅书籍，而今她可以流利地浏览和背诵大量古籍；	每天坚持晨读，从古文最基本的文字音韵字起，一到周末就去国家图书馆借阅书籍，而今她可以流利地浏览和背诵大量古籍；	《汉语音韵》《诗词格律》等学术普及读物，还积极参与文字改革、推广普通话、汉语规范化等工作，撰写出《论汉语规范化》《关于古代汉语的学习与教学》《怎样学习普通话》等深入浅出的论著，	20 世纪 50 年代以后，「雕虫」的动力不再是经济压力。作为国内最知名的语言学家之一，王力担起了普及语言学知识的担子，不仅撰写了《音韵学初步》	时间和教学是紧密连接起来的，《汉语史稿》《汉语音韵学》等书既是他的讲稿，又是具有开创性意义、高水平的学术专著。	是不受「格律」的束缚，同样追求「音韵」与「意境」。	从「革命圣地」拓展出去，将由题材所引发的「形」「色」处置为种种意象，而将「笔墨意义」与「精神境界」视为根本。犹如「新诗」，只是不受「格律」的束缚，同样追求「音韵」与「意境」。	但是，走好这条路不是那么容易的事情。做先秦文学研究的学者，需要具备「小学」的基本功，精通文字音韵训诂，能以自己的方式读通出土的简帛，有自己独立的见解。
光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	本文 出所
中国声音 世界回响	教师梦让她永不言败	诗外的闻一多周良沛	并雕之 皇皇千万言 龙虫	并雕之 皇皇千万言 龙虫	并雕之 皇皇千万言 龙虫	张博 李可染的红色情怀	大推进 《楚辞》研究的重	見出し
2015/7/17	2015/7/13	2015/7/12	2015/6/27	2015/6/27	2015/6/27	2015/6/5	2015/5/28	年月日
複合	複合	漢大②	固有	固有	固有	漢大②	漢大③	意味

光 053	光 052	光 051	光 050	光 049	光 048	光 047	光 047	番号
韵也……审音者听之，其恍然身游水部之乐阁，处士之孤山也哉。」	其主题为清幽舒畅的泛音曲调，形象地再现了梅花恬静端庄之姿，「以梅为花之最清，琴为声之最清，以最清之声写最清之物，宜其有凌霜音韵也……」	北大简本《苍颉篇》的发现，使这一失传八九百年的著名字书之面貌初步得以明朗，对于中国文化史、教育史、文字学、音韵学与历史文献学的研究无疑都有极为重要的学术价值。	章太炎是个非常博学的经师，他在文字音韵学上的造诣无人可以匹敌。	今人将「音乐」读为「音yuè」，将「喜乐」读为「喜lè」，将意为「喜好」的「乐」读为「药yào」，并不完全符合《广韵》音韵，而与古音就相去甚远了。	盖乾嘉学者崇尚朴学，不仅以朴学治经，且「以经学家实事求是之法读子」，只注重文字、音韵的训诂，而遗落了经书、子书内含的形上道体。	「不是我们水平不够，而是没有外文版，存在语言障碍。」他因此申请了外译项目《汉语历史音韵学》；「必须重视对外传播的力量」。	令他颇感遗憾的是，世界上其他高校采用的音韵学教材，以美国密西根大学的版本居多。	本文
光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	出所
梅边吹笛成三弄	种古书 「北大简」再推10 的大树	朱杰人：把经学还 原为一棵生命不息 的大树	活诗学性情 儒学底色 佛学生	音义辨王齐洲 《乐记》之「乐」	章太炎论经子关系	中国声音 世界回 响	中国声音 世界回 响	見出し
2015/ 9/25	2015/ 9/25	2015/ 8/31	2015/ 8/18	2015/ 7/27	2015/ 7/20	2015/ 7/17	2015/ 7/17	年月日
漢大①	複合	複合	複合	漢大③	漢大③	固有	複合	意味

光 059	光 058	光 057	光 056	光 055	光 054	番号
调」「卫调大鼓」「文武大鼓」「京音大鼓」。	在改革、发展过程当中，它有过许多名称，在北京曾被称作「京调大鼓」「小口大鼓」「晋韵大鼓」「平韵大鼓」「文明大鼓」，在天津曾被称作「卫	二、采用公认的音韵系统，逐一清理了《辞源》字头的上古音、中古音和现代音的标注，使《辞源》注音基本达到音义契合，古今贯通；改变了第二版音系不统一的局面，使注音系统面貌一新。	该报精心创意，整合资源，与出版社携手，组织实施「阅读中国书香校园」系列活动，以音韵之美引导「古诗文诵读」，以内容之美引导孩子品味《小学生古诗360》《小学生经典晨诵读本》等读物，	我真诚希望，在文字、训诂、音韵版本、校勘学界的年轻朋友中，既多涌现杰出专家，也出现一些通家。这样，庶几若干年后，在中华民族特有的「小学」领域甚至经学、史学等领域或许能够诞生	他用中医药名称填词，不但艺术造诣颇高，而且生活情趣浓厚，读来确实是一种知识与音韵大美的享受。	本文 出所 見出し
光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	光明日报	
生	京韵大鼓的前世今生	百年《辞源》的现 代意义	重温许慎《说文解字》 神许嘉璐	文书整理须力戒十 弊	辛弃疾笔下的药名 词	
2015/12/23	2015/12/22	2015/12/14	2015/12/4	2015/10/15	2015/10/9	年月日
固有	複合	漢大②	漢大③	漢大③	漢大②	意味

新008	新007	新006	新005	新004	新003	新002	新001	番号
不再自傲，顺其自然、得失淡然、红尘纷扰，心已低调，执念尽在不拘的文字里风干成画，所有浮想都在婉转绝美的音韵中烟消云散，所有情感皆在平静的心湖里蕴蓄沉淀。	读书，做学问，音韵文字学是基础。	更有趣的是这个句子读起来既有节奏又有音韵，只能是古文修养的自然流露，要掩盖也掩盖不了。	有趣的还是这个句子读起来既有节奏又有音韵，只能是古文修养的自然流露，要掩盖也掩盖不了。	古时的庐江应该就在这里，也即是郭君后节中的“庐江”。博主通过音韵的对比联系，令人思接千载，佩服！	随后，英国威尔士大学钢琴天才谢学林独奏《李斯特爱之梦》、《今夜爱无限》，钢琴神童都彭蕾演奏《莫扎特协奏曲》，娴熟的手法，悠扬的旋律，铿锵有力的音韵，以及乐曲表达的主题思想，	柏斯音乐集团和武汉音乐学院联合选送的郭聪演唱演奏《百鸟朝凤》，以宛转悠扬、俏皮灵动的音韵，惟妙惟肖地向大家展示了百鸟争鸣的场景，博得了阵阵喝彩！	现代语言的提炼，诗歌格式的创造，音韵方面的出新，使它自由体并峙而显新诗之繁盛。	本文
博客	作家吴宝震的	友朋程志的博文	客志的博文	客志的博文	客志的博文	王缙志的博文	苗雨时的博客	出所
写春诗	拂晓惊雪梦 携梅	陈子庄《石壶论画语要》（6）	绑匪的字条	菜子湖地名考释	百乐钢琴齐奏响，华雨乐章助力青少	父亲王力的文章：《怀念赵元任先生》	中国现代格律诗的结构	见出し
2014/2/18	2014/1/26	2014/1/22	2014/1/21	2014/1/20	2014/1/11	2014/1/9	2014/1/7	年月日
漢大②	複合	漢大②	漢大③	漢大①	漢大①	複合	漢大②	意味

新 013	新 012	新 011			新 010	新 009	番号
钱玄同所著的《文字学音篇》是我国高等学校最早的音韵学教科书。	是在情感深处荡起悠悠的音韵，思忆着久远的年华，与岁月随之涓涓流淌。	这在《中州音韵》和沈宠绥《度曲须知》里均有相关文字。	去声字分南北曲之别，元代周德清著有《中原音韵》，视为北曲作曲准绳，周氏以为「阴阳之说」仅为平声有之，入派三声，从而使平仄有了阴平、阳平、上声、去声之分。	也就是说曲家填词作南曲仍按照《中原音韵》确立的标准字音，而在曲唱时，为与北曲区分，遵《洪武》，入声按南音唱之。	首先北曲无人声字，《中原音韵》里，周德清已将「入派三声」。	但却忽略了字词之间的平仄和音韵和谐，显得拗口，甚至没有原诗易懂，这是乱用典故的毛病。	当然，中文虽然你在句法上不如英文精密，但在音韵、表意方面，则要比英文强上许多，从上面的例句，便不难看出这一点。
刘继兴的博文	东江娃的博文	昆笛王的博文	昆笛王的博文	昆笛王的博文	昆笛王的博文	诗人陈立红的博文	张子漠译的博文
力鲁迅「打油」很给力	篇244散文：夜色下的思绪	王建农2013年昆笛心得集锦	王建农2013年昆笛心得集锦	王建农2013年昆笛心得集锦	王建农2013年昆笛心得集锦	刘欢改《卷珠帘》歌词网友为何不买账	翻译十论之一：损有余而补不足
2014/3/6	2014/3/3	2014/3/2	2014/3/2	2014/3/2	2014/3/2	2014/2/23	2014/2/22
複合	漢大①	固有	固有	固有	固有	漢大②	漢大②

新 018	新 017	新 016			新 015	新 014	番号
古代人所接受的教育环境与我们现代人根本不同，所以我们现代人创作诗词，有的遵循传统音韵格律创作古诗词，	而我们，就这样一杯茶、一份茶点在手，在这抑扬顿挫、轻清柔缓、弦瑟琮铮的音韵中沉醉。	而我们，就这样一杯茶、一份茶点在手，在这抑扬顿挫、轻清柔缓、弦瑟琮铮的音韵中沉醉。	而我们，就这样一杯茶、一份茶点在手，在这抑扬顿挫、轻清柔缓、弦瑟琮铮的音韵中沉醉。	而我们，就这样一杯茶、一份茶点在手，在这抑扬顿挫、轻清柔缓、弦瑟琮铮的音韵中沉醉。	而按音是靠左手按弦，右手弹弦出音相互配合，当右手指弹出音后，左手指必须按在弦上不离开才会保持余韵，如果左手一指一离开弦，余韵就消失了，所以又产生了一个如何保持音韵不断的问题。	弹琴人处理节拍时有一种易犯的毛病，就是不知充分发挥「音韵并茂」的作用，弹起来一声接一声唯恐误了节拍，应当延续两拍的，急急促促不能控制只延续一拍，甚至不能掌握节拍时值乱弹，但是，由于古琴指法复杂，表现力丰富，细微的音韵和伸延的变化给记谱带来一定困难，很难通过记谱方法反映真正的艺术表现形式和琴曲感情，弹奏琴曲还需要有一定的艺术修养处理或由老师指导。	哀怨凄婉的琴曲，应发挥古琴音韵特点，以柔兼刚，充分发挥音韵的表现力组台旋律；
猫行的爱旅熊的博文	茶的一博文	茶的一博文	茶的一博文	茶的一博文	茶的一博文	茶的一博文	茶的一博文
易白宣布正式成立「易心派」	去千年平江路，听穿越时空隧道的浅吟低唱——苏州评弹	浅谈古琴的几点修养（转载）	浅谈古琴的几点修养（转载）	浅谈古琴的几点修养（转载）	浅谈古琴的几点修养（转载）	浅谈古琴的几点修养（转载）	浅谈古琴的几点修养（转载）
2014/4/15	2014/4/10	2014/4/2	2014/4/2	2014/4/2	2014/4/2	2014/3/27	2014/3/26
漢大②	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	漢大①	複合	固有

新 020						新 019	新 018	番号
<p>可在舞台上京剧对尖团字是比较严格的，因为这样比较容易对相近的字作出区别，京剧对尖团字的划分来自《中原音韵》这本书，是从南北语音中取长补短，归纳出来而自成规则的。</p> <p>念白也象唱段那样有上下句、有平仄声、尤其在音韵方面都有一定的要求，能和音乐、锣鼓、唱腔等戏曲中的其他音乐形式相协调。</p> <p>工整、对仗、讲究音韵。</p>						<p>但是，最厉害的是女歌手徐雯，她除了歌艺出众唱情真挚之外，她的歌声腔调和音韵，有9成以上和邓丽君相似，只是在高音域演唱时有半个或四分之一个音调的区别，一般人都察觉不出来，</p> <p>韵白的定型：元朝，泰定元年<sup>1324</sup>年，高安人周德清，根据当时的北方语音以及舞台演出中元剧的发音，整理出版了一部书——《中原音韵》。</p> <p>这部书对明清两代的昆曲影响很大，对戏曲语言的规范提高，作出了伟大的贡献，以后历代，由民间和政府出版了不少规范的汉字的韵书，主要都用于生活语言，而不像这本《中原音韵》，它是和戏曲紧密相关的。京剧继承了昆曲的吐字归韵，在很大程度上也是按中州音韵来规范语音的。</p>	<p>有的摒弃传统音韵格律写新诗，前后两者都有可取可舍之处。</p>	本文
上官青 的博客	上官青 的博客	上官青 的博客	上官青 的博客	上官青 的博客	上官青 的博客	音乐林 的博客	易白 E-bai 的博客	出所
京剧的念白	京剧的念白	京剧的念白	京剧的念白	京剧的念白	京剧的念白	徐雯《十亿掌声》蓝光CD 邓丽君日文加中文经典歌曲	易白宣布正式成立「易心派」	見出し
2014/4/26	2014/4/26	2014/4/26	2014/4/26	2014/4/26	2014/4/26	2014/4/20	2014/4/15	年月日
漢大②	漢大②	固有	固有	固有	固有	漢大①	漢大②	意味

新 024			新 023			新 022	新 021	番号	
而琴会上裴金宝老师对古琴的演奏，指法极为稳健、灵巧，弹奏有时阳刚、厚重，似北方人的宽厚气度，有时轻柔、淡远，音韵中又明显有着南方人的细致。			有人曾从技巧上批评毛泽东诗词作品，认为有些作品没有严格遵守音韵声律，甚至有重字等犯戒，又有俚语入诗词的习惯，这些也许从传统诗词创作的角度该是成立的， 曲中意味，既「深得唐人绝句妙景」（《人间词话》），又兼具宋词清真疏朗之自然。 方来被推崇为描写自然的佳作。 堪称「秋思之祖」（《中原集》）。			马致远一曲小令，短短 28 字，意蕴深远，结构精巧，平仄起伏，顿挫有致，音韵铿锵，直贯灵心。	美女博导，父亲马格霖（音韵学家、文字学家，曾任北京大学国文系主任长达十四年，其间被戏称作「好好先生」。 <small>新 050</small>	从善如流贯一生。沉迷格律研音韵。	本文
因为，古琴的音韵，音的部分更多是指右手弹奏的音声，韵的部分，则多在于左手的弹奏。			云南来的一位年轻琴人，通过存世的古琴名家录音，自学到一曲《流水》，在琴会上演奏，曲调尚可一听，可是指法较为杂乱，这样提升琴艺的空间就非常小，古琴的音韵也相对弱些。						
客	生的博客	寻找一颗星的博客	寻找一颗星的博客	寻找一颗星的博客	寻找一颗星的博客	但斌的 博客	董坚的 博客	出所	
（上）	行者先生：探寻中国古琴艺术之路	行者先生：探寻中国古琴艺术之路	行者先生：探寻中国古琴艺术之路	行者先生：探寻中国古琴艺术之路	行者先生：探寻中国古琴艺术之路	那些尘封在历史中的女人，美得不可方物！	《九州江》2014 年第 3 期，评论诗词版	见出し	
2014/5/7	2014/5/7	2014/5/7	2014/5/2	2014/5/2	2014/5/2	2014/5/2	2014/5/1	年月日	
漠大①	漠大①	漠大①	固有	漠大②	漠大②	複合	漠大②	意味	

新 028	新 027	新 026	新 025	新 024	番号
当然，这里也应当指出，清代学者的解释学，虽然是建立在以音训为主的训诂学和音韵学基础之上，但他们也并非不重视字形学。	吟诗有一个很大的好处就是记得住，就跟唱歌一样，而且对音韵、平仄什么的自然而然就熏出来了。 <small>新 031</small>	以一号人物吴靠善为例，他的唱念以安庆官话音韵进行几乎全部的改写，在不失原剧风范的前提下，安庆版黄梅戏化的吴靠善生动传神地诠释了他的舞台形象。	展开了一系列编纂与整理历史文化典籍的活动，官修书籍达120余种之多，为历代帝王修书之冠，所涉猎的范围包括经学、数学、小学、音韵、诗文、词章、典章、图志、天象、医学、书画、鉴赏等等，京剧和黄梅戏在音乐和语言上是各具自体系的，京剧唱词和道白的「精彩点」和「出彩点」如果用黄梅戏音韵展示，就不一定能达到原有的剧场效果。	那宁静的片刻，琴室中播放的吴门琴曲《梅花三弄》，一瞬间的雅静、迢迢的音韵，如同空谷中的美妙回响，又似梅花绽放时的清逸与高洁景象，疏影横斜，暗香浮动，一重重的悠扬音调，所以，那天之后，我就下了一个决心，去各地寻访古琴名师、习琴，探寻一条中国古琴艺术之路，要把古琴音乐传承下去，不能让它只是成为一种世界性的文化遗产，而是活着的、流动的音韵。而他最擅弹的琴曲，是一首叫《普庵咒》的古曲，因曲中的很多音韵都像模拟寺院的敲钟声，他弹奏的这首曲子，一般比其他琴家的演奏时间要长几分钟，别人问他为什么呢？	本文
客客何新博	的微博	王家骢的微博	中国戏剧网的博文	北京装饰之光东方的博客	出行者先生的博文
不是象形文字	何新：汉文字系统不是象形文字	资中筠：中文是一种文化底蕴	四赞《升官记》	清官旧藏《鸟谱》	出行者先生：探寻中国古琴艺术之路（上）
2014/5/11	2014/5/10	2014/5/9	2014/5/9	2014/5/8	2014/5/7
複合	漢大②	漢大③	漢大②	漢大③	漢大①

新 033	新 032	新 031	新 030	新 029	新 028			番号
<p>「既保持了古体诗歌跌宕自如的气势，而又兼富近体诗讲究音韵美的一种诗歌体式」，</p>	<p>重复、啰嗦是诗歌的大忌，而诗人此处的这一重复，不仅是从诗歌的音韵效果上作了强化处理，更是提醒与暗示，使得语义立即就变得微妙和深切，转向了人生终极意义上的永久「安眠」。</p>	<p>吟诗有一个很大的好处就是记得住，就跟唱歌一样，而且对音韵、平仄什么的自然而然就熏出来了。 <small>新 027</small></p>	<p>乐器村所产乐器以选材精细、工艺精湛、音质纯净、音色清脆、音域宽广丰富、音韵婉转悠扬而著称，其别致的形制和精美的花纹闻名于世，极富使用价值和收藏价值，倍受国内外游客的青睐。</p>	<p>一个意蕴深远、音韵优美的名字，常让人过目不忘。</p>	<p>其三，音韵。谓呼吸有清浊高下之不同。沈约《四声谱》及西域反切之学。</p>	<p>至于传统之所谓「音韵学」，实际上相当于现代语言学中的一「发音生理学」和「音位学」。</p>	<p>传统所谓「小学」，实际包括三种学术：1.训诂学，2.文字学，3.音韵学。</p>	<p>本文</p>
曹宗国的博客	客海诗人小	诗坊的教	客媒广春的江月	博客水良师的曾风	客客何新博	客客何新博	客客何新博	出所
柳忠秧的诗参评鲁奖是学院派的昏聩	精读与对话：罗伯特·弗罗斯特的《未走之路》	【资中筠：中文是一种文化底蕴】	中国新疆民族乐器村	不怕生坏命，最怕取错名	何新：汉文字系统不是象形文字	何新：汉文字系统不是象形文字	何新：汉文字系统不是象形文字	见出し
2014/5/28	2014/5/28	2014/5/24	2014/5/19	2014/5/11	2014/5/11	2014/5/11	2014/5/11	年月日
漢大②	漢大②	漢大②	漢大①	漢大②	漢大③	複合	複合	意味

新 041	新 040	新 039	新 038	新 037	新 036	新 035	新 034	番号
其中还要包括一部分音韵学常识，熟悉和掌握一些词汇、意义等，同时要求学生生在课余写些毛笔字，以便养成书写端正的习惯。	恰博旗，这个音韵铿锵的地名被潘洗尘救活，这个潘洗尘的出生地如今叫四方山村，隶属于黑龙江省肇源县肇源镇。	「柯达」这两个汉译音也很悦耳，象按动快门的聲音，发音响亮，音韵和谐优美，含义明确、冲击力比较强，从而被公众广泛注意和认可。	音韵上，从「叹后约」句开始，用韵转密，如促节繁弦，正好适应了硬咽语塞，一吐为快的抒情需要。	科普项目有海洋馆、动感影院、音韵之声、鸽子广场等。	读英文原版的更有音韵感。	但是编选时，从儿童心性出发，我们选择的一定是音韵和谐灵动、形象鲜明美好、境界明朗开阔的经典诗文。	如今我从事的学术专业领域，是古代音韵与古代文学，我「好古」的特点，跟古老题材的连环画《穆柯寨》似乎有某种联系；	本文
徐文兵的博文	安琪的博文	诗人安博客	含佛提精的光博客	西安左鹏的博文	南京酒店管理有限公司	杨政的博文	语近徐冬母客的博文	丁启阵的博文
中医历史上著名的五老上书	沉甸甸的生之叹息	点编辑：易洪重工	赏析讲解	夜半乐冻云黯淡天气柳永注释翻	成都市成华区新华公园网络营销策划方案	绘本教我们如何做爸爸	儿童阅读课程化：用文字点亮儿童的母语课堂	回忆儿时读书乐
2014/7/8	2014/7/6	2014/6/26	2014/6/23	2014/6/20	2014/6/13	2014/6/5	2014/5/30	年月日
複合	漢大②	漢大②	漢大②	固有	漢大②	漢大②	漢大③	意味

新 049	新 048	新 047	新 046	新 045	新 044	新 043	新 042	番号
古人写诗做文都很讲究章法，每一首（篇）诗文都有其完整的行文结构与写作脉络，再加上古诗文本身言简意丰、音韵和谐，套用古诗文来铺设文章的行文结构，	语文课，要讲出它的语言美、音韵美、形象美、情感美、哲理美、生活美等；数学课，要讲出它的简单美、对称美、整齐美、和谐美、奇异美等。	声律音韵称绝学，字正腔圆要求严。	玉屏箫笛，音韵清越，工艺精巧，是民族乐器中的精品，是玉屏侗、汉、苗、土家等多民族文化发展融合的结晶。	二句中不用一二闲字，止提掇出紧关物色字样，而音韵铿锵，意象具足，始为难得。	在音韵一家商店买不全，只得求助售货员。	因为 Dr. Sears 的书不是以情节取胜，他所有的书都在强调音韵，如果没有音频，中国普通的家长根本难以驾驭，我在美国 6 年，现在仍然无法驾驭该系列图书，需要自己进一步学习才行。	这里有一个极难克服的障碍，就是西方音乐的旋律构成和汉语言音韵如何协调处理的问题，这个恐怕需要几代音乐家、作曲家做出积极的探索 and 试验，	本文
文冲刺语的博文	葛平老师的博文	陈玉成的博文	襄樊咩羊的博文	曹宗国的博文	汪中求的博文	来自王若大的博文	解玺璋的博文	出所
2013 年高考语文满分作文素材：美文名句集锦	新授课、复习课、讲评课三种基本课型的操作方法	2014 年 8 月 1 日	神箫仙笛曲悠扬玉屏箫笛美名传	温庭筠的两句诗为何备受推崇	第八次日本考察之社会篇	Dr. Sears 的书适合中国孩子吗？	虎妞祥子的咏叹：一粒怪味豆	見出し
2014/8/5	2014/8/3	2014/8/1	2014/7/31	2014/7/21	2014/7/15	2014/7/10	2014/7/9	年月日
漢大②	漢大②	漢大②	漢大①	漢大②	誤植か	漢大②	漢大②	意味

新 057	新 056	新 055	新 054	新 053	新 052	新 051	新 050	番号
飘逸虚渺的音韵，给人以洒脱尘滓之感。	册」的宫廷文学；	亦有为灵璧石自身所独具，诸美毕臻，美轮美奂，谈到音韵改革，都主张以曲韵代诗韵，以新文学艺术代替「高文典	如清泉弹奏下山的音韵	当然研习「六艺之学」，需要有一定「小学」的根底，即要懂文字、音韵、训诂。	这证明外国人也音韵感。	那些形式优美、内涵深远、音韵铿锵的文字至今依然打动着海内外华夏儿女的心灵。	美女博导，父亲马裕藻（音韵学家、文字学家，曾任北京大学国文系主任长达十四年，其间被戏称作「好好先生」。有弟马衡、马鉴、马准、马廉皆为著名学者，世称郟县「五马」。 <sup>022</sup>	本文
客 茶 天 一 琴 的 博 琴	的 司 客 人 的 博 客 马 南	客 人 的 博 客 陈 子 山	静 下 观 天 的 博 客 sjx	刘 梦 溪 的 博 客	美 人 锥 的 博 客	客 韵 的 博 客 君 心 雅	徐 增 英 的 博 客	出 所
笑的古琴曲	【原创】与秋天有一郎	大 自 然 奇 山 怪 石 (128) 【灵璧石】	根 凤 羽 给 云 做 衣 裳 (周 刊 第 35 期 同 题 诗)	刘 梦 溪：到底什么是国学	作 家 参 考 汪 曾 祺 论 语 言 八 十 条 及 创 作 谈 (非 常 受 用)	不 忘 初 心 守 望 心 灵 家 园	美 丽 民 国	见 出 し
2014/8/29	2014/8/28	2014/8/24	2014/8/24	2014/8/15	2014/8/10	2014/8/8	2014/8/7	年 月 日
漢大②	漢大②	漢大①	漢大①	漢大③	漢大②	漢大②	複合	意味

新 064	新 063	新 062	新 061	新 060	新 059	新 058	番号
现代经验」也许仁智各见，	「婆婆」的产生，既分担了「姑」的意义负荷，又能满足汉语双音节的音韵节律，且称呼起来亲切随和，因此最终「熬成了婆」，成为「夫之母」的专称了。	「婆婆」的产生，既分担了「姑」的意义负荷，又能满足汉语双音节的音韵节律，且称呼起来亲切随和，因此最终「熬成了婆」，成为「夫之母」的专称了。	笔记 R 「监狱与研究室」之一：音韵学和文字学	首先从音韵上来看，此句当为仄平平仄仄，「又恐」都是仄声，虽然第一个字可不论，但能都入律更好。	她认为，要从小学一年级起就让孩子感受音韵的美，「古诗词的韵律对培养孩子的记忆力和节奏感都非常有益」。	美在音韵和谐。	词有词牌，词牌严格律定了每首词的格律和音韵。
曹 宗 国 的 博 客	客 咬 文 嚼 字 的 博 客	客 咬 文 嚼 字 的 博 客	丁 晓 平 的 博 客	曹 宗 国 的 博 客	晓 妍 凤 的 博 客	天 山 宝 客 的 博 宝	出 所
诗礼传承	周啸天获鲁奖有违	「婆」	《硬骨头：陈独秀五次被捕纪事》目	苏词「又（惟）恐琼楼玉宇」句辨析	习近平批评「去中国化」，是在批评谁？	古诗鉴赏十规律	见 出 し
2014/9/26	2014/9/23	2014/9/17	2014/9/12	2014/9/11	2014/9/11	2014/9/7	年 月 日
漢大②	漢大③	複合	複合	漢大②	漢大②	漢大②	意味

新 069	新 068	新 067	新 066	新 065	新 064	番号
那么，他的词风或许又会是另一番模样，我们也就不会欣赏到那一首首精雕细琢，音韵婉转的词篇了。	李云芳本来是音韵学教授老李的情人，她怀着老李的孩子，随同方子郊来到乡下静养，却莫名其妙地爱上了方子郊。	音韵学教授老李，认为只有自己这样的世家子弟才配玩文化，庄严的学术在他那里成为赏鉴的古董。	5. 对偶：给人以音韵美、节奏美、对称美。	我们在诗词歌赋中也强调音韵的和谐，并有「诗歌之有韵，如柱之有础」之说，有韵味的诗歌才能令人朗朗上口，回味无穷。	得果成无漏果，分音韵有缘音。	文采，就是指诗词的思想情感之美、意境之美、音韵之美。
客记的博偶	方麟999的博客	方麟999的博客	何新博客的博	何新博客的博	西寿宫的八万博仙	曹宗国的博客
事宋徽宗干过的荒唐《楚墓》	当传统遭遇现实——评史杰鹏小说《楚墓》	当传统遭遇现实——评史杰鹏小说《楚墓》	乱画的傅抱石	乱画的傅抱石	【王重阳集】重阳全真集卷二	周啸天获鲁奖有违诗礼传承
2014/10/27	2014/10/19	2014/10/19	2014/10/5	2014/10/5	2014/10/3	2014/9/26
漠大②	複合	複合	漠大①	漠大②	漠大①	漠大②
						意味

新 074	新 073	新 072	新 071	新 070	番号
昨晚小雨自编自导了一场小马宝莉里的閃耀盔甲和音韵公主的婚礼，女士们，先生们，閃耀盔甲和音韵公主的爱情可歌可泣……男才女貌……喜结连理……	音韵不对，会让口号生涩暗哑，难以上口。	「古典文献」专业方向只有一个二级学科，就是古典文献，主要研习古籍整理方法，通常要涉及版本、目录、音韵、训诂等学科分支。	一般只有并列联合词语才能倒错，词语倒错的意义主要是追求「陌生化」和音韵的和谐。	教师的教学语言也要有艺术含量，有美感，讲究语言的时代美、规范美、丰富美以及音韵美，不能使用粗俗语言甚至口头禅，要有教师语言素养，用语言的魅力征服学生，激发他们的学习兴趣，	本文
客记的博手	何满宗的博客	何满宗的博客	温儒敏的博客	清凤冷的博客	出所
礼一场别开生面的婚礼	千货广告这样打，销量提升200%	千货广告这样打，销量提升200%	中文学科的历史、现状与前景	22招经典高考作文技巧	教师要锤炼好自己的语言
2014/11/27	2014/11/25	2014/11/25	2014/11/18	2014/11/4	2014/10/29
固有	漠大②	複合	漠大③	漠大②	漠大②
					意味



新 080	新 079	新 078	新 077	新 076	新 075	新 074	番号
词有词牌，词牌严格律定了每首词的格律和音韵。	明丽又开朗，音韵显晓畅。	著有《万青阁全集》八卷、《万青阁诗余》、《续表忠记》、《录音韵正伪》等。纂有《徽州府志》、《交城县志》等。	五行音韵养生	骨笛是一种原始乐器，是音韵享乐的古老见证；	而成就了一种所谓的「汉字」，这种新的学术，是不主静而主动的，它的哲学是排除思想而求考据，考据一学发生《金石》《历史》《音韵》，各方面都发达，	对偶 形式整齐，音韵和谐，互相映衬，互为补充。	形象生动、清新优美、简洁凝练、准确严密、精辟深刻、通俗易懂、音韵和谐、节奏感强。
文冲刺的博客	高考试题的博客	马东盈的博客	嘉林尚风的博客	山东纪客的博客	高考试题的博客	高考试题的博客	出所
性的解答题语口诀	古代诗歌鉴赏规律的解答题语口诀	马东盈、赵吉士《深更到翟家庄》评注	五行音韵养生	《语文报》中考版文台订本发表《语作版文是一首歌》	中国历史是几幕老英雄的悲剧	现代文阅读理解必杀技大全	見出し
2014/12/26	2014/12/26	2014/12/24	2014/12/20	2014/12/8	2014/12/5	2014/12/5	年月日
漢大②	漢大②	固有	漢大①	漢大①	漢大③	漢大②	意味

新 082	新 081	番号
诗中的「兮」字，古音是否如现在吟音的读法，并不一定，因为音韵及语言，相隔数十年就会有变动的，这个字有如今日歌曲中的「啊」一样，没有实质的意义。	偶然想起了意境宏阔、寓意深邃、格律严谨、音韵和谐、阅之心情舒畅、吟之雅趣横生的中国传统诗词。	本文
客柴的博	Cherry 心艺代银木文川中学当	出所
（十二）	南师之论语别裁	見出し
2014/12/29	2014/12/27	年月日
漢大③	漢大②	意味

番号 性別 年齢	(一)「音韻」のイメージ	(二)「音韻」を使った文
J001 女 18	漢文漢詩	末尾の音韻を合わせる。
J002 女 18	漢詩に使われているイメージです。	何も思いつかない。
J003 女 18	ビートルズ	音韻ド人もびっくり！
J004 女 18	単語の切れ目のリズム	音韻について学ぶ。
J005 女	韻を踏んでいる	何も思いつかない。
J006 女 18	「韻文」「散文」という文の形や「韻を踏む」という、音と文に関連するイメージです。	何も思いつかない。
J007 女 18	リズム	何も思いつかない。
J008 男 18	古文、漢文　リズム	何も思いつかない。
J009 女 18	語尾を同じにすることによって、統一感とリズムを生み出すもの。文章がリズムミカルになる。 ノリが良いイメージ。頭いいな、とふわりと思わせる言葉の使い方。	何も思いつかない。
J010 女 18	韻を踏む、という言葉があるので、単語の語尾の音のことかと思うが、よくわからない。	何も思いつかない。
J011 女		

資料六 「音韻」に関するアンケート調査の回答（日本・中国）

【凡例】

- ・日本と中国の大学生を対象に行った、「音韻」の意味・用法に関するアンケート調査の回答を、表にして挙げる（頭に、「J」（日本の大学生、または「C」（中国の大学生）」を付けて、通し番号を付す）。調査対象は、立教大学文学部日本文学専修の一年生（回答者数は二二名）と、ハルビン師範大学東語学院商務日語専攻の三年生（回答者数は二八名）で、調査時期は二〇一六年五月である。
- ・調査項目は、次の二項目である。
- （一）「音韻」と聞いて、最初にどんな意味（イメージ）を思い浮かべるか書いてください。
- （二）「音韻」の时候、请写下你最初想到的是什么意思（形象）？  
听到「音韵」的时候，请写下你最初想到的是什么意思（形象）？  
请用「音韵」这个词，造一个句子。
- ・表には、「性別・年齢」調査項目（一）と（二）の回答を、原文のまま挙げる。（二）の回答の当該語の部分（音韻）には、網かけを行う。未記入の場合は、空欄にする。
- ・中国語の漢字の字体は、原文どおり、現代中国語の字体（簡体字）を用いる。
- ・くぎり符号（句読点など）は、原文のままとする。ただし、引用符はカギ括弧に改める。

J022	J021	J020	J019	J018	J017	J016	J015	J014	J013	J012	番号
男	男 19	男 19	女 18	女 18	女 18	女 18	女 18	女 18	女 18	女	性別 年齢
ラッパ ー	話しの余韻、詩の中でよく重要視されていること。	短歌やラップ	韻を踏んでいる。的な	よく漢文で使われている。	同じ音の感じがする	何も思いつかない。	何も思いつかない。	言葉の最後	ラップ、漢詞	「言葉」というものを構成する要素の一つ。	(一)「音韻」のイメージ
何も思いつかない。	作詩する時、音韻を重視したほうがいい。	この短歌は巧みに音韻をふんでいる。	何も思いつかない。	何も思いつかない。	何も思いつかない。	何も思いつかない。	何も思いつかない。	何も思いつかない。	何も思いつかない。	何も思いつかない。	(二)「音韻」を使った文

C007	C006	C005	C004	C003	C002	C001	番号
女 22	女 22	女 22	女 23	女 23	女 21	女 22	性別 年齢
乐曲、詩、文章等の节拍、韵律、韵味。	古代诗人朗诵作诗的形象。歌手写歌词的形象。音韵我想应该是诗或者歌词的一种韵律。	所谓音韵，首先想到的是作诗、作词、言语中所流露出的韵味，是符合文章整体格调的依据。	我听到这个词首先想到的是优美的音符，在跳动，然后是一个美丽的少女弹着钢琴，各种美妙五彩的音符在飞舞。	听到「音韵」一词的时候，我首先想到的就是中国的古诗、词，因为中国的古诗词在音韵上是很讲究的；一首诗词的韵律，节奏都是一首诗的关键的地方。「音韵」好的诗词、句子能让人读起来朗朗上口。	「音韵」是指在一个句子或者单词的「音」和「韵」，「音」是指语言的音调，或者气流的轻重。气流通过声带经声带及舌唇调节而产生的音。「韵」是指一个句子或者单词的韵味意境。	音节和韵律，可以联想到典雅的古曲小调。例如吴歌、宋词、长短之间的抑扬顿挫之美。除此之外还会联想到诗词断句后的韵母节奏，平仄起伏的动感变化。	(一)「音韻」のイメージ
这首歌曲的音韵很对人寻味。	作诗非常讲究音韵。	诗词创造时应注重音韵的协调。	音韵一种美丽的声音的旋律。	这是一首音韵极佳的诗句。	诗词中音韵协调很重要。	屈原时期的依词软语，由于「兮、哉」等助词的广泛使用有一种独特的音韵美。	(二)「音韻」を使った文

C014	C013	C012	C011	C010	C009	C008	番号
女 21	女 21	女 22	女 22	女 20	女 21	女 22	性別 年齢
音乐的韵律、韵味。	音乐的韵味。	音调（日语的音调）	语调、汉字的读音、对汉字的读音的感觉。	规律的，悦耳的音节，且偏柔和，古典。	音乐的韵律，具有特有的美感，能够打动人心韵的韵律。	音韵是音乐中包含的韵味、情感。	（一）「音韻」のイメージ
古琴的音韵令人沉醉。	请理解了音韵的含义后，造一个句子。	BIGBANG的歌词许多都有音韵的，说唱歌曲比较讲究音韵。	这个字的音韵很好。	琴瑟和鸣的音韵，是人心神愉悦。	这首歌的音韵朗朗上口，使人感触颇深。	虽然他很认真地弹奏，但是从他音乐中感受不到一丝音韵。	（二）「音韻」を使った文

C021	C020	C019	C018	C017	C016	C015	番号
男 20	女 23	女	女	男 21	女 21	女 21	性別 年齢
诗歌里的音韵能够提升诗歌的整体层次。让诗歌读起来的朗朗上口。	听到一种曲调，感到欢快、沉闷、悲伤或悠然等。	给人一种轻松、愉快、放松的感觉，如音乐一般，感觉是音乐的一部分，声音和韵律构成最动听的乐章。	最初想到的是类似与心电图一样的电波的浮动。浮动的频率与高低都是音乐韵律的体现。每一次的波动都是可以触及心跳的。	音韵，即为音律的韵味，不只是外部的表现，有时也应体现在内的精神与情感中。	音韵 我认为是一种语言所形成的固有的旋律，让人感到舒畅的感觉。	音韵，对音乐旋律的一种感觉。	（一）「音韻」のイメージ
这是一首音韵和谐的诗歌。	中国古典乐曲具有独特的音韵。	「音韵」是与生俱来的一种天赋。	听到那音韵的浮动会激起我心底最深处的感动。	对于大自然的音韵，我们人类尚未完全挖掘。	什么都想不到。	什么都想不到……	（二）「音韻」を使った文

C028	C027	C026	C025	C024	C023	C022	番号
女	女 21	女 21	男 24	女 22	女 22	女 24	性別 年齢
音韵，首先想到的是旋律，是附出在音乐中、乐曲中的旋律，具有节奏感，使人心情放松，身心愉悦。	声音的韵律、节奏感、美妙的声音。	天上人间、律动、心悸。	乐谱、节奏。	汉语的韵母。	如汉语中的声调，分为一声、二声、三声、四声。	音调、韵律。	(一)「音韻」のイメージ
音韵可以使人心情愉悦，身心放松。	这首歌的音韵十分美妙。	井柏然的音韵真的好棒啊！	音韵是生活中一道美丽风景。	音韵在语言学中是很重要的部分。	把握好词汇的音韵，才能更好的表达情感。	读音的时候，音韵非常重要。	(二)「音韻」を使った文